

---

# 右手に剣を左手に恋を

28号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

右手に剣を左手に恋を

### 【Nコード】

N5880S

### 【作者名】

28号

### 【あらすじ】

王子様と出会ったのは合コンだった。

架空のイタリア半島に存在する小国フロレンティア。その国で騎士を営む「キアラ」は、無理矢理参加させられた「合コン」で、年上の王子様に連絡先を渡してしまった。

騎士と王子、物語の中ならば素敵な恋が芽生えそうな組み合わせだが、現実は甘くない。騎士と言っても下級。しかも、剣の腕と腹筋だけは立派なキアラの恋の行方ははたして…。

## 登場人物一覧（前書き）

騎士の初恋編までのネタバレを含みます。

メインキャラの詳しい紹介は、【騎士のお仕事編】をどうぞ。

## 登場人物一覧

キアラ＝サヴィーナ (18)

ガリレオ騎士団第4小隊所属の女騎士。

類い希なる剣の腕と運動能力を有しているが、かわりに女子力が欠落している。

恋と男が苦手で、それを遠ざけようと必死になるあまり男装までするようになった。

合コンで出会った王子ヴィンセントに告白され、初デートの相手が王子という非常事態に陥る。

ヴィンセント＝アルジェント (20代後半)

フロレンティアの第6王子にして、ガラハド騎士団1番隊隊長をとめる騎士。

王族の血は引いていないが、王と国民からの信頼は誰よりもあつい。その反面元マフィアの幹部という異例の経歴の持ち主でもあり、貴族の中には敵も多い。

合コンでキアラを見初めて一目惚れするが、相手が悪すぎてなかなか恋が進展しない。

レナス＝マクスウェル (26)

ガリレオ騎士団第4小隊の隊長で、キアラの尊敬する上官。

人のうらやむ美貌と剣の腕を持つが、結婚相手だけは未だ見つからない。

恋がヘタで、酒に弱く、ずばらで仕事嫌いという非常に面倒くさい女だが、やるときはやる女。

幼い頃から付き合いのある、第5小隊の隊長ヒューズを顎で使って

いる。

カイル＝ヒューズ（30代半ば）

顎で使われる男。

ガリレオ騎士団第5小隊の隊長で、『獅子隊長』の異名を取る英傑。しかし日頃レナスに虐げられているのでその面影はあまりない。

幼いレナスの護衛騎士となって以来、彼女に振りまわされる人生を送っている。

ステイツと呼ばれる大国出身。故に実はパスタよりハンバーガーが好き。

アルベール＝アレクサンドル（23）

フロレンティアの第4王子。

ガラハド騎士団1番隊の副隊長で、聖騎士の称号を持つ魔法剣士。

甘やかされて育ったせいか、仕事には不熱心で、いつも女の子の事ばかり考えている。

女性の前では気取っているが、内面は物凄く幼い。

合コンで猫をかぶったレナスに一目惚れするが……。

ヴィート＝メディチ（37）

ガリレオ騎士団の騎士団長にして創設者。

フロレンティアの第5王子でもあるが国民の殆どはその事に気付いていない。

騎士団長としての彼は国民からの信頼も厚く、同時に娘の溺愛ぶりが異常なことで有名。

寝るときは、枕の下には娘の写真を30枚ほど入れているらしい。

アレッシオ＝パラディーズ（26）

レナスの同期で、ガリレオ騎士団第10小隊の副隊長。自称白衣の天使。

妖精術を応用した治療と解呪を得意とする騎士団一の治療術師。

妖精の血を引いているため、美しい羽根と容姿を有しているが、残念ながら性別は男。

普通にしていればまだ見られるのだが、女装と化粧とイケメンが好きなため、ゲテモノ扱いされている。

## 登場人物一覧（後書き）

キャラの名前が覚えられない！という意見を頂いたので、サクッと見れるキャラ一覧ページを作ってみました。

どことなく紹介文が緩いのは仕様です。

小説進行に合わせて、修正及び追加を行う場合がございます。

「王子様と出会ったのは合コンでした」

キアラが彼との出会いを語るたび、友人はかならず笑いだす。

もしくは冗談はよせという顔をする。

だが、これは紛れもない事実だった。

身分を隠して潜入した合コンで、キアラを見初めたのは正真正銘の王子様。

去り際に「つきあってくれないか」と告げられた声を、彼女は今も忘れられずにいる。

つややかな漆黒の髪と、獣を思わせる鋭い紅の瞳。派手ではないが、人目に止まる涼やかな目元とクツキリとした目鼻立ちは、新聞や雑誌の一面記事でよく見る見知った顔だった。

そう、彼は本当の意味で「王子様」だった。

しかし対するキアラは、喜びよりも驚きで口がきけなくなるような恋愛初心者で、何より運が悪いことに、彼女は、貴族の娘でも王家の娘でも、可愛い町娘ですらなく。

服の下には見事な腹筋を隠し持つ、下級騎士だったのである。

## Episode 01 - 1 王子の落とし方

騎士団に所属する女子が、彼氏に振られる最大の理由は腹筋である。

それは悲しいことに事実で、その事実はキアラだけでなく、彼女と同じガリレオ騎士団に所属する女性騎士全員の、嘆きでもあった。

イタリア半島に、二つの大国を挟むようにしてある小国フロレンティア。

その国を守るために設立された、ガリレオ治安維持騎士団第4小隊に、キアラ・サヴィーナは所属していた。

貴族だけで構成されたガラハド騎士団とは違い、ガリレオは叩き上げの騎士によって構成された戦闘のプロフェッショナルである。

騎士団は第1から第10までの小隊からなり、キアラの所属する第4小隊は、剣術に秀でた女性のみで構成された部隊で、盗賊退治から魔獣討伐に貴族の護衛と、こなす任務の幅はとても広い。

だから今回の「合コン」も貴族の護衛の一種だった。

「合コン」。正式名称は「合同コンパニー」というらしい。

海を挟んだ東の果てにある島国「東和国」で流行っているとされるそれは、懇親会とお見合いをあわせたような物だ。

結婚を前提とするのではなく、おつきあいを前提に複数の男女が食事をかねた顔見せを行う。つまり、出会いを目的とした食事会だ。はじめは国内にいくつもある、魔法術や妖精術の学校に通う学生達が面白半分に始め、今では貴族のお嬢様方、坊ちゃん方まで巻き込んで、えらい流行り様である。

だが決して、そうでもしなければ出会いがないわけではない。

「恋が無くては生きていけない！」と本気で思っているのがフロレンティアの人々だ。ナンパは当たり前だし、週末には町の至る所で社交界やらパーティーが行われ、一日で100の男女が恋仲になり、

その半数のカップルが別れるとまで言われている。

「合コン」まがいのことは日夜行われているだろうに、「はやりだから」という理由でハマってしまう所がフロレンティア人らしいと、客観的に分析しているのはキアラ。しかし、彼女が所属する騎士団内でも、合コンは今日までいくつも持ち上がったっている。

だが、「騎士やってまーす」といつて受けがいいのは男子だけ。女子が同じ文句を口にすれば、女の子らしい女の子を求めてやってきた男の受けはたいそう悪い。

合コンでなくても、祭りや舞踏会など、彼女を連れだつて参加する行事に、率先して誘われる女子は隊内にはいない。

隊士全員が30過ぎのおばさんであるとか、筋肉だけが取り柄の不細工ばかりだと言う訳ではない。

ただ、「騎士」というブランドが、異性には全く魅力的に映らないのである。

だからこそ、今回の合コン任務へ参加希望率の高さは恐ろしいほどだった。

なにしろ「女学生に扮して」という条件が付いているのである。もちろん仕事ではある。が、護衛は過保護な父親が、娘の合コンを許可する理由にとつてつけたもので、別段娘が命をねらわれているわけでもない。その上依頼主の娘アレサンドラは、隊長であるレナスと仲が良く、時々隊に差し入れを持ってきてくれたりもする。「合コンするぞ！」

と浅ましく叫んだ隊長は今年26の結婚適齢期が終盤に迫ったお年頃で、この話に乗らないわけがなかった。

結果として、くじで決めた四人と隊長、そして隊長の補佐官であるキアラが参加することになったのだが、どういう訳だが一番やる気の無かったキアラが、当たりくじを引いてしまった。

貴族の男子とお嬢様学校に通う女子。

そういう組み合わせの中に、数あわせとして入れられたのが、彼だった。

ヴィンセント＝アルジエント。ガラハド騎士団1番隊隊長にして、フロレンティアの第六王子。

キアラも最初は彼の存在に気づかなかった。十代後半の若者が中心の中に、まさか20代半ばすぎの、それも王子様が混じっているとは思わなかったし、キアラ同様、ヴィンセントもまた普段の鎧を外し、若い貴族が纏う仕立てのいいスーツを纏っていたので最初は誰も気づかなかった。

しかしフロレンティアでは珍しい短い黒髪に違和感を覚え、たまに近くに寄ったときに伺えば、見覚えのある深い紅の瞳が、つまらなそうに手元のサラダに向けられていた。

なぜよりもよって合コンに王子が！

そう叫びそうになるのをぐっとこらえ、キアラはどうにか自分の席までもどった。

キアラの他にも、レナスや隊士の何人かはヴィンセントに気づいている様子である。しかし、「王子様、ラッキー」と飛びつく愚者はもちろんいない。

今日の合コンは、彼女たちにとって生きるか死ぬかをかけた狩りなのだ。恋人はもちろん、レナスなどはあわよくば結婚相手に出来そうな相手を物色してきたのである。

よって、長期間おつきあい出来そうな好物件以外、彼女たちは完全無視だ。王子という肩書きは、そりゃあ、貴族の娘様方には飛びつきたくなるセールスポイントだろう。けれどそれは、彼女たちが常日頃からゲームのように恋に明け暮れているからだ。

今日捕まえた男を、下手すれば一生使い回さなければならぬ隊士達にとっては、王子は高嶺の花すぎるのだ。

どうせデートの1回や2回で捨てられるのは目に見えているのに、誰が好きこのんで手を出すのか！

そんな雰囲気は隊内からひしひしと伝わってきて、キアラはすこしだけ王子がかわいそうになってきたが、彼女自身は彼氏すら作る気もない。

元々男が苦手で、それが行き過ぎて普段は男装までするような18歳である。

今日も、彼女はあえて談笑の輪にはずれたところで、一人ラザーニアとサラダをがつついていた。

しかし今思えば、そのポジションがまずかった。同じく暇を持てあましていた王子にとって、もっとも声をかけやすいポジションにいたのが、キアラだったのである。

「よく食べるな」

気がつけば、目の前に王子の顔があった。彼が自分の前に席を移動したのだと気づくのに、少しだけ時間がかかった。

「おなが、減ってしまって」

王子と交わす言葉ではなかった。しかし彼はそれで満足なようで、キアラの食事風景をぼんやりと眺めている。

耐え難い気まずさだった。どこの世界に、王子の前でラザーニアをがつつくシチュエーションを楽しめる乙女がいるというのだ。

「食べますか？」

仕方なしに、フォークに指したラザーニアをかがげると、王子はあるう事がキアラの手を引き寄せ、食べかけのラザーニアをぱくりと口に入れた。

「いや、コレじゃなくて！ 新しいのを取り分けようかと、そういう意味だったんですが！」

「一口だけ食べたかったんだ。今ので満足した」

耳に心地よく響く低音で、そんなことを恥じらいもなく言っける。

落ち着け自分。自分は男が苦手だったはずじゃないか。だから無駄に高鳴るな、たいした胸でもないくせに！

と、心の中は阿鼻叫喚だが、もちろん外面だけは冷静に保つ。

「こついつところは良くくるのか？」

「い、いえ、今回が初めてです」

「だろつな。君もつきあいで参加させられた口だろつ」

「君も？」

「今日の幹事役の男いるだろ。あいつ、俺の同僚」

「え、でもあの人がどう見ても18くらいにしか」

「そう言うって事は、俺の年ばれてるか」

墓穴を掘ったかと身構えるが、王子は特に気にする風もなく続けた。

「魔法で外見変えてるんだよ。まあ元から童顔だからあまり変わらんが…」

ちなみに今のは秘密でと、とってつけたように王子は言う。

「変身魔法が使えるって事は、そうとう位の高い方なんじゃ」

「そこはノーコメント。正体ばらしたら俺が殺される」

手元のワインを引き寄せ、王子は苦笑気味にそれに口を付ける。

王子に「殺される」なんて単語を口にさせるといことは、それだけ相手とはうち解けあつた仲なのだろう。

そんな相手が、どうやら今はレナスと意気投合しているようだ。

王子の友人と自分の上官が恋仲になる。それはそれでおもしろいような気がしたが、そんな身分の高い人が、騎士隊の隊長なんかを相手にしてくれるのかとも思う。

女学生で通している今はいい。でももし仲良くなって、恋人として関係を重ねれば、嫌でも彼は気づくのだ。自分の恋人が、普通ではないことに。

「心配しなくてもいい。自分を誤魔化すことはあるけど、女性は大事にする」

黙っているキアラが、男に不審の目を向けていると勘違いしたのだろう。王子はあわてて男のフォローに回る。

「別に彼を値踏みしてる訳じゃないんです。ただ、彼が見ている女性はその、ちよつと問題アリなんで」

「年齢詐称してるとこ？」

「それは、見た瞬間にわかるでしょう。18歳には、見えませんか」

「違いない、と王子が笑う。決して老けているわけではないが、無理に若々しさを取り繕った自己紹介を、キアラも思い出して笑う。黙っていれば美人なのにと、言われ続けたレナスのいつもの悪い癖だ。」

「それで、君もサバ読んでるの？」

不意に訪ねられ、キアラは首を横に振る。

「正真正銘の18です」

「10も年下か」

お互いの年の差だと言うことはすぐにわかった。

しかしその話に乗れば必然的に恋の話題になることがわかっていたので、キアラは聞こえなかったふりをして、お皿に残ったラザーニアを黙々と口に入れた。

## Episode 01 - 2 マフィア上がりの王子様

「で、どういう流れで口説き落とししたの？ ほらほら、お姉さんに話してご覧なさい」

合コンを終えた次の日の朝、騎士団本部にある第四小隊の事務室に入ったとたん、隊長のレナスに捕まった。

「口説き落とししてません。相手が勝手に連絡先を押しつけてきただけ」

「天下のヴィンセント王子に連絡先貰うなんて、それだけで大したもんよ」

「ほしければ差し上げます。別にいりませんから」

「とかいって、まんざらじゃないんでしょー」

レナスの挑発にキアラは無言を貫いたが、凶星でなかったといえは嘘になる。

去り際に耳元でささやかれた言葉も、手渡されたメモも、キアラにとっては簡単に捨てることが出来ない物だった。

レナスや他の隊士に比べたら恋愛に興味があるとは言えないし、正直男は苦手だった。それでも彼女も年頃の娘である。異性への興味も少しずつ芽生えつつあるのだ。

「デートの約束とか、したの？」

「週末に合わないかとは言われました」

「じゃあ、あんた日曜休みね。代わりに私がしっかり盗賊退治してあげるから」

「いや、それはいけません！ 街道の盗賊退治は私が請けおつていた案件で」

「王子様とのデートと、盗賊退治。秤にかける馬鹿がどこにいる！」  
言うが早いか、レナスは他の隊士に休日出勤を申しつける。

呼びつけられた隊士も悪い顔一つせず了解してしまったので、キアラも下手にごねられない。

「でも、ヴィンセント王子って言えばなかなかの硬派じゃない。意外に行くところまで行くかもね」

そんな期待させることを言わないでほしいとキアラは思うが、ヴィンセントの評判はキアラも良く耳にする。

他の王子と違い、ヴィンセントは特殊な事情で王子の位を得た人物だ。

そしてこの特殊な事情は、この国の歴史に関係する。

フロレンティアの歴史は浅く、建国されたのも300年ほど前のことだ。元々は畜産と商業の街として栄えていたフレレンティエという街に、5人の賢者がそれぞれ学舎を興したのが始まりだという。5人の賢者はそれぞれ魔法術、妖精術、医学術、魔科学、そして騎士術にたけた者達で、彼らの学舎には多く人が集まり、次第にそれぞれの学舎は規模を大きくしていった。それが結果的に学舎を囲む街をも発展させ、ついには国になったという。

建国当初は国王はおらず。国政の任につくのは、賢者の学舎を卒業した者達の中でも、取り分けて優秀だった5人の生徒だったという。

現在は、5賢者の中でもきわめて優秀だった魔術師グリモアの血を引く一族が国王の位を有しているが、血筋だけで国の統治者を決めるべきではないと説いた賢者の意思を尊重し、国王は自分の息子の他に5人、血の繋がらぬ子供を王子として向かい入れるしきたりがある。

そうはいつても、跡を継ぐのは大抵血を分けた子供であるのだが、王子となった者達は例外なく国政に関わる重大な任につく。

そしてその5人のうちの1人に選ばれたのがヴィンセントだ。

元はフロレンティアから北西に下った産業国「シチリアーノ」出身の彼は、元マフィアの幹部という異例の過去を持つ。5年ほど前、観光でシチリアーノ国を訪れたフロレンティアの国王との息子がマフィアに襲われるという騒ぎがあった。そのとき二人の命を助け、騒ぎを静めたのがヴィンセントだったのである。当時の働きにいた

く感動した王は、彼をフロレンティアに連れ帰り、開いていた最後の王子の座を与えた。

当初はマフィア上がりの若者など以ての外だと、貴族達からの風当たりは強かった。しかし持ち前の剣の腕と礼儀正しさは次第に民の心をつかみ、貴族達の評価を改めさせ、最近ではガラハド騎士団の隊長にも任命された。

年齢は他の王子より少し上だが、王自身も自分の後継者としてではなく、王子として側に置いておきたいようだ。それを彼自身も理解しているのか、淡々と国王の任務や騎士としての活動に従事している。

王子という立場を利用して遊びほうけている他のお坊ちゃん方と比べれば、なかなか立派な人物だとキアラも前から思っていた。そんな王子が合コンに参加していたのは驚きだが、昨日の様子ではキアラ同様、無理矢理参加させられた線が濃厚で。他の貴族と比べて女性の話題が少ない事を考えると、そろそろ身を固めるとか何とか言われて、無理矢理引っ張ってこられた口だろう。

でも、よりもよって、そこでどうして自分に目をつけたのかとキアラは思わずにはいられない。人より誇れるのは剣の腕くらいだし、美しさよりも気の強さが目立つ目鼻立ちに、女らしさはあまり無い。

遊牧の民の血を引く母から授かったエメラルド色の瞳だけは自慢だったが、日頃の訓練で日焼けした肌の所為で、それも宝の持ち腐れだと自分では思っている。

見た目に寄らず相当趣味が悪いが、硬派といわれつつ本当は女に手が早いのか、そのどちらかなんだろうなと、キアラはため息をついた。

週末まではあと3日。「あれは冗談だった」という文がいつ届くものかと、キアラは本気で思っていた。

**Episode 01 - 2 マフィア上がりの王子様（後書き）**

初の長編です。舞台はイタリア！ファンタジー！恋愛！と少女漫画的な要素をいれようと意気込んだのに、予想以上におなご達がたくさんしくなってしまう。こんなノリでもいいよ！といってくださいるかたは、今後もおつきあい頂ければと思います。

## Episode 02 - 1 初デートは鮮血の香り

盗賊討伐に出かける隊士達を泣く泣く見送って、待ち合わせのリストランテに向かったのは正午前だった。結局、中止を告げる文は来なかったのである。

さすがに剣は腰にぶら下げていないが、出かけ用の私服など持っていないキアラは、結局合コンの時に借りた女学生の制服を着ていることにした。

待ち合わせの10分前だというのにヴィンセントはすでに店にいて、窓際の4人がけの席でキアラに手を振った。

「今日も学校だったのか？」

さすがに着ていく服が無くて、とはいえず、キアラは曖昧な笑顔で誤魔化す。

「今日は俺のおごりだから、何でも好きな物を注文してくれ」

「でも、来たのは私の勝手ですから」

「俺がおごるのも俺の勝手だろ」

それ以上この話題を続ける来はないらしく、ヴィンセントはキアラの前にさつとメニューを差し出す。

値段を見て、正直言葉を失った。昼時、それも学生でにぎわう噴水広場の裏にあるというのに、どうりでお客が全くいないわけだ。

ランチだというのに、キアラがいつも通っているバールの4倍は値の張るメニューが並んでいる。

「決まらないなら、俺と同じのでいいか？」

ヴィンセントの言葉に慌ててうなずくと、素早くメニューを閉じた。慣れた様子で給仕カメリエールに料理とワインをオーダーする様子を見ると、相手は王子なのだなど、今更ながらに思う。

今日のヴィンセントは、貴族と言うよりは騎士団の男性が身に纏うような、厚手の紺のズボンにブーツ、上半身は仕立てのいい純白のシャツ一枚という、きわめてラフな格好をしていた。指定された

リストランテも、値段はともかく割とシックな店だったので油断したが、ふたを開ければやはり自分とは全く違う人種なのだと思感する。

「ワインは白で大丈夫か？」

ヴィンセントの言葉にうなずき、キアラは何うように彼の顔を見た。

「どうして自分がつて、顔だな」

見透かされていた。

「男性から、お誘いを受けたのは、はじめてなので」

「意外だな」

お世辞とはわかっていても顔がほてる。いつもなら、口先だけのお世辞になど耳すら貸さないのに、まっすぐに見つめられた赤い瞳が、彼女の心を放さなかった。

「しかし、その年で異性との交流がないのは珍しいな。俺の故郷とは違って、この国では恋は文化だと聞いたけど」

「たしかに、恋は生活の一部だという人は多いです。愛に生きた遊牧民の血を受け継ぐ人が多いからかもしれないけど、目が合えば恋の始まりだと友達も良く言っています」

「じゃあ、条件はすでにクリアしているわけだ」

「たどえ話です」

「でも、君は来てくれた」

ヴィンセントの言葉に高鳴る鼓動が憎い。

「じゃあ、俺たちの出会いに乾杯でもするか」

どこかおどけた調子で、つがれたワインを掲げるヴィンセントに、キアラも仕方なくグラスを掲げる。

乾杯、そう言ってワインをあおるヴィンセントとほぼ同時に、キアラもグラスに口を付ける。

そして、はっとした。

そのワインは、キアラにとってあまりになじみが深い物だったからだ。

「このワイン」

「シチリアーノの80年物だよ。あそこの国は政情が不安定だから、最近なかなかワインが入ってこない。飲める店と言ったら、盗賊団のアジトくらいじゃないかな？」

そう説明するヴィンセントの瞳が、まっすぐキアラに向けられる。その瞳は先ほどまでの甘い物ではなく、キアラを試すような鋭く輝いていた。

「なぜ、この店に私を？」

「無理矢理連れてこられた合コンで、君だけが俺の相手をしてくれた。そのお礼といったら？」

「じゃあ、つきあつてほしいという意味は？」

「俺一人で乗り込んで、全員を相手に出来る自信がなかった。うちの上官は下世話な盗賊退治になって興味が無いし、この案件をおつていたのは君の隊だと聞いてね」

ヴィンセントが笑ったのとほぼ同時に、前菜を運ぶためにテーブルへとやってきたカメラエーレが、懐からナイフを引き抜いた。

反射的に動いたのはキアラ。手にしていたグラスワインをカメラエーレの顔にかけると、一瞬の隙にテーブルを飛び越えて、カメラエーレの腕を蹴り上げる。

ナイフをとばされたカメラエーレは逆上し、キアラへと殴りかかろうとした。

がそれよりも早く、ヴィンセントがワインのボトルをカメラエーレの後頭部に叩き付けた。

「ロングとはいえ、スカートで回し蹴りはどうかと思う」

「ならどうして、ズボンで来いと言わなかったんですか？」

「男装の麗人が好きだなんて言ったら、俺が君のことを知っているのがバレるだろう」

「私のこと、調べたんですか？」

「キアラ」サヴィーナ。騎士団第四小隊の副隊長。14歳でプリマヴェエラの騎士学校を卒業、同年に王国直属の騎士団にお呼びがかか

るも、そちらを蹴ってガリレオ騎士団に入団。同性愛者かと思われるほど異性との関係を拒み、普段は男装までしている。これ以上はプライベートな問題かと思つて調べてないけど、そのかたくなさの理由には少し興味がある」

「そこまで調べておきながら、今更私の人権を尊重するでも？」

「別に君を傷つけようと思つて調べたんじゃない。ただ、純粹に君とお付き合いを考えて・・・」

「こつこつ状況、おつきあいとは言いません」

言いながら、キアラはカウンターの奥から続々と出てくる人相の悪い男達に目を向けた。出てきたのは全部で六人。その腕には質の悪い大降りの剣が握られている。

「こいつら、私がおつていた盗賊団です。街道で荷馬車を襲つて情報は、どうやら嘘だったみたいですね」

「だから今朝方君の部隊がぞろぞろ出かけてつたのか」

「知つていて、あえて止めなかつたのでしょ？」

「声はかけたんだが、すてきな笑顔で君のことを頼むと言われてね」

「どうせはなから言う気なんてなかつたんでしょ？王子のくせに性格が悪いですね」

「よく言われる」

ヴィンセントは足下に置かれていた2本の剣を拾い上げ、その片方をキアラに投げ渡す。

「どうしても、この案件は俺の手柄にしたいんだ」

さやから剣を抜き放ち、ヴィンセントが手前の男に斬りかかる。

「人に手伝わせておいて？」

ヴィンセントに負けじと剣を抜き放ち、キアラは素早い動きで、彼の背後へと回り込む男に一太刀を浴びせた。

どの敵も、動きが遅い。素早さを武器に剣を操るキアラにとっては、楽すぎるくらいの相手だ。

制服が血に濡れることもいとわず、キアラは続けざまに三人の男を切り伏せた。命までは奪わないが、腕や足の一本はとばす。そう

でもしないと、これだけ体躯のいい男達は抵抗をやめないからだ。  
四人目の男の右腕を切りとばし、暴れる前にと首を絞めて意識を  
落とす。

それから五人目を相手にしようと剣を構え直すと、すでに最後の  
一人はヴィンセントが斬り倒したあとだった。

「まだ、奥に何人かいる」

「あなたはここにいてください。あとは私が片づけます」

キアラの言葉に振り返ったヴィンセントは、血に濡れたキアラの  
横顔に思わず口をつぐむ。ヴィンセントの視線にキアラも気づいた  
のだろう、彼女はほほに付いた返り血をぬぐいながら、無理矢理微  
笑んだ。

「私が異性を寄せ付けけないのは、遅かれ早かれこういう顔を見られ  
るからです。女の子の服を着ないのも、丈の短いスカートや可愛ら  
しいだけの服じゃあ、鍛えた体を隠しきれないから」

小さい頃から、騎士になりたいと思っていた。

がむしゃらに勉強して、稽古をつけて、騎士になって……。自  
分の性別を自覚したのはそのさらに後。

でもそれは本当に今更で、強くなることは男のようになることだ  
とも思っていたキアラにとって、今更自分の体と心を女の子に変え  
ることは出来なかった。それでも、少しばかりの勇気で希望に手を  
伸ばしたらコレだ。結局、自分はいくらがんばっても女の子にはな  
れない。

「ありがとう。あなたみたいなのが悪い人は好きじゃないけど、  
私の目を見て、可愛いって言うてくれたのは結構嬉しかった」

逃げるように、キアラは店の奥へと駆けだした。敵は、まだ残っ  
ているし、それを見過ごすことはもちろんできない。なぜならばキ  
アラは、か弱い女の子ではなく、誇り高きフロレンティアの騎士だ  
からだ。



キアラ達第四小隊がおっていたのは、高級ワインを積んだ荷馬車ばかりをねらう盗賊だった。

フロレンティアから東に延びるロマーナ街道を根城にしたその盗賊は、奪ったワインを独自のルートで横流しし、資金を得ているという。その取引先の一部が貴族だったために、騎士団もなかなか手が出せないでいたが、襲った商人の中に死者が出たため、ようやく第四小隊が討伐に向かうことになったのだ。

しかしどうやら、苦労して得た情報は眉唾物だったらしく、盗賊達は取引先のリストランテの下が本当の根城だったらしい。情報をくれた点では、ヴェンセントに感謝しなくてはと思ったが、どうせ教えてくれるならばこんなやり方でも良かったのにと、キアラは思わずにはいられない。

リストランテの地下、三百平方メートルはあるつかというワイナリーに足を踏み入れたとき、その思いはさらに強くなった。

ワインの大樽の陰に隠れて伺えば、少なくとも十人以上の盗賊達が武器を片手にキアラを待ち受けていた。とっさに隠れたからいい物の、上での騒ぎを知った盗賊達は殺気だっており、一人でこの数を相手にするのは少々骨が折れる。

「あんな恥ずかしい事言わずに、ついてきて貰えば良かった」

思わずつぶやいた泣き言に、

「そういう台詞は、君も目を見ていってほしいな」

と答えたのは、いつの間にか背後に忍び寄っていたヴェンセント。叫びたいのをぐっとこらえ、目で不満を訴えれば、ヴェンセントはキアラの明るい銅色の髪をクシャクシャとなでた。

「どうしてきたの？」

「君が心配だったから」

「嘘ですね」

あまりに速いつつこみに、ヴィンセントは仕方なさそうに白状する。

「本当は君に手柄を取られたくなかった」

「私はいつらが捕まえられればいいんです。手柄なんていくらでも差し上げますよ」

「ずいぶんと優しいな」

「王子様に敵しくできると思ってた？」

「その呼ばれ名は好きじゃない。二十八にもなって、王子様はないだろ」

「いいから、協力するならさっさと乗り込んでくださいよ。私は王子さまと違って暇じゃないんですから」

「お前も、性格悪いって言われるだろ」

あきれた顔で、ヴィンセントは懐から黒い物体を抜き出す。キララの記憶が正しければ、それは拳銃と呼ばれる最新鋭の武器だ。魔科学研究所が考案したという、魔法をもしのぐ小型の遠距離武器。

製造が難しく、扱いも容易ではないからと騎士団の装備にはならなかったが、貴族の間では護身用にいくつか出回っているとは聞いていた。

「俺が気を引くから、お前は反対側から回り込んでくれ」

「それじゃあ、あなたが危険です」

「王子って肩書きで見くびってるかもしれないが、君よりは長く生きてるし、場数が違う」

言うが早いのか、ヴィンセントは銃を片手に物陰から飛び出す。

彼がトリガーを引くたびに、銃口の先に立つ男達が、腕や足を抱えて崩れ落ちた。確かに攻撃のスピードは詠唱が必要な魔法以上だ。威力はそれほど高くないようだが、敵の足止めにはもってこいだろう。

「いけ、キアラ！」

低い声で呼ばれた名前に思わず息が詰まった。それでも体は勝手に敵にねらいを定めていたが、剣を振るその手がわずかに震えるの

がわかった。

敵を倒すのは簡単だ。キアラだって場数は多い。しかし混戦で、しかも背中合わせで戦うような状況で、相手が男なのは始めてだった。女性とは違う、圧倒的な存在感。それを感じるだけで、背筋が伸びる。

「いい腕だ」

背中越しの声に、心が震える。しかしへまはしない。もちろんキアラがそれだけの腕であることも確かだが、お互い初めての共闘だというのに、相手の次の動きが手に取るようにわかる所も大きい。

敵の攻撃の交わり方も、交わした後の反撃のタイミングも、フォローしてほしいタイミングも、気がつけば体が勝手に感じている。

「最後だ」

同時につきだした剣が、盗賊の頭と思わしき男の両腕を切り裂いた。

絶叫をあげて倒れる男、その体から上がる血しぶきから、キアラを守るようにヴィンセントが体を移動させる。

「今更です」

「どこに立とうが、俺の勝手だろ」

剣をさやに戻し、ヴィンセントがこともなげに言う。

床に倒れる男達がいなければ、恋人同士に見えたのだろうかと、そんなことを考えている自分に気付いて、キアラは激しく後悔する。

「どうした、怪我でもしたか？」

「していたとしても、あなたの手だけは煩わせません」

向き合うようにして立つヴィンセントに悟られないよう、顔をそっと背けながら、キアラは最後まで、憎まれ口しかたたけなかった。

## Episode 02 - 3 男らしさは程々に

「制服は、ヴェンセントが弁償してくれるそうです」

「そんな当たり前のことで、私が納得すると思うのかわっ！」

無駄足に終わった盗賊討伐から帰ってきた隊士達を出迎え、あらかたの事情を説明したキアラへの、レナス隊長の返答はその一言であった。

ちなみにいつもの隊室ではなく、「飲まないとやってられない」というレナスの一存により、騎士団本部の側にある行きつけのバーでのことである。

夕方前というのもあって、お客はまばらだ。そんな時間からビールを注文するレナスに、なじみのバリスタは笑い、「キアラちゃんも苦労するなあ」とカフェを入れてくれる。

この店のような、小さな商店をかねたバーは、フロレンティアの国民にとって憩いの場だ。席は少なく立ち食いがメインだが、カフェや、パニーニのような軽食やジェラートからアルコールまで、取り扱う品の幅は広い。

そして彼女たちの行きつけのバーは特にアルコールの種類が豊富で、キアラは大抵カフェですが、レナスは立ち飲みが出来なくなるくらいの量を平気で飲む。

「で、結局あの王子様は何で盗賊のこと知ってたわけ？」

「私達と同じく、ガラハド騎士団へも討伐依頼がきていたようです。ただ、あちらは貴族への圧力に値を上げて、捜査自体は早々に打ち切ってしまったようですが。担当者として納得がゆかず、一人捜査を続行していたようですね」

「そこに偶々、同じ相手をねらうあんたが現れた。あら、運命の出会いっぽくて、なかなか素敵」

「勘弁してください。せつかくうちの団の大手柄になるところだったのに、横からかつさらわれたんですよ」

「まあ、あちらさんのメンツも立ててお上げなさいな。いくら王子といえど、無断捜査がばれればまずいでしょうし、手柄の一つも手みやげにしなきゃ言い逃れ出来ないのよ」

「でも！」

本気でいらついているキアラに、レナスは少しだけ驚く。基本的に、キアラが異性に対してこうもムキになること少ない。

幼い頃から騎士になることだけを、ただひたすらに追い求めてきた為か、彼女は「騎士」に関すること意外にはあまり興味を示さない。

どんなときでも騎士らしく、騎士として、騎士であり続けるために。

彼女の行動の三原則は、すべてが「騎士」である。

そんな彼女が心を揺さぶられる相手。それもまた騎士であるのはさすがといえるが、少しでも女らしさが芽生えつつあるのは悪い事じゃない。

「惚れたんだ」

キアラが、カフェを思い切り吹き出した。

「そろそろだとは思ったのよね。むしろ、遅すぎるくらいって言うか」

「な、何を言い出すんですか！」

「初恋よ、初恋。あんたの場合は女らしさの目覚めも込み」

「お、女らしさはすでにあります！恋とか、考えたことあります！心の、中では」

「考えるだけじゃまだまだ。恋は落ちてなんぼなのよ」

変なところで意地になるところがまた可愛いが、それを異性の前で出せるようになるのはまだまだか。

だがもしかすると、そう言う相手に彼女はついに巡り会ったのかもしれない。

「ともかく、私の話は置いておくとして。やっぱり問題は盗賊団の」「話をすり替えなーい」

「でも、2ヶ月もかけて情報あつめたのに、このオチはひどいと思いません？」

「少なくとも、今期のボーナスに上乘せは期待出来ないわねえ。あ

ーあ、ブランドのバック、買っくんじゃなかったー」

とか何とか言いながら、「ワイン」と叫ぶ隊長の姿に、キアラはあきれほか無い。

しかし、あきれる一方で、キアラはレナスのことを尊敬もしている。

女もうらやむブロンドと、どんなに長い時間太陽の下にいても、決して日に焼けない白い肌。エルフの血を引くと言われるマクスウエル家の長女でありながら、貴族としてではなく騎士として生きる、美しき上官。

彼氏がほしいとか、ブランド物の服がほしいとか言いながら、彼女が自分の家や財産を利用することはなく、どんなときも、剣ですべてを勝ち取ってきた。

そんな彼女こそ、女騎士の鏡でありキアラの目標だ。

「そういえば、この前の合コンで連絡先を交換した相手、どうなんですか？」

「うふふ、明日デート」

「じゃあ、そろそろ帰りましょう。二日酔いじゃあ、格好が付かないでしょ」

レナスの代わりに運ばれてきたワインを代わりに一気飲みして、キアラはにっこり微笑んだ。

「そういう無駄に男らしトコ。いい加減隠した方が良いわよ」

思わずこぼれたつぶやきは、可愛い部下を案じる、優しい上官の忠告だった。

親友が本気で恋をしていることに、ヴィセントはすぐに気がついた。

「ねえヴィン、女性への贈り物はやっぱり花かな？ それともワイン？」

少年のように微笑む親友、アルベール「アレクサンドルの言葉に「ワイン」とヴィンセントは答える。

「そうか、やっぱりそうだよね」

栗色の巻き毛を揺らしながら、「ワインセラー見せて！」と言うが早いか部屋を飛び出していくアルベール。ヴィンセントの屋敷あることも忘れて駆け出す親友に、彼はやれやれと首を振る。

客間を出てすぐ横の木の扉を押し開ければ、地下のワインセラーへと続く階段はある。そこを降りていると、昼間に戦った一人の少女のことが思い出された。剣の腕ならば、ヴィンセントとも並ぶその上小柄な肉体を生かした体術はスピードがあり、しなやかな体から繰り出される蹴りは見事だった。

しかしなによりも、一流の剣士でありながら、時折見え隠れする女の子らしい瞬間と、それに気付かず無意識のうちに男のように威勢良く振る舞う元気の良さ。それでいて、自分を悲観する儂げな視線が、ヴィンセントの脳裏から離れない。

自分を見つめる瞳は、小動物のように落ち着きが無く、愛らしい。しかしひとたび視界に敵の姿があれば、それは一瞬にして獣のそれと変わる。

「キアラ、か」

背中をあわせて戦った記憶と、自分に向けられた表情のギャップが、ヴィンセントの記憶に深く深く、彼女の存在を刻みつける。

「ヴィン、コレなんてどうかな？ 飲みやすいつて、この前いつてたよね」

「あ、ああ。いいと思うよ」

「じゃあ、コレ貰っていてもいいかな？ 今度、お返しにうちのワインセラー漁らせてあげるから」

「気にするな、お前には日頃の恩もある」

「そうだよ、僕のおかげでヴィンにも彼女が出来たんだもんね！」

親友の暢気な言葉に、ヴィンセントは苦笑を返す。彼女ではないといえば、今日の出来事を説明しなければならない。そうすれば必然的に、彼にレナスの正体を告げなければならないだろう。いずれは分かってしまうことかもしれないが、お互いがお互いの正体を隠しているうちは、他人が口を挟むことでは無い気がする。

「そうだ、最近ヴィンが顔を見せないから、父さん心配してるよ。

食事に誘っても反応が悪いつて泣いてる」

「ただ、忙しいだけだよ」

「でも、たまには気遣ってあげてね。ああ見えて王様なんだし、下手したら王子を首にされちゃうかもよ」

「それはそれで俺はかまわないんだが」

「僕はやだよ、兄さん達はみんな僕に冷たいんだもん。仲良くしてくれるのはヴィンだけ」

「だからって、恋愛相談までされても困るぞ俺は」

「じゃあ、ヴィンが逆に相談してよ」

立ち戻った話題にあからさまなため息をつけば、アルベールはここにこ笑う。

「で、昨日の子はどうだったの？」

こうなれば正直に話すまで折れないことは、長年お付き合い分かっている。仕方なく、レナスの正体がばれない範囲で今日の出来事を告げれば、アルベールの顔には心底あきれ果てた表情が浮かぶ。

「それさ、あの子にとっては要らぬお節介だったんじゃない？」

「俺は親切で、アジトを教えてやったんだぞ」

「教え方がなってない。そんな回りくどいことするくらいなら、普通に盗賊取り逃がした方がずっと良かったってその子思ってるよ」

たしかに、素直に教えろとキアラにも怒られた。

「それに、食事の誘いに乗ったって事は、少なからず彼女の方にはヴィンに対する好意があった訳だよ。そんな女の子が、返り血のついた自分の姿、見られたいわけない」

「調べでは、細かいことを気にする女性ではないと出ていたが」

目の前に立つのは本物アホなのかと、アルベルはあきれを通り越して怒りを感じる。

「あのね、女心はプロフィールには乗ってないの。それに、事前にデート相手の身辺調査とかあり得ない。相手の素性を自分のトークで引き出すのがデートの醍醐味だし」

仕事馬鹿の友人が異性に興味を示したというのは、喜ばしいことでもある。がしかし、もう少しやり方というものがあるだろうに。

「もう一回、ちゃんとあつて謝った方が良いよ。ヴィンも一方的に恨まれたままじゃ嫌でしょ？」

「やっぱり、嫌われたかな」

「そりゃあ、壊れやすい乙女心に向かって上級魔法ぶつ放したあげく、魔剣デストロイヤーでポッコボコニ粉碎させたようなもんだもん」

「そこまでか！と、今更気付くヴィンセントもヴィンセントである。仲直りには、ワインより花が良いと思うよ」

得意げな親友の言葉に、このときばかりは素直にうなづくヴィンセントであった。

「じゃあ、授業料としてこのワインはもらっていくから」

「ずいぶん高くつくなあ」

「もっと色々教えてあげようか？ フロレンティア流の女の子の落とし方」

「いいからさっさとワインを持って出て行け」

親友であり、弟のようなアルベルの頭を乱暴になでながら、ヴィンセントは笑った。

しかし次の日、ヴィンセントはこのときのやり取りを激しく後悔

することになる。

アルベールが無邪気に持ち帰ったワイン。それが奇しくも、もう一度キアラと彼を結びつけることになるうとは、今の彼は思いもしないのだった。

「さあ、今日の私は何点だ！」

勝負服に袖を通し、目の前で上官に仁王立ちされるときほど、キアラはレナスと同室になった自分の不運を悔やまずにはいられない。騎士団の雀の涙ほどの給料を節約すべく、キアラは騎士団の指定寮になっている、このオンボロアパートメントに住んでいるのだが、どういふ訳だか同室は上官のレナスなのである。入室当初は見ず知らずの女性隊士と同じだったが、キアラの押しに弱い性格を見抜いたレナスが「こいつを同室にしたら、あれこれこき使ってやれる！」という理由で無理矢理部屋替えを宣言。そして今に至るといっわけである。

「いいと、思いますよ」

「私は点数を聞いています！」

とはいうものの、キアラのたたき出した点数は5点が良いところ。素直に言えばげんこつが降ってくる点数である。

しかしこれはレナスが悪いのだ。あえて若さを演出する、無駄に襟元が開いたドレス着るから、年を誤魔化しているのがさらに目立つてしまう。

「ここは清楚な方がいいと思いますよ。この前買った若草色のアフターアンドレス。あれにしたらいかがですか？」

「あれ、ちよつとババ臭くない？」

「そんなことはありません。むしろ、その異常なほど開いたドレスでは、隊長の鍛え上げられた胸筋が際立ちます」

キアラの一言に、レナスはあわててドレスを着替え始める。

「せめて、コルセットでも締められればいいんだけど」

「大丈夫、隊長の脇腹はちゃんと引き締まっていますから」

「しかしやはり、もつとくびれた方が」

「いや、むしろ鉄のように堅く引き締まった隊長の脇腹は、コルセ

ツトじゃびくともしないと幸いです」

「それは嫌みか！」

「いえ、単なるアドバイスです」

渋々口を閉ざすレナスの着替えを手伝いながら、キアラはけなしつつもレナスの美貌をうらやましく思う。

「大丈夫、隊長は綺麗です」

キアラの言葉に、レナスは心の底からうれしそうに笑う。

「ありがとう。お前の一言を聞くと安心する」

キアラに礼を言つて、レナスは乱れた髪を素早く整えた後、「今日こそは負けない！」と戦に出陣するかの様なかけ声を残して部屋を出て行った。

残されたキアラはといえば、レナスの脱ぎ散らかしたドレスをタンスへと戻している。下手に放置していればしわになるし、放置していたことがばれば「なぜ仕舞わなかった！」と理不尽な説教を食らうのは目に見えている。レナスの強引なところは嫌いではないが、わざわざ怒られに行くような趣味もない。

「こんどこそ、上手くいけばいいな」

思わずそんな言葉をつぶやいてしまい、キアラはふと窓の外に目を向ける。今日のフロレンティアは、白い雲が生える快晴で、どこまで続くあかね色の瓦屋根がより一層美しく見えた。

他国では鉄やガラスを使った建築物が増えているご時世だというのに、この街の建物はどれも石や土壁で出来た古めかしい物だ。

歴史的景観を残すためだと言つて、新しい建造物の建設を禁止しているのが原因だが、おかげで他国からの観光客も多く、彼らが落としていくお金はこの国の貴重な財源の一つだ。

キアラの住んでいるアパートも、行きつけのバルやレストランも、もとは千年以上も前に作られたと石造りの建物を改装することによって、今の形を保っている。

国が出来たのは最近だが、街を構成する建築物のほとんどは数千年前からあるものなのだ。

もちろんすべてが昔のままではないが、近年発見された時を操る妖精の協力のおかげで、この街には物質の時を止める時間魔法がかけられている。

滅びることのない、均一性がとれた石造りの町並みと、それを覆うあかね色の瓦屋根はいつ見ても美しく、所々に見え隠れする大聖堂や鐘楼は、荘厳で神々しい雰囲気は今もなお湛えながら、静かに街を見守っている。

今も歴史が根付くこの街が、キアラは好きだ。好きだからこそ守りたいと思うし、願わくば、この美しい街を守り続ける騎士でありたいとキアラは考える。

それは女らしく生きることよりも、キアラにとっては重要なはずだった。

なのに、美しい町並みを眺めていると思い出すのは、自分を利用した男のこと。

「また、会えるかな」

無意識のうちに彼女はつぶやいていた。自覚のない一言は、軽い寒気をキアラにもたらす。

恋愛小説の主人公なんて柄じゃないのは、自分が一番知っている。それに何より、相手は自分を利用した男だ。好みでもないし。

「しっかりしろキアラ。あんたは、女じゃない、騎士だ。むしろ男だ」

呪文のようにぶつぶつ喋るキアラの様子は、少々不気味だが、止める相手は誰もいない。

はずだった。

「レナス嬢はどこだ!」

鍵をかけ忘れた扉を開けて、部屋に飛び込んできたのは、予想もしない人物だった。

「ヴェインセント、様」

何とか残った理性で「様」をつけ、キアラは啞然とした顔でヴェインセントを見る。

「レナス嬢は？大切な話があるのだが」

「レナスなら、今し方デートに」

「入れ違いになったか」

「隊長に何のようですか？何か申しつけることがあれば、伝えておきますけど」

「後では遅い」

せつぱ詰まった様子のヴィンセントに、キアラもただならぬ気配を感じて身構える。

「デートの場所なら聞いているので、ご案内しましょうか？」

「いや、私も聞いているのだが・・・」

そこで、キアラも気付いた。二人が出かけたのは有名貴族が主催する開かれる仮面舞踏会。いくらヴィンセントといえども、相手がいなければ入れない。

「一緒に、来てもらえないだろうか？」

くると思っていたが、いざ言われると返事に困る。

「でも、私ではヴィンセント様のお相手には不釣り合いだし」

「問題ない。仮面で顔は隠す」

「嫌みか！ と突っ込みたいのを押さえつつ、

「でもドレスもないんです」

とさらに釘をさすが、ヴィンセントは諦める気がないらしく、キアラの腕をすでに取っていた。

「それくらい、すぐに調達する」

「ヒールの高い靴を、はいたこともないような女ですよ！」

「たのむ、今回は少し、荒れるかもしれないんだ」

付け足された一言に、さすがのキアラもそれ以上の抵抗ができなかった。

## Episode 03 - 2 慣れないドレスに悪戦苦闘

舞踏会は、フロレンティア1の商家メデイチ家の所持する郊外の湖畔にて行われていた。

楽団の音楽に合わせて踊る者、出された料理を優雅につつく者、用意されたボートにカップルで乗りこむ者。皆それぞれに会を満喫している。

舞踏会の主催者であるメデイチは、フロレンティア周辺の商いを取り仕切る商人である。

商いで得た支出から肥を増やし、今では貴族のように振る舞っているが、実際彼らの一族に貴族の血は入っていない。

とはいえ、現在の社交界において重要視されるのは、血統ではなく知名度と資産。成り上がりだが、商人としての腕は一流であるメデイチ家に取り入ろうとする物は多く、会場はかなりのにぎわいであつた。

「ずいぶんと、人が多いですね」

慣れないドレスに悪戦苦闘するキアラを、ヴィンセントが嫌みのないエスコートでフォローする。

道すがら駆け込んだ高級ブティックで、ヴィンセントが見立てたドレスと靴は、さすがキアラに似合っていた。残念ながら仮面舞踏会故顔は隠れてしまうのだが、正直ヴィンセントは少しほっとしている。こんな可愛い女の子を連れて歩けば、知り合いに何を言われるか分からないし、彼女も不特定多数の男に声をかけられる事請け合いだ。

自分とはもかく、キアラが男にちやほやされるところは何故だかあまり見たくない。何より彼女自身がいやがるだろうし、その当てつけが自分へと向けられるのは嫌だった。

「しかし、広い会場ですね」

「こつという所ははじめてか？」

「馬鹿にしないでください。護衛で何回かは来たことあります」

「それは回数に入れるべきではないと思う」

「そう言うあなたは？」

「あるが、あまりに誘われるので途中で数えるのを辞めた」

そう言う台詞は嫌みなのか天然なのか。真顔で言われると判断に困る。

「レナス嬢が行きそうな当てはあるか？」

「普段なら食い気を優先させそうだけど、男がいるならボートですね。変なところでロマンチストだから」

まあ、すでにフラれていなければの話ですけど。

キアラの一言に苦笑しつつ、ヴィンセントがキアラを連れ立ったのはボート乗り場だ。

「ここで待ち伏せしますか？」

「時間が惜しい、乗るぞ」

順番待ちを強いている貴族の間を強引に抜け、ヴィンセントは今し方開いたばかりのボートに飛び乗る。乱暴だなと思いつつも、彼一人を行かせるわけにも行かないので、キアラも棧橋を蹴ってボートに飛び乗った。

彼女に手を貸す気でいたヴィンセントは、キアラの挙動に、なすべがない。

「エスコートしようと思ったのに」

「され方がわかりませんので」

キアラのつれない態度に、ヴィンセントがやれやれといった具合に腰を下ろす。その表情を見なかったことにして、キアラもまたボートのバランスを取るために腰を下ろした。

こぎ手はヴィンセントで、キアラはただ船に揺られていれば良かった。本当は少し申し訳ない気もしたが、女性がオールを握る船はどこにもない。下手に割る目立ちするならば、黙っている方が健全だ。

「仮面の下からでも、レナス嬢のことがわかるか？」

「ドレスの柄でわかります」

「もし見つけたら合図してくれ、ボートを近づける」

「しかし、なぜこんな回りくどいことを？ まさかデートの邪魔が趣味とか？」

「問題はレナス嬢ではなく、彼女が受け取るプレゼントにある」

「爆弾でも渡されるんですか？」

「いや、ワインだ。彼女のお相手は俺の親友でね。デートの手みやげにワインが欲しいとねだるので一本やったのだが、それがどうやら渡してはいけなかった物のようで」

「それに今更気付いて取りに来たと。しかしそれなら、そのお友達の方に返してくれと頼めばいいじゃないですか」

「あいつにだけは知られたくない案件なんだ。悟ってくれ」

「昨日のことに関係、あるんですね」

キアラの一言に、ヴィンセントはわずかにうなづく。

昨日と今日の言動から察するに、ヴィンセントには何でも一人で解決したがる所があるようだった。王子のくせに、誰かに頼るタイプの人間ではないのだろう。そんな人が自分を協力者を選んでくれたことを考えると、忘れていたはずの胸の鼓動がまたぶりかえす。

「あの右奥の船に、隊長がいます」

声のふるえを悟られないように、キアラはそれだけ言ってレナス達の乗る船にだけ目を向ける。

10メートルほど離れた位置にある黄緑色のボートの上で、レナスが相手と楽しそうに話しているのが見える。仮面で顔を隠しているも、感情が動きに出やすい彼女が笑っているのは一目瞭然だ。

「ワインは見えるか？」

「包みが、隣に置かれていますね」

「さり気なくボートを寄せる。ひったくれ」

これまた、無茶な命令である。天下の第四小队隊長の隙について、彼氏からのプレゼントを奪い取れとは、地獄から悪魔の角を持って帰れと言っているような物だ。

「それは遠回しに、私に死ねとおっしゃってるんですか？」

「やらなきゃ、レナス嬢とアルベールが危険に巻き込まれるかもしれない」

思わず耳を疑ったが、ヴィンセントが、こんな所で笑えない冗談を言うような性格だとは思えない。

「殺されたら、敵を取ってください」

オールを操るヴィンセントに言って、キアラはわずかに腰を上げる。

ひつたくるなんて甘いやり方では、レナスから物を奪うなんて無理だ。奇襲を駆けて一気にやり遂げるしかない。

「揺れます、せいぜい落ちないように」

言うが早い、キアラはドレスの裾をひつつかむと、ボートの底を蹴って跳躍した。

レナスのボートまでは3メートル。キアラにとっては造作もない距離だった。

「あ、あんた！」

ボートに乗り込んできたドレスの女に、さすがのレナスも動揺のあまり動きがぎこちない。その一瞬の隙をついて、キアラはワインの包みをつかみ取る。

レナスが声を上げ、ボートの上であるのもかまわずキアラに足払いを駆けたが、それも予想の上だ。

キアラはレナスの足をよけるように、今度はボートの舳先に向かって跳躍する。

「来い、キアラ！」

また、あの声が彼女を呼ぶ。

ワインを片手に、残されたボートのバランスが崩れるのもお構いなく、キアラは跳んだ。

その先にはヴィンセントの待つ船があり、着地するキアラを、今度はヴィンセントが完璧にエスコートした。

「良くやった」

抱き留められた腕の中で、キアラは背後でボートが転覆する派手な音を聞いた。

「隊長に、後で殺される」

「フオローはしよう」

抱きしめられたまま、耳元でささやかれた言葉に、キアラは耳まで真っ赤になった。それにヴェンセントは気付いていたが、このまま腕を放すのが妙に惜しく、あえて今は何も言わなかった。

さすがにあの騒ぎの後、堂々と棧橋に戻ることも出来ず、ヴィンセントはポートを棧橋とは反対の対岸につけた。

今度はキアラの下船を手助けし、少し満足げに笑う。それからヴィンセントはワインの入っていた包みを開けた。ボトルに破損箇所はなく、コルクもしっかりとしまっている。

「強奪する対象を破損させるほど、素人じゃないですよ」

乱れた髪を直すのに手間取り、結果的に髪留めを乱暴に外しながら、キアラは不満げに言った。

「すまん、見くびった」

素直に謝まられると、それはそれで気まずいのだが、キアラは表情を崩すのもしやくなので、そのままの勢いで尋ねる。

「それで、そのワインに何か問題でも？」

ヴィンセントは言葉に詰まったが、ここまで強引に協力されられておいて黙っているほど、キアラはお人好しではない。

「私はあなたにとって、使い勝手のいい駒か何かですか？ 答えによつてはそのワイン、今度はあなたの腕から無理矢理強奪しますが」「すまない、下手に巻き込んで悪いかと思つて、つい口が重くなつた。訳は話す」

この状況で、まだ巻き込んでいるうちに入らないというのか。ならば、いったいどれほどのことにヴィンセントは首を突っ込んでいるのだろうか、キアラは少し不安に思う。

「君たちが追っていた盗賊団、彼らの盗品の売り手に、貴族がいたのは知っているな」

キアラはうなずいた。だからこそ、討伐までに時間がかかったのだ。基本的に、キアラ達の騎士団はフロレンティアで起きた事件を、即事解決するために設立されたものだ。同じ位置にあるガラハド騎士団は貴族や王族出身の騎士が多く、隊を動かすのに何かと制約が

出る。その制約を逆手に取った賊や事件が多発したことから、より自由に剣を抜ける、自営団に近い騎士団が必要となり、結成されたのがガリレオ騎士団だ。

しかしそんなガリレオ騎士団でさえ、捕縛に時間を取られる場合がある。権力のある貴族からの横やりや、王族からの圧力がそれだ。「盗賊との取引先は、メデイチ家と並ぶ商人出の貴族ヴィッチーニ家」

「意外と小物じゃないですか」  
「今のところは、な」

それが小物でなくなる可能性が、ヴィッチーニ家にはあるようだ。「しかし、裏についている奴らのたちが悪い。というより、ヴィッチーニ家は商人の皮をかぶった元マフィアだ。美術品の取引で成り上がったメデイチ家とは違い、裏で裁いているのは危険な錬金術の商品や、幻覚性のあるフェアリーパウダー」

「麻薬ですか」

「フロレンティアでは個人使用目的での取引が禁止されている。しかし学術都市故に研究への使用は認められているだろ。それを貧乏学生あたりが小遣い稼ぎに横流しているという噂があつてな。調べた末にたどり着いたのが、ヴィッチーニ家。いや、ヴィッチーニファミリーだ」

「じゃあ、あの盗賊団も？」

「ファミリーの下っ端だ。元々あのレストランは貴族ではなく、その筋の御用達だ」

「しかし、マフィアが絡んでいるならば、いくら貴族の圧力があつたとしても、強制捜査に踏み込めるのでは？」

「試しに、昨日捕まえた男とヴィッチーニ家の因果関係を上に報告してみたが、見事にもみ消されたよ。やっぱり、王家と関わり合いがある貴族は扱いが難しいな」

「王家とですか？」

「ヴィッチーニ家の長女と、第5王子の縁談が持ち上がっていると

言ったら君は信じるか？」

「ヴィンセントの言葉は、あまりに衝撃的な物だった。」

「まさか、よりもよって」

「俺も信じたくはなかったが、ガラハド騎士団ではこの件の捜査すら行われなかった。堂々と街道で盗みをはたらく盗賊を無視しろと言われたとき、嫌な予感がした。それで調べてみたら、取引先の中に、ヴィート王子の名があった」

その名に、キアラの顔が複雑になる。

「ヴィートは、国王の長男にして第5王子の位を持つ貴族だ。アルベールよりも一回りは上だが、彼が王子になるとき、すでに末っ子であるアルベールが直系の王子として名が上がっていたため、わざわざメデイチ家の養子になってまで、王子の位を受け継いだ策士だと言われている。父の国王とは確執があったようで、メデイチ家と共闘する貴族の圧力により、無理矢理第5王子の位を得たというのがもっぱらの噂だ。」

しかしキアラの不安は、また少し別の所にあったのだが、今はあえて何も言わない。

「しかし、王子ともあろう方がケチな盗賊からワインを仕入れて何を？」

「ワイン、ではない物を仕入れていたとしたらどうする？」

「ヴィンセントは言うと、包みから出したワインのコルクを抜いた。上品な赤ワインの香りが立ち上るべきその瞬間、キアラの鼻孔を刺激したのはきつい血のにおい。」

「これは」

「血だ、それも人の」

血に慣れたキアラとはいえ、ボトルの中で揺れる赤い液体には気分が悪くなる。

「なぜ、このような物が」

「これは噂だが、ヴィッチーニ家とヴィートは共闘して、不死の研究をしているらしい。その過程で死ぬことのない生き物の開発を行

つているとの、噂がある」

「不死と血……。まるで、ヴァンパイアですね」

人より遙かに長い年月を生き、人の血を食らう種族。ヴァンパイアと呼ばれる彼らは、エルフやドワーフ同様、今も実存される種族である。個体数が極端に少なく、その原因は彼らの不死の力をねらった人間が、18世紀の終わりに彼らを狩ったこととされている。

現在では、安全保障の条約が人間とヴァンパイアの間で結ばれ、両者の間に大きな対立は起きていないが、変わりにヴァンパイアの姿を人の街で見かけることもまた少なくなった。

「ヴァンパイアよりたちが悪いだろうな。最近のヴァンパイアはバールで女を口説くくらいだが、化け物に女を口説くセンスがあるとは思えない」

「しかし、それは本当なんでしょうか。人が不死を手に入れようなど、神の意志に反していると思います」

「彼らの信じる神は許してくれるのだろう。一つの神に縛られた時代はとうの昔に終わったんだよ」

ヴァンセントは言うと、ボトルに満ちた赤い血をじっと見つめる。その目が一瞬、獣のように鋭く光ったような気がしたが、コルクをきつく閉めるヴァンセントの表情はいつもの、きまじめな彼の物だ。「まあ、化け物の噂云々よりも、問題はこんな物を裏で取引しているヴァイトとヴィッチー二家だ」

「コレを証拠として国王に直訴する訳にはいかないんですか？」

「そのつもりで、昨日ワインセラーから盗み出したんだ。しかし俺としたことが、まさかアルベールに持ち出されるとは」

「どんだけぼんやりしてたんですか」

「面目ない」

まさか、キアラのことを考えていてとは言えず、ヴァンセントは素直に頭を下げる。

「しかし、それならそうと言ってくださればいいのに。うちの騎士隊ならば、王族相手にも憶することはありません」

「だからこそだよ。貴族が力を増し始めた昨今、君たちのような騎士は貴重だ。下手に事件に巻き込まれて、利権を取りあげられたいはないだろう」

「見くびっていただいては困ります。我々の正義は誰かに取り上げられるほど軽くはない」

キアラは言うと、ヴィンセントの手からワインをひったくる。

「一人で出来ることなど限られていますよ。それに証拠の一つや二つ上げたところで、握りつぶされる可能性がある。逆に反撃を受けることだってある」

「だがもしものとき、犠牲になるのは自分だけですむ」

同僚の目をかいくぐって独自に調査していたのも、危険を顧みずに盗賊のアジトの潜入を決意したときも、すべては身近な仲間達に迷惑がかからないようにとの配慮だった。

特に彼の補佐であり、親友であるアルベール。彼はヴィートの弟であり、下手をすれば逆に利用される事もあり得る。そしてそれを、ヴィンセントは何よりも恐れていた。

だがそのすべてを見透かした上で、キアラは続ける。

「もしもの状況を考えた時点で、あなたは自分の負けを認めたも同じだ。正義のために剣を取る騎士が負けを認めるなど、言語道断。騎士の名と剣を得たときから、我々に負けなどあり得ない。それくらい覚悟を持つべきです」

一回りも年下の少女に、まさか堂々と説教されるとは思わず、ヴィンセントはあつけにとられた。

そして彼女のまっすぐな言葉は正しく、返す言葉がなかった。

「たしかに、失敗することはあります。しかしそこで折れたらそれこそ終わりです。どんなに踏みにじられても、倒されても、正義のために剣だけは放さない。それが騎士だと、私は父に教わりました」

「君のお父上は、さぞや立派な騎士なんだろうね」

「私の憧れです。だから、私も騎士になりました」

ドレスの裾をぎゅっとなつかみ、キアラは少しだけ悲しそうに笑う。

「もちろん、ドレスがもつと似合えばいいなっと思うときもありませんけどね」

それでもやはり、彼女は剣を捨てられない。なぜならば、彼女は騎士だからだ。正義のために、虐げられた人々のために戦う者。

いつの時代も、どの国にも存在する正義の番人。

だからこそ、彼女はヴィンセントの目を見て言葉を続けるのだ。

「私達が調べてきた捜査資料を提供します。代わりにあなたの情報を私達にください」

「協力してくれるのか？」

「あなたにそのつもりがあるのなら」

キアラの言葉に、ヴィンセントが首を横に振れるはずがなかった。

## Episode 04 - 1 秘密の園の現実

ヴィンセントが、ガリレオ騎士団の本部に足を踏み入れたのは、これからはじめてだった。

ガラハド騎士団本部より一回り小さいその建物は、没落した貴族の屋敷を改装して作られたらしい。本部内に訓練所や武道場はないそうだが、裏手にある騎士学校と提携しているので訓練場所には事欠かず、本部と騎士達が使う事務室及びロッカールームやシャワールームのみが本部内には置かれているらしい。

「見ても、絶望しないでくださいね」

そう言っただけでキアラが案内したのは第4小隊の隊員室で。中を見てようやく、ヴィンセントは言葉の意味を悟った。

女だけの小隊だから、綺麗に整頓されているのかと思いきや、現実にはそう甘くない。

更衣室が並列しているので、隊室は仄かに汗くさく、部屋のあちこちに制服や書類が散乱している。

「異性の目を気にしない分、ついつい手抜きしちゃうんですよね。まあ、あなたみたいな男になら、見られても痛くもかゆくもないんですけど」

との、おきまりのそつない説明を聞きながら部屋に入ってきたヴィンセントに、隊室に残っていた10名ほどの隊士達が、絶叫した。「何で、よりもよって男を連れてくるのよばか!」

「せめて事前に連絡しなさいよ!」

そんな罵声を浴びながら、隊士達は食い散らかしたお菓子や脱いだままの制服を素早く片づける。

「基本的に、部屋にいるときは休憩時間なんで」

と誰かが口にしたフォローに、ヴィンセントは笑顔で、気にするなと告げる。

その笑顔に、隊員達はようやく彼の素性を見抜き、2度目の絶叫

を上げた。

## Episode 04 - 2 男よりも漢らしく

隊員達が落ち着いたのと、隊服に着替えたレナスが駆け込んできたのはほぼ同時だった。

事情を説明した文はすでに読んでいると思われたが、お世辞にも彼女の機嫌は良いとは言えず、

「ボートをひっくり返した言い訳はわかった。だが、人様のデートをぶち壊しておいて、ただで済むとは思うなよ」

キアラとヴィンセントに対する第一声はそれだった。

「アルベールには、後で俺からちゃんとフォローしておくよ」

「何があっても、私の本性はばらすなよ。王子だからとか、恋する女の前ではそう言うの関係ないから。本気でぶっ殺すから」

その本気が、嘘でないのがレナスの怖いところだ。

「それで、これからどうするつもりだご両人？ 貴族に喧嘩を売るそうだが、どんな作戦で行く？」

けんかを売りに行くとかわかっていながら、止めに入らないのが第4小隊である。レナスはもちろん、他の隊士達も説明する前からやる気満々だ。たぶん、盗賊退治が不発に終わったことでストレスもたまっているのだろう。そのはけ口があるとわかれば、のらない手はない。

「ワインをダシに強制捜査をかけたい。場所はウィッチー二家の本邸、その地下に奴らの研究所があるはずだ。それさえ見つければ、言い逃れが出来ないほどの証拠になる」

「捜査権の発動は、私が上に掛け合う。あんたからの情報だと言えば、うちの団長は喜んで出勤許可を出すぞ」

「貴族からの圧力が合ったらどうする？」

まだ少し不安そうなヴィンセントに、キアラが笑った。

「かかる前に、敵をつぶします」

あまりに男らしい発言に、ヴィンセントは舌を巻くしかない。

どこまでもまっすぐに、彼女たちは悪と立ち向かうのだ。それはヴィンセントにとって、少しうらやましいものだった。

「作戦は今夜。昨日の騒ぎで、私達が共闘する可能性を敵も考えているだろうし、なるべく早く乗り込みたい」

レナスの言葉に、キアラが素早く指示を飛ばす。

「ガブリエツラとアドーレは、屋敷の見取り図入手に尽力しろ」

「ドローは屋敷の周辺をはって、現状を逐一報告」

「ロベルタは、第5小隊に応援要請」

「そのほかの隊士は一六ひしこくまるまるまで本部にて待機。ただし出来る限りの準備はすませておけ」

キアラの指示に、隊士達は素早く部屋を出て行く。

「早いな」

それがヴィンセントの感想だった。ガラハド騎士団は元々、貴族出身のボンボンの集まりで、正直命に関わるような危険な任務はあまり回ってこない。それを騎士達も重々承知なので、任務に対しての危機感ややる気があまり無いのだ。

もともとそこまで治安が悪い国ではないが、率先して盗賊退治に行くような度胸のある騎士はいないし、そもそもそのような依頼は自分で受けず、ガリレオ騎士団に回している節もある。それをヴィンセントは快く思っていなかったが、なるほど、この行動力ならば下手にガラハドの騎士達に任せるよりも効率が良いかもしれない。

「女性に頼ってばかりで、申し訳ないと思うのだが」

「とかいって、私達のこと自分の部下より男らしいとか思ったんでしょ？」

レナスの言葉は凶星で、ヴィンセントは苦笑で誤魔化した。

## Episode 04 - 3 隊長からのアドバイス

装備と隊服を取りにヴィンセントが出て行った後、キアラもまた着替えのために更衣室に向かった。

隊員のほとんどは隊室の方に控えているため、更衣室にはキアラの他には誰もいない。

所々へこんでいる銀のロッカーを開け、隊服を取り出す。

窮屈なドレスからの開放感に思わずため息をこぼしたとき、笑い声が彼女の背後から響いた。

「似合ってたのにもつたいない」

「嫌みですか」

振り返れば、レナスがキアラに微笑んでいる。

「なかなかいいセンスね、あの男」

「女性とドレスは見慣れているのでしょうか」

返した言葉に、レナスが笑みを濃くする。

「でも、あなたには相手こずつてると見える」

「自分は女の範疇には入らないでしょうからね」

「そう悲観しないの。本当にかわかったのよ、かわいすぎて一瞬あんなだつてわからなかった」

ボートでのことを言っているのだろう。

「で、どうだった？ ドレスを着て王子と歩いた感想は？」

唐突な問いかけに、キアラはロッカーを乱暴に閉めることで答える。

「そう怒んなにの。前回のデートよりはだいぶ進歩したじゃないか」

「あれはデートではありません」

「でも二人きりだった」

「行きがかり上そうだっただけです」

「でも、二人きりだった」

にやりと笑われ、キアラはレナスから視線を外す。

「で、ご感想は？」

「…エスコートされるのが、難しかったです」

仕方なしに答えた直後、響いたのはレナスが吹き出した音だ。むっとして彼女を見れば、腹を抱えてしゃがみ込んでいる。

「隊長が聞くから答えたんですよ！」

「いや、予想はしていたが、あんたホントおもしろい！」

「どこかですか！」

「エスコートされるのが、難しいってあんた…」

「な、なれないからです！ドレスとか、ヒールとかはじめてだし、やたらと、手とか差し出されるし……」

「それが普通だっつーの」

「私にとっては普通じゃないんです！」

思わず怒鳴れば、レナスがまた爆笑した。

「あの男も苦労するだろうなあ。一から手取り足取りおしえなきゃならないなんて」

「もうありませんから！こういう事案は！」

「事案言うな。それにあんだだつてまんざらじゃないくせに」

「でもあつちは……」

言ってしまうってから、口を滑らせたことにキアラは気づく。

だが撤回するまもなく、レナスが彼女を励ますように肩を叩いた。

「案ずるな。ああいう堅物は、お前みたいな女っ気の無い奴にコロツと落ちるもんよ」

「フオローですかそれは！」

当たり前だとうなずいてから、レナスは荒ぶる部下の頭をクシヤクシヤとなでた。

「あんたはもう少し自分の気持ちに素直になりなさい」

「私はいつも自分の心に正直に生きています。だってそれが……」

「あんたの騎士道、だから？」

うなずけば、レナスは笑みを苦笑に変える。

「それに、いまさら女らしさが身に付くとは思いません」

「女らしさは身に付くものじゃなく、すでにあんたの中にあんのよ。そしてそれは、好きな男と一緒にいれば自然と表に出てくる」

「自然と……」

「ということ、ヴェンセントの逃がさないようにね。あんただって、女らしくなりたいとは思っているんでしょ？」

「でも騎士らしくあることが、自分にとっては一番で」

「女らしくなったところで、騎士としての品格が失われる訳じゃない。私を見なさいよ、女としても一流、騎士としても一流じゃない……そうですね」

「今、間があつた」

「いえ、隊長は私の目標です」

「なら恋をしない。そして恋に生きなさい」

「でも自分は仕事の方が……」

「安心しなさい、うちの騎士団は恋愛を推奨している」

「それは団長がタラシだからでしょう」

呆れて言えば、レナスが思い出したようにぼんと手を打つ。

「そういえば、うちの団長とヴェイト王子の関係ヴェンセントは知ってんの？」

「知らないみたいでしたよ。伝えておきますか？」

「デリケートな問題だから、私が伝えておく。それよりあんたには、他に伝えることがあるでしょ？ 愛とか色々」

「ないです！ なんにも！」

「というわけで、はいこれ。恋愛指南書」

「といって、どこから取り出したのは派手な表紙の本。」

『これを読めば、あこがれの殿方からのキスやお姫様だっこも夢じゃない！』とふざけた帯のついそれを半ば押しつけるように渡し、レナスは笑う。

「じゃ、がんばれ」

笑いながら、更衣室を出て行くレナス。

その声にいらだち、キアラは手にした本を床に投げつけようとし

て腕を振り上げた。

だがそのまま、キアラはしばし動きを止める。

「…でも、上官からもらった物を、捨てるのは騎士道に反するし」と振り上げた腕をおろし、今度はきっかり一分、キアラは本と見詰め合う。

「…今度返そう。今度」

意味のない言い訳を口にした後、結局キアラはロッカーの奥にそれをしまったのだった。

**Episode 4 - 3 隊長からのアドバイス（後書き）**

8 / 3 誤字修正致しました。 ( ) 指摘ありがとうございました

乗り込むのは夜中。そう思っていたヴィンセントの考えとは裏腹に、レナスから突入の指示が出たのは七時過ぎ。丁度夕飯時である。隊士が得た情報に寄れば、この時間帯は護衛の兵士達が交代で近くのバルまで食事に行くため、敵の数がかなり減るのだ。その上周りには他の貴族の屋敷も多いので、下手に騒げば人の目になってしまう。キアラ達の方には捜査という大義名分があるが、相手には本来武器を持つ理由がない。むしろ反撃すれば自分たちに非があると認めているようなものだ。

「さて、乗り込むわよ！」

正面から堂々と、捜査令状を突きつけて乗り込んだレナス達に、案の定敵は出足をくじかれた。

「施設があるとしたら地下だ。不死者は日の光に弱いからな」

「では、下に降りる階段を探すぞ！ かかれ！」

ヴィンセントとレナスの言葉に、隊士達は屋敷の中に散っていく。当主が不在なのも幸いし、今のところ戦闘になっている気配はない。「このまま、何事もないまま見つければいいけど」

ヴィンセントと共に捜索にあたるのはキアラ。

しかし彼女の願いもむなしく、いつの間にか貴族とは思えない風貌の男達が、彼らの前に立ちはだかるようにして現れた。外から援軍が来れば見張りの隊士が知らせる。ということはやはり、どこかに抜け道があるのだ。そしてその先が研究施設に違いない。

「副隊長は、ヴィンセント様と共に捜索を、男達は私達が食い止めます」

後ろに続いていた隊士の言葉に、キアラは素直にうなずく。そのためらいのなさに、彼女たちが強い信頼関係で結ばれているのをヴィンセントは悟った。

「隠し通路を造るなら、装置を隠しやすい書斎あたりでしょうか」

「ありがちだが、怪しいな」

「書斎は一階の奥でしたね」

出かけにたたき込んだ屋敷の見取り図をなぞりながら、キアラが駆ける。そしてそれに続くのはヴィンセントだ。

「さすがだな」

「褒めても何も出ないですよ」

「本当にかわいくないな」

「知ってます」

「まあ、そこが好みなんだが」

段差もないのに足がもつれ、キアラは転倒しかける。

「大丈夫か？」

「やめてください」

「ん？」

「好みとかそういうこと、息を吐くみたいにいわないでください！」

「そうあわてるな。あ、前に……」

ヴィンセントが言うまでもなく、キアラとヴィンセントの距離が開いた。

いつの間にか、進行方向には武装した男が3人。

だがヴィンセントが剣を抜くまもなく、3人の後頭部にキアラの蹴りが見事決まった。

「今度言ったら、あなたがこうなりますから」

振り返りざまに言い放たれたその言葉に、ヴィンセントが笑う。

「了解した。だが、もう少し俺の出番も残しておいてくれよ」

「善処します」

乱れた襟元をただし、キアラは生真面目に返した。

向かってくる男達をさらに5人ほど倒したところで、キアラ達は目的の場所にたどり着いた。

扉を押し開ければ、そこには武装した複数の男達と、不自然な角度で手前に飛び出している本棚。

そしてその後ろには、あからさまに怪しい鉄の扉が見えた。

「あたりのようだな」

笑顔で剣を抜き、ヴィンセントが敵を片づける。その間に隠し扉が閉まらないよう、キアラが中へと滑り込む。

「先に行つて通路を確保します」

扉の奥には、石造りの螺旋階段がつづいていた。薄暗い所為で足下は見えないが、壁に手をつき、勘を頼りにキアラは下る。

百段ほど足場を降りると、唐突に広い空間がキアラの前に現れた。昨日盗賊が隠れていたワイナリーと同じくらいの広さだが、こちらのほうが作りが古い。天井や周囲の土壁は所々崩れ落ちており、奥の方は完全に崩落してしまっている。元々はもつと広い地下室だったのだろうが、今は見る影もない。

もつと大がかりな研究施設を想像していたキアラは肩すかしを食らった気分だが、ほのかに香る血のにおいは、そこが目的地であることを悟らせた。

「無事か？」

追いついてきたヴィンセントにうなずき、キアラは辺りを見回す。控えの兵士達はあらかた上上がったのか、敵の影はない。しかし人ではない何かの気配が、地下室には確かに存在にしていた。

「ワインがあります」

昼間ヴィンセントが手にしていたのと同じレベルの赤ワインが入った木箱が、地下室には山のように積まれていた。この中身がすべて同じワインなら、いったい何人分の血になるのだろうか。

「事件が解決した暁には、ワインの出所もはかせないと」

「これだけの量があれば、言い逃れは出来ませんね」

「後は、本物の化け物でもいれば完璧なんだが」

言いながら、ヴィンセントはさらに奥へと進んでいく。正直、化け物はあまり見たくないキアラであったが、ヴィンセントを残して先に撤退するわけにもいかない。

地下室には、血のワインの他にも得体の知れない液体や臓物が置かれていた。どうやら、ここで行われていたのは、魔科学の中でもっとも高度とされる「錬金術」とよばれ術学の実験のようだ。地面には血で書かれた魔法陣がいくつも描かれ、放置された学術書はすべて錬金術に関するものなので、間違いない。

「キアラ」

いつの間にか先に進んでいたヴィンセントが、突然彼女の名を呼ぶ。あわてて駆け寄れば、床に倒れた一人の男をヴィンセントは見下ろしていた。それはキアラもよく知る人物、第5王子のヴィートである。

肩に深い傷を負ったヴィートは、苦悶の表情で二人を見上げる。

「やはり騎士団の連中か」

仕立てのいいダークスーツを血で真っ赤に塗らし、オールバックに整えられた白髪之交じる髪はひどく乱れていたが、意識ははっきりしているようだ。

「手当てします」

ヴィートの横にかがみ込むキアラ。それを見たヴィートは、わずかに笑みを浮かべる。

「俺の手当より、ここから早く逃げた方が良い。まだどこかに化け物が潜んでいるぞ」

「お前が作り出したのか？」

ヴィンセントの言葉に、ヴィートは首を横に振る。

「俺が来たとき、すでにあいつは生み出された後だった。赤子を相手にするつもりで来たのがまずって、このざまだよ」

ヴィートの他人行儀な言葉に違和感を覚えつつも、ヴィンセントは本能的にこの場を離れるべきだと感じていた。ここは、人のいるべき所ではない。

しかし彼が撤退を口にするまもなく、それは現れた。  
殺気ではなく、それは狂気。

背後にふくれあがった気配に、反射的に横に転がると、刃よりも鋭い長いかぎ爪がヴィンセントとキアラの側を通り抜ける。

「なんだあれは！」

ヴィンセントの問いに答える言葉を、キアラは持ちえない。

人に近いが、人でもなく。獣のようなキバと爪を持っているが、それは獣と言うにはあまりに人に似すぎている。

「噂の、不死なる生き物でしょうか？」

「確かに、気配は似ているな」

言いながら、ヴィンセントは鞘から剣を抜きはなした。

「倒すぞ。あれが外に出たらやつかいだ」

「倒せますか？ あれがヴァンパイアの一種なら、なかなかの強敵ですよ」

「あいつに背を向けるが、君の騎士道か？」

ヴィンセントの挑発に、キアラが苦笑する。

「心外です」

剣を抜き放ち、一番に斬りかかったのはキアラだ。しかし予想以上に化け物の動きは速い。第一撃を舞うように交わすと、続けざまに繰り出されたなぎ払いすらも、素早い跳躍で化け物は交わしていく。

「そいつは、人間の早さじゃ追いつけない」

ヴィートが叫んだが、正直その助言は聞きたくなかったのが本音だ。

「さすがに、人間は辞められません」

真面目な表情で、ヴィンセントの元まで後退するキアラ。

「魔法は使えるか？ 妖精術でも良い」

「上手くはないですが、初級魔法なら」

「敵の後ろに炎で壁を作って、相手の動きを制約しろ。あいつの相手は俺がする」

「危険すぎます」

「大丈夫だ。人間を辞めれば何とかなる相手らしいからな」

いつの間にか、ヴィンセントの手には例のワインが握られていた。「今から起きることは見なかったことにしてくれよ」

化け物が跳躍するのと、ヴィンセントがワインに口を付けるのはほぼ同時だった。

ボトルからこぼれた血が、ヴィンセントののどを伝い、彼の纏う鎧を濡らす。

魔法を唱えるのもわずれて、キアラはその姿に見入った。

なぜならばヴィンセントは、キアラの目の前で、人でなくなったからだ。

「炎の壁だ、急げ！」

そう叫ぶヴィンセントの口からのぞくのは、化け物と同じ鋭い牙。彼は剣で化け物の一撃を防ぐと、その牙を化け物の首筋へと突き立てる。

化け物が絶叫し、首の肉が抉れるのもいとわずにヴィンセントから離れた。

ほぼ同時に、キアラは魔法の詠唱を終えると、化け物の背後に熱い炎の壁を生み出す。

天井まで届く壁に化け物は恐れおののき、逃げ場が無いことを無意識のうちに感じたようだ。逆上した化け物は、今一度ヴィンセントにねらいを定め、鋭い爪の生えた腕を振り上げながら、彼に駆け寄る。

だが化け物が腕を振り下ろすよりも、ヴィンセントが化け物の懐に入り込む方が遙かに早かった。

化け物がヴィンセントを認識するよりも速く、彼は剣を化け物ののどに突き立てたのである。

剣を突き立てた次の瞬間には、化け物の首は体から離れていた。それがヴァンパイアに近き存在を殺す、唯一の方法出ること、誰よりもヴァンセントが熟知している。

化け物は、あまりにあっけなく、骸とかした。本物のヴァンパイアではなかったらしく、灰になって言えることはなかったけれど、息絶えたことは明らかだ。

「もう良いぞ」

ヴァンセントの言葉に、キアラは炎を消失させる。魔法が苦手というのは本当らしく、炎を消したとたんに、キアラはその場に崩れ落ちた。

「おい、どうした！」

あわててヴァンセントが駆け寄れば、青い顔でキアラが平気だと笑う。

「体力には、自信あるんですけどね」

しかし魔力は多くないのだろう。にもかかわらず、あんなに高い炎の壁を作り出したのだ。体力で補いきれる限度をとうに超えている。

「目的は達成した、帰ろう」

キアラを助け起こそうと差し出されたヴァンセントの腕を、キアラがはねのけた。

そこでヴァンセントは、今更のように自分の状態に気がついた。今のヴァンセントは先ほどの化け物とうり二つの姿だ。そんな自分がキアラに触れて良いわけがない。

自嘲して、ヴァンセントは静かに腕をおろそうとする。

「…勘違い、しないでください」

だが、ヴァンセントの前で彼を見上げるキアラの声に恐怖の色はなかった。

「あなたの肩を借りたら、また隊長にからかわれるから」

いいながらうつむいてしまったので、キアラの表情はよく見えな  
いが、彼女の耳は真っ赤だ。

「そ、それに下手な貸しは、作りたくありませんから」

「しかし顔色が悪いぞ」

「失礼ですね、元々こんな色なんですよ」

こんな時でも意地っ張りな彼女が妙に可愛くて、ヴィンセントはためらいを捨てた。

「行くぞ」

「お、降ろしてください！ 私は騎士です、お姫様だっこなんてまっぴらです！」

と、虫の息にも関わらず、無駄な抵抗に出るところもまた可愛い。「される機会もないんだろ、黙ってだっこされとけ」

ヴィンセントの台詞に、キアラは抵抗する体力も無い、最後は小さくこくりとうなずく。

「お熱いのは良いことだが、俺のことも思い出してくれると助かるんだがねえ」

二人の背後でヴィートが言う。

「隊長達を呼んでいきますから、もうちょっとだけ我慢してください」  
キアラの声に、てっきり不満を示すかと思いきや、ヴィートは意外に素直にうなずいた。

「一人娘の頼みじゃあ、仕方ねえな」

わざとらしい大きな声に、ヴィンセントは思わず動きを止めた。

「娘？」

「ヴィンセント様はヴィートのこと疑ってたみたいだけど、私達の協力者ってヴィートなんですよ。普段の素行が悪いから色々悪い噂たてられてるけど、こう見えてうちの騎士団の創設者で団長だし」  
まさかとは思いますが、キアラがこの場で冗談を言っているとは思えない。

「どうして、先に言ってくれなかったんだ！」

「だって、レナスがヴィートのことは私が説明するって言って」

あえてしなかったに違いない。

きつと彼女はこの展開をどこか予感していたのだ。ヴィートを見

つけるのがキアラとヴィンセントであることも。そしてヴィートの前で、ヴィンセントとキアラが誤解されるような状況に陥るのも。

「アルベールに、正体ばらしてやるのかな」

思わずこぼれた一言に、何も知らないキアラだけが異議を唱えた。

盗賊団とヴィッチー二家の事件を解決してから数日後、ヴィンセントの元に事件の顛末を報告しに来たのはヴィートだった。

「ご苦労なことにわざわざ屋敷まで押しかけ、

「同じ王子として君と友好を深めたいと思ってね。キアラも来たがったが、ここは男水入らずの方が良いと思って」

と、わかりやすい嫌みを手みやげにする徹底ぶりだ。

「ヴィッチー二家の方は、国王直々に処分を下してくださいさるそうだがぶん、国外追放になるだろう。盗賊団の残党が何人が残っているが、それも、私の騎士団が何とかする」

客間のソファアにぶんぞり返りながら、ヴィートは事件の収束を報告した。

「ヴィッチー二家がつぶれば、あなたの再婚も白紙ですね」

「もともと再婚なんてするつもりはなかったさ。俺は、死んだ嫁さん一筋だからな」

ヴィンセントに心配されるのも嫌と言わんばかりの表情のヴィート。これは本格的に嫌われたと悟ったのか、それ以上何も言わない。「それよりもお前、体どうした？」

唐突な質問に驚くヴィンセント。そんな彼を、ヴィートがため息混じりに続ける。

「あのワイン。シチリアーノの内線で死んだ死体から抜き取った物だと聞いた。死者の血は、お前みたいな奴の体には毒なんだろ」

「大丈夫ですよ。俺は純血じゃないから」

「だったらなぜ、こんな閉め切った部屋こもってる」

ヴィートの指摘に応えられないのは、彼の言葉が凶星だからだ。

本当ならば自分から話を聞きに行きたかったが、今の彼には日の光さえ猛毒だ。体を動かせるようになったのも、昨日今日の話である。

「何だったら、活きのいい女の2、3人。今回の礼に手配してやつても良いぞ」

ヴィンセントは無言で首を横に振ると、少し悲しげに笑った。

「俺はもう、人の血を吸うのは辞めたんです。ヴァンパイアの王子なんて、流行らないでしょ？」

「俺は別に、そこまで自分を縛ることもないと思うぞ。せつかくの自由が許される時代だぜ？ 学問も、思想も、宗教も、民族も、そう言うしがらみのない時代に生まれたんだから、もうちょっと楽しく生きるや」

ヴィンセントの、心の闇をヴィートは無意識に感じ取っているのかもしれない。

「うちの娘もさ、堅い所はあるが自由に生きてるぜ。いつちよ前に恋までし始めたみたいだよ」

言って、ヴィートは少しためらいがちに続けた。

「やっぱりあれか、ヴァンパイアも腹筋が割れた女の子は興味ない口か」

「どういう意味ですか？」

「いや、第4小隊の奴らがいつも泣いてるからよ。腹筋見られてられたーって」

ありありと想像出来るその光景に、ヴィンセントは思わず吹き出した。

「割れてて良いじゃないですか。たるんだおなかで、正義なんて守れません」

「でも、結構死活問題みただぜ。その分、男は良いよな。剣持ってる三割り増しでモテるから」

でも彼女たちは違うのだろう。どんなに騎士として優秀でも、心ない中傷で女としてプライドを傷つけられる事も多いに違いない。

「お前も、中途半端に付き合うんならあいつらにはだけは手を出すなよ。肉体が強い分、意外と中身はもろいからよ」

「でももし本気だったら、良いんですか？」

まっすぐに向けられたヴィンセントの視線に、ウィートは少しだけ悩んだのち、口を開いた。

「かまわねえが、うちの団員泣かしたら、団長の俺が黙っていると  
は思っなよ」

**Episode 5 - 3 騎士団長（後書き）**

6月16日 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

「さあ、今日の私は何点だ！」

デート前の恒例行事に、キアラは適当な点数を答えてもう一度ベツドに潜る。

「ちょっとー、私がフラれても良いって言うの？」

アルベールから「もう一度会いたい」という文を貰ってからというもの、レナスの機嫌は下がることなく常に最高潮で。いい加減疲れていたキアラの気分は、正反対のどん底だ。

相変わらずレナスは身分を隠しているようだが、湖に落ちて溺れかけたアルベールを助けたことから、二人の仲はさらに深まったという話は聞いている。

「レナスさんみたいなの頼りがいのある人、好きだな」

と言われたという話はもう100回は聞いており、今朝だけでも10回は同じ台詞を聞いた。

それに比べて、自分の最後の奇跡はお姫様だつこで。そこにすべての運を使ってしまったせいも、あれ以来ヴィンセントには一度も会えていない。

ヴィートの策略も多少絡んでいる気はしたが、元々それほど深い仲だったわけではない。

というより、どう考えてもお友達以下だ。

「もう、うじうじしてる暇があつたら恋文の一つでも書けば？」

とレナスは煽るが、女の格好すらろくに出来ないキアラに文をしたためる能力があるわけもなく、出来ることと言つたらやはりうじうじしているくらいだ。

「せめて、たまの休みくらい外に出なさい。ほら、お姉さんがお小遣い上げるから、ジェラートでも食べてらっしゃい」

出かけにそんな子供扱いをされ、さらに気分はどん底であったが、確かにこのまま部屋にこもっていても気が滅入るだけなのは確かだ

ある。

たまには少し女っぽい格好をしようかとも思うが、選ぶほど持っていない服はどれもがきやすさ重視で購入した男物で、気がつけば腰に剣まで差して部屋を出る。

ジェラートを食べに行くと言っただけなのに、まるで市街の見回りに行くような格好だ。

アパートメント前の石畳を右に折れ、100メートルほど行くと市民の憩いの場となっている噴水広場にキアラは向かった。

普段は広場の端にあるジェラテリアジェラテリアで時間をつぶすのだが、今日は学校帰りの学生が多く、混雑しているようなので辞めた。変わりに西に延びる大通りに入り、次の噴水広場に出る少し手前で脇道へとはいる。左右を高い建物に囲まれたこの道は、人通りもまばらで歩きやすい。その道を進めば、先ほどの噴水広場より少し手狭な、小さな広場に出る。

そこに、キアラの行きつけの小さなジェラテリアはあった。

なじみの亭主に挨拶し、購入したのはティラミスとイチゴのジェラート。それを片手に、広場の中央にある今は枯れた小さな噴水に腰を下ろす。

見事なほど誰もいない。カップルでくるには雰囲気がないし、友達と語るには声が響きすぎるその広場は、今や完全に忘れ去られたデッドポイントだ。

せつかくの休日、それも気分転換に外に出たというのに、こういう場所を選んでしまうとところがまた哀しい。

繁華街に出れば、1人でウィンドウショッピングを楽しむ女性はいる。だがその中の1人になる勇気が、まだキアラにはない。

剣をぶら下げたままスカートを買い自分が想像できない。そもそも剣を持ち歩かなければいいのだが、いざというときに武器がなかったらとおもつと、落ち着かない。

ジェラートをくわえながら、キアラは剣を抜き放つ。

「やっぱり、私にはこれが一番なのよね」

ジェラートをなめながらこぼれたのはそんな言葉。

「安心しろ、ジェラートもちゃんと似合ってる」

だが続くはずのない否定が、キアラの背後から響く。

ぎょっとして振り返れば、彼女の心を惑わす張本人が目の前に立っていた。

「ジェラートとけてる」

指摘にあわてて持ち上げた腕を取られて、驚いて上げた顔に口づけが降ってきた。

もちろんされるのは初めてで、それが好きな相手の唇になるとは思っていないで。

「ジェラートの味しくない」

と笑われて、平常心を保っていられるほど大人でもない。

「な、何ですか急に！」

真っ赤になつて抗議するキアラの腕から、今度こそ本当に溶けそうになっているジェラートを取り上げたのはヴィンセントだった。

「食べていいか、ここ数日何も食べてないんだ？」

「あ、どうぞ」

ってそうじゃない。そう言う状況じゃない。

「どうして、ここに来たんですか？」

「アルベールの所に来たレナスに、一人で泣いてる頃だから励ましにいけない」

理由を聞いて、少しだけがっかりする。

「でも、あわてて飛び出したから探すのに苦労した。アパートにもいないし、結局もう一度アルベールの所に行つて、君が行きそうな所聞いた」

凹んでいた気持ちが一瞬にして浮上する。あわてたって事は、自分を心配してくれたのだと思つて良いのだろうか。泣いている自分を、想像して焦ってくれたと勘違いしても良いのだろうか。

「な、泣いてなんかいません」

しかし考えとは裏腹に、口をついて出たのはいつものふてくされ

た声だった。しかしヴィンセントは気にしていないようで、笑顔でキアラの不機嫌をやり過ごす。

「でも、ジェラート食べながら、うっとりした表情で剣を見つめる状況は普通じゃないと思うぞ」

「別にうっとりしてません」

むくれるキアラの横に、ヴィンセントがすつと腰を下ろす。

近い。非常に近い。

だが、距離をとればまた冷やかされる気がして、キアラは必死に耐える。

「お前、俺と一緒にいるのがそんなに苦行か？」

「え？」

「眉間のしわが、尋常じゃない」

「元々こういう顔です」

「あとそつだ、さつきはすまなかつたな」

唐突な謝罪に一瞬訳がわからなかったが、ヴィンセントが自身の唇を指さしたとたん、キアラの顔が真っ赤になる。

「あんまり辛いからちよつと生気吸い取らせて貰った。この前のワインに当たって、正直死にそうだったんだ」

生気？ ワイン？

思わずわいた疑問と、重なるのは先ほど押し当てられたヴィンセントの唇の感触。

「キスじゃ、なかつたんですか？」

「さすがの俺も、剣とジェラート抱えた乙女に突然キスは……」

まで言うてから、ヴィンセントは自分が犯した間違いに気付いた。「あ、違う。すまん。君のことは特別だけど、さつきのは死にかけの体が無意識に取った延命措置というか」

「別に良いんですよ。私はあなたにとって、どうせ良いタイミングで現れる駒か何かですから」

「確かにさつきのは無意識だったけど、別に誰にでもやる訳じゃない。君じゃなきゃしなかつたよ」

「もう良いって言ってるでしょ！ 元気になったなら、さつさと家に帰ってください！ 具合も悪いんでしょ！ 死ぬ！」

「君、今どさくさに紛れて死ぬって言ったろ……」

「言ってますせん、言う訳無いじゃないですか。ほらほら、日に焼かれて朽ち果てる前にさつさと帰れ」

「悪いが、俺も騎士だ。目的を達成するまでは引き下がる訳にはいかない」

「目的って何ですか。嫌がらせですか」

「君を、改めてデートに誘いたい」

皮肉を重ねようとしていたキアラの口からこぼれたのは、息をのむ音だけだった。

「今度は盗賊とか、なしで」

嫌か？と訪ねられ、キアラは固まる。

「いや、そう言う方がいいなら用意してもいいぞ。酒場のぐるつき退治とか、そう言う案件も無いわけではない」

黙るキアラにさすがのヴィンセントも焦る。だがその言葉がわすかだが、キアラのかたくなな心を溶かした。

「そういうのなら、つきあってもいいです」

「ぐるつき退治？」

「ぐるつき退治」

真つ赤になりながら言う言葉じゃないか、今のキアラにはそれが精一杯だった。

「南の通りだから少し歩くけど、いいか？」

神妙にうなづくキアラに、ヴィンセントがうれしそうに微笑む。

「あと……」

「ん？」

「終わったらジェラートおごってください。私のは、あなたが食べちゃったんで」

「どうせなら、夕飯くらいおごる。天下の第四小隊の副隊長に、ただ働きはさせられないからな」

「ゆ、夕飯とかは別に」

「ラザーニアのうまい店があるんだ。君、好きだろう」

はじめて会った時の事を思い出し、ヴィンセントは笑う。

「嫌いじゃありません」

「じゃあきまりだな」

言うなり立ち上がるヴィンセント。その隣にキアラも立ち、二人は腰に差した剣の位置を正す。

「行きましよう」

騎士らしく、ピンと伸びた背筋のまま歩き出すキアラ。それに半歩遅れヴィンセントが続く。

相変わらずムードはないが、はじめはこれくらいでいいのかもしれない。

前を歩く騎士に微笑みを向けながら、ヴィンセントはそんなことを思った。

騎士の初恋編【END】

昼下がりのフロレンティアは、今日も穏やかな陽光の下に輝いていた。

冬の観光シーズンも終盤を迎え、一時期ほどの活気はないが、通りはどこも賑やかで、国民も観光客も穏やかな足取りで道を行き交っている。

そんなフロレンティアの東南、フロレンティアの街並みを望む小高い丘の公園に、レナスはいた。

ミケランジェロ広場と呼ばれるその公園は、街に沿って穏やかに流れるアルノ川と、モザイクを思わせる煉瓦色の屋根が連なるフロレンティアの景色を一望出来るため、観光客と市民の憩いの場となっている。

それ故公園の片隅にはカッフェヤリストランテがあり、そのリストランテのテラス席にレナスは腰を下ろしていた。

今日の彼女は、いつもの隊服ではなく外出用のドレスをまとっている。

その横でカッフェを口にはしているのはアルベール。

アルベールの方は騎士団の制服のままだが、ガラハド騎士団の純白の制服は場の雰囲気や壊す事無く、またレナスのドレスと並ぶとよく栄えた。

「この景色はいつ見てもすばらしいですね」

丘から望むフロレンティアを眺めながらレナスがつぶやけば、アルベールもまた大きく頷く。

「昔から、疲れたときはよくここに来るんです。ここに来ると、心が洗われる」

そう言ってカッフェを飲むアルベールをちらりと伺うレナス。今日の彼はなぜか少し疲れているように見受けられた。その上どこか緊張しているような面持ちもある。

それをいぶかしく思つてさり気なく周囲を見回せば、彼の側に、護衛らしき私服の騎士が控えていることにレナスは気付いた。

一応隠れているつもりらしいが、同じく騎士であるレナスは、彼らの仕草から彼らがガラハドの騎士であることを見抜く。

「あの、何か、あつたのですか？」

おそろおそろ訪ねてみると、アルベールは幼さの残る顔に優しいな笑顔を宿す。

「疲れたなんて言つたから、心配させてしまつたね」

「もしなにか、不安なことがあるなら私が相談に・・・」

「大丈夫。それに、あなたには迷惑をかけるなんて、そんな情けない騎士でありたくないから」

「情けない事はありませんよ。一応その、私はアルベール様の恋人ですし」

「だからこそだよ。側にいてくれるだけで僕は救われている。だからあなたにはただ笑つていて欲しいんだ」

アルベールの言葉に、レナスは渋々口をつぐむ。それからあわてて、アルベールの欲する笑顔を彼に向けたが、やはり彼はどこか浮かない顔でフロレンティアの町並みを眺めていた。

普通の女性なら、こういうときは黙つて微笑んでいるべきなのだろうかと、レナスは悩む。

騎士であるレナスという女性ならこう言うとき、何が何でも理由を聞き出してしまつたらう。

それどころか無理矢理相談に乗つて迷惑がられてしまつのがオチだ。

しかし、今の彼女は騎士ではなく貴族の令嬢だ。

つきあいはじめてそろそろ2ヶ月がたつが、レナスはまだ自分の正体を彼に告げられずにいた。

ヴィンセントとキアラが箝口令を敷いてくれているおかげで、外部から自分の正体が露見する心配はない。

だからこそ最近、レナスは悩み始めていた。

自分は騎士だ。そして相手は、王子だ。

はじめの合コンときは気づかなかったが、5回目のデートの時、彼女はアルベールから自身が王子であることを告白された。

そのときに自分もと告白すればよかったのに、王子という肩書きがそれを阻んだ。

正直怖じけずいたのだ。

キアラにはヴィンセントとの仲を進展させると茶化していたが、いざ自分が王子とつきあうことになってはじめて、彼女のためらいを理解できた。

身分を超えた恋愛はこの国では禁止されていない。だがやはり相手は王子で、そして自分は騎士だ。

美しい女性に囲まれている彼が、汗と泥まみれの女を相手にくれるとはどうしても思えなくて。

ましてやそれを妻にすることなど想像ができなかったのだ。

だがそれでも、アルベールの優しさや言葉に惹かれている自分は否定できず、レナスは自分の正体を告げられぬまま、こうしてアルベールとの時間を無駄にしてしまう。

「そろそろ、言わなきゃね」

こつそりつぶやいて、レナスはそつとアルベールの手に自分と手を重ねる。

重ねられた手のぬくもりに、アルベールがレナスを見つめた。

視線が合うとやはり勇気はしぼんでいく。

ガリレオ騎士団、第四小隊隊長の名が泣くぞ！と自分を叱咤してみたものの、

「どうしたの？」

と、自分にかけられる甘い声音の前で、言うべき言葉はかき消えていく。

何も発せず、ごまかすこともできず、過ぎていく時間。

そのとき、唐突にレナスがつけていたイヤリングがきらりと光った。

それに気づき不思議そうな顔をするアルベール。その瞳に映るイヤリングの輝きに、レナスはあわてたように立ち上がる。

「すいません、お手洗いに！」

言うが早いか駆け出すレナス。それと同時に、彼女はイヤリングを軽くひねった。とたんに、彼女の鼓膜を聞き覚えのある声が震わせる。

「キアラです、今大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけがあるか！デート中だぞ！」

そのイヤリングは、小型の音声伝達器。急な要請や出勤のさい、連絡が取れるようにと騎士達が常に身につけている物だ。

「で、用件は何だ」

仕方なく尋ねると、真面目な部下は真面目な声で答えた。

「急な出勤要請です」

「めんどくさい」

「でも仕事です」

こういうとき、副官の少女は甘やかしてはくれない。

それでも言い訳を探しているうちに、気がつけばトイレは目の前。もちろん用を足すつもりはなかったが、仕方なく彼女はその中に入る。

「わかったすぐ行くよ。…あとそうだ、ヒューズがいるならつれてこい」

「ヒューズ隊長ですか？隊長は夜勤明けで今帰られるところですが」  
「なら捕まえる。そして引きずってこい」

それだけ言うと、レナスは一方的に通信を切る。

さて、今日はどんな言い訳でごまかそうかと、レナスは個室の中で頭を抱えた。

## Episode 0

### 隊長の悩み（後書き）

腹筋隊長レナスが主人公の話です。キアラやヴィンセントはもちろ  
ん、新キャラも出ますので、よろしければまたお付き合い下されば  
と思います。

## Episode 01 - 1 愛のドウオモで死を叫ぶ

「死んでやる！」

昼時のフロレンティアに響いたその絶叫の出所は、街の中心に位置するサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の大円蓋クーポラであった。「俺は本気だ！ 死んでやる！」

愛のドウオモと称される大聖堂のクーポラからの景色はフロレンティア1の絶景。

それゆえ、観光客が上れるようになっていたのだが、何をとち狂ったか安全のために設置された柵を乗り越え、1人の男が大声でわめいているのである。

この異常事態に気づいた市民の通報で、ガリレオ治安維持騎士団が現場に向かったのが12時15分。その任に赴いたのはガリレオ治安維持騎士団第4小隊。女性ばかりで構成された小隊である。

「急な呼び出しがこれか……。まったく、また面倒をお越しやがって」ドウオモの側に立つ鐘楼のもと、双眼鏡でクーポラの状況を確認していた隊長にレナスの言葉に、副官であり第4小隊の副隊長であるキアラ「サヴィーナはため息をこぼす。

「とりあえず、落下したときのために特殊魔法部隊に応援を要請しておきました」

「いっそ突き落としてさっさと解決するか」

「説得という手段は？」

「あのドウオモエレベーター無いじゃん。上まであがるの超しんどい」

いっそ弓矢あたりで打ち落とそうか。

と物騒なことを言い出す隊長にため息をつき、キアラは部下から渡された報告書に目を通す。

「が、キアラはそれをすぐに閉じた。その素早さに、隣のレナスがめざとく気づく。」

「どうした？」

「いえ、何でもありません」

言いよどむキアラに、レナスの視線が若干厳しくなる。

「言わないと、お前が5回も書き直した上に結局ゴミ箱に捨てた恋文を朗読するぞ」

キアラが、素早く報告書を開いた。

「男の連れらしき女性に話を聞いたのですが、どうやらその、今回のことは痴情のもつれが原因らしく」

「ほう…」

「ミラノから新婚旅行でフロレンティアを訪れた折、愛のドウオモと名高い大聖堂のクーポラに上ろうとなったまではよかったのですが」

「…あらかた、途中の階段の多さにどちらからともなく不満がこぼれ、それが転じて大げんか。挙げ句の果てに別れ話が飛び出し、男の方が投身自殺」

「よく分かりましたね」

「時々居るんだよ、ああ言う馬鹿は」

よし、とレナスが何かを決意した表情で頷く。

「やっぱり弓矢で撃ち殺そう」

「だめです！」

「そんなくだらない理由で人様のデートをぶちこわしていいと思っ  
ているのか！ 死刑だ死刑！」

「だから言いたくはなかつたんですよ！」

キアラの悲鳴と重なるように、先ほどまで騒いでいた男の絶叫が響いた。

あわてて視線を男に戻すと、彼はクーポラをズルズルと滑り落ちている。どうやら足を滑らせたようだ。

「嫌だー！ 死にたくないー！」

先ほどとは違ってかわって、男はそんなことを叫んでいる。

「あいつ、本物のアホだな」

「感想はいいから早く上に行きましょう」

「案ずるな、すでに手は打ってある」

とレナスは自信満々に言い放す。

その直後叫んでいた男のからだが傾いた。

様子を見守っていた人々の愛だからだが零れる悲鳴。その刹那、ドウオモの天辺から1人の男が丸屋根を駆け下りる。

ガラハド騎士団の騎士であることを示す純白の制服に身を包み、危なげない足取りで男の側まで降りてくるのは二人がよく知る人物であった。

「ヴィンセント……」

思わずつぶやいたのはキアラで、そのつぶやきにレナスがにやりと笑う。

「あなたの王子様は人助けもお手の物か」

「そ、そんなんじゃないありません」

真っ赤になってむくれる部下にさらに苦笑しながらレナスは救出劇に目を戻す。

「あいつの登場は予想外だけど、まあいいか」

ヴィンセントは男をすでに安全な位置まで引き上げている。

こういう高所での救助の場合、救助をする側巻き込んでの二次災害がおきる場合が度々あるが、ヴィンセントにその心配は無用のようだ。

「まったく、どこかの誰かとはデキがちがうな」

レナスはそう言うと、今更のようにドウオモの上から顔を出した1人の男にむかってため息をついた。

## Episode 01 - 2 二人の隊長

500段もある階段を上り下りした結果、今にもつりそうな足を引かずつて、ガリレオ騎士団第5小隊隊長カイル「ヒューズがドウオモから出たとき、不機嫌なオーラ丸出しのレナスはそこにいた。

「遅すぎ」

「俺の年も考えろ」

レナスより年上のヒューズは今年で35。

その年でクーポラまでを3分半で駆け上った功績を褒めてほしかったが、肝心の目的を達成できていなかったのは確かなので、彼はそれ以上の言葉を重ねられない。

「お前はホント使えないな」

「俺とお前で、いくつ歳が違うと思っただよ」

「体がなまっただよ。日頃さぼってばっかなのが悪い」

「だって、有能な部下達が隊長はデスクワークだけでいいですから  
つて」

「それ、遠回しに使えないおっさんは書類に判子だけ押ししてるって意味だから」

「まあ、否定はできんがね」

あっけらかんと笑いながら、ヒューズはばんばんに張った太ももをのんきに叩いている。

その情けない姿に、レナスはため息をついた。

「昔は、もう少しかつこよかったのにな」

思わずこぼしたレナスの言葉に、「何か言ったか？」と小首をかしげるヒューズ。

何でもないと答えてから、レナスはまじまじと側に立つ男を見た。  
「本当なら、今頃アルベールと優雅なランチだったのに。どうしてこんなオヤジと……」

「なんだ、飯まだなのか」

なら一緒に、と続けようとしたヒューズの言葉をレナスが裂いた。

「今日は奢りなさいよ」

「ちよつと待て、何で俺が！」

「間に合わなかったでしょ、その罰」

「そもそも、さっきのはお前の隊の担当だろ。それを無理矢理……」

「でも、間に合わなかった事実には変わりはない！」

「変わりはしない。変わりはないが釈然としない物がある。だがヒューズが抗議する間を与えるレナスではない。」

「アルノ川沿いの、この前行ったリストランテにしよう。そうしよう」

「あそこ高いだろ！」

「本当なら、もっと高いところで食べるはずだったんだから」

「いや、でも俺とじゃねえし」

「もつと高いところで食べるはずだった！」

有無を言わせぬ言い方に、ヒューズは背の高い体を丸め、女々しく財布の中身を確認している。

「給料日前で、持ち合わせがだなあ」

「カードつかえるから！」

「暴君め」

本人は聞こえないようにつぶやいたのだが、ヒューズの右頬にはレナスの右フックが華麗に決められていた。

「ワイン、飲みまくってやる」

嫌がるヒューズを無理矢理引きずりながら、レナスは大股で歩き出す。

「何で俺は、夜勤明けまでこの女にこき使われているんだらう」

今度こそ聞こえないようにつぶやいて、ヒューズは年下の同僚との出会いを後悔と共に思い返した。

## Episode 01 - 3 断ち切れない腐れ縁

ヒューズが始めてレナスとあつたとき、彼女は僅か10歳であつた。

それからかぞえると、彼女とはもう15年以上の腐れ縁だ。

ちなみにレナスの我が儘な性格はそのころから変わっていない。むしろ若干悪化している。

対するヒューズはまだ精悍な青年で、海の方このステイツと呼ばれる国からきた彼は、その武術の腕を買われ、貴族の令嬢であるレナスの護衛として雇われたのだ。

護衛とは名ばかりで、そのころから無駄に活発だったレナスのお目付役兼教育係というのが正しい。

なにせ悪戯好きのレナスは、雇われたメイドや教育係の服に片っ端から蛇や蛙を入れて追い出す始末だ。

それに動じず、そして貴族という肩書きに縛られず彼女を本気でしかつた唯一の使用人がヒューズだった。

彼女とまっすぐに向き合うヒューズのことにはレナスの父も気に入っており、いつの間にか執事騎士というありがたくない上に滑稽この上ない肩書きをヒューズは拝命した。

その成果、レナスにとってヒューズはいまでも一番近い存在となつた。

愚痴や不安のはけ口は常に彼で、親に言えない悩みの相談相手もヒューズだった。

その居心地の良さを手放すのが惜しいばかりに、騎士団に入る決めたときも無理矢理ついてこいと迫つたのだ。

「お前さんが家を出たら俺のお役もごめんだしな」

と脳天気な二つ返事で彼女に付き従い、お互いほぼ同時期に隊長に就任した。

だがやはり、騎士団に入ってから気苦労も多かったのか、20

代前半からすでに彼はかなり老け込んでおり、今も昔も彼のあだ名は「おっさん」である。

さすがにその事に関してはレナスも悪いと思っていたのだが、やはり心おきなく迷惑をかけられる存在が側にいれば、嫌でも甘えてしまう。

それに当の本人も自分の外見に無頓着なため、「気にするな」と言うばかりである。

今は外見も年相応になったが、逆にいつも髪はぼさぼさでひげを整えることもしない彼に、最近ではレナスの方が手を焼いている。

しかし本人は、ダンディーでモテるからいいと、やはりどこ吹く風。

実際、おっさん臭くすばらな割に女子に人気があるのも確かで、そこが密かにレナスはおもしろくなかったりもする。

正直自分よりもてるのだ、こんなだらしないくせに。

だからいつか見返してやると、思い続けてはや10年。

ついに運命の人を見つけ、ヒューズよりも早く結婚できるのレナスは意気込んでいた。

ヒューズの方も、ようやく手のかかるお嬢様から解放されるとアルベールとの仲を喜んでいた。

…はずだったのだが。

## Episode 02 - 1 王子の悩み

アルベールがガラハド騎士団本部に帰ると、隊室はドウオモでも救出劇の話で持ちきりだった。

「やっぱり凄いよなヴィンセント様は」

「命綱無しでクーポラ駆け下りてたぜ。凄い度胸だよ」

「あれで王子だもんなあ、俺達形無しだよ」

廊下まで聞こえてきた騎士達の談笑に、アルベールは何となく隊室に入り辛い。そのとき、廊下の向こうから聞き覚えのある声があるを呼んだ。

「デートはどうしたんだ？」

今し方話題になっていたヴィンセントその人である。

「レナスさん、急用が出来ちゃったって」

苦笑気味に言っていると、ヴィンセントは残念だったなと彼の肩を叩く。

「ねえ、ヴィン」

隊室から少し離れた、人気のない階段のすみに、アルベールはヴィンセントを引き寄せる。

「僕ってさ、やっぱり頼りないかな…」

「どうしたんだよ藪から棒に」

「昨日ほら、例の件で父さんから、もっとしっかりしろって怒られた」

アルベールの言葉に、ヴィンセントは苦笑する。

「それなのにさ、結局今日もデートを優先させちゃったし」

「でも前からの約束だったんだろ？」

「だけど…」

「それに、例の件については俺に任せろって言っただろ」

「そういうとこだよ、問題は」

先ほどの騎士達の話の思い出し、アルベールの表情はうかかなかった。

「僕一応、ヴィンの副官なのに何にも仕事してないし」

「してない自覚はあったのか」

「そう思ってるならもつと怒ってよ」

ヴィンセントの冗談にむくれるアルベール。その表情に、ヴィンセントは笑った。

「しかたなく仕事されても、邪魔なだけだからな」

優しいように見えるが、甘やかされているわけではないと分かるのはこう言うときだ。

笑顔で、彼は一番痛いところをついてくる。

特にアルベールに関してはそれが顕著で、彼にためらいや迷いがあれば、一番キツイ方法で答えへと彼を導いてくれるのがヴィンセントだった。

「本当に、適わないよ」

「やる前から諦めるなよ」

「そうだね、さすがに今回は敵前逃亡はまずいよね」

「今回は本気なんだな」

意外そうに言うヴィンセントにむくれながらも、アルベールは少し照れたような声音で言った。

「やっぱりさ、できる男の方が女の子にもてるし」

「そっちな」

「僕にとっては死活問題。もしレナスさんにフラれたら立ち直れない」

「その情熱が、もう少し仕事にも向いてくれたらな」

「この僕が無断欠勤無く働いてるだけで凄いなと思うけど」

「えばるなよそこで」

ヴィンセントは呆れるが、確かに以前のアルベールと比べたら進歩ではある。

この王子は、今まで様々な職務や学業を放棄してきたのだ。

女子のような風貌に甘え上手。その上末の王子と来たら、甘やかすなと言う方が無理な話である。

国王や王妃はもちろん、教育係から剣の師匠まで、誰からも怒られることもなく、ひたすら甘やかされて育ったせいで、かつてのアルベールはそれはもう酷い怠け者だった。

唯一熱を入れていたのは女性との交際。

騎士団で働き始めるまでは3日もつた仕事はなかったらしい。

だからこそヴィンセントのような存在は新鮮で貴重だったのだから。

一番厳しいが、逆に今では一番懐いている。それも国王がうらやましがるほどに。

「という事で、ローマの件お願いね」

ここぞと言うときに使う特別な笑顔で言い切れば、さすがのヴィンセントも首を縦に振るしかない

「了解」

「あ、でも来週でおねがい。デートの続き取り付けたいし」

「お前なあ……」

といつつも、想定範囲内だったのかヴィンセントはそれ以上、否定の言葉は重ねなかった。

「警備の企画書作ってくる。あとそうだ、外に出るときは絶対にこえかけるよ」

「大丈夫、今日は一日騎士団にいるし」

アルベールはそう言って、頼もしい親友兼上官を見送った。

だが、事態が急転したのはその翌日のことだった。

Episode 02 - 2 護衛任務は破局の予感に満ちて

「どういう事ですか！なんでよりもよってウチの隊なんですか！」  
レナスの怒鳴り声ガリレオ騎士団の団長室から響いたのは、彼女とアルベールのデートがお釈迦になった翌日のことであつた。

変わりの休暇を貰おうと騎士団を訪れたレナスに、突然舞い降りたのは騎士団長からの呼び出し。

お世辞にも綺麗とは言えない第4小隊の隊室よりも、若干片付いている団長室に入るなり、騎士団長ヴィートはレナス以下第四小隊に任務を与えた。そしてそれがレナスの怒りの原因である。

ヴィートから与えられた任務。それは、王子の護衛であつた。

だがその王子が問題だつた。何せ護衛の対象は、レナスが身分を隠して交際している第4王子アルベールなのである。

「第5小隊との合同だつていつてんだろ」

「2小隊も必要な案件だとは思いません」

「俺はまだ事件の詳細を伝えてねえが？」

遠回しに落ち着けと言いたいのだろうが、今日のレナスは完全に頭が血が上つていて気がつかない。

「それに、アルベールは騎士でしょう。それもガラハドの。それをウチの騎士団で護衛つてどういう事ですか？」

「お、名前呼びかよ。青春だねえ」

「殺しますよ？」

笑顔で言い切るレナスに、ヴィートが豪快に笑う。

「ウチの騎士団つて、ホント統率ねえよなあ。騎士団長に向かって剣を向けるとかありえねえ」

「笑い事じゃなくマジでやりますよ」

「まあ、俺が死んだところで担当は変わらんから」

渋々剣をおろしたレナスに「じゃ、そう言うことで」と笑うヴィート。

これ以上彼に何を言っても無駄だと悟ったレナスは、奥歯をかみしめ団長室をあとにした。

「もう、ほんと、マジで最悪。死にたい」

ワインの瓶をテーブルにどんとたたき付けながら、レナスがその日2度目の怒鳴り声を上げたのはフロレンティアの中央広場より西に延びる、細い通りにある一軒の酒場だった。

グイートより護衛任務を命じられたその夜のことである。

本日呼び出しを受け、愚痴聞き役となっているのはヒューズである。

1時間前まではキアラもいたのだが、あまりの荒れように明日の作戦に支障が出そうだと判明したため、ヒューズが彼女を先に帰したのだ。

二日酔いで仕事に来ることも多いレナスだ。その上、恋愛が絡むと悪酔いするのは確実だった。

前回男性にフラれたときは、ヒューズを連れ立って酒場を5軒梯子し、最終的にヒューズがコレクションしていたワインを全部あげた。

その更に前は飲んでいたときこそ大人しかったが、その翌日は仕事中に突然涙が止まらなくなり、泣きつ面のまま銀行強盗を5人逮捕していた。

私生活を仕事に持ち込むなど騎士の名折れだと更に凹み、やはり励ますのに一晩とコレクション全部を費やした。

フォローする側に見ると、失恋したレナスはとにかく面倒くさい。そこに酒が入ると更にだ。

基本的にフロレンティア人は仕事よりも恋が優先なので、むしろ泣きながらも仕事をしている分レナスはマシな方である。仕事の言えはだが。

でも後に引きずれば引きずるほど面倒は増えるため、可能ならば愚痴も涙も全て出し尽くさせたいというのがヒューズの本音だ。

「ホントさあ、今回は超順調だったのよお。こんなに、かわいいって言ってくれた人今までいなかったしい」

怒っていたかと思えば突然にやにや笑いだし、レナスは手でワイン瓶をもてあそぶ。

「もう聞いたよその話は」

「まだ20回しか話して無いじゃない！」

「何回話したら満足すんだ」

「わかんない」

きやははと笑って、レナスはヒューズのグラスに勝手にワインをつぐ。

「俺まで二日酔いになったら、明日誰が指揮すんだよ」

「あんた酔わないじゃない」

「あのね、俺もついい年のおっさんなの。胃とか肝臓とか弱ってんの」

「あ、おねーさん！赤ワインもう一本」

「聞けよ俺の話！」

「え？何？」

呂律も回らなくなり始めたレナスに、ヒューズは深いため息をついた。

「ちょっとー、ため息つきたいのはアタシなだけどう」

「もついいよ、ため息でも酒でも涙でも、好きなだけ飲んでこぼせ」

「うん。泣きます、一晩中泣きます。そして飲みます」

「店閉まるぞ」

「あんたんち行くからいい」

「また俺のコレクション飲み尽くす気かよ」

「それで私の怒りが収まればいいわねえ」

うふふと笑いワインを煽るレナス。それに苦笑しながら、ヒューズはワイングラスを傾ける。

ちらりと伺えば、レナスの表情から堅さが消えている。

そろそろか、と長年の感で見当を付けヒューズは傾けたグラスを

置いた。

「そういえば、明日のことだけだな」

「泣けと言いながら仕事の話？」

不満そうに、だが無視も出来ないのかレナスは言葉を返してくる。

「お前報告書読んでないだろ」

「キアラが読んでるもん」

ひどい上司だなと苦笑しながら、ヒューズは持っていた報告書を机の上に放り投げる。

「なによ、ここでいきなり説教でもするの？」

「結構状況悪いぞ」

そこで、レナスの手がグラスから離れた。

「まあ、こっちに依頼が来たって時点で、お前も気づいてたんだろうけどよ」

ヒューズが言葉を重ねたとたん、レナスは机に顔を埋めた。

「…あたし、ホント最低なの」

その肩が震えていることに気づきつつ、ヒューズは無言でワインを煽る。

「話がきた時点でどれくらいやばいかわかってたの」

嗚咽混じりのか細い声だった。

しかしヒューズはあえて、短い相づちだけを返す。

「アルベールが危険な状態だって分かったの。…なのに」

そこで、堰を切ったように泣き出すレナス。

落ち込むことがあると、彼女はとにかく酒を飲む。そして自分の不運を愚痴り、怒り、無駄に笑う。

だが、涙はいつも後回しだ。

「真っ先にバレたらどうしようって思っちゃったの…。アタシ恋人なのに、騎士なのに、自分のコトばかりなの…」

涙と一緒にようやく零れた本音にため息を重ねながら、ヒューズは机に伏せるレナスの頭を優しくなでてやる。

本音と涙がなかなか出てこないのは、幼い頃からのお約束だ。

貴族の令嬢として子どもらしさよりもレディとして振る舞うことを強要されてきたせい、ヒューズが始めて会ったとき、レナスは泣くことを知らない娘だった。

悪戯や悪ふざけが度を過ぎるのも、結局自分の気持ちを変現する事に不器用だからだ。

今も昔も、記号的な行動でしか彼女は感情を表せない。

泣けば全てがすむところを、酒におぼれた哀れな女を演じないことには、自分の本音も吐き出せない。そのくせ演じることで更に無理をし、心がこじれてしまうのだ。

本当に面倒が臭い女に捕まった。

とヒューズは目の前でなくレナスを見つめながら思う。

それでも何故だか放っておけなくて、いつもいつもこうして見たくもない涙をわざと流させるようなことまでしている。

「自分の保身に走って何が悪い。同じ状況だったら、俺は心配なんて二の次になるぞ」

「あんたはぜつたいそうなんない」

「買いかぶってくれるね」

「かぶるわよ。あんたはアタシの目標なんだから」

くぐもった声のつぶやきに、ヒューズは苦笑を濃くする。こつこつ事を泣きながら言うから、更に放っておけなくなるのだ。

「お前は何かから何まで、男の趣味がわるい」

「アルベールはいい男だもん」

「お前がそこまで惚れるくらいだからな」

「だから、こんな終わり方したくない」

「まだ終わったって決まってるねえだろ」

「だけど、さすがに騎士団の格好で前に出たらバレちゃうし」

「ついがおまえ、そもそもそんな正攻法で護衛するわけ？」

ヒューズは言葉に、レナスがようやく顔を上げた。

泣きはらした目と赤い鼻のまま、彼女はヒューズを見上げる。

だがその顔に悲観の色はなく、ヒューズはほっと胸をなで下ろす。

もちろん、レナスには気付かれないようにだ。

「ヒューズ」

「あん？」

「仕事の話、しよっか」

「現金だなお前」

笑いながら、ヒューズは「すみません、白ワインももう一本」と手を挙げた。

## Episode 03 - 1 再会はターミナル駅のホームで

護衛の対象であるアルベールとの待ち合わせ場所は、フロレンティアの北にあるターミナル駅であった。

サンタ・マリア・ノヴェッラ駅という長い名前の駅は、フロレンティアで唯一近代的な手法で立てられた建築物でもある。

かつてはレオポルダと言う名の駅がフロレンティアの玄関口であったが、近隣国とを繋ぐ新しい路線や、新規開発された高速鉄道の乗り入れを行うために新設されたのが、サンタ・マリア・ノヴェッラ駅だ。

朝10時出発の南ローマ国行き的高速鉄道に乗るアルベールの護衛のため、彼らが駅に着いたのは待ち合わせの30分前。

だがアルベールはすでに南ローマ国行き的高速鉄道に乗り込んでいるとのことだったので、第4小隊及び第5小隊は高速鉄道が乗り入れるホームへと向かった。

アルベールの乗る一等客車の周りにはすでにガラハドの騎士が取り巻いており物々しい雰囲気だ。

第4小隊を率いていたキアラは、その警備に気を引き締める。

「第4小隊副隊長キアラ」サヴィーナです。本日はアルベール様の警護のため、ガリレオ騎士団より派遣されました」

そう声をかけると騎士の中からヴィンセントが顔を出す。

「応援感謝する。本日はガラハド騎士団からは、1番隊長ヴィンセント」アルジェン以下5名が警護に当たる」

「こちらは第四小隊及び第五章小隊より総勢15名です」

「警備企画書は読んで頂けたらどうか？」

「はい。ただこちらからも提案があるのですが」

「では車内で打ち合わせを」

ヴィンセントの言葉にうなずき、キアラは素早く列車に乗り込んだ。

## Episode 03 - 2 進展の無い二人

アルベールの乗る一等客車の一つ手前、人払いをした食堂車にて  
ヴィンセントはキアラと二人、それぞれの提出した警備企画書に目  
を走らせる。

「さすが、そちらはなかなかおもしろいことを考える」

「与えられた情報の少なさからして、この方がいいのかと」

前後のドアに人影が無いことを確認してから、ヴィンセントはわ  
ずかに声を落とすにつづける。

「君たちなら気づいてくれると思っていた」

「では、状況を詳しくお聞かせ頂きましょうか？」

「それはいいが、せつかく二人なんだしもう少し砕けたらどうだろ  
う」

「いつもと変わりませんか？」

否定はできないが、それでもやっぱり仕事モードのキアラは少し  
堅い。

「いつもの3割り増しで眉間にしわが寄っている」

「こつこつ顔です」

「そろそろしわのない顔を俺に見せてくれないと思っただけど  
な」

「理由がないです」

「もう10回もデートしてるのに」

ガタツと言う音がして、キアラの体が不自然に傾ぐ。

「どうやら、同様のあまり椅子に座り損ねたようだ。」

「あれはデートじゃ……」

「盗賊退治や強盗退治ばかりとはいえ、あれは時間外労働。それに  
二人でいればそれはデートだ」

「あなたのデートの定義は広すぎる」

「君の定義に会わせていたら永遠にお友達のままだ」

「いいじゃないですか、お友達」

「じゃあ俺が恋人を作ってもいいのか？」

キアラの視線が、不自然に逸れる。

「別に、私には、関係ないし」

とかいいつつ、明らかに動揺しているのがかわいくてヴィンセントは思わず吹き出す。

「君も少しは素直になってきたな」

「なんですかそれ！ 私は私のままですよ！」

「顔がようやく女の子になってきた」

「元から女の子です！」

肩を怒らせるキアラをヴィンセントは笑う。

「リラックスできたところで仕事の話に戻ろうか」

「私のこと、からかって遊んでいるでしょう」

「君はまじめすぎる」

ヴィンセントの言葉を、キアラは否定できずに黙り込んだ。まじめなところは長所だが、同時に短所でもあると常日頃からレナスにも注意をされている。

『お前は頭が固すぎる』『肩の力を抜いてもう少し状況を見る』

レナスの怒号を思い出し、キアラはこの場は言葉を納める。

「それで、今回の状況を教えて頂けますか」

苛立ちを残した声で訪ねるキアラに苦笑しながら、ヴィンセントは再度周囲を確認し口を開いた。

「アルベールを狙っているのは、先月捕まえた盗賊とヴィッチーニ家の残党だ」

「残党？ そんなはずはありません、残党はすべて……」

「そう、君たちの騎士団がすべて捕縛した。…生きていた奴らはな」「どついうことですか？」

「残党の中に、すでに禁忌に手を出した奴がいたんだ」

「それって、まさかあのとき倒した化け物みたいな奴が、まだいるって事ですか？」

「あの一步手前だ。どうやら君たちに捕まえる前に、生きたまま不完全な不死を手にした奴がいるらしい」

「そういえば、捕まえた残党の中で不自然な自殺を遂げた物が何人かいました」

「そいつが墓から出てきてるっていったらどうする？」

「考えたくない話だ。だがヴィンセントが口にすることに偽りはないだろう。」

「しかしなぜ、彼らはアルベール様を？恨みならヴィンセント様や私のほうが…」

「あいつが聖騎士だからだ。アルベールは魔を打ち消す聖なる魔法をつかえる、そういう存在は不死者の天敵だ」

「でも、ヴィンセント様は一緒にいますよね」

「俺くらいになればアルベールの魔法じゃ死なない。正直に言うと、聖職者でありながら修行をサボりすぎて、あいつの魔法は超がつくほど貧弱なんだ」

「いいんですか、それで…」

「今まではよかったが、多数の不死者を駆逐するにはまずい」

「だから、これからローマにある聖騎士の聖堂まで修行に行くのだという。」

「修行って言っても聖水で身を清めるだけだけだ」

「それで魔術が強くなるんですか？」

「少なくとも、上級魔術を唱えれば、街中の出来損ない不死者くらいは一掃できる」

「そしてそれを阻止したい不死者達が、アルベール様を狙っているんですね」

「うなずくと同時に、ヴィンセントはわずかに顔をしかめる。

「どこか苦痛を感じさせるその表情に、キアラが声を上げようとしたときヴィンセントが言葉をつなげた。」

「ただ問題はそれを阻止したい不死者が予想以上に多かったことだ」  
そう言うと、ヴィンセントは肩を押さえる。

「怪我をなさってるんですか！」

「大した怪我じゃない」

と言った直後、キアラがヴィンセントの制服を掴んだ。

「脱いでください」

「大胆だな」

「いいから！」

いつになく必死なキアラに、ヴィンセントは渋々襟元を広げる。あらわになった肩口に巻かれていたのは付帯。そしてそれはわずかに血がにじんでいた。

「ひどいけがじゃないですか！」

「不意を打たれてな」

ヴィンセントほどの手練れが怪我を負うと言うことは、相手が手練れであるか、ヴィンセントの不意をつけるだけの存在であると言うことだ。

「実は、ヴィッチー二家以外にも不死に手を出した貴族がいくつかにいるらしい。さらに運が悪いことに、騎士団に所属している貴族の中にね」

「その騎士に傷を…」

「敵は予想以上に多く、それは身近にいる。彼らからアルベールを守るにはもう俺1人の手では終えなかった」

「そこは、察していました。レナス隊長とアルベールさんの事を知っているながら、私たちに護衛を頼むことは、それしか方法がないってことですから」

「不死者に関してはなかなか公にできん。その点君たちなら経験済みだし口も堅い」

「期待通り、いえ、期待以上の働きをして見せます」

「そう言ってくれると思った」

制服をただし、ヴィンセントはどこか誇らしげに笑った。

「彼女が一流の騎士って言うのは、なかなか誇らしいものだな」

「かの…」

真っ赤になつてうつむくキアラ。

「でももし彼女って言うなら」

だがいつもはそこで押し黙る彼女も、今日は必死に口を開く。

「怪我したら事、ちゃんと教えてほしかったんですけど」

「でも、教えたらガラハドの騎士を片っ端から斬り殺しにきそうだし」

けれど必死の言葉も、妙なところで鈍いヴィンセントには真意が伝わらなかつたようだ。

「し、心配させるって意味ですよ！いくら私だって、犯人以外は切りません！っていうか、犯人でも殺しはしません！」

「でも犯人がわからない場合は？」

「…怪しい奴を、片っ端から殴り倒すくらいはするかもしれませんが  
あと、拷問して割り出すとか。」

としょんぼりしながら言い出す騎士の少女に、やっぱり言わずにいて正解だったかもしれないとヴィンセントは思う。

一度火がつくと見境がなくなるという話はレナスから聞いていたが、どうやら思っていた以上のようだ。

「いつもは冷静だけど、君にもそういう所があるんだな」

「私はまだまだ未熟です」

「愛がそうさせるんです、くらい言ってくれてもいいと思うけど」「  
ないですから！それは！」

頑なな少女に、ヴィンセントはただただ笑っていた。

列車の発車音に、アルベールはまどろみから意識を覚醒させた。側にいたはずのヴィンセントの姿はなく、変わりになじみのない制服に身を包んだ騎士が他の乗客の中に紛れていた。

ガラハド騎士団の純白の制服とは違う、抑えめの赤を基調にした制服はガリレオ騎士団の証。

デザイン的にもスタイリッシュなガラハドの制服と比べると、とにかくガリレオの制服は渋い。そしてそれは、最先端の高速鉄道の車内にはとても浮いていた。

彼が乗る高速鉄道列車フレッチャ・ロツサは昨年南ローマで開発された最先端の列車である。故に作りも近代的だ。

その速度もそれまでの鉄道とは桁違いで、それまでの在来線とならび、イタリア半島の国々を結ぶ足として期待されている。

フロレンティアから南ローマまでの所要時間は2時間たらず。とにかく速い。

しかし正直、アルベールはこの速い乗り物が苦手だった。フロレンティアは機械の乗り物がないが、他国に行けばこのような乗り物は多く見かけることができるし、海の方この英国やステイツなどはさらに科学技術が進んでいる。

だがそうした最先端の技術や機械とフロレンティアはとにかく縁がない。そんな国で育ってきたせいか、近代的な作りのこの列車にもなかなかなじめず、ヴィンセントがない今、年甲斐もなく心細さを感じている。

そんなとき、前方の車両とを結ぶ扉が開いた。

ヴィンセントが戻ってきたのを期待して顔を上げるアルベール。その表情が、凍り付いた。

「あら、奇遇ですわね！」

そう言ってアルベールの前で微笑んだのは、ドレスに身を包んだレナスだったからだ。

「ど、どうしてレナスさんがここに!」

「私のおじさまが急病だというので、お見舞いに行きますの」

いつもの男らしい口調からは想像もできない女の子口調でそう告げるレナス。そんな彼女に駆け寄ったアルベールは、側の座席にレナスを無理矢理座らせる。

「この列車に乗ってはいけません。キケンなんです」

「でも、この列車ローマまで停車しませんのよ」

今更のように車窓に目を向ければすでにフロレンティアの町並みは遠くに過ぎ去っている。

さすが最新車両、加速度も半端ではない。

「とにかく、危険なんです。特に僕の側は」

「もしかして、私がお嫌いになりましたの? はっ、まさかローマに他の恋人が?」

わざとらしくハンカチで目元を押さえるレナスに、アルベールはあわてふためく。

「ちがいます、ただ僕は今不特定多数の者達に狙われています。だからあなたを危険にさらしたくなくて…」

「それなら安心してください。私には、護衛もいますので」

そう言ってレナスが手を打つと、前方の車両から1人の執事が現れる。

「執事のヒューズです。彼、ステイツの俳優であの有名なブルースウィルスリーの物まねが得意なんですよ」

レナスがそう告げたとたん、執事…もといヒューズはどこからともなく木の板を取り出すと、それを放り投げ

「ほあたい」

やる気のないかけ声とともに蹴りでそれを真っ二つにしようとし、見事に失敗した。

「まあ、たまには失敗しますけど」

レナスの笑顔に、アルベールは決意する。  
彼女のことは、自分が守らねばと。

## Episode 03 - 4 不器用な告白

「作戦は成功しているようですね」

一等客室内の様子をうかがっていたキアラの言葉に、ヴィンセントは何ともいえない顔をしていた。

「強引、過ぎないだろうか」

「安心してください。貴族のお嬢さんは大体ああいう感じですよ」

「いや、まあ、さすがにあそこまで変身すればガリレオの隊長が二人も護衛についているとは思わない」

思わないが、隊長2名をこんな使い方をしてもいいのだろうかトヴィンセントは悩む。

「レナス嬢はまだしも、ヒューズ隊長をあんな」

「ヴィンセント様は、ヒューズ隊長をご存じなんですか？」

「ガリレオの獅子隊長とまで謳われた方だぞ。何度か手合わせをしたが、あの人に勝てた試しがない」

「確かに武術と剣術はすさまじいけど、そこまでとは…」

そう思ってしまうのは、常日頃からレナスに虐げられ、蔑まれ、こき使われているヒューズの姿ばかりを見ているからだろう。言われてみれば隊長としての仕事を間近で見るのはこれがはじめてだ。

「たしかに、ああやって小綺麗にしていると、少しマシには見えませけど」

思わずこぼれたつぶやきにヴィンセントが信じられないという顔をする。

「ガリレオ騎士団は、本当に変わっているな」

騎士としての覚悟も仕事も一流。だが何か決定的に間違っている部分もある。

だが逆にそのかけている部分がガリレオの良さでもあるのかもしれないと思ひ直し、ヴィンセントはそれ以上の追求をやめた。

「では、我々は他の車両の見回りに行くか」

ヴィンセントの言葉に頷き、キアラは先に歩き出す。

「そう言うところ、君らしいな」

食堂車を横切りながらつぶやかれた一言に、キアラはちらりとヴィンセントを振り返る。

「普通の女性は、男性の後ろに付き従いたがるが」

「それでは、何かあったとき、私が盾になれませんが」

「いいかげん、王子様扱いはやめてほしいんだが」

「…でもその」

唐突に口ごもるキアラに、ヴィンセントとは軽く小首をかしげる

「もし背後からの敵がきたら、私の背中を守っていただきますから」

「君にしては上出来な告白だな」

「告白じゃありません!」

ムキになるキアラ。それを笑いながら、ヴィンセントは彼女をさつと追い越す。

「でも、前は俺だ」

「ですが!」

「俺の背中を守るのは嫌か?」

ヴィンセントの言葉に、キアラは小さく首を横に振った。

## Episode 04 - 1 女らしさと騎士らしさと

電車が走り出して早30分、未だ襲撃はなく隣で談笑しているレナスに笑顔を向けながら、アルベールはちらりと周囲を見回した。騎士を他にすれば出入りをする者もおらず、襲撃の予兆はない。ヴェンセントからの報告によれば怪しい客の姿もないとのことだ。さすがに時速300キロで走る列車に乗り込むのは難しい。襲撃があるならば列車が止まるタイミングだろうとアルベールは踏み、わずかに緊張を解く。

「そんなに心配されなくても大丈夫ですよ」

唐突に、レナスがアルベールの手のひらを握る。

それにほんの少し驚きながらも、彼女の笑顔を見てみると安心できる自分に気づき、アルベールは苦笑した。

いざとなったらレナスを守るのは自分の方なのに、気がつけばいつも、レナスのさりげない言葉や行動に救われている自分がいることを、アルベールはすこし情けなく思う。

見た目は可憐で清楚。そして常に明るく気だてがよいレナスをアルベールは心の底から愛しく思っている。

だが時々思うのだ。彼女には自分にはない強さがあると。

「本当に、あなたは強い」

レナスが若干息をのむが、アルベールはそれに気づかないようだった。

「今の状況を話しても動揺一つしない」

「それは、アルベール様が側にいてくれるからですわ」

「でも僕は騎士としてはまだまだ半人前です。剣術では友のヴェンセントに勝てず、聖なる力にすら拒まれている」

「でもこれから修行に向かうのでしょうか？ 立派なことですよ」

「むしろ遅すぎるくらいです」

「でも、あなたはそれに気づいたわ」

切なげに揺れるアルベールの顔をのぞき込み、レナスは笑う。

「間違いをただし、後悔から前に進むことは正しい者にしかできないことです。そしてそれこそ、騎士として大切なことなのではないでしょうか？」

「あなたはずいぶん、騎士道にお詳しいようだ」

アルベールの言葉に、レナスは目を泳がせる。

「…ということ、昔教えていただいたんです。その彼に」

そう言った先にいたのは、暇そうな顔で二人の側にたたずんでいるヒューズ。

「執事にですか？」

「い、今は執事ですが以前は騎士だったそうで」

フォローしろと視線を送られ、ヒューズは「作用でございまして頭を下げる。」

そのやりとりを見て、アルベールはなぜだか少し複雑な顔をする。

「僕なんかより、立派な騎士が側にいるのですね。それも常に」

「そんな！アルベール様より立派な騎士なんていませんわ！」

そう言うなり、レナスはアルベールの腕をとる。

「あなたはこんなに素敵で女性に優しくしてお強い。それに比べてこの男、情けなくてどうしようもなくブルースイリスリーの物まねしかできないんですよ」

再び跳んできた視線に、ヒューズが「あちよ」とやる気のない構えをしてみせる。

「こんなのご自分を比べてはいけません！」

ね？ と顔を近づけられ、アルベールは渋々うなずく。

「すみません。最近ちょっといろいろと自信をなくして…。情けないところを見せました」

「かまいませんわ。むしろ私には見せてくださってよいのですよ」

レナスの言葉にアルベールは堅く首を横に振る。

「男性は女性より強くあらねばなりません。あなただって、強い男性が好きだとおっしゃっていたでしょう？」

「それはそうですけど、私は…」

「僕はあなたにふさわしい男でありたいのです。わかってください」  
そう言って、アルベールは堅く口を閉ざし、窓の方へと視線をそらす。

自分に向けられなくなった言葉と視線に、レナスもまた仕方なく  
黙り込むほか無かった。

Episode 4 - 1 女らしさと騎士らしさと (後書き)

8 / 3 誤字修正致しました。 ( ) 指摘ありがとうございました

## Episode 04 - 2 隊長達の実力

列車がフロレンティアを出てから約1時間。

窓の外では、フロレンティアのあるトスカーナ地方のどかな田園地帯がそろそろ終わりにさしかかろうとしている。もう、南口ーマは目と鼻の先だ。

相変わらず口をきかないアルベール。それに不安を覚えながら、レナスはちらりと周囲を見回す。

交代の時間なのか、第4小隊の騎士達と入れ替わりに第5小隊所属の男性騎士達が車両に入ってくる。

だがそこで、レナスは妙な違和感を感じた。

最初の違和感は香りだ。それは男性用の香水の香りのようだったのだが、妙にキツイのだ。

汗のにおいを隠すために香水を付ける騎士は多くいる。だが、それにしては強い気がする。

「すみません、ちょっとお手洗いに」

そう言って立ち上がるレナス。その側に、ヒューズがさりげなく付き従うと同時に、彼は口を開いた。

「アルベール王子」

ヒューズが名を呼ばれ、アルベールは少し驚いた顔でヒューズを見上げる。

「その者達を、少しの間お借りしてもよろしいでしょうか？お嬢様の護衛に」

先ほどの情けない構えを見たあとだったためか、アルベールはすぐに頷いた。

「では、君たちも一緒に」

ヒューズという言葉に渋々うなづく騎士達。

彼らをつれ、洗面室のある後方の車両との接合部にレナスとヒューズは向かう。

「ごめんね騎士さん達。少しの間だけだから」

レナスが笑顔を向ければ、騎士達は微笑む。

「大丈夫ですよ、アルベル様のご命令ですから」

「そちらの執事だけでは不安でしょう？」

騎士の言葉に、レナスの笑みが消えた。

「ヒューズ、まかせた」

言われるまでもなく、動いたのはヒューズだった。

レナスを後ろに押しやり、手前にいた騎士の腹部に重い拳をたたき付ける。

そこでようやく彼らは気づく。

「お前達も護衛か！」

「きまつてんでしょ」

二人目の騎士に蹴りを繰り返した直後、彼は素早くかがみ込む。

その背を蹴って、レナスが騎士達の前へと躍り出た。

残りの騎士は3人。彼らは一様に剣を抜いたが、狭い通路でなかなか身動きがとれない。

だがレナス達は違う。

狭い通路でありながら、お互いがお互いの動きを利用して立ち位置を変えることで、攻守に後れをとることはない。

ヒューズが相手の攻撃をさばき、その隙についてレナスが急所的確についた攻撃で相手を昏倒させていく。

息のあった連係攻撃に、騎士達は一太刀も浴びせることが出来ぬまま倒れていった。

「よし、終了」

ガッツポーズで微笑むレナスに、ヒューズが乱れた髪をかき上げる。

「いくらマトモな格好しているとはいえ、さすがに隊長がわからない部下はいないわよねえ」

「マトモっておまえ」

「あ、ネクタイ曲がってる」

言いながら、ヒューズの乱れた着衣を直すレナス。

「だって髭も整えてるし、服もしっかり着てるし」

「服はいつも着てるっての」

つつこみながら、今度はヒューズがレナスの乱れた前髪を耳にか  
けてやる。

間近に近づいたヒューズの顔に、何故だか少しレナスはたじろい  
でしまう。

こうしてまともな格好をしていると、確かに女子達が黄色い声を  
上げるのも分かる。いつもはボサボサのチャコールグレーの髪には  
まだ白髪もなく、髭も整えればなかなか男前に見える。やる気の  
ないオーラは相変わらずではあるが。

「俺の顔、何かついてるか？」

「別に何でもない！ それより、他に敵がいないか探しましょう」

「あとは俺が何とかする。お前はアルベルんとこいけ」

「だけど」

どことなく冴えない顔のレナスの頭を、ヒューズが軽くこづく。

「安心しろ。お前の正体がバレるような状況にはしない」

「なによ、かつこつけちゃって」

「俺は元からかつこいいんだよ」

ヒューズという言葉によく微笑むレナス。

だがそのとき、アルベルルのいる車両から剣戟が響いた。

「まさか！」

駆け出そうとする二人。だが今度は、後方の客車から悲鳴が上  
がる。

「ヒューズ、後ろの敵の数はわかる？」

レナスの言葉にヒューズが側の扉から後方を伺う。

「8だ」

「ならあんたが後方！ こっちは3人だから」

「さて、それじゃあ…」

引き留めようと伸ばした腕を、レナスが跳ね上げた。

「悔しいけど、格闘じゃあんたの方が強い。その数じゃ、私だと時間がかかりすぎる」

その言葉に、ヒューズは黙って後方車両の方に視線を向ける。

「あんたのそう言い潔いところ、好きよ」

「お前が好きな男はそっちの車両だろ」

「だから守りに行くの」

そう言うなり、駆け出すレナス。

「惚れた男は守れよ、おてんばお嬢様」

同時にかけたしたヒューズの声に、レナスが走りながらドレスを引き裂いた。

「乗客は守りきりなさいよ、ダメ執事！」

そして彼女はアルベールのいる車両へと続く扉を開けた。

Episode 04 - 3 第四小隊隊長レナスⅡマクスウェル

「さあ、あとはお前だけだ！」

側に倒れているガリレオの騎士をかばうように剣を構えながら、アルベールは目の前に立つ騎士をにらむ。

騎士はガラハドの服を着ていたが、その顔に見覚えはない。

敵はガリレオだけでなく、ガラハドの騎士にも化けていたのだ。そしてそれに気づかず接近を許してしまい、アルベールもまた肩に傷を負っていた。

「さあ、お前にはここで死んでもらうぜ」

「貴様等のようなやつに、やられる僕ではない」

そう言っ て剣を薙ぐアルベール。手応えは十分だった。

だが……

「そんな一撃じゃ、俺たちは殺せないぜ」

騎士はなおも立っていた。不気味で邪悪な笑顔をたたえて。

「不死者……か」

「気づいたところで遅いぜ、王子様」

にやりと笑い、剣を振り上げる騎士。だがその腕に、レナスが投げつけたナイフが突き刺さった。

絶叫する騎士。続けざまに、レナスは隠し持っていた投げナイフを更に放る。

それは騎士の額に深々と突き刺さり、絶叫はさらに大きくなった。手持ちのナイフを騎士達に投げ終ると同時に、レナスは駆ける。

その腕に剣はない。だが、彼女にはためらいもなかった。

絶叫し剣を振り回す騎士達。

しかしレナスはそれを軽い身のかわしでよけていく。

見たところ不死者と化している騎士はアルベールの側にいる1人のみのようだった。

人ならば拳でいけると判断し、レナスは手前の騎士の股間蹴り上

げる。

激痛で腰を折った騎士の首に手刀をたたき込んで昏倒させ、同様の攻撃でもう1人をたおす。

残りは不死者一人。

最後の騎士が落とした剣を拾い上げ、ナイフが刺さったままうずくまっている不死者の首にそれを突きつける。

「首を切りとばせば、不死者も死ぬのよ？ おわかり？」

レナスの言葉に、不死者は悲鳴を上げて後ずさった。

そしてそのまま彼は別の車両に逃げようとする。

だがそこに二つの影が立ちはだかった。

「逃がすとも？」

剣を構えたヴィンセントとキアラに、不死者は再び情けない叫び声を上げる。

「前の車両の敵は制圧しました」

「ご苦労」

そう言うと同時に、レナスは不死者の肩に手を置く。

「安心なさい。ウチの騎士団じゃ、罪人の扱いは生者も死者も同じ。抵抗しなきゃちゃんど牢屋に入れてあげる」

レナスの言葉に不死者は泣きながら頷いた。

「キアラ、拘束しろ」

「はい、隊長」

敬礼してから、キアラはアルベールの姿に気がついた。

しまったと思い、腕をおろそうとするキアラの腕をレナスが止める。

いいんだと苦笑してから、レナスはアルベールを振り返った。

「身分を偽っていたことをお許し下さい。私はガリレオ騎士団第四小隊長レナス＝マクスウエル。第4王子アルベール様の護衛を命じられた騎士です」

## Episode 05 - 1 聖天使城の夜

聖天使城、カステル・サンタンジェロ。

アルベールの目的地であるそこは、南ローマ国の首都ローマにある聖騎士を育成するために建てられた城である。

かつて、人ならざる者が悪とされていた時代、南北ローマ国とフロレンティアが合同で作ったのがこの城だ。

特に、闇の力を有していると言われるドラゴン、そして不死の体を持つヴァンパイアは悪の権化とおもわれており、彼らから人々を守るための存在を聖騎士と呼んだ。そしてここが、その聖騎士団の本部だったのである。

もちろん現在はこちらの種族とも和解し、ドラゴンなどはむしろ保護種として乱獲が禁止されている。

逆に聖騎士も、そのような種族を守るため側として聖なる剣を振るようになった。

あるいはかつての遺恨から未だ人を脅かすことを辞めないヴァンパイアの討伐が、彼らの今の仕事である。

とはいえ、かつてに比べれば絶対数はかなり少ない。

しかしただの騎士とは違い、聖騎士が使う聖魔法はなかなかに扱いが難しい魔法である。それ故学問所と修行の場を兼ねたサンタンジェロ城は今も残っているのだ。

そんな聖なる力に守られた城に、乗り込んでくる不死者はさすがにいない。

そのため、アルベールの護衛にしていた騎士達は明日の朝の出發まで休息を取ることとなった。

それはキアラ達も例外ではなく、城主の好意で提供された、城の客間でゆっくりと過ごすことができる…はずだったのだが。

「そんなに心配せんでも良いと思うがね」

殆どの騎士がこれ幸いとローマ観光へ出かけた中、城に残ってい

たのはキアラはヒューズにそうたしなめられた。

キアラの前には、客間のソファで棒きれのように横になったまま、ぴくりとも動かないレナスがいる。

そんな彼女にどう声をかければいいのかわからぬまま、キアラは無駄に室内を右往左往していたのだ。

「放っておけばいいさ。そのうち立ち直る」

そんな彼女に、向かいのソファに腰を下ろしていたヒューズが声をかける。

その直後、ヒューズの顔にソファのクッションがぶち当たった。

「立ち直れるか！ 私の最後の恋が終わったんだぞ！」

起きあがったレナスにほっとしつつ、荒ぶる彼女にかける言葉のないキアラはわずかに身を引いた。

その横を駆け抜け、レナスがヒューズにつかみかかる。

「協力するって言ったくせに、この役立たず！」

「するつもりだったが、ドレス破いて駆けだしたのはお前だろう」

「止める！」

「止めて、後悔しなかったか？」

ヒューズの言葉に、レナスが黙り込む。

それと同時に彼女の目から、大粒の涙がこぼれた。

側にキアラとヒューズしかいないせいか、レナスは子供のような鳴き声を上げる。

「キアラ、ちよつと外でてろ」

ヒューズの言葉に頷くキアラ。その後ろで、レナスがヒューズにすがりついて泣き続ける。

こんな子供の様になくレナスを見るのは、キアラも初めだった。そしてたぶん、それをヒューズ以外に見せるのは不本意なはずだ。

レナスにとってヒューズは特別だが、キアラはまだそこまでではない。それがわかっているから、彼女は言われるがまま部屋を出て行く。

ほんの少し、不本意な思いで。

「わるいな」

そんなキアラの気持ちもわかってているのだろう、ヒューズは扉の向こうに消えたキアラに小声でそう謝罪する。

「今は、私だけ見てる！」

唐突な嗚咽混じりに罵声が響いた。

「なんだよ、案外元気じゃないか」

「元気じゃない！」

そうかみつき、レナスはヒューズの胸に拳をたたき付ける。それなりに力を込めたつもりだが、ヒューズは揺らぎもしない。

「元気だよ。その元気があれば、まだ終わりじゃない」

「無理だ。絶対嫌われた」

「嫌われるのなんていつものことだろう」

「アルベールは特別なんだ！ 特別で、大切な……」

涙でかき消える声に、ヒューズの表情にも暗い影が降りる。

だが彼は続けた、消えたレナスの声の変わりに彼女の覚悟を。

「特別で大切なら、こんな簡単に手放していいのか？ お前の気持ち、ちゃんとつたえたのか？」

「伝えたよ、好きだって何回も何回も何回も」

「それは、ドレスを着たお前だろ？」

ヒューズ of 言葉に、レナスが顔を上げる。

「ガリレオ騎士団隊長、レナスはマクスウエルの気持ちも、お前は伝えたのか？」

頬を伝う涙をぬぐってやりながら、ヒューズは笑う。

「腹筋割れてるけど、男より強いけど、いびきもうるさいけど、つきあってほしいってあの王子様に言ったのか？」

「……いびきは、うるさくないもん」

「酒のむとすごいぞ、お前」

ヒューズ of 言葉に、レナスは彼の胸を殴る。だがその拳は、先ほどより遙かに軽かった。

「私のこと、好きになっってくれるかな？」

「わからん。俺は王子じゃないからな」

「あんだだったら？腹筋割れてる女でも良い？」

「勘弁だ」

「そこは嘘でも、いいといえ！」

元気になってきたじゃないかと笑って、ヒューズはレナスの体を自分から引きはがす。

なぜだかそれを少し寂しく感じながらも、レナスは腐れ縁の男に向かって小さくありがとうとつぶやいた。

Episode 05 - 1 聖天使城の夜（後書き）

05 / 21 誤字修正

Episode 05 - 2 すれ違いの狭間で

「まだ、こんな所にいたのか」

客間の外、狭い廊下に座り込んでいたキアラに突然声が降り注ぐ。はっとして顔を上げると、そこにいたのはヒューズだった。

「レナス隊長は」

「まだ唸ってるが、まあ問題ないだろう」

そう言って歩き出そうとするヒューズに、キアラは少し複雑そうな顔で頭を下げた。

不満なオーラを隠しもしない少女に苦笑しながら、ヒューズは暇をもてあますために歩き出す。

だが運が良いのか悪いのか、ローマの街を見回せる回廊に出たところで、レナスがそれ以上に凹んでいる人物にヒューズは出会ってしまった。

アルベールである。

「聖騎士が暗黒騎士みたいな顔してるぞ」

思わず声をかけると、自分の指摘はあながち間違っている訳でないのが分かる。

「えっと…」

「ヒューズだ。カイル〓ヒューズ」

そう言って手を差し出すと、アルベールが少し驚いた顔で手を取った。

「ヴェインが、憧れてた騎士だ」

ヴェインとはヴェインセントのことだろうと見当を付け、ヒューズは苦笑する。

「そんな大層なもんじゃねえけどな」

「でも伝説は知ってます。ピサの斜塔ほどもあるドラゴンを一人で倒した話とか、ゴブリン百匹と殴り合って無傷で生還したとか」

「俺は怪獣か何かか」

と突っ込みつつ、伝説の内容については否定しないところ、事実ではあるらしい。

「まあ、昔の話だ。今は窓際族」

「でも少なくとも、僕よりは凄い」

そう言っつてしよげるアルベールの側に、よっこいしょとおっさん臭くあぐらをかく。

「お前さ、俺とお前で年齢と勤続年数いくつ違つとおもってんだよ」「そつ言う問題でしょうか」

「あとはそつだな、邪悪なドラゴンの封印といちまったり、ゴブリンの盗賊団に単身で乗り込もうとするアホと一緒にいるかどうかも違つな」

アホという言葉に、アルベールがおかしそうに笑う。

「そんな同僚が居るんですか？」

「お前のよく知る奴だよ」

アルベールの顔が驚きが変わる。

「女つてアレだな、可愛いからつてなにやっても許されると思つてるトコあるよな」

「でもその、レナスさんが…」

と思いつつ、先ほどの立ち回りを見れば納得してしまつところもある。

「正直、今のお前さんより駄目だったなあいつは。何をやつても地獄絵図つていうか」

「あんなにしつかりしてるのに」

「あいつも騎士生活長いからな。続けてりゃあ、嫌でもたくましくなる」

ヒューズは言うつと、アルベールの頭をガシガシとかき回す。

「自分の実力に凹むのは、ドラゴンを連れてきた後だ」  
その言葉にアルベールの心は僅かに浮上する。

「だがやはり立ち上がることはまだ出来ない。そんな彼の横で、ローマの街を眺めていたヒューズがぼつりとこぼした」

「お前は、あいつが好きか？」

「そりゃあ好きですよ。綺麗だし、可愛いし……」

「ドラゴン連れてきてもか？」

「それは、正直分かりません」

うなだれるアルベールに、ヒューズは笑う。

「そう凹むな、お前はまだあいつのことを全部知った訳じゃないだろっ」

「正直、それに怯えてるんです。もし知ったら……」

更に自分と比べてしまいそう。そして彼女を嫌いになってしま  
いそう。

そして卑しいことに、自分より強いからと言う理由で彼女を嫌い  
になる自分を見たくないのだ。

「僕は本当に駄目な人間だから」

そう言っ  
て落ち込むアルベールに、ヒューズはため息をこぼし、  
そして。

「この阿呆」

と拳骨を落とした。

ヴィンセントにも殴られたことはなかったアルベールは、驚きの  
あまりヒューズを見上げることしか出来ない。

「お前がウジウジしている間に、泣いてる女が居ることを忘れるな」  
そこでようやくアルベールは気付く。レナスの気持ちを全く考え  
ていなかった自分に。

「あんなに必死にネコかぶってた理由、お前なら分かるだろ」

「わかります」

言われなければ気付かなかった自分が痛い。

「いきなりハードルの高いことをやれとは言わん。だが立ち止まる  
な」

それ以上をヒューズは言葉にしない。そしてそれは、言葉を重ね  
る必要ないと分かっているからだ。

心底適わないとアルベールは思う。だが、それを理由に拗ねるほ

ど愚かにはなりたくはなかった。

「いつてきます」

ようやく立ち上がり、アルベールはかけたした。

残されたヒューズはその場に腰を下ろしたまま、ぼんやりとローマの街並みを見下ろす。

「こんなトコまで来て、俺は何をやってるんだか」

零れた一言に自嘲の笑みを浮かべ、ヒューズはため息を重ねた。

## Episode 6 - 1 お節介な騎士達

客間のある廊下を駆けていたアルベール。そんな彼を、唐突に引き留めた声があった。

「すみません、少しお話が！」

振り返るとそこにたのはキアラ。どこか思い詰めた表情の彼女にアルベールが歩みを止めると、彼女はそばの階段を指さした。

聖騎士の守護天使であるラファエルの像を望む屋上。キアラがアルベールを連れてきたのはそこだった。

アルベールとともに外へと出たキアラは、素早く周囲を確認する。敵影はなく、殺気も感じない。あたりまえだが、アルベールがいる建前、確認せねばという義務感があるのだろう。

「ここは安全です」

「ヴェインが言っていた通りだな」

そう言いきる彼女に、アルベールは苦笑する。

「ガリレオの騎士は優秀だった」

その言葉に、キアラの胸は高鳴った。好きだといわれるのはもちろんうれしい。だがそれと同じくらい、彼に認められているのはキアラにとって喜ばしいことだった。

そしてそんな彼女の気持ちに気づいたアルベールは少し哀しそうに笑う。

「君たちは良いな。素のままの自分をみとめあっている」

「わ、私とヴェインセント様はそう言う関係では…」

「でも好きでしょ？」

アルベールのまっすぐな言葉に、キアラは思わずうなずいてしまふ。

「どこが好き？」

ヴェインにはいわないからと念を押され、キアラは観念した。

「まっすぐなところですよ。騎士としても人としても彼は常にまっすぐに生きている。だからこそ間違える時もあるけど、そう言うとき、側で正してあげられたらって、そう思うんです」

キアラの答えに、アルベールは心の底からうれしそうに笑う。

「ヴィンのこと、ちゃんと見てるんだね」

「一緒に剣を振ったからわかるってだけです。言葉よりも剣は多くのことを教えてくれるから」

そういつてから、キアラは躊躇いがちな視線をでアルベールを見つめる。

「だから、アルベール様も隊長と向き合って欲しくて……」

たぶん、恋の仲裁などしたことはないのだろう。だがそれでも、アルベールを引き留め彼女は伝えたかったのだ。

「向き合えば隊長の良いところ分かって貰えると思うんです」

「レナスさんは本当に慕われているんだね」

アルベールの言葉に、キアラが大きく頷いた。偽りのないその視線と、ようやく浮かべた彼女の笑顔に、ヴィンセントが惹かれたもう一つの理由が分かった気がした。

「安心して、僕も彼女もそのつもりみただから」

そう言うつと、アルベールはゆっくり背後を振り返る。

振り返った先、そこに立っていたのはレナスだった。

「まったく、どいつもこいつもお節介ばっかりだ」

その目に涙がないことを確かめてから、キアラはほっと息をつき、彼女に駆け寄った。

「私は、周囲の警備に戻ります」

「うん、たのんだ」

入れ違いにバルコニーに出るレナス。その手には自分の剣とヒューズの剣が握られていた。

それ彼女はまっすぐにアルベールを見て、大きく息を吸う。

「あの子じゃないけど、私もこんなやり方しかわかんないの」

自分の剣をアルベールに投げれば、彼はそれを片腕でキャッチす

る。

「僕も、確かめたいって思ってたんだ」

そう言っつて、アルベールは剣を抜いた。

視線の先には、すでに剣を構えたレナスがいた。

剣戟の音を聞きながら、ヒューズは懐からたばこを取り出し、マッチで火をつける。だがしけていたのかマッチは乾いた音を立てるばかりだった。

「これを」

いつの間にか、側に立つ騎士の姿にヒューズは笑う。

「王子に火をもらうとはね」

ヒューズのたばこにマッチで火をつけたのはヴィンセント。

「お前さんも、すうのか？」

「やめました。嫌いだと、言われたので」

潔癖な騎士の少女を思い出し、ヒューズは笑う。

「青春だねえ」

「そんな年でもないですが」

そういつて、ヴィンセントはヒューズの側で彼と同じく壁に背を預ける。

「あなたも、十分青い恋をなさっていると思いますが？」

「なんでそう思う」

「アルベールとのやり取り聞いていました」

最後のつぶやきまで、と続けるヴィンセントにヒューズは苦笑し、わざとらしく話題を変える。

「んなことより、お前さん体は大丈夫なのか？」

「怪我の方は平気です」

「そっちじゃねえよ」

そういつと、ヒューズは懐から小さな小瓶を取り出した。

「竜の血だ。飲めば一晩はしのげる」

「どこでこれを…」

「ヴァンパイアのお前さんが、聖騎士の本部でピンピンしてられるわけねえからな」

自分の正体を彼に告げた覚えはない。とすればキアラかレナスあたりが話したのかとも思ったが、それをヒューズ自身が否定した。

「見りゃわかるさ」

そんなまさかと思いつつヒューズの方に顔を向ける。

一瞬彼の瞳が不気味な紅い色に染まった気がして、ヴィンセントは息を呑む。

だが彼を見たヒューズの表情に変化はなく、瞳も特におかしな所はない。

「一応、隠しているつもりだったんですけどね」

「…まあ、人間色々と経験すると、分かることもあるんだよ」

「ドラゴンを倒せたのも、そういう経験のお陰ですか？」

「倒したんじゃないかって説得したんだよ」

「手荒に、でしょう」

「多少な」

「恋愛に関しても、もう少し手荒な手に出ても良いと俺は思いますけど」

唐突に話を戻され、ヒューズは肩をすくめる。

そのとき、廊下の向こうからキアラがやってくる。

ヴィンセントとヒューズに気づき、彼女はなぜだか不満そうな顔をした。

「暇なら仕事してください！」

キアラが言うと、ヒューズが剣のない腰元をぼんと叩く。

「行きますよヴィンセント様」

「ここは安全だしそう力まなくても」

「絶対と言うことはありません！」

強引なキアラに苦笑しつつ、「では」と敬礼をして、ヴィンセントはキアラの隣に並ぶ。

「青春だねえ」

という言葉でキアラは無視し、ヴィンセントは苦笑で交わす。

そのままズカズカと歩き出すキアラの耳元に、ヴィンセントはそ

つと顔を近付ける。

「今日はいつもより積極的だな」

彼女に尋ねれば、キアラはちらりとヒューズを振り返る。

「ヒューズ隊長と、何話してたんですか？」

「男の話だよ」

「…ずるいです」

予想外の言葉に、ヴィンセントはきよとんとした顔で彼女を見つめる。

「みんな、ヒューズ隊長には本音を見せるのに私には見せてくれない」

「俺は君には本音を告げているつもりだが？」

「あなたのことはどうでも良いんです！ レナス隊長が…」

そこで言葉を切って、キアラはうつむく。

「私だつて隊長の側にいるのに、いつも大事な相談はヒューズ隊長にばっかり」

「すねてるのか」

「すねてません！」

いつもより子供のような態度なのは、明らかにすねているからかだろう。

だがそれ以上指摘すれば今度は口を閉ざしてしまいそうで、ヴィンセントは重ねたい言葉を飲み込んだ。

「そのうち、ヒューズ隊長にできない相談もできるようになるさ」

「どんなですか！ いつですか！」

「それはアルベル次第じゃないかな」

「意味がわかりません！」

「まあ、君にはわからないだろうな」

思わずこぼれた本音に、キアラは明らかに不満そうだ。

さてどうご機嫌を取るかと悩むヴィンセント。

可能ならばローマでのデートも取り付けたいが、優秀な女騎士を仕事から遠ざけるのは骨が折れそうだった。

**E p i s o d e 0 6 - 2 不器用な恋（後書き）**

8 / 3 誤字修正致しました。 ( ) 指摘ありがとうございました

Episode 06 - 3 想いは剣にのせて

「…参りました」

そう告げて、アルベールはあがった息のまま膝をついた。レナスもまた肩で息をしながら、その場に腰を下ろす。

「本当に、強いんですね」

アルベールの声に、レナスは笑った。

「強い先生に、ずっと鍛えてもらっていたから。でも、アルベール様も予想以上に強くてびっくりしました」

「ヤワに見えるけど、一応聖騎士の資格はあるから」

「ですね、正直甘く見てました」

素直に言い切るレナスに、アルベールは少しくすぐったそうに笑う。

「いいね、こういうのも」

「え？」

「はじめてだよね、お互い息も絶え絶えで話すのなんて」

「舞踏会でおぼれたときは息も絶え絶えでしたけど」

「今思うと、あのときのレナスさんはすごく男らしかった」

「おぼれるあなたにあわてて、ネコがはげかけまして…」

「無理をさせてたんだね、いろいろと」

アルベールの言葉に、レナスはほんの少し顔を赤らめた。

「…嫌われたくなかったんです。あなたのことが、好きだったから」  
「僕が嫌うと思った？」

「あなたは優しい。でも、私は今まで何度も恋で傷ついてきたんです。この仕事や自分の力や体のことで、たくさん傷ついて、そしてそのたびに…」

恋をやめると泣いて、わめいて、酒におぼれて、ヒューズに泣きついた。

「それでも恋をやめたら、女として大切な何かが駆けてしまう気が

して、焦ってまた恋をして」

そしてまた同じ事を繰り返してきた。

「あなたが信じられないんじゃないじゃなくて、女としての自分が信じられなかったんです」

「ごめんなさいとうなだれるレナス。その側に、アルベールがそつと寄り添った。

「実を言うと、僕もおんなじなんだ」

向けられたアルベールの笑顔は明るくて、レナスは少しだけ胸をなで下ろす。

「騎士団に入れたのもさ、聖騎士になれたのも実は実力じゃない。

ただ僕が、王子だからなんだ」

これは秘密だけど、と笑顔を苦笑に変えて、アルベールは剣を見つめる。

「騎士団に入った当初なんて本当に弱くてさ…、もう背伸びするの一杯一杯だった」

でもそれが認めるのが嫌で、仕事をしないで遊びほうけていた時期もある。

「今の剣術もね、ヴィンに教わったんだ。同じ王子で、なのに強くてかつこよくて、そう言うのを間近に見てようやくやる気になったというか」

「それだけで得た実力だとは思えません。あなたは本当にお強い」

「でも、動機が不純なのはあのは本当だよ。剣術より女のこと遊ぶ方が好きだし、剣が強くなればもてるかなあって」

幻滅した？と笑うアルベールに、レナスは首を横に振る。

「私も、剣術を始めたきっかけは似たような物です。追いつきたい人がいて、憧れを憧れのままにしくなくて始めたんです」

「でも君は隊長にまでなった」

「性に合っていただけですよ、ダンスや刺繍よりも剣が」

「実は僕もそうみたいなんだ。やってみるとこれが意外に楽しくて、お互い動機は不純、だがそれでも騎士を続けている。意外と似た

もの同士だねとアルベールは笑った。

レナスもまたようやくアルベールの側まで来ることが出来たよう  
な気がした。

けれど同時にレナスは感じた。アルベールは今、男ではなく一人  
の騎士として自分と対峙しているのだと。

「でもそれだけじゃダメなんだよね。今回自分が狙われて、ヴィン  
まで怪我をして、ようやくわかったんだ。自分はホント甘かった  
て」

言いながら、アルベールは剣をきつく握る。

「同時に思った、もし同じようにレナスさんが傷ついたらって…。

そしてそのとき自分の剣が役に立たなかったらって」

だから今日ここまでできたのだと、アルベールはつぶやく。

「聖騎士の修行って本当に簡単なんだ。聖水を飲んで、それで終わ  
り。なのに、今までの僕はそんなことすら面倒くさがってしなかつ  
た」

「これからあります」

「そうだね。これから、いろいろとがんばらなきゃね」

そう言うと、アルベールは手にしていた剣をレナスに返す。

「僕はまだまだこれからなんだ。だから…」

返された剣と言葉。それをレナスは受け取り、最後は静かにうな  
ずいた。

『まもなくフロレンティア。フロレンティアでございます。お降りの方はご準備をお願いいたします』

車内アナウンスに、大きな伸びをひとつしてヒューズは意識を覚醒させた。

「仕事中」

隣に座るレナスの声に、ヒューズはあくびを返す。

「大丈夫だろ。車内の敵はあらかた片づけたんだし」

そう言うヒューズの足下には、縄で縛られた騎士姿の男達が転がっている。

「しかし、こいつ等も懲りないね」

「フロレンティアにいたら、アルベルが全部解決してくれるわよ。だからこれで最後」

「でも、帰りぐらいゆっくりしたかった」

「とかいって、一人で全員ぶちのめしたのは誰よ」

「そんな顔の女に負けたら、こいつ等のプライドズタぼろだろうからな」

ヒューズの言葉を鼻で笑うレナスの目ははれている。クマは化粧で隠してはいるが、それでも泣きはらした目だけは戻らない。

「今回の恋も、あつという間に終わっちゃったな」

高速で駆け抜けていく風景を眺めているレナスに、ヒューズがちらりと顔を上げる。

「2ヶ月なら長い方だ。それに、嫌われて終わった訳じゃないだろ」  
嫌われた方が楽だった」

そうこぼし、レナスは窓ガラスに頭を預ける。

お互いのことを話して、出した結論は別れだった。

『今のままじゃあなたと付き合う資格がないんです』

そう言うアルベルに、そんなことはないと言いつくことは出来

なかった。

彼は決意をしていたのだ。騎士として、男として。今の自分を変えたいと。一人で一人前の男になりたいと。

そしてそれを彼女は止めることは出来なかった。女としては引き留めたかった。支えたいと言いたかった。

けれど彼の決意を騎士であるレナスはいたいほど理解出来てしまったのだ。

だから彼女は頷いた。

「結局、わたしはアルベールの前じゃ女にはなれなかったのよね」でも後悔はしていない。それでも一晩泣くほど辛かったけれど、後悔はしていない。

だから彼女は、側のヒューズに視線を向けられる。

「あーあ、でもホント惜しい事したなあ」

「ん？」

「ローマまで行ったのに買い物も出来なかった」

落ち込むレナスをどう励まそうかとそれなりに頭を悩ませていたヒューズは、その言葉にため息を重ねる。その反応にレナスがわざとらしくふて腐れた顔を作る。

「仕事中って言ったのは誰だよ」

「でも、早起きすればブティックくらい行けたのに！」

「お前、失恋すると買い物に走るタイプだよな」

そしてそれに毎回付き合わせてきたのだ。財布も含めて。

「今回は金はかさぞ」

「安心しなさい。当分休みはないし、買い物何てしてる暇ないし」ホント最悪よ。そういうと、再びレナスは車窓に目を向ける。

気がつけばフロレンティアの町並みがそこにはあった。後数分で駅にも到着することだろう。

「いくわよヒューズ」

「最後で良いだろ。仕事熱心な部下達がいるんだし」

そう言うヒューズの横を、キアラとヴィンセントが捕縛した騎士

を担いで歩き去っていく。

「な？」

と微笑むと、レナスは呆れた表情でヒューズを見た。

『フロレンティア・フロレンティアでございます』

窓の外には見覚えのある駅のホーム。そしてそこには騎士に護衛をされたアルベールの姿がある。

決意もしたし後悔はない。でもやはり泣きはらした目を見られるのが嫌で、レナスは慌ててヒューズを追い立てるために窓に背を向けた。

だがヒューズはそのまま動かず、それどころか突然レナスを抱き寄せた。

突然のことに言葉を失うレナス。その耳元で、ヒューズが笑う。

「こうしてりゃあ、見えん」

そう言う問題ではない。だが、相も変わらず言葉は出ないままだった。

『北ローマ行きフレッチャ・ロッサ発車いたします』

それどころか、気がつけば発車ベルまで鳴っている。

「れ、列車！出ちゃう」

ようやくそれだけ言うと、レナスは慌ててヒューズから体を離す。対するヒューズはさして動揺することもなく、列車の座席から立ち上がることもない。

どうすることも出来ずに窓の外を見れば、景色は動き出している。

その中で、副官の少女が笑顔で手を振っている。

「なっとなっ！」

そこでようやく呪縛が解けた。レナスはヒューズの胸を掴み上げると、殺す勢いで締め上げる。

「列車出ちゃったじゃない！」

「落ち着けよ」

「落ち着け？ これ、北ローマまで停まらないのよ！」

「まあ、2時間ちよいだろ」

「仕事中なんでしょ！」

「お前はさ、もうすこしサボることも覚えたほうが良いぞ」

「あんたが言うな！」

言うが速いか、ヒューズに右フックをお見舞いしていた。あまりに威力に通路までふつとばされるヒューズ。

その情けない倒れ方に、レナスは怒るきも失せる。

それどころか、どんどん遠ざかっていくフロレンティアの景色とあわせておかしさすらこみ上げてくる。

「もうほんと、団長に怒られるわよこんなの」

「だから落ち着けて」

殴られた頬をさすりながら、ヒューズが椅子の手すりに体を預ける。

「でもホント、なんでこんな…」

先ほど抱きしめられたことを思い出し、レナスは思わず赤面する。自分から抱きつくことや体に触れることは小さい頃から何度もあるのに、何故だか胸の動悸が治まらないのだ。

そういえば、いつもは自分からでヒューズから抱きしめられたのは始めてかも知れない。

「買い物、したそうだったから」

動揺するレナスとは対照的に、ヒューズはそんなことをのんびりした口調で言っただけ。

「買い物ってあんた」

「北ローマの首都ミラノだったら、お前の好きなブランドの店があるんだろ。ローマでできないなら、そこまで行けばいいかなって」

「だけど、いくら何でも今って」

「だって、辛いのは今だろ？」

そう言っただけでレナスを見上げたヒューズの微笑みに、レナスはぐつと唇を噛む。

そうしなければ、また泣いてしまいそうだったからだ。

「部下も元彼もいねえぞ、ここには」

「うるさい！ あんたがいる！」

「何度お前の泣きつ面見てきたと思ってる」

ほらこいと、腕を広げたヒューズにレナスは一も二もなく抱きついた。

「あんたはさ、ホント馬鹿」

「そんなの、自分が一番知ってるよ」

レナスを軽々抱きかかえ、ヒューズは再び自分の席に腰を下ろした。

「まあ、一応臨時休暇って事で話は付けてあるから、安心しろ」

「いつの間に…」

「いい男は仕事も出来るんだよ」

冗談は顔だけにしろとヒューズをこづきつつ、実際少しだけ見直したのは秘密だ。

「じゃあ、今までで一番辛い失恋だから、いっぱいバッグ買おうかな」

泣きながら言うセリフではないが、思いついたのはそのセリフだったのだから仕方ない。

「ほどほどにな」

「いいでしょ。荷物持ちもいるし」

レナスの言葉にヒューズが返したのはため息。でも、文句を言いながらも彼は絶対自分の隣にいてくれる。

「次の恋はさ、ちゃんと成功させるから」

「だからお金かせて？」

「わかってるじゃない」

「かえせよ」

もちろんと頷いて、涙を拭いて、レナスは笑った。

今度はお金だけじゃなくてちゃんと恩もかえすから。今度は今度はもう間違えないようにするから。

「だからもうちょっとだけ、付き合ってよ」

そうつぶやいてレナスは車窓に目を戻す。

フロレンティアはもう遙か遠く。窓の外にはのどかな田園風景が  
広がり始めていた。

ミラノまでの所要時間は2時間45分。

その間のひとときはヒューズとの小旅行を満喫したくて、レナス  
は耳に付けた通信機を外した。

隊長達の受難編【END】

フロレンティアの春は遅い。だが春はフロレンティアが一年で一番輝く季節でもある。

冬の眠りから目を覚ました草木は一斉に芽を出し、フロレンティアを囲むトスカーナ地方特有のなだらかな丘陵は瞬く間に若緑色のブドウの新芽に彩られる。今年のブドウの豊作を願いワイナリーでは春を呼ぶとされる妖精を招き、華やかな宴が執り行われるのだ。

もちろん宴が開かれるのは郊外ばかりではない。

フロレンティア市街でも、春の訪れは夏まで続く数々の祭典の幕開けを意味する。

それは同時に、観光シーズンの始まりを意味していた。

復活祭バスケットをかわきりに、6月にはいると仮装フットボールの大会や花火大会、それが終われば夏の休暇はもう目の前だ。

イタリア半島の国々はもちろん、他の大陸からも多くの観光客がやってくるこの季節、特に忙しいのは治安維持を行う騎士団である。だが忙しさ以上に、美しい春とともに妖精達が運んでくるやつかいな物がある。

そしてそれは、騎士団を非常に悩ませる物でもあった。

「……隊長、今年もまた、撃沈いたしました……」

ガリレオ治安維持騎士団第四小隊の隊室に響く悲しいつぶやき。

それはフロレンティアに、春と共に「恋の季節」が到来したことを意味している。

だがフロレンティアに愛が溢れ、春の妖精が喜びを振りまく春は、騎士団に所属する女子にとっては「失恋の季節」でもあるのだ。

春になると男も女も老いも若きも、恋を求めて浮き足立つ。

もちろん既に愛を育んでいた者は、より一層愛を燃え上がらせるのが春だ。

だがこれは一般的な男女の話。相手が騎士、特に女性が騎士だった場合はこの一般には入らないのである。

春の到来は激務の到来を意味する騎士団において、この時期に休みを獲得できるのはよほどの強運の持ち主だけだ。復活祭が終われば多少余裕も出来るが、出会いのピークは復活祭までの一週間。その間に恋人を探すのもキープするのも至難の業なのである。

そもそも恋に本気になった一般女性に、体力と男気だけが取り柄の女騎士が適うわけがない。お目当ての人がいたとしても、こちらが忙しさに悲鳴を上げているうちに、男は違う女にちゃっかり取られている、というのはざらだ。

フロレンティアの男は基本的に女性がいれば声をかけずにはられない。だからこそ一時的でも騎士達も交際関係を持つことが出来るのだが、結局最後に選ばれるのはいわゆる普通の女の子である。

男性が会いたいと言えば美しく着飾って颯爽と現れる女性。まかり間違っても服の下に腹筋を隠していたり、剣を腰から下げているりはしない。

先週デートした男が違う女性を連れているのに巡回中に鉢合わせ、というのは良くある話で、復活祭2日前の今日は3人の女騎士が、その不運に遭遇した。

「復活祭のあと、一緒に出かけようって……。約束してたんですよ……なのに」

隊室の中央、失恋の涙に濡れる3人の騎士を囲むようにして、休憩中の隊士達はそれぞれ労いと同情の言葉をかける。

「しかしこのペースでは、復活祭前に今年も彼氏持ちが0になるぞ」つぶやいたのは隊長のレナス。例年よりは異性と交際している隊士が多いにもかかわらず、気がつけば今の今まで別れ話が浮上していないのは一人という状態だ。

そしてその一人は……………。

「隊長聞いてください！ ジュリオの店に入った強盗を逮捕しました！」

と、顔に返り血を付けながら隊室に飛び込んできた、男装の騎士キアラである。

「絶望だ……。絶望的だ……」

そう言っつうなだれる隊士達に、何か間違えたことを言ったかどキアラは首をかしげる。

「いいから、あんたは取調室で調書かいてきなさい」

「はい！」

「後、顔は洗え！」

笑顔のまま廊下に出て行く部下の姿に、レナスは頭を抱えた。

## Episode 00

### 妖精の訪れは春と失恋の予兆（後書き）

時期が過ぎてしまいましたが、復活祭（イースター）のお話です。誰かさん達の恋が進展したり、誰かの秘密がちょっこつと暴かれたりする3話目です（笑）  
いつもより若干長めになりますが、よろしければまたお付き合い下さい。

あと拍手のお礼小話にヒューズとレナスのエピソードを追加しましたので、もし気に入ってくださった方がいらっしやいましたら、読んで頂ければと思います。

6月17日 一部文章修正

8月3日 一部文章修正（ご指摘ありがとうございました）

## Episode 01 - 1 騎士団長はさばり魔

逮捕した強盗を地下の牢屋にぶち込んだ後、キアラはすっかりした顔で騎士団内を歩いていった。

出来ることならば荒事はない方が良い。だがやはり、自分の手で悪党を逮捕するというのはなかなか気分が爽快だ。

それも本日、彼女はすでにスリや泥棒を含む4人の悪党を捕まえている。

「これは新記録だ」

と一人ニヤニヤしていると、突然目の前に壁が迫った。

慌てて立ち止まると、壁だと思っていたのは騎士団長のヴィートだった。

「すいません！」

ぶつかりそうになったことをわびて敬礼をすると、ヴィートは少し困ったように笑う。

「どうせなら胸に飛び込んできて欲しいところだがな」

「ありえませんが？」

即答され、ヴィートは大仰な仕草で頭を落とす。

「せめて二人だけの時くらい、パーパに優しくしようよキアラちゃん」

「戸籍上、あなたは私の父親ではありませんので。…まあ、あったとしてもしませんか」

「でもパーパはパーパだ、さあ再会のハグをしよう」

「嫌です」

「またもや即答だった。」

相手は騎士団長。だが扱いがぞんざいのなのはキアラだからと言っただけではない。

普段は第5小隊長長のヒューズと並んで『おっさんコンビ』と呼ばれる騎士団長は、ヒューズがそれ以上にだらしない上に仕事を

しないことで有名だ。

副官達の目をかいくぐって昼間から酒場に入り浸る。騎士団に出資してくれる貴族との晚餐に寝癖で行く。等はいつものこと。

今日も長くなってきた白髪交じりの髪は乱暴にひとつにまとめ、顎にはもちろんそり残しの無精髭。その上隊服は『色気が足りない！』と言って着崩し、無駄に胸元を開けているという有様である。今更だが、女子の隊服をスカートにすべきだったと後悔しているらしい。

もちろん騎士団長をやるくらいの器量はあるのだが、平和な時とはにかくだらしない騎士団長に、キアラを含む騎士達は手を焼いている。

「行ってもいいですか？ これから巡回なんで」

「今帰ってきた所じゃないか」

「代打です。今日もまた、その……」

「うちのうら若き乙女達をフツた奴がいたのか？ 乙女に涙を流させるなんて最低だねえ」

「と言うわけですので」

では、と敬礼をしてキアラは歩き出そうとしたが、そこで引き下がるヴィートではない。

「俺も行く」

「団長は黙って自分の仕事をしてください」

「人々と交友を深めるのも、騎士の立派な仕事だ！」

どうせ昼間からワインを飲みたい口実だろう。

キアラの予想は見事的中することになるのだが、結局ヴィートを止められず、二人が騎士団本部を出たのはその10分後のことであった。

**Episode 01 - 1 騎士団長はどぼり魔（後書き）**

8 / 3 誤字修正致しました。 ( ) 指摘ありがとうございました

## Episode 01 - 2 橋の上で恋人に逢ったなら

騎士団本部のあるテ・ヴィッティ広場をヴィート共に出発したキアラは、ドウオモヤ駅のあるアルノ川対岸へと向かった。

途中にあるヴェツキオ橋までくると、橋の上にある宝石店から人々が顔を出す。

彼らに「今日は娘と一緒になんだ！」と主張を繰り返すヴィートには呆れるが、それを道行く人たちも喜んではやすので、怒るに怒れない。

それにほんの少しだけ、国民に愛されている父親の姿を見るのが誇らしいという気持ちもある。もちろん彼には言わないが。

国民のために働くガリレオの騎士に、フロレンティアの国民たちは親しみを持って接してくれる。

そしてガリレオの騎士も、騎士としてではなく友人として国民と接するようにしている。

それは団長のヴィートの意向であり、彼自身も騎士団長でありながら、自ら率先して街に出て、こうして国民の声を聞く事が多い。

だからみな、騎士団長である彼にも気軽に声をかける。

道化じみた言動や行動故、からかわれる事すらあるくらいだ。

でもそうやって人々と笑い会っている父の姿が、キアラは本当は好きだった。人々の中で笑っている姿は、母に微笑みかけていた父を思い出せるから。

「そうだ、キアラちゃん。キアラちゃんの王子様がさっき通ったよ」

そう言ったのは、ヴェツキオ橋で宝石店を営むドワーフの老人だ。

「お、王子様ってなんですか!」

「ヴィンセント王子と付き合ってるんだろ?」

「誰がそんなことを!」

もちろん、老人が指さす先にいるのはヴィートである。

「いや、俺とおやつさんの仲だからつい」

とかいいつつ、至る所で言いふらしている可能性は否定出来ない。そう言えば、最近街を歩いていると、色々な人から身に覚えのない労いの言葉をかけられる事が多くなった。

街中だけではなく、貴族の護衛で舞踏会などに赴けば、貴族の令嬢達に羨望の眼差しを向けられていたこともある。

「色々合点が行った」

「別にいいじゃねえあ。みんな応援してくれてるんだろう」

キアラはピンと来ていないようだが、ヴィートは自分同様この少女が多くの人々に好かれているのを知っている。

とはいえ正直、キアラとヴィンセントが付き合っている事が分ければ、愛娘に妬みや嫉妬の火の粉が降りかかるのではと恐れたこともあった。

だが実際は、男装の騎士と王子という組み合わせは、ロマンスに目がないフロレンティアの女子たちにとっては妬みよりも観察の対象とうつつたようで、街の娘たちや学生はもちろん、貴族の令嬢達からキアラが嫌がらせを受けたことはないようだ。

もちろんヴィンセントに言い寄る女性が消えたわけではないが、逆に袖にされることに快感を覚え、男装の騎士と王子との恋愛を妄想して楽しんでいる者もいるらしいというのは、参加した舞踏会で得た情報である。

「とはいえ、お前ももう少し努力しないとなあ」

「何の話ですか！」

「周りをよく見てみる、道行く女子達のこの輝きを！」

たしかに、春と恋の訪れに人々は浮き足立っている。それに比べてキアラはいつものまま、地に足がついた言葉遣いと態度しか示さない。

「私がいきなりあなったら気持ち悪いでしょう」

「気持ち悪くない！ お前はもつと恋におぼれるべきだ！」

力説する父親に白い目を向けるキアラ。

そのとき、橋の向こう側から見覚えのある顔と、聞き覚えのある

黄色い声が響く。

「ヴェインセント様よ！」

キアラの側でも悲鳴が上がり、道行く女性達が騎士団の隊服に身を包んだヴェインセントにうっとりした顔を向けた。

「ほれ、お前も……」

と面白半分でキアラの肩をぼんと押すした直後、キアラが突然走りだした。

「おお！」

と感嘆の声を上げたのはドワーフの老人。彼と共に事の成り行きを見守っていたヴェイトは思わず微笑む。

「そうか、愛する人に駆け寄るくらいは女つ気がキアラにも……」

と涙を流さんばかりに喜んだ次の瞬間、キアラはヴェインセントの側を猛スピードで駆け抜けた。

恥ずかしさゆえの奇行にしては勢いがありすぎる。

「あの、ヴェイト騎士団長」

啞然としたヴェイトに、声をかけたのはキアラとすれ違いにこちらにきたヴェインセントだった。

「たぶん、スリを追いかけていったんだと思います。あれは」

「キアラが言ったのか？」

「いえ、女物のバッグを持って走っていく男が見えたので」

俺が追いかけたかっただんですが、あの子の方が速くて。

と笑顔で言うと、ヴェインセントは女性達を卒のない言葉であしらいながら、ヴェッキオ橋の向こうに消えた。

「まあ、キアラちゃんらしいけどな」

「橋の上で恋人とすれ違ったら、普通は駆け寄って抱き合ってキスだろう！」

「まあ、お前さんの娘だしなあ」

「なんでだよ！俺は最高にモテるいい男だろう！」

「ウチの騎士団長は、ずばらで、だらしがなくて、おっさんくさい！って騎士達が話してるのを聞いたぞ」

その言葉に、ヴィートはその場に崩れ落ちる。

「俺だつて若い頃は！ 若い頃は！」

「そういや、お前さんの若い頃つてしらねえな。オレもここに店を構えて長いが、お前みたいな阿呆な若造に覚えがない」

「だから、昔の俺はもつと格好良くてまさしく王子つて感じてだな  
！」

「寝言は寝てから言え」

と老人は笑いながら店に入っていく。

こつ見えてもヴィートもヴィンセントと同様王子の位を持つ人物である。

しかし王子として公務を行うときと騎士団にいる時では外面と纏うオーラが違いすぎる所為で、今では国民にすら別人だと思われている。

そもそも第5王子のヴィートと言えば悪名ばかりが一人歩きをし、今では公務の場ではなくゴシップ誌のピンぼけ写真でしか顔を拝めない存在と化している。もちろん全部赤の他人なのだが。

そのお陰で隠しているわけでもないのに、ヴィートが同一人物だと気付く人はほばいない。何せ同じ王子であるヴィンセントが気付かないくらいだ。

「納得出来ん！」

「何で絶叫してるんですか」

いつのまにか、キアラが彼の側まで戻ってきていた。

「スリは？」

「本部に戻る騎士が側にいたので、引き渡してきました」

「そうか。じゃあ早速だが、俺は今からお前に説教を……」

「余計な時間をくいましたね。そろそろ行きましようか」

父親の言葉をばつさりと切り捨て、キアラはさつさと歩き出した。

「納得できん……」

今度は小声でつぶやいて、ヴィートはキアラの後をとぼとぼとついで行つた。

## Episode 01 - 3 恋人達の異変

「ねえ、さっきそこでキアラちゃんとすれ違ったよね？」

ヴェツキオ橋をわたり、ガラハド騎士団に戻るためにアルノ川沿いの通りを歩いていたヴィンセントに、馴染みの顔が声をかけた。

「アルベール、お前何でこんな所にいるんだ」

「酷いなあ、一応お仕事中なんだけど」

と子どものようにむくれるのは、親友であり彼の補佐であるアルベール。

「どう見てもこれからデートって感じだけど」

「当分は彼女作らないって言ったでしょ？」

「じゃあなんだその花束は」

「うん、ちよつと捜査をね」

そういうと、アルベールはヴィンセントの側で声を抑える。

「なんかさ、今年いつもよりもカップルの数少ないと思わない？」

アルベールの表情は真剣だが、突然そんな事を言われても、ヴィンセントはいまいちピントと来ない。

ホント恋に疎いなあとため息をこぼしながら、アルベールは続けた。

「なんかね、復活祭パスクワが近づくに連れて恋人が増えるところ、今年は別れるカップルが急増してるんだって」

「そういえば、部下の中にも女性に振られて泣いてた奴がいたな」

「毎年春はフロレンティアで迎えるけど、こんな事初めてでさ。…だから気になっちゃって」

出来たらもう少し本格的に捜査がしたいんだけど、と恐る恐る尋ねるアルベールにヴィンセントは頷く。

「俺に打診するって事は、心当たりもあるんだろう？」

「うん。妖精術の学校で立て続けに妖精が盗まれてるみたいなんだ。それも恋を壊す妖精が」

「そんな物があるのか」

「もしそいつらが恋人達にイタズラしたら、まずいと思わない？」

「具体的な効力は？」

「それを今から聞きに行くんだ。妖精の権威がガリレオ騎士団にいるらしいから」

そして花束はその手土産らしい。

「レナスに見られたら誤解されるぞ」

「最近、僕たち良いお友達なんだよ。妖精に詳しい人を教えてくれたのもレナスさんなんだ」

なら安心だと、ヴィンセントは親友の肩をねぎらうように叩く。

「この件はお前に任せる。精一杯やって見る」

「うん、がんばるよ！」

あとそうだと、アルベールは少し心配そうな顔でヴィンセントを見つめた。

「ヴィンも恋を壊されないように気をつけなよ」

「たしかに俺達が喧嘩したら流血騒ぎだな」

「そう言う事じゃなくてさ。手ひどい失恋で失踪しちゃっ子もいるみたいだし、ヴィンはともかく失恋経験のないキアラちゃんが、ヴィンに振られるようなことがあったら…」

拗れることは目に見えている。

「気を付ける」

ヴィンセントが頷くと、アルベールは満足そうに頷いてガリレオ騎士団の本部へと歩いていった。

ようやく仕事にやる気を見せ始めた親友の姿に、ヴィンセントはほっと胸をなで下ろす。

そして同時に、アルベールの話にヴィンセントは先ほどちらりと顔を見た恋人の事を思い出す。

お互いの騎士団は距離が近いため、時折巡回中にはったり出くわす事が多い。

だがキアラから声をかけてきてくれた事は、まだ一度もなかった。

こちらでも女性にまとわりつかれてしまう事が多いので、声をかけにくいのは重々承知だ。

だが、それでも目を合わせるとか、女性に囲まれた自分を見て何か思うところがあっても良いのではないかと、ヴィンセントは思わずにはいられない。

先ほどの事も、実は少し傷ついている。あり得ないとは分かっているけど、キアラがかけたとき一瞬期待した。

けれど彼女の瞳に映っていたのは自分ではなくスリである。オチはすぐに読めたがやはり男としては切ない。

一体彼女は、自分の事をどれくらいを気にかけてくれているのだろうか、ヴィンセントはぼんやり考える。

毎日、と思いたいが正直自信がない。

デートの後の口づけもおあずけのまま、手だって繋げるのは3回に一回くらいである。

だがそれでも、年下の彼女の事が愛しくて仕方がないのだから恋というのはやっぱりやっかいな物だ。

キアラが恋の駆け引きが下手なことは分かっているし、そこに惹かれていたのも事実。

けれど、ヴィンセントも男である。

ヴァンパイアとして見た目以上に長い人生を有しているが、恋をすれば少年のように一喜一憂するし、生殖器官と本能は人のそれと変わらないのである。

「俺が妖精の粉をかぶっても案外平気だったりして」

と思わずこぼして、自分で凹んだ。

そのとき、落胆するヴィンセントの耳に、女性の悲鳴が飛び込んでくる。

悲鳴の出所は側を流れるアルノ川。慌てて視線を走らせれば、一人の女性が川を流されていた。

女性の姿と位置を確認すると同時に、上着を脱ぎ捨てヴィンセントは川に飛び込んだ。

流れが速い川ではないが、先日の雨で水かさは増している。とはいえ女性の元までたどり着くのは、泳ぎの得意なヴィンセントには容易いはずだった。

だが女性の体に腕を回した次の瞬間、それまで青白い顔をしていた女性の目がカツと見開かれる。

針生類を思わせる細い瞳孔に危機を感じた次の瞬間、ヴィンセントの口に女が息を吐き出した。

花に似た甘い香りに、ヴィンセントの意識が遠のく。

それでも何とか女をふりほどき、ヴィンセントは何とか岸まで泳ぎ切った。

「大丈夫か！」

荒い息で岸につかまっていると、ヴェッキオ橋から騒ぎを見ていたドワーフの老人が、彼を引き上げに駆け寄った。

「ありや何だ」

「わかりません」

振り返ると、先ほどまで女がいた場所を黒い蛇のような物が泳いで行くのが見えた。

「女性が、いました」

「オレも見たが、お前さんの側で突然消えちまった……」

「自分は大丈夫ですので、至急騎士を呼んでください」

人でも人でなくても、あれは放っておいていい存在ではないとヴィンセントの第六感が告げていた。

だがすでにヴィンセントの体は重く、老人を見送ることすら億劫だった。

体が燃えるように熱い。

意識を手放してはいけないと分かっているのに、まぶたは重くなり、口から零れる吐息は熱を帯びていく。

そして再び戻ってきた甘い香りに意識を支配され、ヴィンセントは意識を失った。

## Episode 02 - 1 妖精と元カノにはご用心

絶叫。そして阿鼻叫喚。

ガリレオ騎士団の救護室に響くそれは、アルベールの物だった。

「ふっふっふ、いいざまよ」

少し離れたところで、騎士とは思えぬ邪悪な笑みをたたえているのはレナス。その横ではヒューズが頭をかかえている。

「ホント可愛い。食べちゃいたいくらいよう」

絶叫しているアルベールを羽交い締めに行っているのは、妖精の権威ことガリレオ騎士団の第10小隊副隊長のアレッシオである。

第10小隊は主に後方支援、中でも怪我をした騎士に救護に当たる部隊だ。それ故彼らの控え室は、騎士団内にある救護室。

ちなみに医療班は、ガリレオ騎士団で唯一、可愛い女子隊士がいる部署である。もちろん、腹筋のない普通の女子だ。

だからアルベールは、意気揚々とこの部屋を訪れたのだが……。

「やめてくださいアレッシオさん！」

「だ〜か〜ら〜、アタシのことはアレッシアって呼んで」

「でもあなた、男でしょう！」

とアルベールが叫べば、アレッシオは女性と比べても遜色がない美貌を崩壊させた。

「うるせえなあ！ 女だっついてんだろうがぁ！」

「レナスさん、この人何なんですか！」

「だから、妖精の権威よ」

「っていうより、妖精さんでーす」

と微笑むアレッシオの手から逃れ、アルベールが隠れ蓑に選んだのはヒューズだった。

「からかうのはそこら辺にしる。ガリレオ騎士団にはバケモノがいるって噂を立てられたらどうする」

「私のどこがバケモノなのよう」

たしかに見た目は女性の用に美しい。美しいが、やはり体つきと長身はどう見ても男のそれだ。その上本人が言い張るように彼は妖精と人とのハーフであるため、その背には美しい透明の羽が生えていた。

「とりあえずそれしまえ、気味が悪い」

「あたしのチャームポイント全否定！」

「王子様が怖がってるだろう」

半泣きでヒューズにしがみついているアルベールに、アレッシオは仕方なく自慢の翼を人の目に映らないように消した。

「あと、レナスもいい加減笑いをこらえろ」

「だっていい気味なんですもの」

「レナスさん、僕に恨みがあるんですか…」

「フラれた当時は悲しかつたけど、なんか時間たつたら腹立ってきたのよね。こんな子どもみたいな奴に振られたらと思うと」

「いつもの優しいレナスさんじゃない！」

「幻想をぶち壊すようで悪いが、こいつはこういう奴だ」

ヒューズの後ろに隠れたまま、アルベールはうなだれる。

「それでえ、このアレッシアちゃんにどんなご用かしら？」

そのまま隠れているわけにもいかず、アルベールは事の次第をおっかなびっくり話し出す。

「うーん、恋を壊す妖精の所為だとしたら私も気付くと思うのよねえ」

腐っかけていても妖精の血を引くアレッシオは、どんな妖精の姿をも見ることが出来る。

だが春の妖精以外の妖精を、最近見た記憶はないと言うのだ。

「それにね、恋を壊す妖精の粉つて一匹から少量しか取れないのよ」

「でも、それしか心当たりが無くて」

アルベールの言葉に、ヒューズは彼が持ってきた調査書に目を通す。

「妖精術の学舎か……どこもそれなりに警備魔法は嚴重なはずなん

だが」

「でも妖精が次々消えているんです」  
それも現場には妙な点があるのだ。

普通の窃盗ならばオリが壊されていたりもするが、飼育員が離れている間に、中の妖精だけがすっかり消えていたらしい。その上鍵を持ち去られた形跡ももちろん無いという。

「とりあえず、市街を巡回する騎士には妖精探知機もたせましょうか。復活祭までこのまま放置するのも気味が悪いし」

レナスの言葉に、ヒューズも頷く。

「アタシも、春の妖精さんたちにお話聞いてみるわ。あの子達、街の至る所を飛び回ってるし」

お願いしますとアルベルが頭を下げると、アレツシアがウインクを返す。

「お礼は、デート一回だからね」

「デート！」

「王子様なら、良いお店知ってるでしょう？」

甘い声音で誘われ、アルベルは再びヒューズの後ろに隠れた。

「こんなんで大丈夫かよ」

怯える王子を庇いながら、ヒューズはもう一度調査書に目を落とす。

正直、アルベルが作ったと思われるお世辞にも良くできた報告書ではなかった。

情報には穴が多く、そもそも調書としての作法が何一つ守られていない。

その上、無駄な修飾語ばかりが並んでいるので、一瞬恋文を読んでいるのかとヒューズが錯覚したほどだ。

だが彼が追いかけている事件は、ただの窃盗事件でも、痴話喧嘩の連鎖でも無いと、ヒューズは予感していた。

「ちよつくら、これ借りるぞ」

くつつくアルベルを引きはがし、ヒューズは調査書を手に救護

室を後にした。

## Episode 02 - 2 不運を呼ぶガリレオ騎士団の懐事情

「おお友よ！ 良いところにきた！」

調査書をコピーしようとして、騎士団の玄関横にある事務室にヒューズが顔を出したのと、ヴィートとキアラが騎士団に帰ってきたのはほぼ同時だった。

コピーを待っているヒューズに縋り付いたのはヴィート。今日は良く王子に抱きつかれる日だと、ヴィートの正体を知るヒューズはウンザリする。

こう言うときほど、事務室にしかコピー機のないガリレオ騎士団の貧困ぶりを呪わずにはられない。

基本的にガリレオ騎士団はヴィートのポケットマネーと、彼と親交のある貴族からの資金援助だけで成り立っている。

それ故廊下には常に「節約」の標語がはられ、経費の申請も必要最低限の物しか受理されない。

もちろん任務に使う装備、剣や武具も殆どがガラハド騎士団からの払い下げ品。それ故殆どの騎士は、装備に関しては自腹を切っている。

そんな騎士団に、コピー機のような機械用品が充実しているわけもない。

最近では魔科学も進歩し、日常生活や事務作業を豊かで便利にする機械製品は増えてきた。

それはもちろん値段がリーズナブルだから。

だがしかし、安いと言っても隊室ごとにコピー機を設置するような予算がある訳もない。それ故コピー機は事務室にある一台きり。

食料を保管する冷蔵庫ですら、各階に一個なので常に中身は一杯だ。その上ヒューズの第5小隊は第4小隊と同じ階。気がつけば冷蔵庫には「女子専用」というレナス直筆の張り紙がされ、第5小隊の男達は飲み物すら入れさせて貰えない。

今日こそはヴィートに直訴しよう、とヒューズは縋り付く上司に目を向ける。

がしかし、ヴィートは話を聞くどころか娘から受けた虐待について一方的にまくし立てている。

「じゃあ、後は任せましたから」

清々した顔でヴィートを置いて去っていくキアラ。

「で？ 結局怒られた原因は何だ？」

話を聞く気が無さそうなヴィートに仕方なく尋ねてやれば、ヴィートは驚いた顔をする

「なぜ私の方に非がある事になっている！」

だっていつものことだろうと返せば、ヴィートが年甲斐もなく凹んだ。

「最近、娘と上手くコミュニケーションが取れないのだ」

「昔からじえねえか」

「どうすればいいと思う？」

「とりあえずもう少しまともな大人になれ」

ヴィートを引きはがしながら、ヒューズはカウンターに出てきた事務室の女性からコピーを受け取る。

「ん？ また何か事件か？」

「ああ……」

軽く事情を説明すると、それまでおちゃらけていたヴィートが僅かに表情を変えた。

「お前さんが出るほどか？」

「わからん。だが他の隊は手一杯だし、レナスの所はこの手の話題にやあ向かない」

「だがある意味、恋愛してる奴は少ないから向いてるかも知れないぞ」

「俺だってフリーだろ」

「心は常に誰かさんの事でいっぱいなくせに」

アホかとつぶやいて、ヒューズは調査書をヴィートに押しつける。

「これアルベールに返しておいてくれ」

「騎士団長に雑用をさせる気か」

「たまには、弟に顔でも見せてやれよ」

そう言っつて本部を出て行くヒューズに苦笑しつつ、ヴィートはもう一度調査書に目を落とす。

「失恋の連鎖……か」

何か思うところがあつたのか、ヴィートの瞳に憂いが満ちた。

「妖精の仕業なら良いがな……」

もしそうでなければ面倒くさそうだな、と騎士団長らしからぬ発言をヴィートは続ける。

だがその目には、人々に信頼される騎士の真剣さが宿っていた。

## Episode 03 - 1 街に溢れる乙女の涙

復活祭を明日に控えた翌日の朝、アルベールが懸念していたようにフロレンティアの街には失恋の涙が溢れていた。

「どうだった？」

巡回から戻ったキアラが第4小隊の隊室に入ると、レナスが以下第4小隊の騎士達がキアラの言葉を待っている。

「どこもかしこも喧嘩ばかりです。良く行くバールの親父さんと女将さんまで、今日は口をきいてないみたいでした」

「やっぱりか……」

そういうと、隊室の中央にレナスが市街地の地図を広げる。

「あと、スカラー通りのおじいちゃんのところも、昨日から奥さんと口聞いてないそうです」

街の人々と特に仲が良いキアラは。今朝からこうして馴染みの顔の家や店を巡っては、聞き込みを繰り返していた。

「女たらしのロレンツオのところも喧嘩してるのはいつものことだけど、ジオルジュさんの家もギクシャクしてたのには驚きました……」

あそこはおしどり夫婦だったのにと、隊士の一人がこぼす。

「若いカップルばかりじゃなく、老年夫婦までこれじゃあ、絶対何かあるわねえ」

とはいえ相変わらず妖精の姿は見えず、原因は分からないまだまだ場所から何か特定出来るかもと、分かる範囲で別れたり喧嘩をしているカップルや夫婦の住まいをこうして地図にかき込んでみたが、印は街中に散らばり関連性は見いだせない。

「くそお、ヒューズの調査を待つしかないかあ」

昨日から一人騎士団を出たまま帰ってこない同期の男の事を思い、レナスはため息をつく。

「そう言えば、話を聞いていて気になったことがいくつもあるんで

す

「確証はないが、事件に深く関わると思われる情報を、キアラは聞き込み先入手していた。」

「だがそれを告げようとしたとき、キアラと少し遅れて巡回に出ていた騎士の一人が、隊室に駆け込んでくる。」

「その手に持っていたのは今朝方発売されたゴシップ誌だ。」

「ヴェンセント様が……」

「続きを聞く前に、キアラがゴシップ誌を乱暴に奪った。」

「カラーで刷られた表紙には、ヴェンセントが美しい女性と深い口づけを交わしている写真が大きく取り上げられている。」

「黙ってそれを見つめるキアラから、今度はレナスが新聞を奪った。」

「……これもきつと、今回の事が原因だよ。だから気にするな」

「レナスは言ったが、キアラは何も言わぬまま、隊室を出て行く。」

「何かあったら連絡して！」

「隊士に声をかけると、レナスはキアラのあとを慌てて追いかけた。」

町中をずんずん歩いていくキアラを追いかけながら、レナスは持ってきてしまったゴシップ誌にもう一度目を走らせた。

写真に写った男はどこからどう見てもヴェインセントだった。この手の雑誌は記事のねつ造も多いが、そう言う場合はこんなはつきりした写真は載せない。

となればやはりこれは本人だ。しかしキアラのご執心な彼が、違う女に手を出すはずがないとレナスは確信している。

不気味なくらい本心が読み取れない背中に目を戻し、レナスはキアラにどう声をかけようかと思いを巡らせる。

そのとき、キアラの足が唐突に止まった。そこはゴシップ誌でヴェインセントの背後に写っていたバールである。

開店準備中のそこに、キアラは躊躇いもなく入った。何をするつもりかとレナスが尋ねようとした次の瞬間、キアラが剣を抜いた。

「ガリレオ騎士団だ！ 店の責任者をだせ！」

突然の抜刀に店員が息を呑む。もちろんレナスもだ。

「わ、私が店長です！」

奥から出てきた老年の男に、キアラが剣を向ける。

「昨日、ヴェインセント王子がここに着たか？」

「は…はい」

「一緒にいたのは誰だ！」

「き、貴族のご令嬢のようでした。お名前は存じませんが、今日も会うお約束をされていたようでした」

そうか。と短く答えて、キアラは抜き身の剣を持ったまま店を出て行った。

その一連の様子に、レナスは薄ら寒い物を覚える。

あれは、確実に怒っている。それも、今すぐヴェインセントとその

相手を斬り殺しそうなほど。

「お騒がせしました」

愛想笑いを浮かべつつ、レナスは耳に付けているイヤリング型の通信機の周波数を、ヒューズの通信機の物にあわせた。

Episode 03 - 3 魔の口づけに犯されて

「ヒューズ！私だ！」

痛いほど鼓膜を震わせる大きな声に、ヒューズはドウオモの側で耳を押さえた。

「もしかしくなくても、ヴィンセントとキアラか」

「読んだか」

見えないとは分かっていたが、手にしたゴシップ誌を軽く上げつつヒューズは肯定する。

「キアラがヴィンセントを殺しに行きそうなんだ、止めるのを手伝え」

「それよりこつちも分かったことがある」

「5秒で話せ」

無理だと分かっていたが、とりあえず口を開く。

「復活祭バスケットでつかう、山車の保管庫の周辺で不審な女が目撃されている」

「女？ 妖精じゃないのか？」

「だが怪しい点がいくつかある」

ヒューズが言葉を続けようとすると、5秒たったという鋭い声がある。

「話は聞く、だから急いでこつちに来い！」

「キアラなら、お前が説得しろよ」

「抜き身の剣を持っているんだぞ」

「お前だってもってるだろう」

「自慢じゃないが、剣術ではあの子に適わない」

ため息をつきつつ、ヒューズは目を閉じると静かに息を吸う。何かを探るように空を仰ぎ、そして彼は静かに息を吐き出した。

「……いま、ガリレオ通りか」

「見えたか」

ヒューズが口にしたのは川を越え、ガリレオ騎士団の更に東にある町はずれの通りだ。確かそこにヴィンセントの邸宅があった事を思い出し、彼は眉をひそめる。

「ここからだと時間が掛かる、頑張れ」

「とんでこい！」

また無理難題をと思いつつ、ヒューズは目を開けようとした。

そのとき、甘い花の香りが彼の鼻孔をくすぐる。

慌てて目を開けようとしたヒューズの頬に、冷たい女の手が触れた。

それをはね除け、彼は目を見開いた。

目の前にいたのは女だった。黒く長い髪には虫類を思わせる瞳は、人と言うにはあまりに禍々しい。

「ヒューズ、どうした！」

通信機から響くレナスの声に、女が不気味な笑みを浮かべた。

「それがお前の女か？」

目の前の女は言った。だがそれは人の言葉ではなかった。

驚くヒューズの耳に女がもう一度指を走らせる。かちりと音がして通信機の電源が切られた。

抗いたいのヒューズの体は動かず、それどころか意識までもが遠のきつつあった。

「そうか、お前は私と同じモノか……」

女はそういうと、ヒューズの唇に自らの舌をはわせた。そのまま口の中へと押し入ってくる女の舌を追い出そうとするが、絡められた舌は麻痺したように動かない。

「同族のニオイを嗅ぎ取ったその鼻はやかいだ……。ならばその心、犯してやるう」

離された唇から三度漏れた言葉は冷たく、しかしそれを聞くヒューズの目は虚空を見つめるばかりだった。

Episode 04 - 1 確かめるために

キアラがヴィンセントの家を訪れたのは、これがはじめてだった。ヴィンセントの邸宅は街の南東、フロレンティアの街を一望出来るミケランジェロ広場の近くにある小高い丘の上であり、その周りには貴族達の屋敷が並んでいる。

以前とある貴族を護衛したとき、その令嬢がここがヴィンセント様の屋敷だと話していた記憶を頼りにたどり着いたそこは、記憶の中の物よりも立派で大きかった。

門は閉まっていたが、乗り越えられない高さではない。

ベルを鳴らすつもりなど端から無いキアラは、軽い身のこなしでそれを上り始めた。

「ちよつと、いいかげんにしなさい！」

彼女の後に付いてきたレナスが慌てて腕を伸ばしたが、既にキアラは門を登り切った後である。

「怒るのも動揺するのも無理ないけど、冷静になりなさい！ あなたは騎士でしょう！」

レナスの言葉に、一瞬キアラの動きが止まる。

だが彼女は、すぐに門の向こうへと体を向けた。

「……確かめたいんです」

屋敷の内側に着地をした後、キアラがそう呟いた。

「彼だったら、それが出来るから」

「どういう意味よ！」

「10分たって出てこなかったら来てください」

それだけ言うと、キアラは屋敷へと駆けだした。

不用心な事に屋敷に鍵は掛かっていなかった。

広い、しかし驚くほど何も無い玄関ホールにキアラは少しだけ息

を呑む。

これほどの広さの家ならば使用人の一人や二人いても良いようだが、その気配はない。

ヴァンパイアであると告げた時の少し寂しそうな横顔を思い出し、ヴィンセントは身近に人をおきたくないのかも知れないと、キアラは思う。

それから彼女は、1階から順番に部屋を開けていく。

応接室や食堂に人影はなく、続いて2階へと足を踏み入れたとき、女のあえぎ声を彼女は聞いた。

声の位置から部屋の場所はすぐに分かった。

だが扉を開けたくないという思いに、腕が震える。けれどキアラは、全て覚悟をした上でここに着たはずだ。

剣に手をかけながら、キアラは扉を開ける。

ベッドが置かれているだけの寝室はカーテンが閉められ、深い闇に閉ざされていた。

その奥で、女性のあえぎ声が小さな悲鳴に変わった。

音を頼りに室内に踏み込めば、ヴィンセントがドレス姿の女を組み伏せているところだった。

女は目隠しをされているので気付いていないが、ヴィンセントの瞳は獣のように残忍な目をしていた。

「やっぱり」

そうつぶやいたキアラに、ヴィンセントが顔を上げた。

市内を巡回し、情報を集めていたキアラはある話を聞いていた。

仲が悪くなった男女は、必ず男性側に非がある事。そしてその非とは、恋人以外にキスや性交渉を迫ったという事だった。

『突然頭がぼーっとして、次の瞬間には女房に殴られてた。目の前には知らない女が裸でいるし、もう何がなんだかさっぱりわからねえ』

そう言っとうなだれていた馴染みのバールの店長を思い出し、キアラはきつく拳を握りしめる。

「邪魔をするな」

いつもはキアラに甘い言葉をささやいてくれる声が、今日は冷たくキアラを突き放す。

予想以上に痛いなおもいつつも、キアラは既に腕を振り上げていた。

右頬に一発。こちらの腕がしびれるような一撃を、キアラは最愛の男に向けて放つ。

ヴィンセントの体が女から退き、キアラが女を無理矢理引き起こした。

目隠しを取れば、女は驚いた顔でキアラを見上げる。

「殴られたくなかったら、今すぐ出て行って」

キアラの射るような眼差しに、女は脱いだ靴も忘れてその場から逃げ出す。

女が去ったのを見届けた後、キアラは倒れたまま動かないヴィンセントに近寄った。

側に膝をつき、彼の顔をのぞき込む。

さすがに死んではない。だが呼吸が酷く浅かった。

そしてなにより、唇から覗く長い牙が異彩を放っている。

「ヴィンセント」

耳元で名前を呼べば、僅かだが彼の目が開いた。

声はない。だが口の動きで、彼が自分の名を呼んだ事は分かる。

「私に分かりますか？」

うなずき、それからヴィンセントはキアラの頬に指を走らせる。

「俺は…何をした…」

「欲望に任せて、吸血行為を行おうとしていたようです」

そう言っただけキアラは握りしめたままの拳を開く。

「だから、殴りました」

体を起こしながら、ヴィンセントはキアラの赤く腫れた掌に目を落とす。

「……酷いな」

「すみません、ちょっと本気を出しました」

「そこは謝るところではない。それよりすぐに冷やさないと」

言ってヴェンセントが立ち上がったとき、破壊音と剣劇が一階の玄關ホールの方から響いた。

そして続いた悲鳴は、レナスの物だった。

「行こう」

お互いの腕を支えに、二人は立ち上がった。

## Episode 04 - 2 異形の者達

肩に走る熱と血のにおいで、レナスは右腕が使い物にならなくなったのを悟った。

剣を左腕に持ち替え、彼女は目の前に立つ異形の化け物を見上げる。

「隊長！」

部下の声に視線を走らせれば、吹き抜けになった2階の廊下にキアラとヴィンセントが立っていた。

「これは……」

息を呑んだのはキアラ。だがヴィンセントは異形の赤い瞳に見覚えがあった。

「ヒューズ隊長か」

人の姿に酷似していながら、それには禍々しい黒き闇を纏った翼と角、そして鋭い爪を有していた。

どことなく竜をも思わせる鱗の肌はまさしく異形。だがその体躯と、レナスを見下ろす顔にはヒューズの面影がある。

変わり果てたヒューズの姿に、キアラは息を呑み、ヴィンセントはきつく剣を握った。

「何故こんな姿に……」

キアラの言葉にレナスは首を振る。

「これがこいつなの。だけど……」

レナスを見つめる瞳は先ほどのヴィンセントがそれ以上に冷たく、そして殺意に満ちていた。

「ヴィンセント様の時と同じでしょうか」

「君は、俺を殴って戻したのか？」

「はい、それで目が覚めたと聞いたので……」

キアラの言葉にヴィンセントが剣を片手にヒューズの背後に飛び降りる。

そしてそのまま、彼ヒューズの懐に入り、僅かに面影が残るその顔に拳をたたき込んだ。

だがその直後、ヒューズの爪がヴィンセントの肩を貫いた。激痛でうめくヴィンセントから爪を引き抜き、その体を壁へと叩き付けるヒューズ。

彼の意識は、まだ戻らない。

「ヴィンセント様の際は上手くいったのに」

倒れたヴィンセントにもう一度ねらいを定めるヒューズを見つめ、キアラは必死に頭を働かせる。

先ほどと何が違う。考えろ、考えろ。

猛襲した爪を避けながら苦痛にうめくヴィンセントの姿は、キアラの思考は何度も中断させる。

だが糸口は自分の中にあるはずだった。

異形と化していたが、レナスはそれを知っている様子。ならばヒューズにかかっているのは意識を奪う、あるいは操る魔法のみのハズだ。

同じ系統の魔法、そして同じ術者によってかけられた魔法ならば解除の方法は同じハズ。

だが同じ衝撃で彼は目覚めない。

ヴィンセントの時、ヒューズの時、そしてバールの店長の話をもう一度思い返し、そして、彼女は気付く。

「逃げてくださいヴィンセント様！ その魔法は私達じゃ解けない！」

「どういう意味だ！」

「意識を戻せるのは、恋人だけなんです。好きな相手じゃないと、きつと届かない！」

ヴィンセントはヒューズの攻撃を避けながら、レナスに視線を走らせた。

「なら大丈夫だ」

ヴィンセントの視線にたじろいだのはレナスだ。

「何で私が！」

「少なくとも俺やキアラよりは近い存在だろう！ 試してみる価値はある！」

嫌だと言おうとしたが、レナスはヒューズの姿を見て思いとどまる。

彼女は思い出したのだ、始めてこの姿を見たときのことを。

レナスはまだ幼い子どもだった。だから恐ろしくなかったと言えば嘘になる。だが、それよりも鮮明に焼き付いているのは自らの姿を悲観するヒューズの悲しげな瞳だった。

「でもそうね、私の拳なら覚えてるかも知れない」

もしあいつをひっぱたくとしたら、自分しかない。

邪魔になる剣を投げ捨て、レナスはヒューズの側へと駆ける。

爪を振り上げヒューズが吼える。だが、その腕が不自然に止まった。

まるでレナスを傷つけまいと、彼の心が魔法に抵抗しているようであった。

「目を覚ませ、この阿呆！」

渾身の一撃をたたき込めば、ヒューズの体がのけぞる。

「もう一発！」

さらにもう一撃。

そしてもう一度腕を引き、更にもう一撃喰らわそうとしていたレナスの腕を、ヒューズの掌が止めた。

「一発で十分だったの……」

姿は異形のままだが、零れたその声はいつもの彼の物だった。

「ヒューズ！」

力無く崩れ落ちた体を抱きかかえれば、ヒューズの声が苦痛に震える。

「待つてる、押さえ……こむ」

レナスの腕の中で、ヒューズの体は次第に人のそれへと戻っていた。

変化に伴い破れた衣服までは戻らないが、翼も角も体の内へと消えていく。

「あんまり心配かけないでよ」

「悪い」

まだ荒い息づかいのヒューズを支えながら、レナスはヴィンセントにありがとうと礼を言う。

「あんたのこと、少し見くびってた」

気がつけばヴィンセントの傍らに立っていたキアラが、レナスの言葉に小首をかしげる。

「惚れた男を殴りに行くなんて、ちゃんと彼女の自覚があるんじゃない」

レナスの言葉にキアラは真っ赤になって、違う、誤解だと騒ぎ出す。

それを見守るヴィンセントの表情は甘く、それを見ているとつらやましいとまで感じた。

「そりゃあ一人だけ生き残るはずだわ」

レナスのつぶやきが聞こえていたのは、ヒューズだけのようだった。

## Episode 05 - 1 二人の絆

普通の病院にかかれぬヴィンセントとヒューズを連れて、キアラ達が戻ってきたのはガリレオ騎士団の救護室だった。

二人の治療を担当したのはアレッシオ。二人に関してともヴィートが事前に話を付けていたため、傷の治りが異常に速い彼らを見てモアレッシオが慌てる事はなかった。

それに正直、二人の怪我は軽い方である。

「あらやだあ、これ折れてるわよお」

とアレッシオが突っついていているのはキアラとレナスの掌である。

「骨が折る勢いで殴られたのか…」

「お前は一発だけだろ。俺なんて二発だ」

ギプスを撒かれている第4小隊の隊長と副隊長に、殴られた男達はそうこぼす。

「助けてあげたんだから文句言わないでよ!!」

「あそこで殺しておけば、俺の人生安泰だったのかもなあ」

「何それ! 信じらんない!」

と、ヒューズにつかみかかろうとしてレナスは痛みにつめく。

「あんたは肩も怪我してるんだから」

「こんなのすぐ治る!」

「あんたにはそんな機能ないから、ほらほらヒューズと交代して無理矢理寝かせられ、レナスは更に不機嫌になる。

その傍らに、そつと寄り添ったのはヒューズだ。

「悪かった…」

彼女だけに聞こえたささやきは深い後悔に満ちていた。だからこそ、レナスはもう一度彼の頬を殴り飛ばした

「痛い!」

「俺の台詞だったの」

「……今ので、おあいこだから」

不器用な、しかし彼女の拳に、気にするなという思いが込められていることにヒューズは気付く。

それでも後ろめたさがぬぐえない彼に、レナスは苛立ち、言葉を重ねた。

「今のは肩の傷のぶんだから！」

そこでようやくヒューズが苦笑する。

「むしろ増えたぞ一発」

「残りは、私の腕が使えない間の分」

「1回は免除されるのか」

「殴られるような事しないでよ」

「お前が静かに寝ててくれりゃあ、何もしないしおきない」

どういう意味だと喚くレナスをなだめるヒューズ。

二人のやり取りに、それを眺めていたキアラはほっとする。

「もう、いつも通りだ」

思わず零れた言葉に、側のヴァインセントも微笑む。

「全部含めて、認め合ってるんだな」

「なんか、ヒューズさんに適わない理由が分かりました」

ヒューズは全てをさらけ出して、その上でレナスの側にいるのだろう。キアラがヒューズの姿に恐怖を抱いたときも、レナスはまっすぐに彼を見ていた。

危機は感じていてもあのときのレナスに恐怖はなかった。必ず彼が戻ると、きつとレナスは信じていたのだ。

不安で頭がいつぱいだった自分とはまるで違う、まっすぐな信頼。それを間近で見て、キアラの胸に今更のように後悔に押し寄せた。

無言で立ち上がり、キアラは素早く部屋を出て行く。

「ここは、追いかけるところだぞ」

「言われなくても」

まだ少し痛む肩をおさえつつ、ヴィートのつぶやきにヴァインセントは苦笑いを返した。

Episode 05 - 1 二人の絆（後書き）

8 / 3 誤字修正致しました。 (ご指摘ありがとうございました)

## Episode 05 - 2 それは恋の証

「後悔するのは、俺の方だと思っただけど」

救護室の側にある階段の裏、物置として使われている暗がりには、キアラはしゃがみ込んでいた。そしてヴィンセントの気配に、彼女は慌てて彼に背を向ける。

「悪かった、本当に」

キアラの横に腰を下ろすと、今度は膝に顔を埋める。

「謝らないでください。余計に惨めになります」

「そうだな、いくら理由があっても許される事じゃない」

「そうじゃない！」とキアラは掠れた声でヴィンセントの言葉を遮った。

「状況を考えればあなたに非がないのは一目瞭然だったんです。でもゴシップ誌を見たら頭は真っ白になるし、目の奥は熱いし胸は苦しいし、もう何がなんだか分からなくなってる」

気がついたら本部を飛び出していた。

「報告も相談も連絡も全部とんじやったし、目のさまし方も気付いてたのに隊長にも告げなかったし、騎士として色々失格な事したし」  
数え始めたら自分の醜態はきりが無い。

そしてなにより、非がないと分かっていたのに、女と共に部屋にいたヴィンセントを見て、頭に血が上がった。

「何もかも上手くできなかつたし、ヴィンセント様の事信じられなかった」

そう言って泣き出す少女に、ヴィンセントはぐっと歯をかみしめる。

拗れるのは分かっていた。だが、これは…

「お前は、可愛すぎる」

思わずこぼすと、涙で濡れた頬を真っ赤に染めてキアラがヴィンセントを睨む。

「そう言うとき、仕事が二の次になるのはよくあることだ」

「だけど、本当に何も考えられなくなっちゃったんです！」

「それだけ俺を好きって事だ」

何でそんな事を自分の口から言わねばならないのかと、さすがの  
ヴィンセントも若干恥ずかしく思う。 だがおかげで、キアラは今  
更のように自覚したようだった。

「理由があつたって、お前が違う誰かとキスしたら俺はその男を殺  
せる自信がある」

「ヴィートでも？」

それは微妙に違うが、正直ヴィート相手でも嬉しくないと正直に  
告げれば、キアラは嬉しそうに笑い、それからそんな自分に気付い  
てまた赤くなる。

「だからお前は、そんな事態に陥った俺を怒る資格がある。むしろ  
怒れ」

「だけど……」

「正直泣かれるのはきつい。それも俺に非があるのに」

注意をするとアルベルに約束した。にもかかわらずあっけなく  
魔法にかかった事を思い出し、ヴィンセントは頭を抱える。

「でも、それだけじゃないんです……」

「まだ何かあるのか？」

「橋の上でヴィンセント様が女の子に囲まれたのを見たときも、殴  
りたいて思いました」

正義の騎士が怒りに溺れるなんてと、再び泣き出すキアラにヴィ  
ンセントは彼女の体を抱き寄せる。

「君は、本当に恋を知らないんだな」

「悪かったですね」

「とりあえず怒るのか泣くのかはつきりしろ」

「好きでやってるわけじゃありません。もうわけがわからないんで  
す」

それほどまで彼女は追いつめられていたのだろう。いつもは冷静

なキアラが、涙も感情も止められないのだ。

「本当に悪かった」

自分の感情に混乱する、恋に不慣れな恋人の体を抱きかかえ、ヴィンセントは彼女を膝の上に載せる。

「重いですよ」

筋肉ついてるから、と赤くなるキアラにヴィンセントは苦笑した。

「そこも含めて好きだから」

更に赤くなったキアラが逃げ出す前に、ヴィンセントは彼女の唇を奪う。

口づけは長く、しかしキアラは拒めなかった。

## Episode 05 - 3 人心を惑わすもの

キアラの涙が止まるのを見計らって救護室に戻ると、先ほどの面子の中にアルベールが増えていた。

「どうやらヴィートが事件の担当者である彼を呼んだらしい。」

彼を含め、キアラ、ヒューズ、ヴィンセントはそれぞれの情報を開示する。

「蛇の目の女か……」

そうつぶやいたのはヴィート。含みのある言い方に、一同は彼を注視する。

「昔似たような女を見た記憶がある。つっても20年も前の事だが」その当時はここまで騒ぎにはならなかったが、事象は酷似しているという。

「そのとき、女は捕まったんですか？」

「ああ。だけど女は人じゃなかった」

変種の竜だったと、ヴィートは続ける。

人の心を操る竜。その竜は何故だか男ばかりを狙い、人心を惑わしていた。捕まえたのは当時のガラハド騎士団で、罪人といえど竜を罰するのは御法度だったため、北欧にある竜の保護区に彼女を預けたのだという。

「同種でしょうか」

「とりあえず、保護区に連絡して確認を取る。あとは、どうやって入り込んだかだな」

フロレンティア市街へ入るには、街を覆う守護魔法の切れ目を通るしかない。

切れ目は通称『門』と呼ばれ、そこには検問所が設置されている。治安維持と動植物保護のため、他国からの入国者はもちろん、国外に出国した者は必ず、パスポートと手荷物検査を行う必要がある。とはいえフロレンティアのような小国では検査も甘く、時折禁種

のドラゴンや妖精が入り込み、事件に発展する事もあるのも事実だ。  
「入国管理局の奴ら、金属探知器にひっかからねえもんはホイホイとおすからな」

「あいつ等が真面目に仕事してたら、あんただって引っかかるくせに」

とヒューズという言葉に突っ込んだのはレナス。

先ほどの姿を見ただけでは彼の正体はよく分からないが、少なくともヴィンセントと同じかそれ以上にまれな存在である事はキアラも気付いている。

とはいえ、もちろん詮索するつもりはない。危険があるならそもそもヴィートが騎士団に入れるとは思えないし。失礼な話だが、あのレナス隊長に付き合えるだけの理由が分かった気がしたのだ。

「お前、今俺の顔見て失礼なこと考えただろう」

とヒューズはキアラの考えを見抜いたようだが、それ以上言えばレナスの機嫌が悪くなるので二人とも先は続けなかった。

「とりあえず女どもは怪我もあるしここで待機、悪いがヴィンセントは保護区の方に向けあってくれ。確かお前、つてがあつたよな」  
「すぐに」

「あと、ヒューズは入国管理局の方だ」

ヒューズは黙って頷いた。

「アルベールはガラハドに戻ってこの事を伝える。それから、竜への警戒と魔法の解除方法を国民に伝えるよう上を説得しろ」

「できるな？　と言われてアルベールは自慢の笑顔をむける。

「上を転がすなら、ヴィンより僕の方が得意だよ」

よし、と弟の頭を久方ぶりに撫回してから、ヴィートもまた彼らと共に歩き出す。

部屋を出て行く男達に、残された女達と妖精は目を見合わせる。

「ちゃんと仕事してりゃあ、格好いいのにあのオヤジどもは」

レナスの言葉に、アレッシオがうっとりした顔で男達の背中を見つめる。

「アルベールちゃんも良いけど、ヴィンセントも格好いいわあ」

「だっ、だめです！ ヴィンセント様は、だめです！」

と思わず怒鳴ったキアラに、アレッシオがにやりと笑う。

「安心しなさい、恋する男には手を出さない主義よ」

まあ手近なヒューズあたりを狙うわ、と今度はレナスに微笑みかければ彼女は今更のように折れた腕に目を落とす。

「あれは、たまたまよね」

ヒューズが自分を好いているなど想像が出来なくて。しかしもし違う女が彼を殴って止めたら腹がたつきもする。

「次で決めなきゃ本気で結婚やばいんだから、あんな男に構ってる暇ないわよ」

自分に言い聞かせるようにつぶやいて、レナスはベッドの上で大きく伸びをする。

本当は自分も出て行きたいが、足手まといになるのは目に見えている。

それにもしまたヒューズに何かあったら止めるのは自分だ。そのとき全力で拳を振り下ろせるように精進せねばと、レナスは休息を取るため目を閉じた。

## Episode 06 - 1 忌み嫌われる王子

恋人がおかしなそぶりを見せたら、殴って確かめましょう。

という珍妙な張り紙が街中に溢れた復活祭<sup>バスケフ</sup>当日、街は少しずつだが活気を取り戻しつつあった。

どんな事でも良い方向にとらえるフロレンティア人の気質のせい  
か、街中では女達が男達を殴る快音が響き、その行為が逆にお互いの絆を深めているようだった。

「ホント、たくましいねえ」

団長室から表の通りを見ていたヴィートは、ヴィンセント達からの報告書に目を通し、それから復活祭<sup>バスケフ</sup>のハイライトである、「スコツピオ・デル・カッロ」に参加するため、いつもは適当に結っている長い髪をオールバックに整える。

「よお色男」

鏡の中をのぞき込めば、そこには鋭い目の男が一人。騎士団の制服を脱ぎ、はやしっぱなしの髭を綺麗に剃れば、いつもより一回りは若く見える。

その上で値段ばかりが張る黒いスーツに身を包んだ彼は、人々から忌み嫌われる王子そのものだった。

人がいない隙について部屋を出、ヴィートは裏口からアルノ川へと続く通りへと繰り出した。

彼が向かうのは、ドウオモ前の広場。そこで彼の参加する祭はと  
り行われる。

「山車の爆発」の意味を持つスコツピオ・デル・カッロと言う儀式は、美しい装飾を施された山車を雄牛が引いていくパレードから始まる。

ドウオモ前の広場まで引かれた山車には大量の爆竹がつけられており、そこにフロレンティア王家の墓からまれに見つかる聖なる魔石から打ち出した火の粉を放つのだ。

魔石で扱うのは大聖堂の祭壇から放たれた春の妖精の役目。

妖精が上手く火を放ち、それによって山車に付けられた爆竹を派手に爆破させるのが祭のハイライトとなっている。

そしてこの爆竹の勢いによって山車にしかけられた小さな扉が開き、その中に入れた春と恋の妖精と共に魔石を持った妖精が祭壇に戻れば、今年は愛と実りに満ちた一年になると言われている。

だからこの爆破を間近で見れば恋が実ると言われ、多くの国民や観光客がこぞって広場に集まるのだ。

それだけの規模の祭であるから、国の代表である国王や王子達も、祭には参加するしきりになっていた。

とはいえヴィートが行けば祭が盛り下がる事は確実なので、普段は騎士団長として警護につく事が多い。

けれど今日ばかりはそうも行かない。お目当ての人物はきっと王子ヴィートを待っているのだ。

だから彼は人々に白い目を向けられるのを承知で、王子として大通りを闊歩している。

「今更何しにきた」

広場へと向かうためにヴェッキオ橋をわたっていると、いつもは気さくに声をかけてくれる老人が彼を睨んだ。

「今回の騒動、お前の所為じゃああるまいな」

老人の言葉を鼻で笑い、ヴィートはその場を歩き去る。

その言葉はあながち間違っではないが、ここで声を出せば耳の良い老人には自分の正体がばれる可能性がある。

ばれたくないと、思っている自分に今更気づき、ヴィートは思わず苦笑した。

隠しているつもりはなかった。

同一人物だと悟られたところで何も問題はないと彼は思い続けてきたはずだった。

しかし騎士団長として過ごす時間が長くなるに連れて、どうやら自分は今の立場を居心地が良いと感じていたらしい。

心のどこかでは全てを無かったことにして、やり直したいと思っ  
ていたのかもしれない。

だから今回のこれはきつと罰なのだ。

涙で濡れた愛娘の瞳を思い出し、ヴィートは人知れず拳をきつく  
握りしめた。

## Episode 06 - 2 20年前の事件

バスク  
復活祭の式典に出ているとばかり思っていたアルベールとヴィンセントが、第4小隊の隊室に駆け込んできたのは、おそろいのギプスをはめたキアラとレナスが待機しているときだった。

何事かと声をかければ、アルベールが古びた書類の束を二人に渡す。

「報告書なら今朝読んだわよ」

レナスが切り返したが、急いでいるのかヴィンセントは説明を始める。

「これは20前の事件の物だ。前にも同様の事件があったなら何か参考になるかと思ってガラハド騎士団の資料室を漁っていたらこれが出てきた。それも観覧禁止の棚から」

ヴィンセントの説明を聞きながら、キアラが見つめていたのは、当時竜に惑わされた男性のリスト。

そしてそこに、ヴィートの名前があった。

昨日はどこか他人事のように語っていた。そしてそれに違和感を覚え、キアラは報告書に目を向ける。

表紙に赤い文字で観覧禁止と書かれていることから、それが表にはだせない事件だった事は容易に想像がつく。

それもたぶん秘密裏に処理されたたぐいの事件なのだ。

そういう事件の大半は、王家や国の歴史に関わる物で、報告書が残っている場合でも、そこに事件の詳細が書かれていることはほばない。

「気になって話を聞きにきたんだが、部屋にいないんだ」

ヴィンセントの言葉に、キアラが側にあつた剣を手を取ったのは無意識だった。

そのまま今にも駆け出しそうなキアラの腕を、ヴィンセントが慌てて掴む。

「放してください！ ヴイートを探さないと！」

振り返ったキアラの顔に浮かんでいたのは恐怖。

この手の感情をあまり表に出さない恋人が、始めて見せたその表情に驚きつつ、ヴィンセントは彼女を落ち着かせる。

「報告書には、魔法をかけたのは凶暴な竜だとあった。君一人では行かせられない」

「でももし……」

ヴィートに何かがあったらと訴えるキアラを、ヴィンセントが優しく抱きしめる。

「あの人はガリレオ騎士団の騎士団長だ。そう易々とやられはしない」

キアラを目を見つめ、ヴィンセントは微笑む。

「それに、こう言うときは恋人は上手く使え」

「助けてくれるんですか？」

「竜とヴァンパイア、どっちが勝つ方にかける？」

ヴィンセントのささやきに、ようやくキアラの顔に笑みが戻る。

「どうせなら、そこにいるの馬の骨も使いなさいよ」

レナスが進み出たのはタイミング良く隊室に顔を出したヒューズの前。

「誰が馬の骨だ」

頼りがいのある上官と恋人の姿に、キアラはようやく冷静さを取り戻す。

「すいません、取り乱しました」

「あなたの、そういう冷静に見えて熱いところは好きよ」

でももう少しお姉さん達を頼りなさいと微笑む上官に、キアラは少し照れながら敬礼を返した。

Episode 06 - 3 過去の清算と乙女の拳と

火薬のにおいと、花の香り。そして人々の歓声に、ヴィートは今年も無事、祭が成功に終わったを悟った。

それにホッと胸をなで下ろしていたとき、歡喜に沸く人々から少し離れた路地の奥、喜びとはほど遠い表情をたたえた女がこちらを見ていることにヴィートは気がついた。

「自分の思い通りにならなくて、残念だったな」

ヴィートの声に女は拗ねた表情を浮かべる。

「お前さんがすり替えた山車の中の妖精は、全部元の場所に返したぜ。恋を壊す妖精が飛び出したら、それこそ街中の女どもが泣くからな」

『泣けばいいのに』

「相変わらずすれてるねえ」

『あなたの所為でしょう』

そう言いつつ女は穏やかに微笑み、ヴィートの体を抱きしめた。

『あなたに会いたかったのよ、ずっと』

「何故こんな事をした」

『もちろんあなたに会う為よ』

そういつて、女は甘い息をヴィートに吹きかける。しかし、ヴィートの瞳は強い意志を宿したままだった。

「もう昔の俺じゃねえぞ」

女を引き離し、ヴィートは勝ち気な笑みを浮かべる。

「お前さんの色香と嫉妬の所為で、色々な女を泣かせたが。もう間違わないって決めたんでね」

『私はもう嫌い？』

大嫌いだ。

ヴィートは言い切った。

「俺はもう、クリスティーナー筋って決めたんでね」

ヴィートの口から零れたその名前に、女の目が怒りに染まる。

『あの女だけは許さない…あの女が、私からあなたを奪った』

「そもそも俺はお前の物じゃない。お前だって、俺を良いように操ったのは、誰かに言われたからだろう」

『はじめはそう。でも私はあなたを愛した、だからあなたに近づくと女を全て壊して狂わせてやりたかったの…』

「そのお陰で、俺は今じゃ非道な女たらした。勘弁して欲しいぜ」  
言っと、ヴィートは腰の剣を抜き放つ。

『私を殺すの？』

「女を殺すのは騎士道に反する。だが、簡単に捕まるつもりはないだろう？」

『そうね。今度は、私があなただを捕まえる』

女の微笑みが、邪悪に歪む。

同時に彼女の肌は鱗に覆われ、目はは虫類を思わせる不気味な物へと変わった。

肉と骨が砕ける音と共に、女は大蛇を思わせる巨大な竜へと変貌する。

騒ぎに気付き、街行く人々の間だから悲鳴がわき起こった。

「さがれ！」

人々を遠ざけようとヴィートが怒鳴った直後、彼の体に竜の尾が巻き付く。

ヴィートの体をきつく締め上げながら、竜は側の建物の壁を伝い、赤い瓦屋根へとのぼった。

『やっと、あなたを手に入れた！ 今度はもう、あの女もいない！ 歡喜に身を震わせる竜をヴィートはにらみつける。』

「お前みたいなブスが、俺の恋人になれると思うな！」

『そういう勝ち気なところを、私の毒で従順にさせるのがたまらなく快感なの』

鋭い牙がのぞく口をつり上げ、ヴィートに食らいつこうと竜は首をもたげる。

だがそのとき、ヴィートをとらえていた竜の尾に巨大な石弓が突き刺さった。

絶叫を上げて痛みに狂う竜。その隙に尾から抜け出したヴィートは、向かいの建物の屋根に立つアルベルに気がついた。

その後ろで、固定した石弓に矢をつがえているのはガリレオ騎士だ。

激痛に悶え、咆哮する竜。その頭上に、今度は矢の雨が降り注ぐ。「絶やすな、打ち続ける」

屋根の下から響くのはレナスの声だ。

「まったく、うちの部下は手荒な奴ばかりだ」

思わずヴィートが苦笑した直後、彼の側に黒い鎧に身を包んだ二人の騎士が駆け寄った。

「あんたがそう言う教育をしたんだろう」

黒い鎧と仮面、そして槍を手にした騎士に、ヴィートがうめく。

「対竜族用の特殊装備なんてもちだしやがって…。そりゃあ、ウチの騎士団一の高級品なんだぞ！」

ヴィートの台詞に仮面を僅かに押し上げ、彼に苦笑を向けたのはヒューズとヴィンセントだ。

そしてその間から、もう一人、騎士が姿を現す。

「安心してください。万が一傷つけた場合の修復費はこの二人が持ちますので」

誓約書も書かせました、と敬礼した騎士にヴィートが微笑む。

「…うちの娘は、俺に似て抜け目がないねえ」

そう言うヴィートを支えた騎士はもちろんキアラである。

「それであいつはどうしますか？」

「殺すな」

「じゃあ、捕獲をお願いします」

途端に、ヴィンセントとヒューズの肩が下がる。

「お前の彼女、ずいぶん簡単に言ってくれるじゃねえか」

「そう言うところが可愛いんですよ」

あなただつて無茶振りする女性の方が好みでしょうと続ければ、ヒューズがウンザリした顔で仮面を降ろす。

「いいからほら、そろそろ矢がつかます」

キアラの言葉に、ヒューズは槍を、ヴィンセントは剣を構える。

最初に動いたのはヴィンセントだ。人とは思えない跳躍で竜の背後に回り込むと、竜の気を引くためにその背に思い蹴りをたたき込んだ。

ヴィンセントを振り向く竜、その次の瞬間ヒューズの背に黒い羽根が現れる。

「ワイヤーを投げろ！」

言われるまでもなく、持っていた太い鉄のワイヤーの先端をヴィンセントはヒューズに投げる。

それを受け取ると同時に飛翔したヒューズは、牙を剥きだして吼える竜の頭を槍で受け流しつつ、その首にワイヤーを巻き付けた。

一方ヴィンセントの方も、暴れる竜の尾を華麗に避けながら竜の体にワイヤーを絡めていく。

身動きが取れなくなり暴れる竜。

だが観念する気はないのか、ワイヤーに締め付けながらも今度はヴィートに向かって突進した。

「…これくらいは許されるか」

と余裕の表情で剣を抜く父の姿に、キアラは回避はせず父の傍らに留まる。

ヴィートの武器は剣一本。だがそれが、竜の牙を押し止めた。

赤い瓦屋根が砕けるほどの衝撃。だがヴィートは竜を押しとどめ、それどころか竜の右の牙を剣で叩きおつた。

竜が絶叫し、そこで始めてヴィートはキアラを抱えて後退した。

「引き上げてください！」

ワイヤーを固定したヴィンセントが叫べば、ヒューズが手にしていたワイヤーの先端を腕に巻き付け空へと飛翔した。

そして彼は、人がいない広場の中心へと竜を投げ落とす。

轟音と共に地面に叩き付けられた竜は、そこでようやく動きを止めた。

念のため、ヒューズは竜の傍らに降り、息があるのを確認する。

「成功だ」

任務完了の合図に、周囲の騎士達から歓声が上がった。

屋根の上にはいたヴィートもそれにほっと息をつく。

だがしかし。

「ヴィート」

名を呼ばれると同時に、キアラがヴィートの頬を殴った。

「これは、お母さんの分ですから」

その言葉を残し、キアラは一人屋根を駆け下りていく。

「ヴェンセント君、今の一撃を彼氏の君はどう解釈する？」

「心配かけさせるなクソ親父って所でしょっか」

「言葉で言われるよりもきくな、これは」

かつて彼女の母親に貰った一撃を思い出し、ヴィートは頬をさすった。

**Episode 06 - 3 過去の清算と乙女の拳と（後書き）**

8 / 3 誤字修正致しました。 ( ) 指摘ありがとうございました

Episode 07 - 1 歪んだ愛と欲望の果てに

竜の捕獲と共に、フロレンティアの恋は例年の勢いを取り戻した。女性が男性を殴る恋は愛情を確かめる行為として浸透し、復活祭パスクワが終わった今日も恋の儀式のひとつとなっている。

一方今回の原因となった竜は、今度は南米にある研究施設に送られる事になった。

北欧の施設は警備が甘く、それにつけ込んだ竜が自慢の色香で監視員を誘惑し、脱走を図った事が分かったのだ。

その後復活祭パスクワのために入国した旅芸人とその動物に紛れて入国し、男の心を惑わせていたらしい。

「今度の施設は相当厳しいところだ、覚悟するんだな」

南米へと送られる前夜、竜の様子をうかがうため、ヴィートは騎士団の地下牢を訪れていた。

警備魔法や鉄格子だけでは、小さな蛇にも変身出来る竜を逃がしてしまうため、地下牢には強化ガラス製のオリが特別にあつらえられていた。

「もう来ないわ。あなたは好きだけど痛いのは嫌なの」

ヒューズとヴィンセントにやられたのが相当懲りたらしく、竜は折れた歯を悲しげにさする。

「お前さんもまっとうな恋をしるよ」

「無理よ。私は歪んだ愛と欲望の心しかないんだから」

「でも、俺には一途だったじゃねあか」

苦笑するヴィートに竜は苦笑を返す。

「うらやましかったの。私の本気の誘惑を解いたのは、あなたただけだったから」

ほんの少し悲しそうに笑って竜はヴィートを見上げる。

「でもあなただけじゃないわね。この国の人は恋に強すぎる」

だからもう来ない。そう言うてから、竜はもう一度ヴィートを見

つめる。

『本当は言うつもりはなかったけど特別に教えてあげる。私、本当は自分一人で逃げた訳じゃないの』

「どういうことだ？」

「ある人に言われたの、フロレンティアで男達を誘惑したらあなたに会わせてあげるって」

「そいつは誰だ」

『顔は分からない、声も覚えてない』

それでは相手を特定出来ないが、竜の言葉に偽りはないようだった。

意図的に竜を呼び寄せた人物。姿も理由も分からないが今回の事件の黒幕がいたことに、ヴィートの表情は険しくなる。

だが今ある情報では黒幕の特定は不可能だ。

「恩に着る」

ともかく今は事件が一段落したことでよしとしよう。

そう思い直し、ヴィートは竜の元を後にした。

団長室に戻ると、意外な人物がヴィートを待っていた。

「お前は何故俺の所に報告書を持ってくるんだ」

目の前に置かれた報告書と、ヴィートがそれを読むのを今か今かと待っているアルベールにヴィートは怪訝な顔をする。

「うちの騎士団長に提出したら、読む前から破って捨てられちゃったんです」

解決したのは実質ガリレオ騎士団であるし、あの竜の事に関しては口外出来ない事が多い。それを報告書として公の場に提出されれば、そりゃあ破棄したくもなる。

それはもちろんヴィートも同じだが、血の繋がった弟に羨望と期待に満ちた瞳を向けられては、読まないわけにはいかない。

「僕、最後まで報告書書いたのって初めてで。だから出来たら添削してください」

俺はお前の先生か！ と怒鳴りたいところだが、やはりこの笑顔には勝てない。

末の弟は甘やかされすぎだと昔はよく苦言したものだが、なるほど、理由はこれかと今更のように理解する。

「わかった、読んだ上でこちらの報告書と合わせて保管しておこう」  
ヴィートの言葉にアルベールは笑顔のまま部屋を出て行った。

そしてそれとは入れ違いに、今度はキアラが報告書を持ってやってくる。

「復活祭の事件に関しての報告書です。レナス隊長から、騎士団長に目を通して頂くようにとのことで、お持ちしました」

アルベールとは違う、私情を挟まぬ完璧な報告にヴィートは違う意味で落ち込んだ。

「あいつと性格が反対だったら、もっと可愛いのになあ」

「あいつとは？」

「いや、こつちの話」

報告書を受け取ってそれに目を通すヴィート。その前では、珍しくキアラが落ち着きのない様子で立っている。

「……聞きたい事があるんだったら言え」

今は二人きりだから良いぞと、応接用のソファアに座るように促せば、キアラはようやく口を開いた。

「20年前の事件について、もし私のような下級騎士にも開示出来る情報があれば、教えて頂きたいのですが」

あくまでかたい口調を突き通す愛娘に、ヴィートは思わず吹き出した。

「そこは、パーパの過去が知りたいなあ。って可愛く言うところだ」

ヴィートの言葉に、きまじめなキアラは言うべきか言わぬべきかを真面目に悩む。

「冗談だ、別にお前に隠すつもりはない」

報告書を手には、ヴィートはキアラの横へ席を移した。

20年前、そのころのフロレンティアの変革期の中にあつた。

現在のフロレンティアは、一元主義型議院内閣制をもつ民主主義の国である。国王の存在と歴史的景観から誤解されがちだが、立派な近代国家のひとつとして国際連合にも加盟している。

政治を行うのは国王ではなく、フロレンティア国民の投票によって選ばれた政治家達。

『国王は君臨すれども統治せず』

それが今のフロレンティアの王の意志である。

だが政治と議会が今の形になってまだ日は浅い。

元々フロレンティアは争いの少ない穏やかな国だが、それでも政界には権力と欲にまみれた黒い膿はあつた。

それを洗い出し、政治と議会を今の形にしたのが現国王でありヴィートの父親だった。

そしてヴィートもまた、父の考えに賛同し、彼の意志を継ぐつも

りだったのだ。

20年前までは…。

「自分で言うのもあれだが、昔の俺はそれはもう立派で仕事の出来る若者でな」

キアラが嘘くさいとつぶやいたが、無視する事にする。

「そんな将来有望な若者を、蹴落としたい奴があこのころのプロレンティアには沢山いたんだ。そいつ等が使った嫌がらせのひとつ、それがあの竜さ」

政治にあまり詳しくないキアラのために、ヴィートはなるべく分かりやすい言葉を選んで重ねた。

「あのころは政界も転換期だったし、親父の周りには敵がゴロゴロいた。だから、立派な跡取り息子は邪魔だったんだろうな」

「暗殺とかもあつたんですか？」

「俺は若い頃から強かつたし、護衛達も選りすぐりの猛者達だったからな。その結果、殺せなくても、王子としての地位から引きずり降ろせばいいと思つた悪者さんたちの策略に、パーパは見事に引つかかつちやつたわけよ」

情けないと頭をかきつつ、ヴィートは自らを嘲笑する。

「そして悪者さん達は立派な王子様を墮落させ、自分の手駒として使いたい放題だ」

人心を惑わす竜や妖精の前に、ヴィートは為す術もなく負けたのだという。

「気がつけば墮落した王子として蔑まれるまで心を喰われていた。

我ながら酷い男だったなあ」

若気の至りではすまないほどに、と笑うヴィートをキアラは憂いを込めた目で見つめる。

あらためて、自分は父の一面しか知らなかったのだとキアラ自覚する。

今までにも聞く機会はあつた。しかしキアラは恐ろしくもあつたのだ。

騎士として尊敬する父と、王子として忌み嫌われる父。

もし王子の方が本当の姿だったらと、本当はずっと怯えていた。でもやはり理由はあったのだ。そしてそれは父にとっては不本意であると分かって、キアラはほっと胸をなで下ろす。

「今はもう全部終わった事だ」

キアラの不安をほどくように、ヴィートは彼女の頭を優しく撫でる。

「俺は正気に戻ったし、俺を酷い目に遭わせた奴らは全員ぶつつぶしたからな」

「じゃあ、今は全部元通りになったんですか？」

「さすがに失った名誉は回復出来ないけどな。真実を知った後でも、親父とはあんまり口きかねえし」

親父なりに気まずいみたいだ、と言うヴィートの言葉に。キアラは会った事のない祖父の事を思う。

「勘当しちまったもんは取り消せねえし、自分の息子を信じ切れなかったのが相当ショックみたいだ」

だから親父が凹みすぎねえように、もう少し放蕩息子でいるのだとヴィートは笑う。

「まあ実際、模範的な優等生よりこれくらいの方が楽しなあ」

「でも、誤解が解ける日はきますよ。今回の事だって、竜を退治したのはヴィート王子だって言ってる人はいるし」

「正確には俺の優秀な部下と、息子になる予定の男だが」

ヴィートの言葉に、真つ赤になるキアラ。

「そつえば、今日は復活祭パスクワの休日だろう。デートでも行ったらどうだ？」

「騎士団に休日はありません」

「つーかおまえ、その腕じゃ内勤しかできないだろう」

「でもレナス隊長も仕事してるし」

「アホか」

報告書でキアラの頭を軽く叩くと、ヴィートは騎士団長として命

令する。

「レナス」マクスウェル第四小隊隊長、及びキアラサヴィーナ第四小隊副隊長に本日より1週間の休暇を言い渡す！」

思わず立ち上がり、キアラは敬礼をした。

「上出来だ」

後もう少し、女の子らしくしてくれたら更に上出来だと続けると、愛娘は真っ赤になってそっぽを向いた。

「色々と教えてくれたお礼に、たまにはお昼ご飯でもって思ったのに」

「おい！ そう言うことは早く言え！」

「でももう良いです」

「まった！ ちょっとまで、今予定を確認する！」

と言いつつ、ヴィートは素早くスケジュールの書かれた手帳を開き、そしてびつちりうまった予定の上から『キアラちゃんとランチ』と大きく書き加えた。

「もう、飲み過ぎですよ…」  
ぐったりしている父親を支えながら、キアラは夕暮れの街を歩いていた。

昼間だというのに娘とのランチに気をよくしたヴィートはワインをラッパ飲みし、そして見事にぶっ倒れたのである。

まだ仕事があるだろうに、とは思いがヴィートには優秀な副官も多い。ヴィートが酔いつぶれて帰ってくるのも想定し、既に誰かが仕事を肩代わりしている気もする。

「悪い事しちゃったかな…クラリツサさんとか、怒ってないかな」  
父の優秀な秘書官を思い出し、キアラはうめく。とはいえ、たまには付き合っただけの事とは言われていたのも確かだ。娘にあしらわれると、その日一日ずっとぐちぐち文句を言っているという話は、耳にタコである。

「うう」

口を押さえて唸る父の姿に、キアラは少し遠回りの道を選ぶ。アルノ川沿いの通りならば、風も通るので少しは気分が良くなるかも知れないと思ったのだ。

「み、水…」

川沿いの通りに出たところで、ヴィートが再びうめき出す。

しかたなくヴィートを道ばたに放り、キアラは先ほどのレストラで調達しておいた飲料水を放る。

「すみません」

「謝るくらいなら飲まないでください」

面目ないとうなだれながら、ヴィートはぐったりと倒れ込む。

しばらく放置した方が良さそうだと判断し、キアラは川沿いの堀に腰を下ろした。

アルノ川から望むフロレンティアの美しさに、キアラはほっと息

をつく。

特に夕日に染まるフロレンティアは、一日の中でもっとも美しい。ただでさえ鮮やかな瓦屋根が、燃えるような紅に彩られると、夜の到来を感じた人々が部屋のランプや街灯に、光の妖精を入れていく。

時折機嫌を損ねた妖精が、主の手から逃げ出し空を駆け、降り注ぐ粉は夕日を浴びてキラキラと輝く。

一日の終わり。

普通の街であれば、それはどこかもの悲しい物だけれど、フロレンティアでは夜の訪れこそが始まりだ。

授業を終えた学生達は今から遊びに出かけ、仕事終えた大人達は、仕事の愚痴を魚に酒を飲みに行く。そして多くの恋人達が、共に夜を過ごすために街へと繰り出していく時間。それがフロレンティアの黄昏時だ。

とはいえキアラには、恋人をデートに誘うような器用な真似が出来るはずもない。

ロマンティックな町並みに、今日だけは僅かな殺意を覚えながら、キアラはため息をついた。

その頭上を小さな妖精がきらりと横切った。祭で放たれたらしいその妖精は、春と恋の象徴である桃色の羽根を輝かせ、キアラにウインクする。

降りかかった妖精の粉は甘く、しかし自分の柄ではないと慌てて振り払えば、妖精はクスリと笑って飛び去っていく。

「妖精にまで馬鹿にされた……」

思わず零れたため息。だが空から視線を降ろせば、見たくない顔が向こうから近づいてくる。

それも、女に囲まれた状態で。

黄色い歓声が呼ぶのは、キアラの想い人の名前。それにウンザリしながらも、不意に昨日の口づけを思い出してしまい、キアラはグイートを転がしたままである事も忘れ、側の小道に駆け込んだ。

こんな真つ赤な顔を見られたら恥ずかしくて死ねる。  
むしろ今すぐ腰に差した剣で自らの腹を捌きたいところだが、この腕では無理だ。

とりあえずやり過ごそう。そうしよう。  
道に置かれたワインのタルの影に潜み、キアラはじつと息を潜める。

「それで隠れているつもりなら、君もまだまだだな」  
声が振ってきたのはキアラの頭上。見上げると、ヴィンセントの微笑みがそこにある。

「まあ、眼中にないよりは逃げられた方がマシか」

「気配は、殺したのに……」

「そう言うスキルは仕事中に使う物だ」

それにと、ヴィンセントはキアラの頭を軽く叩く。

「いくら気配を殺しても俺は君を見付けられる自信がある」  
わざわざ耳元で甘くささやくヴィンセントに、キアラは愛情よりも悪意を感じ、彼の体を突き飛ばしてその場から走り去ってしまった。

「お前の所為で、置いて行かれたじゃねえか」

「ヴィートさんが誘えって言ったんじゃないですか」

振り返れば、ヴィートがよろけながらもなんとか立っている。

「しかたねえ、罰としてお前これから俺と飲め！」

「何でそうなるんですか」

「飲みたいんだよお。久しぶりに騎士団長つばい事したら、おじさん疲れちったんだよお」

仕事したくないよおと呻く恋人の父親に苦笑しながらも、彼の事を放っておくことも出来ず、ヴィンセントはキアラに変わってヴィートの体を支えた。

「おーい、団長さんよおー」

そんなとき、ヴェッキオ才橋で宝石店を営む顔なじみの老人が側を通りかかる。

ドワーフ独特の短い足を必死に動かして駆け寄る彼に苦笑しながら、ヴィートはよおと声をかける。

「お取り込み中かい？」

「いんにゃ、これから飲みに行くところ」

言い切るヴィートにヴィンセントが苦笑したが、ヴィートは見ないふりだ。

「なら丁度いいや。今、女房に殴られた男どもが、酒場に集まってるんだ」

「哀れだねえ」

「ちよつくら、愚痴聞いてやってくれよ。仲直りはしてえんだが、きつかけがつかめない奴もいるみてえなんだよ」

「どうせロレンツオのおっさんとかだろう。あいつは普段から素行が悪いから」

「まあだからこそ、一言謝れば仲直りも簡単だと思うんだけどねえ」  
あいつなりに今回の事で懲りたんだろうと、老人は笑う。

「いつもの酒場だな」

「オレも、店を閉めたらすぐ行くから」

老人の言葉に、ヴィートはおう！ と元気に返事をする。

「キアラに怒られますよ」

「じゃあ、俺の変わりに王子様をご機嫌取ってくれよ」

王子という単語に、歩き出そうとしていた老人が、不自然に歩みを止めた。

それから彼は。今度はヴィンセントの方を向く。

「王子で思い出したが、お前さん他の王子とは親交があるかい？」

「ええ」

「なら、その駄目オヤジと同じ名前の王子さんに、謝っておいてくれねえかな。…竜退治の恩人に、俺はひでえこといつちまったんだ」

老人がつぶやくと、ヴィンセントよりも先にヴィートが口を開く。  
「安心しろ、そう言うのを気にする奴じゃねえ」

「お前と一緒にするなよ」

「いい年のオヤジは、みんなこんなもんさ」

明るく笑って、ヴィートはヴィンセントをせかした。

老人と別れ、ヴィートとヴィンセントは石畳のみちをゆっくりと歩く。

「今日は飲むぞお！」

「もう十分飲んでいるようですが」

「吐くまで飲むんだ！」

本当に駄目な大人だとヴィンセントは呆れる。

だが一方で、この人はこれくらいで良いのかも知れないとも思うのは、騎士団長として、そして王子して彼が振るった剣があまりにまっすぐだったのを見たせいかもしれない。

そんなことを考えていると、ヴィートがしゃっくりを上げつつ、どこか意地の悪い顔でヴィンセントを見上げた。

「ちなみにさっきのジジイの店。俺が嫁さんの結婚指輪を買った店な」

抜けているようで抜け目ないこの騎士団長には、まだまだ敵いそうもない。

今晩は長い夜になりそうだと覚悟をしつつ、ヴィンセントは恋人の父親を支えなおした。

男達の秘め事編【END】

「えー皆さん、今年もこの時間が訪れてしまいました」

<sup>バスケット</sup>復活祭を終えた三日後の朝。

巡回に出ている者を覗いた騎士達は、ガリレオ騎士団裏手にある騎士学校のグラウンドに集められた。

騎士達の前にマイク片手に立っているのは、騎士団長のヴィートである。

先ほどから彼の髪を、復活祭を終えた後もしつこく居座っている春の妖精が引つ張っているが、彼は苛つきながらも話を進める。

「ごらんの通り、復活祭<sup>バスケット</sup>が終わったというのに、このように春の妖精さんが街に溢れております。

春は楽しい！ 女の子も可愛い！ でも、いつまでも春気分ではいられません！」

そう言った直後、ヴィートは足下に置いてあった虫取り網を取り上げた。

「という事で、例年通り今年も皆さんには妖精取りをしてもらいます！」

ヴィートの言葉に、騎士達はウンザリしながら、回ってきた虫取り網と虫かごを装備する。

腰に剣を差した騎士がする格好ではないが、貧乏なガリレオ騎士団には妖精捕獲用の装備など高すぎて到底買えない。

それ故、毎年使われるのはディスカウントショップでまとめ買った、ちやちやな網とかごである。

「ちなみに今年は、他国の風習を取り入れようとか国王が馬鹿なことを言ったので、イースターバニーと言う兎さんも500匹ほど放たれてます。そちらも回収し、イースターバニーの貸し出し業者さんに返却してください」

500という数にウンザリしながら網とかごを片手に街へと出て

行く騎士達。

あまりに滑稽なそれは復活祭バスクワの裏名物、ガリレオ騎士団による『妖精捕獲大作戦』の始まりであった。

ShortEpisode01-0 右手に綱を左手に虫かごを(後書き)

こちらは、本編から少し外れたショートエピソード【騎士のお仕事編】です。

ギャグとラブコメ中心の、全五話構成となっております。

メインストーリーとリンクはしていますが、基本的にギャグですので(本編もギャグですが)、飛ばして頂いても構いません。

気に入ってくださった方は、どうぞお楽しみ下さいませ^^

## Short Episode 01 - 1 ドSの女王様と騎士団長

春が来たからと言って、妖精達が勝手に飛んでくる時代は今や過去の物。

世界の近代化によって、人間達が人生の大半を仕事に費やすようになったように、妖精達もまた自分たちの気分で季節を運んだりする時代は終わった。

「今年もお世話かけます」

団長室に戻ったヴィートに、そう言って頭を下げた小さな貴婦人は、春の妖精王プリマヴェエラであった。桃色のドレスを可愛らしい貴婦人に、女であれば妖精でもドラゴンでも基本的に大好きなヴィートはだらしなく笑う。

「今年はずいぶんと、元気の良い子達が多いようですね」

妖精に翻弄されている騎士達の姿を窓から眺めつつ、ヴィートは笑う。

「今年は新人が多いんです。丁度、5回前の春はベビータッシュで昔は自由に自分の魔法を乱用していた妖精達も、今は彼女のような力ある妖精に管理されている場合が殆どだ。

人と同じく、妖精達も仕事の効率化を求める時代。

力ある妖精達は人の社会を真似、統率と業務を効率化させるために妖精派遣会社を次々と設立している。

春には春の妖精を、夏には夏の妖精を、と言ったように世界の季節の移り変わりに合わせて、用途に応じた妖精を派遣するのが妖精派遣会社である。

季節以外でもお祭りや式典等、人間達から妖精を借りたいという要請があれば、彼女たちは場にあった妖精を派遣してくれる。

だがやはり相手は妖精。気分屋で扱い辛いところもあるため、今日のような事態に陥ることもしばしばだ。

「でもみんな、フロレンティアが本当に気に入ってしまったみたい

で」

「今年は、あなたが集合をかけても一人も集まりませんか」  
気に入った場所があると、そこに居座りたくなるのが妖精心とい  
うらしい。

明日には違う国で春の式典があると言い聞かせても、こうして集  
合しないことなどザラなのだという。

そしてそう言う場合、妖精達を集めるのは人間だ。

基本的に、派遣に対して妖精は金銭等の見返りを求めない。

そのかわり、今回のような集合の手助けをすることが契約内容と  
なっており、ステイツや英国のような大国では、妖精回収会社など  
も多くあるという。

そしてフロレンティアでその役目を負うのは、街の何でも屋とか  
しているガリレオ騎士団だ。

「まあ、みんな頑張ってくれますよ」

そう言ったヴィートは完全に他人事だ。

だが、そんなうまい話はない。

自身もカツフェを飲もうとヴィートがコップを手にした瞬間、腕  
をつつたキアラとヴィートの秘書官であるクラリッサが入ってくる。  
その二人の騎士はあまりに対照的だった。主に体のラインが。  
方々からまな板胸と称される小柄なキアラ、そして隊服の上から  
でもわかるほどのアップダウンが激しいセクシーな肉体と美貌を持  
つクラリッサ。

キアラはともかく、クラリッサは女好きのヴィートであれば思わ  
ず手を出してもおかしくない所だが、残念な事に彼女はヴィートの  
天敵であった。

「みんな？」

と人を殺しそうな顔でヴィートを睨んでいるキアラ。

その横でクラリッサがかけていた眼鏡を軽く押し上げれば、それ  
だけでヴィートが悲鳴を上げた。

キアラ以上の殺意、そしてヴィートに向けられた嘲笑はどこか残

酷な笑みにも見える。

「誰がサボって良いと言いました？」

ヒールの高いブーツをならしながらヴィートの側にすつと近寄るクラリツサ。

思わず逃げ出そうとしたヴィートの襟首をつかみ、彼女は彼の予定表がかき込まれた手帳を団長机に叩き付ける。

「今日は一日、あなたも妖精取りですから」

「あの、俺、今日はちよつと具合が…」

と言いつつを繋ごうとした直後、クラリツサの拳が、ヴィートの腹にめり込んだ。

グエツという嫌な声が出て、ヴィートは腰を折って悶え苦しむ。

しゃがみ込んだヴィートの頬にヒールをめり込ませ、クラリツサが美しい笑みに磨きをかけた。

「キアラさん、首輪」

キアラが手渡したのは、その名の通りの首輪である。それも鎖がついた。

それを慣れた手つきでヴィートの首に付け、クラリツサは鎖を強く引いた。

「行きますよ」

「ちよつとちよつと！ 何か今日はいつもよりサドツぷりに磨きが掛かっているぞ！」

「春を早く終わらせないとイケませんので」

「あ、もしかして男にフラれた？」

ヴィートの顔面に、ヒールがめり込んだ。

「騎士団長のことはお任せ下さい」

そう言って笑顔でヴィートを引きずっていくクラリツサ。騎士団で唯一ヴィートを意のままに操る彼女は、DSの女王の異名を取る美しい女騎士だった。

「かっこいい」

そして彼女は、キアラがレナスに続いて憧れている存在でもあつ

た。それも割と本気で。

ヴィートがようやくやる気を出した頃、ドウオモ近くの路地では騎士団の実力者二人が妖精集めに奮闘していた。

「ヒューズ、飛べ！」

割と無茶なことを言う相方にウンザリしながら、騎士団一の実力者は側のワイン樽を蹴って跳ぶ。

そのまま手の中で網の柄を回転させ、目にもとまらぬ早さで八字に虚空を斬れば、地面に着地したヒューズの網の中には妖精が3匹も入っていた。

どんなことでも楽しむ妖精は、捕まったことすら楽しいのか、ケラケラ笑いながら腹を抱えている。

「さすが」

網の中の妖精をさり気なく自分のかごに入れ、レナスはさも自分が手柄を得たように胸を張る。

「お前、さつきから本当に何もしてないな」

「だってこの腕だもん」

「そもそも休暇中だろうお前」

「部下達が頑張ってるのに、家にいるのも悪いかなあって」

「暇だったんだな」

凶星であったが肯定はせず、レナスはかごの中の妖精をのぞき込む。

「だいぶ一杯になってきたわね」

「騎士団に帰るやつがいたら預けるか」

そう言った直後、ヒューズの足下に白い兔がぴよんと跳ねる。

動いたのはレナス。

素早い足捌きで兔の行く手を阻むと、折れていない方の腕で兔を持ち上げる。

「何これ、凄く可愛い」

と言いながら兎を撫でるレナスに、ヒューズは思わず顔を背けた。  
「なに、似合わないっていいたいの？」

目ざとく気付いたレナスが膨れると、ヒューズは曖昧な言葉で「まかす。本当はその逆だが、勿論言えるわけがない。」

それがお気に召さないのか、レナスはヒューズの頭に無理矢理兎をのせた。

「ウサミミおやじ」

何歳児の発想だとこぼすヒューズ。その頭にしがみついた兎は意外に居心地が良いのか大人しくしている。

それを見て、レナスはもちろん爆笑である。

「どうせ似合わねえよ」

「それだけじゃなくて」

怪訝な顔で首をかしげれば、レナスがそつと耳打ちをする。

「このまま『アレ』に変身したら凄いシニールよね」

アレがなんだか予想して、ヒューズ色々な意味で頭が痛くなる。

「しないぞ」

「角の間だからウサミミ、見たいなあ」

本気ではないと信じたいが、期待を込められた視線にヒューズは唸る。

「人に見られたら困るだろう」

「いいじゃん、面白いし」

「そう言う問題じゃない」

言いながら視線が止まったのは、自分が傷つけたレナスの肩だ。

それにも目ざとく気付いたレナスは、兎とヒューズの頭を撫でる。

「あんたも引きずるわねえ」

「痛まないのか？」

「そんなにヤワじゃないわよ」

微笑むレナス。その頭上を、春の妖精が通り過ぎた。

「まだまだいるわねえ」

「エッグハントより難しいな」

「ヒューズも、子どもの頃そう言うことやったの？」

そう言えばその手の話をしたことがなかったと思い尋ねれば、彼は苦笑を重ねた。

「お前に付き合わされたのがはじめてだ。正直始めてやったとき、何故たまごを探さなければならぬのか謎だった」

「正直私もわかんない。昔の神様のお祭りだしね」

でも楽しいから好きよとレナスは笑う。

「あなたが教えてくれたステイツ式のも好き。イースターバスケット、アレ嬉しかったのよね」

ヒューズの国では、妖精よりも兔の存在の方が大きい。復活祭はイースターとよばれ、イースターの朝になると、イースターバニーが子ども達のためにイースターバスケットというかごに入ったお菓子を置いておいてくれるのだ。

クリスマスサンタクロースと同じく、子ども達はイースターバニーの贈り物を何より楽しみにする。ヒューズ自身は貰った記憶はないが、そう言う話があるならばレナスも喜ぶのではない、幼い彼女の為に夜のウチにこっそりバスケットを用意した物だ。

フロレンティアにも同様の風習があるが、兔の話やお菓子の入った可愛らしいバスケットをレナスは大変気に入っていた。

特に始めてもらった小さなバスケットは、今もレナスの部屋に大切に飾ってある。

「あんたと迎える春ももう何度目かしらね」

「そろそろ飽きたか？」

「飽きると思ってたけど」

改めて兎付のヒューズを見て、レナスは笑う。

「こんな便利なイースターバニー、簡単に手放せないわよ」

兎扱いにヒューズは不満そうな顔をしつつも、子どものように彼の手を引くレナスには抗えない。

「そうだ、久しぶりに頂戴よ」

「もうイースターは終わってただろう」

「今年はね、お菓子の変わりにお酒詰めて欲しいな」

「夢がないなお前」

「だって、週末また合コンだからお菓子は駄目なの」

また無駄な事と思ったが、言えば殴られるのはわかっている。

「今度は誰とだ？」

「ヴェネチア共和国から来てるビジネスマン」

アレツシオが見付けたのだと胸を張るレナス。どうやらまた、下らない見栄とネコをかぶって失敗しそうだなと思ったが、勿論これも言えるわけがない。

「そうだ、合コンの前に新しいドレス買いに行くから付き合ってよ」

「何で俺が」

財布目的か、と言おうとした直後、レナスがほんの少しだけ不本意そうにヒューズを見上げる。

「私は何着れば似合うのか、正直私よりあんたの方がわかってるって言うか」

「まあ、昔から見てるからな」

「この前はドレス選びで若干失敗したから、今度は外したくないのだから一番綺麗に見える奴選んで」

お願いと言うより脅迫に近いその口調に、ヒューズは頭の兔をレナスに渡す。

「今ここで、ウサミミやったら考えてやっても良い」

「仕返しが大人げない」

「大人げないのはどっちだ」

しぶしぶ頭に兔を載せ、レナスはヒューズを睨む。

「思ったより可愛くねえな」

骨が軋むほどの衝撃と共に、ヒューズの顎にレナスのアップパーが炸裂した。

「言い直しなさい」

「……可愛く見えてきました」

満足げに微笑み、レナスは頭の兔を撫でた。

ShortEpisode01 - 2 便利なウサミミと可愛くないウサミミ)後

6月16日 誤字修正しました。

昼を回り、気温が上がり始めたフロレンティアの街中では、至る所でぐったりと倒れ込むガリレオの騎士達が見受けられるようになった。

そんな彼らから妖精を回収し、一度本部に戻ったキアラは集まった妖精の数を数えていた。

任務開始から訳5時間。ざっと確認したところ、回収率は3分の一と言ったところだった。

今年も夜中まで掛かるなとうんざりしつつ、キアラも余っていた虫取り網とかごを手にする。

この腕だから回収だけで良いと言われているが、周りの疲労ぶりを見ていると楽をしているわけには行かないと思っただの。

本当は少し痛むが、まあ何とかなるだろうと騎士団本部を出た瞬間、キアラは持っていた網を取り落とした。

いつの間にか、入り口前には妖精が入った大量のかごが置かれていたのだ。

「ここで良かったか？」

聞き覚えのある声に驚いて顔を上げると、かごの向こうに立っていたのはヴィンセントだった。

「あの、これは？」

「今年も大変そうだったから巡回中に見付けた奴を持ってきた」

基本的に、ガラハド騎士団はこの手の雑用を嫌がる。そのため毎年ガリレオ騎士団に仕事を任せっきりで、手伝いなんて以ての外なのだ。……。

「ヴィンター、追加のも持ってきた」

そう言って馬車で乗り付けたのはヴィンセントの副官アルベールだ。

馬車の荷台には大量の妖精が入った瓶やかごの山。

「これ、どうしたんですか？」

「いつもいつも君の騎士団だけに任せるのは悪いと思ってたんだ。だから、ウチの隊くらいは協力させて貰うよ」

ヴィンセントの言葉にキアラが啞然としている横で、かごを抱えたアルベールが微笑みかける。

「実を言うと、これやってみたかったんだよね。正直こんな辛いと思わなかったけど」

「でも、アルベール様の手まで煩わせるわけには」

「兄さんも頑張ってるみたいだし、結構楽しいからかまわないよ」

そう言うと、妖精を手にアルベールは騎士団に入っていく。

鼻歌交じりに歩いていく彼は本当に楽しげで、それにつられて妖精達も歌っている。

「あいつの無駄に明るいオーラにつられるのか、結構妖精が寄ってくるんだよ。お陰で大量だ」

「でも、お忙しいのに」

「あいつと同じくみんな楽しんでやってるよ。俺の隊はアルベールみたいな奴が多いから」

そう言って妖精を抱えるヴィンセントに、キアラも慌ててかごを持つととする。

しかしそれをヴィンセントが笑顔で止めた。

「その腕で無理はしない方が良い」

「だけど、出来ることはしたいし」

「なら何匹いるか数えてくれ。意外に多く集まった所為で、まだ確認してないんだ」

先手を打たれ、キアラは頷くほかない。

いつもいつも、どうしてこの人は来て欲しいときに来てくれるんだらうと、キアラは思う。

そしてそう言うところがどうしようもなく好きなのだが、それを言葉にするのも態度に表すことも出来ないキアラは、何も言えぬまま彼の後を追う他ない。

「そうだ、数え終わったら昼でも食べに行かないか？」

「じ、時間が掛かるから先に行ってください」

「手伝う」

「私の仕事が無くなります。それにみんな働いているのに」

どんな時でもお昼休みは死守する騎士達でリストランテが大盛況なのは分かっていたが、やはりヴィンセントを前にすると素直に頷けないキアラだ。

けれどそれを見抜けないヴィンセントではない。

「じゃあ側のバーでパニーニを買ってくる。そうしたら作業しながら一緒に食べられるだろう」

今度もまた逃げ道を塞がれ、結局キアラは妖精が集められているグラウンドで彼と二人きりのランチをとることになった。

腕が使えないのを良いことに食べさせてやると言い出すヴィンセントに赤くなりながらも、最後には観念してしまふ。

この前のキス以来、ヴィンセントが少し大胆になっている気がしたが、それを拒む事がだんだん出来なくなっている気がする。

「これはまずい」

気がつけば、体が密着するほどの距離にいるヴィンセントに、キアラは眉間にしわを寄せている。彼氏の隣で浮かべる表情ではないが、ヴィンセントは慣れているのでそこは指摘しない。

「なにが？」

「何か、凄く恋人っぽいです」

「俺達恋人じゃないのか」

呆れ声に、キアラは呻く。

「仕事中なのに」

「休憩中だろう」

それに、仕事中でも恋人がと会えば駆け寄ってキスするのがフロレンティア人である。

これくらいスキンシップにも入らない。

「まあ、恥ずかしがるのも分かるけどな」

「恥ずかしくありません！」

思わず返してしまえば、直後に唇を奪われていた。  
軽い口づけだが、キアラの顔は真っ赤になる。

「嘘つくからだ」

「嘘だつて分かってるならやめてください！」

「チャンスは物にしないと、君にはなかなかキス出来ないからな」  
そう言うヴィンセントの横では、キアラが口を押さえて勢いよく  
後退する。

「とにかく、仕事中はキス禁止です！」

「仕事中じゃなきゃいいのか？」

揚げ足取りの名人に、キアラはついに肩を怒らせ立ち上がった。

「は、半径一メートル以内にも近づかないでください！」

「頑なだなあ」

「ドキドキして仕事にならないんです！」

そう言つて妖精の方へと逃げるキアラに、ヴィンセントは思わず  
微笑む。

最大の墓穴を掘ったことに、彼女はきつと気付いていない。

そしてそこがおかしくて、ヴィンセントは怒れる少女の背中を笑  
顔で眺めていた。

夜7時、グラウンドに集められた妖精達にプリマヴェエラが感激の声を上げる。そんな彼女に恭しく頭を垂れたのはヴィートだ。

「今年は助っ人もいたので、いつもより早く集まりましたよ」

「ありがとうございます」

プリマヴェエラはそう言うと、妖精達に目を向ける。

「さあ皆さん、次は更に北に向かいますよ。フロレンティアの皆さんにご挨拶なさい」

散々迷惑をかけたくせに、プリマヴェエラの一言に妖精達はあっけなくバイバイと手を振る。

騎士達は満身創痍だが、飛び立つ妖精達に手は振り返す。

「今年も終わったわね」

夜空に舞い上がる妖精の光を見つめながら、レナスが呟いた。そしてそれに、周りにいたキアラ達が同意する。

「さて、俺達は帰るか」

そう言ったのは助っ人で来ていたヴィンセント。

そこで彼はふと、自分の副官がないことに気付く。

「アルベールなら、イースターバニーを返しに行ったぞ」

ヴィンセントの視線に目ざとく気付き、声をかけたのはヒューズだった。

「じゃあ、これで今年の捕獲作戦もおしまいですね」

キアラの言葉にビールが飲みたいたいと言いだしたのはレナス。

彼女が酒の話題を口にするのと、それを聞いた人は必然的に付き合い合うことになるため、ヒューズが若干表情を曇らせた。

気がつけば他の騎士達も、それぞれ知人を誘ってはビールやリストランテに繰り出すところのようだった。

昼間あれだけの肉体労働を強いられたのだ、今夜は飲まねばやってられない。

それに今年はいつてもより時間もある。ならば飲まずして何をするのだと誰しもが思っていた。

だがそのとき、恐怖のハウリングがその場に響いた。

「えー、みなさーん」

かかったのはまさかの再集合。マイクを握っているのは勿論騎士団長のヴィートだ。

「えー、今連絡がありました」

悪いニュースだと誰もが分かっていた。

「なんでも、イースターバニーを載せた馬車が襲撃されたそうです。その結果バニー200匹が逃走、残り3百匹と御者を人質に、犯人がドウオモに立てこもっているそうです」

ということだと、ヴィートがわざとらしく咳払いをする。

「みなさん、今日も残業です」

事態の深刻さよりも、騎士達は怒りに震えた。

「アルベール、殺してやる」

なかでもレナスの怒りは恐ろしい。

「人質になるくらいなら死ね」

「おまえ、仮にも元彼を……」

「私に迷惑かけた奴は死刑、そういう決まりなの！」

レナスは網を捨て、剣を引き抜き声を張り上げた。

「キアラ、第4小隊を3分で集めて！」

了解ですと敬礼して、キアラは騎士達の中にさっと消えた。

「あの王子様は、本当に飽きねえな」

「面目ない」

うなだれるヴィンセントの肩を、ヒューズがねぎらうように叩く。

「まあ、兎を狙うような小物なら、うちの女達があっという間に片づけるさ」

あの王子様も要領が良いから無事だろうと言われ、ヴィンセントは苦笑する。

「さて、俺達も行くか」

ぼんやりしてるととばつちりがこちらにもとんでくる。

ヒューズのぼやきに苦笑し彼と共に歩き出すヴィンセント。

気がつけば、そこに文句を言いながらも騎士達が続いていく。さつさと終わらせて飲みに行くぞと、気合いを入れる騎士達に苦笑しつつも、その力強さをヴィンセントは心強く思う。

正義も騎士らしさもそこにはない、けれど人間らしさこそが彼らの真の強さだ。

「準備は良いか野郎ども！　これが終わったらワインだ！」

そしてそれを指揮している第4小隊の女達に、ヒューズとヴィンセントは笑みを交わした。

フロレンティアの女は怒らせると怖い。特に騎士の女は。

どうやら、人質騒ぎも意外と早く解決しそうだ。そして多分、今夜は多くのバールで騒ぐ騎士の姿を見ることが出来るだろう。

その中の一人に自分もなるのだろうかと考え、ヴィンセントは思わず笑みをこぼした。

騎士のお仕事編【END】

「嫌です」

その即答に、老人は思わず顔を上げた。

否定と拒絶、それは老人に最も遠い言葉であった。そして得に、目の前に立つ自分の息子は誰よりも老人に忠実で、口答えなど今の今までしたことがなかった。

「お話は以上ですか」

あまりのことに言葉を失った老人の前で、彼はそそくさと一礼すると部屋を出て行った。

唐突な反抗期。と言う年でもないが、似たような事例を上の子の時に経験していた彼は、大きな不安に襲われる。

「もしかしてまた……」

思い出されるのは、自身の過ちと深い後悔。

「だめだ、もう二度とあんな……」

気が付けば、彼は見事な装飾が施された重い椅子が倒れるのほどの勢いで立ち上がった。いた。

彼はきつく決意したのだ。

同じ過ちはもう二度と繰り返さないと……。

新キャラの登場から始まりましたが、今回は騎士達の休日のお話です。

キアラがメインですが、レナスの自堕落な私生活と、女子二人に振りまわされる王子と隊長も出て参りますので、新エピソードもよろしければお付き合下さい。

また、拍手のお礼小話に団長とキアラ（7歳）を追加しました。ちょっと短めですが、幼女特集と言うことでヒューズ×レナス（10歳）も公開予定ですので、もし気に入ってくださった方がいらっしやいましたら、覗いて頂ければと思います。

メニューを見ていると言うよりは、竜と対峙していると言った方が納得出来る表情で眉をしかめている恋人を、ヴィンセントは穏やかな表情で眺めていた。

復活祭から3週間がたち、観光客よりも地元の人々でにぎわうようになった、アルノ川沿いの洒落たりストランテでのことである。

「…すぐ決めますから」

別にせかすつもりはないが、ヴィンセントの視線の意味を勘違いした彼の恋人、騎士キアラは慌ててメニューをめくる。

相も変わらずデートだというのに彼女は隊服姿。勿論腰には剣を差している。

腕のギプスは取れたようだが、まだ動きの鈍い右手には既に擦り傷が出来ている。あらかた、今日も無茶な方法で犯罪者を追いかけて回したのだろう。

どんなときでも、キアラは常に全力だ。まるで手を抜くことが罪だとも思っているかのよう。

レストランの前で待ち合わせをしたときも、時間に余裕があるのに全力疾走してきたくらいである。

「何で15分も前にいるんですか！」

と怒られたが、それを言うならキアラも同じである。むしろ、女は男を待たせるくらいで良いと前回のデートで口を酸っぱくして教えたのに、まるで学習していない。まあそれを予想した上でヴィンセントも少し早めに来たのだが。

もう少し余裕を持てばいいのにと、今も焦ってメニューをめくるキアラにヴィンセントは思う。まあそこが可愛いんだけど心の中心のろけ、先にワインのオーダーだけでも済ませようと腕を上げた瞬間、キアラが一瞬不自然な動きを見せた。

右手の袖口からメモのような物を出し、それにじっと目をこらす

その姿に、ヴィンセントは上げかけた腕でキアラの腕を掴んだ。

「なんだそれは」

こっそり出したつもりだが、ヴィンセントの目はごまかせない。王子でありながら、騎士として日々犯罪者の逮捕や尋問を行っている彼は、不振な行為を見抜くすべにたけている。

言い訳をしようとしたキアラの一瞬に隙をついてメモを取り上げ、ヴィンセントはそれに目を走らせる。

「デートの時の注意事項？」

食事の時は大きな口を開けて物を食べてはいけない。

音が出るような物も駄目、可愛らしさをアピール出来る料理が吉。ケーキはとにかくちまちま食べる。間違っても一口とか手づかみはしては行けない。

「お、音読しないでください！」

料理選びにてこづっていた理由はこれかと納得すれば、目の前の恋人はメニューで真っ赤な顔を隠してしまう。

すぐ赤くなるところが好きならヴィンセントとしてはメニューを取り上げたいところだが、これ以上プレッシャーをかけると、たとえばそれが2週間ぶりのデートであろうと平気で逃げ出すのは学習しているので、ぐつと我慢する。

「これ、どうしたんだ？」

「隊長に、デートのことを話したらだめ出しされて……」

律儀に反省点でカンペを作ってきたらしい。

「訓練じゃないんだから」

「でも、いつまでたっても上手く出来ないじゃないですか！」

確かにデートらしいデートが成功したことは今の今まで一度もない。

最近はやうやく仕事抜きのお食事が出来るようになったが、行き帰りの送迎は断固拒否。それでも無理矢理ついて行くが手を繋いだ瞬間に逃げ出されたことが何回あったか。

復活祭の時に深い口づけをした反動で、ヴィンセントの顔をまと

もに見られなくなり、食事中も一度も目を合わせないと言ったときもあつた。

付き合いだしてそろそろ3ヶ月はたつ。いくら恥ずかしがり屋の女子でも食事のデートくらいは普通に出来る。むしろキスくらいは出来るようになってる。

だが目の前のキアラは普通ではない。女の子らしいことが苦手で、男装までする18歳である。

むしろそんな現状を憂うようになるだけ大進歩である。

「好きな物を、好きなように食べればいいだろう。俺は豪快な君の食べ方、わりと好きだぞ」

そもそも、始めて声をかけたときから、彼女は頬一杯にラザニアを頬張っていたのだ。

今更かわいこぶつたつて、それはそれで可愛いし見てみたい気はするが、上手くいくとは思えない。

「それで、何にする?」

「サラダ……」

「野菜嫌いだろう」

「レタスは食べれます!」

「良いからほら、何でも奢ってやるから、食べたいものをお兄さんに言ってみなさい」

子ども扱いにぶーたれつつも、給料日前で最近ロクに食べていないキアラにこの申し出を断る理由はなかった。

「……お肉が食べたいです」

ようやく出た本音に笑いながら、ヴィンセントは給仕係カメリエーレに声をかける。

「このコースを二つ。メインは牛フィレ肉のステーキ600グラムで」

「多くないですか!」

「ヒューズ隊長から聞いたが、君はかなりの大食いだそうだな」

細い体でありながら大人の男2人分の料理をぺろりと平らげると

話したのは、最近よく酒を酌み交わすガリレオの隊長ヒューズの言葉である。

服飾代に金をつぎ込んでいるわけがないのに。給料日前になると必ず金穴に陥るキアラの懐事情をずっと疑問に思っていたが、給料の殆どは食費に消えると言っことだ。

「ヒューズ隊長め……」

「お前も変な意地はるな」

「だって、自分でも恐ろしくなるくらいの量を食べちゃうんですよ」「いいじゃないか、その分食事の時間が長引けば、君といられる時間も増える」

何だつたら追加で何か頼むかと聞かれ、思わずメニューに目を戻すキアラ。

それから慌てていらないと返したが、ヴィンセントはすぐに彼女が好みの料理をいくつかオーダーしてしまった。

そして運ばれてきた料理は、テーブルに載りきらないほどの量で、仕方なくあいていたテーブルを付けてスペースを拡張する。

確かに怖くなる量だ。けれどそれをキラキラした目で見ているキアラに、ヴィンセントは心の中で小さく謝った。

色々と無理をさせているのはわかっていた。恋人らしい行為が何も出来ないと嘆きながらも、彼女は精一杯女の子になろうと努力している。

騎士として常に完璧であろうとするキアラだ。恋人としても完璧でいようとするのも納得は出来るが、やはり自然なままでいて欲しいというのが彼氏としての本音である。

だが一方で、自分がそれを邪魔しているのもわかっている。

ヴィンセントはこの国の王子だ。そしてその肩書きは多くの異性を引きつけ、ヴィンセントの周りにはいつも女性が集ってくる。むしろ駆け寄ってこない唯一の存在がキアラである。

でもそれを、嫉妬するくらいにはキアラの恋心は成長している。

そしてそれに焦りを感じている様子も最近では見受けられるように

なつた。

彼氏として嬉しい一方、焦ってまた無茶をしないかという心配の方が強いのは、キアラにとって自分が初恋の相手だと自覚があるからだ。

自分も始めて女性と付き合つたときは色々と失敗した口だ。そしてその原因は、見栄と意地を無駄に張つたことである。

そして同じ鉄をキアラも踏んでいるのは見ていればわかる。むしろ自分の時より酷い。

それをこちらは可愛いと思っているが、失敗を繰り返しキアラが恋を嫌いになつたらと思うと不安でたまらないのだ。年上なのだからそこは上手くエスコートせねばならないところだろうが、正直ここまで規格外だと勝手がわからない。

それにたぶん、自分も恋に溺れているのだ。それも、正気でいられないくらい。

「ヴィンセント様は食べないんですか？」

カンペも忘れてラザニアを頬張っているキアラに、ヴィンセントは笑う。

「君に見とれてた」

ラザニアを吹き出しそうになるのを必死でこらえる姿すら愛しいと感じる自分の恋心もまだまだ幼いと苦笑しながら、ヴィンセントはワインを口にした。

## Episode 01 - 2 成長の証と逃走と

「送ります」

4人前の食事を完食したキアラの満足げな表情に油断していた矢先。

ヴェンセントが喰らった不意打ちは、男らしすぎる宣言だった。

「頼むから、俺の言いたい台詞を横取りしないでくれ」

「でもあなたは王子で、私は騎士だし」

「君はもう少し男心を勉強するべきだな」

特に恋する部分だと告げるが、キアラの顔には固い決意の色が浮かんでいる。

「前みたいに、変な竜に誘惑されても困りますし」

「君、結構根に持つてるよな」

「ともかく行きますよ」

そう言って無理矢理服の袖を引くキアラ。どうせなら手を引いてくれと思うが、これもまた進歩した方である。

袖から指を外し、自身の指と絡ませればキアラの肩に力が入ったのがわかった。

「人の少ない道を通るから、構わないだろう？」

耳元でささやけば、絡めた掌にほんの少しだけ力が込められる。

そしてそのまま、二人は夜のフロレンティアを歩く。宣言通り、なるべく人の少ない通りを歩けば、少しずつだけれどキアラの体から力が抜けていく。

会話も自然に出来るようになり、繋がれた手にキアラが慣れてきた頃、二人はヴェンセントの家のある通りへとやってきた。

上手くいけば今日はキスクらい出来るかも知れない。

いつになく順調なデートにホッと胸をなで下ろしていたそのとき、妙な気配を感じてヴェンセントは歩みを止める。

突然、キアラがヴェンセントの体を側の茂みへ押し倒したのは、

その直後の事だった。

普通の恋人同士なら、押し倒すのはキスの前触れだ。むしろそれ以上のことが起きる前兆ともとれる。

「今、妙な気配が！」

だがもちろん、キアラにそれはあり得なかった。

いつの間にか剣まで抜いているキアラに、ヴィンセントはため息をつく。

「俺も感じたが、そう警戒することもない」

「ですが」

キアラは不満そうだが、二人きりで身を隠している方が彼としては心臓に悪い。

「殺気ではないようだし、大丈夫だよ」

「誰かにつきまとわれてたりしますか？」

時折、女性に過度な好意を向けられることがあるのは確かなので、否定はしない。

「君の方は心当たりはないのか？」

「私ですよ」

最近目に見えて綺麗になっている、というのはヴィンセント以外からも出ている意見だが、キアラに自覚はない。

「……やっぱり今夜は送る」

「だめです、何かあったらどうするんですか」

「何かあったとき、危険なのは俺より君だと思っただが？」

「私が弱いつて言いたいんですか？」

「そうじゃない。万が一という事態の時、俺は傷つけられても良いが君はそうじゃないから」

そう言っ て頬に添えられた掌に、キアラはかっ と熱くなる。

「君の綺麗な肌に傷を付けられたら、俺は正気でいられる自身がない」

「も、もう既に傷とか沢山あるし」

今日も訓練中に痣が出来ました！ という言い訳にもならない報

告をするキアラに、ヴィンセントは苦笑を返す。

「例え君が竜より強くても、彼氏としては不安なんだ」

それに、この世に絶対なんて事はない。

かつて自分が身を置いていた世界のことを思い出し、ヴィンセントは瞳を伏せる。

「君にだけは置いていかれたくない」

伏せられた瞳に、キアラはほんの少し驚いた。彼はあまり憂いを外に出さない人だ。

そしてそんな一面を見た所為だろう、不安そうに見上げられた顔にキアラは知らず知らずのうちに引き寄せられていた。

自覚はなかった。

前触れもなかった。

けれど、確かな感触が残る唇に触れヴィンセントが啞然とする。

「今のは……」

答えるキアラの方も、どこかポカンとした表情をしている。

「わ、わかりません」

「わからないのに、キスをしたのか」

ヴィンセントの指摘で、キアラはようやく自身のしたことに気付く。

「き、キスしました？」

「ああ」

「私から、ですか？」

「ああ」

「私から……？」

「それにはもう答えた」

途端に、キアラが真っ赤になって茂みを飛び出した。

「ごごっごめんなさい！ ヴィンセント様が辛そうな顔してるなって、思ったところまでは覚えてるんですけど、なんか、あの…その後のことは良く……その……」

「別に謝るところではない、むしろ嬉しいくらいだ」

「いや、でも」

混乱に混乱を重ね、そしてキアラが取った行動は逃走であった。

ごめんなさいと叫びながら逃げ出す騎士に、残された方はどうして良いかわからない。

ただ少なくとも、例え一瞬でも彼女からのキスを得た幸運には感謝しなければと、まだほんの少し温もりが残る唇にヴィンセントは手を触れた。

ヴィンセントの元から逃げ出した後、キアラが歩みを止めたのは彼の邸宅がある通りから1キロほど離れた街はずれにある墓地の前だった。

立ち止まってもなお、胸の動悸は治まらずそれどころか叫びだしたい衝動は増すばかりだった。

何故自分があんな事をしたのかはわからなかった。今でさえ、彼女自身に自覚はない。

けれど確かに唇に感触は残っている。前の時は受けるのに必死だった分あまり余裕がなかったが、唐突だった割にヴィンセントの唇の柔らかさがありありと思い出され、キアラは側にある街路樹に顔を埋めて唸った。

キスははじめてではない。けれど自分からするならもう少しタイミングを計れと、5分前の自分を今ここに呼び出して説教したい。

夕飯にガーリックのキツイ肉料理とパスタをたらふく食べた上に最近唇が荒れているとレナスに指摘された今日である。せめてもう少し彼に好印象を与えるようなキスをすればいいのに、なんでわざわざこんなタイミングなのだと、彼女は心の中で絶叫した。

いつもは男勝りで、それが行きすぎて男装までしている。とはいえ彼女も年頃の乙女なのだ。恋やキスに多少なりとも理想は持つし、少なくとも相手は理想どころか彼女の想像では計れないほど完璧な男である。

なのに自分は一体何をしているのかと、キアラは後悔に後悔を重ねてうなだれた。

うなだれるどころかその場にしゃがみ込み、声を殺して唸るキアラ。

だがそのとき、キアラは先ほど感じた気配がこちらに近づいていることに気付いた。

恋では三流だが、騎士としては一流。素早く剣を抜き気配の先に目を走らせれば、彼女は思わず息を呑んだ。

そこにいたのは、一人の老人だった。物陰から、顔を半分だけ出してこちらをじっと見ている老人は、正直人気のない夜の闇の中では不気味以外の何ものでもない。

そしてキアラは、幽霊や悪魔と言ったたぐいの存在が大が付くほど苦手だった。

剣を構えつつ、じりじりと後ずさるキアラ。その姿に、老人がふらりと物陰からこちらへとよってくる。

「わ、私に何か用ですか！」

足取りは無駄にゆっくりだが、少なくとも足はある。と言つことは、多分生きてはいる。

「……あんたは、誰だ」

それはむしろこちらが聞きたい。だがじつとこちらを見付ける老人にキアラは恐怖のあまり思わず自分の名前を告げた。

「キアラ、その名前どこかで」

「ふ、フロレンティアでは良くある名前かと」

たしかに、フロレンティアどころかイタリア半島では良くある女性の名前ではある。

「それである、私にご用でしょうか」

「その前に、まずはその剣を閉まってはくれまいか」

確かに相手が生きている人間であれば、丸腰の、それも老人に刃を向けるなど以ての外だ。

それにもし相手が幽霊であるなら、そもそも剣なんて意味はない。失礼しましたと慌てて頭を下げれば、老人はキアラの前までやってくる。

暗がりの中で見たときは怖いと思っただが、目の前にたった一人は白髪であることと生え際が後退していることを覗けば、恐怖を抱くほど老け込んでいるわけではなかった。

意志の強そうなのは凜々しい眉と瞳には未だ精悍さが残り、若い頃

はもちろん、今でも老年の紳士好きに人気のありそうな顔立ちだ。

杖もなく歩く足取りは力強く、背もピンと伸びている。頭が後退しているので高齢だと思ってしまうが、実際はさほど年老いているわけではないのかも知れないと、キアラは見かけに惑わされ、あまつさえ悲鳴まで上げてしまったことを後悔する。

「もしかして道に迷われましたか？ よろしければ、街の中心まで案内させて頂きますよ」

謝罪もかねて親切心からキアラが言えば、老人は品定めでもするかのようにじろじろを彼女を見つめた。

相手の真意がわからず非常にやり辛い。しかし騎士として無下にするわけにも行かなかった。

「あの…」

「ごういう、まな板みたいなのが好みとは思わないがな」

まな板という言葉に、キアラのこめかみが引きつる。その言葉が意味するところがわからないキアラではない。

「ご用がないなら、帰りますけど」

「いや、用ならある」

意志が強いどころか少々傲慢なところが老人にはあるようだ。

「私は観光客なんだが、訳あって護衛がいるのだ。そして、君に私の護衛をたのみたい」

「そう言うことでしたら、騎士団の方に申請を出してください。観光案内にもたけた護衛専用の騎士がいますので」

キアラの言葉に、途端に不機嫌になる老人。

しかし彼女がそう提案したのは、決して老人が面倒になったからではない。

ガリレオ騎士団では観光で訪れた貴族や資産家などから護衛を請け負うことが多いため、観光案内に長けた騎士が別にいるのだ。タダではないが、観光局でガイドを雇うのと同じくらいの値段を出せば、一日つきつきりで観光案内をしてくれる。

騎士がガイドのまねごとなどとガラハド騎士団からは皮肉を言わ

れているが、国から援助を貰っているガラハド騎士団と違い、ガリ  
レオ騎士団の財政は常に火の車だ。

『金がないのに国防何てやってられるか！ 絞れるところから絞っ  
てやるぜ！』

と豪語する、良く言えば頭の柔らかい、悪く言えばがめつい騎士  
団長の元、設立された観光事業部はなんだかんだで好評だ。最近で  
は貴族だけでなく、騎士にエスコートされたい観光客からも良くお  
声がかかる上に、案内の質も良いのでリピーターも多いらしい。

戦闘部隊の自分が案内するよりも、彼らに頼んだ方がずっと効率  
的でよりよい休暇を楽しめ事は確実。

だからこそキアラは提案したのだが、老人はがんとして首を縦に  
振らなかった。

「いや、君が良い」

「と言われましても、仕事がありますし」

「君でなければ駄目だ」

全くらちがあかなかった。むしろ最初よりも明らかに悪くなって  
いく老人の機嫌に、キアラは完全に押されていた。

「休暇はいつだ？」

「一応明後日は、1日あいておりますが」

「ならば、明後日の朝9時にサンタクローチエ教会で」

老人は言うつと、護衛がいると言っていたくせに、一人さっさと歩  
き出してしまふ。

「ほ、ホテルまでお送りしましょうか！」

「いらん」

最後までつかみ所がないまま、去っていく老人。

勢いにのせられて休日を教えたのは間違いだったかもし知  
れない。

得体の知れない不安を感じつつ、キアラは老人が消えた夜の闇を  
見つめていた。

**Episode 01 - 3 闇夜の遭遇（後書き）**

06/23 誤字修正しました。

## Episode 02 - 1 騎士達の休日

夕方ぶりの休日。

窓から差し込む柔らかい日の光をうけ、キアラは気持ちよく目を覚ます。

風でたなびくカーテンの向こうに見えたフロレンティアの空は、街に連なるあかね色の瓦屋根が栄える見事な青空に覆われていた。

仕事が無いときでも7時に起床するキアラは、隣のベッドで熟睡しているレナスを起こさないよう静かにベッドを出ると、共用のクローゼットから自分の衣服を取り出す。

グインセントと付き合いだした今でも、彼女のクローゼットにあるのは男物の衣服ばかりだ。小柄な自分が来ても不恰好にならない物を選んではいるが、動きやすさと着心地を重視した服はどれも可愛らしさとはほど遠い。

自分でも一着くらいはとっているのだが、未だ女物を扱うブティックに入る勇気がでず、かといって誰かに付き合い合っ貰うのも恥ずかしい。

結局隊服と遜色のない、地味な男物の衣服ばかりが増えてしまい、今日も彼女が袖を通すのはそれだ。

服を着替え、昨日の夜に買っておいたサンドイッチで軽い朝食をすますと、キアラはたまった洗濯物を洗濯機に、洗い物を食器洗浄機に放り込んだ。そこでようやく、レナスがフラフラと起き出してくる。

「休みの日くらいもう少しゆっくりしたら？」

「今日は出かけるつもりなので」

だからそれまでに家のことをかたづけたいとキアラは思っていた。レナスはその手のことを何もしないし、次の休日まではだいぶ日がある。

「昨日言った、じいさんの所？」

「ええ」

「やめときなよ。絶対やばいってそのじいさん」

「でも、もし待っていたらまずいですし」

「休日まで立派な騎士でいる事無いわよ。それに何度も言うけど、そのじいさん何かクサイわよ」

「でももし、何かしらの企てがあるならそれこそ野放しには出来ませんし」

真面目すぎる部下の言葉に、レナスは寝癖のついた髪をかきながらため息をつく。

「何かあつたら連絡してもいいですか？」

休日だけだと妙なところで遠慮をするキアラ。

「いいよ、どうせ今日は暇だし」

「でもたしか、合コンがあるのでは？」

「何か、気分が乗らなくて」

レナスの言葉に、キアラが言葉を失う。

「その失礼すぎる驚き方やめなさい」

「だって、彼氏もいないのに隊長が合コンに行かないなんて」

「私だってビツクリしてるわよ。でもなんか、最近巡り合わせが面白いみたいで」

そう言うと、レナスは疲れた表情でベッドに戻っていく。

「合コンとかパーティに行ってもさ、コレって感じの男がいないのよね」

「やっぱり、アルベル様のことはまだ…」

「でもアルベルにあっても前みたいにときめいたりもしないのよね」

かといって、彼並みのイケメンを前にしても最近心がふれないのだという。

「やっぱりあれかな、次で決めなきゃ行けないプレッシャーかしら」

「別に焦らなくても良いと思いますよ。隊長はまだまだ若いですし」「若くないわよ。むしろ、そろそろあんだだって結婚しても良い時

期なんだから」

フロレンティアでは、女性の結婚適齢期は18から25とされている。ちなみにレナスは今年で26。崖っぷちところか、既に転落している。

「あなたに先を越されたらホント凹むわ」

そしてその可能性は今のところ限りなく高い。自分は未だ彼氏すらいないところ、キアラには彼女の欠点さえも愛しいと豪語する物好きの王子がいるのだ。

「あーあ、私も欲しいなあ王子様」

腹筋があっても、酒癖が悪くても、色気より男気が勝っていて、むしろそれら全てをまとめて愛してくれる王子が欲しいと、喚くレナスはまるで10代の少女である。

「だったら、同じ騎士とかどうでしょうか。騎士としての隊長は素敵だし、尊敬されてるし、騎士団の中でも隊長が好きだって言う男性騎士は多いし」

キアラの言葉に、何故だか浮かんでしまったのは一番近い男の顔。

彼ならばレナスの欠点全てを許容してくれる。だが許容はしてくれるがきつと愛してはくれない。愛を求めるにはあまりに多くの迷惑をかけすぎている。

「騎士は、やだ……」

だって現実の騎士は汗くさいし収入も低いし。そう告げたレナスにキアラはそれ以上言葉を重ねることは出来なかった。

「…そうだ、そのお爺さん素敵なお孫さんとかいないかしら」

いたら紹介して貰ってよと、先ほどまでは行くなと連呼していた口でレナスは嬉々として言う。

それに呆れつつ、キアラはそろそろ時間だからと、半ば逃げるようにして部屋を出て行った。

同居人がいなくなると、部屋には洗濯機の回る音とレナスだけが残された。

ベッドの上、二度寝をしようと横になるレナス。

だが恋愛のことで深く落ち込んだせいか、やたらと目が冴えてしまった。かといって出かける気力があるわけもない。

仕方なしにご飯でも食べようと台所へ向かい、小さな冷蔵庫に手をかける。だが中には牛乳が入っているだけだった。

「何もないってわかると、途端にお腹空くわね」

でもやはり外には行きたくない。その上どうせなら美味しいものを食べたい。

そんな我が儘なことを考えた途端、レナスは妙案を思いついた。

寝室へと舞い戻り嬉々としてレナスが手に取ったのは、ベッドサイドに置かれた電話。

機械が少ないフロレンティアでも、テレビ・電話・ラジオ・冷蔵庫・掃除機と言った家電製品はこの家でも普通に使われている。

以前は電気等のエネルギー物質を生み出せる魔石や妖精が少なく、人々の需要にエネルギーが追いつかない時代が長く続いていた。電気を引くだけで馬鹿のように金がかかったし、それらを使って動く機械製品もやたらと値がはったものだ。

しかし魔科学に発達によって、それもいまや過去の話。

太陽や風と言った自然エネルギーを電気へと変換出来る装置の誕生と、蓄電が可能な人工魔石が生み出された事によって、今では使用量以上に電気が供給できるようになり、どんな田舎でも安値で電気を引けるようになったのだ。

とはいえフロレンティアのような古い町では、妖精の力や魔石を使った製品も多く残っている。

だが、機械製品自体も安価になった今、高価で気まぐれな妖精を使う方が新しく機械製品を買うよりもずっと値がはるのだ。

電話などは魔石が埋め込まれた物の方が音もクリアだが、安月給の騎士にはやはり手はだせない。だからレナスが使う電話も、そしてレナスがかけようとしている相手も、使っている電話は機械と電話線を用いた物だ。

『もしもし…』

レナスの耳に響くのは、僅かに掠れた低い男の声。

「ヒューズ？」

レナスの声に、受話器の向こうの男ヒューズが呻く。

寝ぼけた声と衣擦れの音に、レナスは相手がベッドの中に電話を引つ張り込んでいる様子を想像し不満を露わにする。ヒューズの声は、さつさと電話をきって寝たいと考えている時の物だった。

『事件か？』

「事件だったらイヤリングの方に連絡する」

その一言で、ヒューズが再び唸った。

「今日休みでしょ？」

『わかってんなら朝早くに電話してくるなよ』

「用事とかある？」

『……あるよ』

「今の間はないわね。よし、今すぐウチに来なさい」

『せめて昼過ぎにしてくれ。ここのところずっと徹夜で、昨日も4時帰りなんだ』

「ウチに来て寝ればいいじゃない」

ベッドなら貸してやると告げれば、ヒューズの声が遠のいた。

「おい寝るなっ！ 私、今日はあんたと過ごすって決めたんだから」

『……合コンいくって自慢してたろう』

「合コンはやめたの！ そう言う気分じゃなくなったから」

また声が遠のく。

「今、猛烈に驚いた顔したでしょう」

『何でわかった』

「キアラも同じ反応したから」

そこで言葉を切って、レナスはヒューズの声を逃さないように受話器をぐっと握る。

「今日は、家でゴロゴロしながらあんたとお酒飲みたいの。あと久

しぶりに、あなたのご飯も食べたい」

だから来てと、今度は声を落として告げれば、ヒューズのため息が聞こえる。

『何が食いたい』

「ヒューズの作るラビオリ食べたい！ あと、ジュリオの店でジェラート買ってきて！」

『酒はあるのか？』

「ビールなら」

『ワインは白で良いのか？』

電話越しの問いに、勿論とレナスは答えた。

「待ってるから！」

『寝るなよ』

大丈夫だと連呼して、レナスは嬉しそうに電話を切った。

## Episode 02 - 2 まともに見えても油断は大敵

キアラがサンタクローチエ教会に着いたのは、待ち合わせの時間の少し前だった。

まだ朝も早いのだが、観光名所として有名な教会の入り口にはすでに観光客の姿が多くある。

別名「フロレンティアのパンテオン」と呼ばれる教会は、フロレンティアの礎を作った5人に賢者や、国を治めた歴代の王が埋葬されている歴史ある教会だ。

側廊の壁には小礼拝堂と墓石が犇めいているが、不気味さや気味の悪さはなく、広い内部は常に神聖で荘厳な空気に満たされている。観光客で混み合っても清らかな空気が乱れることはなく、むしろ教会に満ちた不思議な力が人の心を落ち着かせるのか、この界限ではあまり大きな騒ぎが起こることはない。

そのため第4小隊の巡回地域からも外れており、キアラが教会に足を踏み入れたのは久しぶりのことだった。

観光客達に混じって内部に入ると、教会の名前の由来になっている大きな十字架が置かれた中央礼拝堂の前に、老人を見付けた。

十字架の前で祈りを捧げる老人の顔は穏やかだった。

一昨日の傍若無人な態度もあり警戒していたキアラだが、毒気のない横顔に油断し、気がつけばそっと彼の側に寄り添っていた。

「君も祈ったらどうだ？」

しかし、キアラに向けられた声は相も変わらずとげとげしい。

「信者の方なんですか？」

とげとげしいが、その手の敵意に鈍感なキアラは、逆に老人に問いかけていた。

「私自身は信仰しているわけではないが、教会の神を信じそれによって救われている者もいる。だからたまにこうして、感謝の祈りを捧げている」

問いかけの答えは静かな口調で告げられたが、キアラに向き直った老人の顔は、次第に一昨日と同じ神経質で意地の悪い物へと変わりつつあった。

「それにしても遅かったな」

「9時のお約束でしたよね？」

「13秒の遅刻だ」

いつの間にか胸ポケットから懐中時計を出して、老人はキアラを睨む。

やっぱり意地が悪いと、心の中でため息をつくキアラ。そんな彼女をじつと見つめていた老人は、突然キアラの来ているシャツをつまみ上げた。

「君は、休日もそんな格好なのか？」

そんな格好とは、飾り気のない男物の服のことだろう。

「動きやすいので」

「でも君は女性だろう。そんな格好でどうやって男を誘惑する」

「誘惑は別にしませんけど」

「したんじゃないのか？ 王子を」

その言葉に、キアラは一昨日の失態を思い出す。だからだろう、気がつけばキアラは老人に情けない問いをかけていた。

「やっぱり、女性からもそう言う誘惑はする物なのでしょうが……」

「君は、何を言ってるのかね」

「いや、知り合いの男性にはこういう事聞けなくて」

そう言ってもじもじする姿は女々しいが、誘惑するにはやはり事足りない。

「色気とかあんまりなくて、服も可愛いのか無くて、そういう女性性は、男性から見えてどう思われますか？」

問われた方の老人は、あきれ果てた表情で唸る。

「私あつたら願ひ下げだな。自分のために着飾ってくれる乙女こそ、何よりも美しく思う」

「でも、何を着ても似合わないとしたら？」

「そんな女と付き合おう何て、正気の沙汰とは思えん」

老人の言葉に目に見えて凹むキアラ。

一方老人は自分の言葉を小声でもう一度繰り返し、キアラの姿を見つめる。

「こんな小娘がよりにも寄ってあいつを落とせるわけがない…、今日こそは化けの皮を剥がしてやる」

なにやら老人は呟いていたが、キアラは聞こえなかったのか小首をかしげるばかりである。

「何か言いました？」

「なんでもない。それよりも、早く私を案内しろ」

具体的にどこへと尋ねれば、どこでも良いという投げやりな答えが返ってくる。

本当に観光する気があるのか怪しい答えだが、見る間に機嫌が悪くなつていく老人の姿にキアラは慌てて歩き出す。

念のため観光課の騎士から情報は貰ってきている。

まずは妥当な線で街の中心地大聖堂下ノオホテから。貰ったアドバイスを思い出しキアラは老人と共に教会を後にした。

**Episode 2 - 2 まともに見えても油断は大敵（後書き）**

6 / 23 誤字修正しました。

チャイムに反応がなかった時点で予想はしていた。

予想はしていたが、ベッドの上であられもない格好で寝ているレナスの姿にヒューズは買い物袋を片手に呻く。

早朝や深夜等、チャイムを鳴らせない時間帯に呼び出されること  
が多々あるため、ヒューズはレナスの部屋の鍵を渡されていた。

彼女だけならともかくキアラがいるので最初は断ったが、キアラ  
もまたヒューズを男として見ていないため、頻繁に彼が尋ねてきて  
も何も言わない。

それどころかヒューズがいるとレナスの我が儘が彼に向くため、  
むしろ彼の来訪を喜んでいる節まである。

だがヒューズの方は気にしないわけにはいかない。どちらも年頃  
の女性と言うには少々難があるが、やはり女性。そこに未婚の男が  
気軽に尋ねていって良い訳はない。

だからヒューズの方から用事があるときは仕事場ですます事にし  
ているが、その手の遠慮にレナスが気付く気配は今のところない。

「まったく…」

遠慮が無いどころか図々しいレナスは、ヒューズの来訪に気付か  
ず完璧に熟睡している。それも着ているのは隊服のシャツ一枚で、  
下はズボンもはいていない。

ギリギリ下着が見えないことが救いだが、日頃の訓練のお陰で綺  
麗なラインを保っている足は目に毒だ。

とはいえ起こせば絶対に怒られる。仕方なく、ヒューズは側に転  
がっている毛布をレナスの体に掛けた。

それから彼は、枕元に転がっている電話を枕元に戻そうと手を伸  
ばす。

そこで唐突に、レナスの抱えていた電話が鳴り出した。

僅かに身じろぎはするが起きる気配のないレナスに、仕方なく受

話器を取ったのはヒューズ。

その声に、電話の向こうの相手がたじろぐ声が聞こえる。

息の止め方から、なにやら誤解をしていそうな相手の正体に気が付きヒューズは苦笑した。

「ヴィンセントか？」

『ヒューズさん、ですか？』

そつだと答えると電話の向こうから安堵の息が漏れる。

「キアラに用事か？」

『ええ、休日だと聞いたのでデートに誘おうかと思ったんですが』

電話を抱えつつヒューズは他の部屋を覗くが、キアラの姿はない。

「今いないみたいだな」

『…もしかして、お邪魔でしたか？』

「んなわけあるか」

『その言い方は、いつもの呼び出しですか』

ヒューズが頻繁に家に着ていることはキアラから聞いているのだから、ヴィンセントの言葉にヒューズは不本意そうな声で肯定した。

「なんだっいたらお前も来るか？ キアラもそのうち帰ってくるだろう」

『勝手に家に入ったら怒られますので。それに、せつかくの休日ですし、二人でゆっくりしてください』

「二人でいるとゆっくり出来ないから誘ってるんだよ」

ヴィンセントがいれば、多少は人の目を気にして我が儘も治まるかも知れないともくろんだのだが、ヴィンセントはつれそうもない。

そつない断りの言葉と共に電話を切られ、ヒューズは今一度レナスと二人きりで取り残された。

「…んう」

仕方なく電話を戻せば、今更のようにレナスが身じろぐ。

「起きたのか？」

「眠い…」

寝ぼけた声音にそれは俺の台詞だと返し、寝返りですれた毛布を

かけ直してやる。

「飯が出来たら声かける」

「ありがとう」

寝ぼけている所為か、普段部下に怒号を飛ばしている女の物とは思えぬ可愛らしい声が返ってくる。

普段からこれくらいしおらしくしてくれたらと思うが、それを言えば殴られるのは確実だ。

気持ちよさそうな寝顔を見ていたらこちらも眠くなってきたが、自分まで寝たらこれまた殴られる事は確実なので、ヒューズは彼女のオーダーに答えるため、台所に向かった。

## Episode 03 - 2 王子様は出不精

電話の受話器を置いて、ヴィンセントは一人ため息をこぼす。  
恋人と休みが重なる幸運は、この忙しい春先では滅多にあることではない。

前のデートの時、逃走される前に休日の予定を聞いておけば良かったと彼は後悔する。帰り際は一番逃走率が高い事を失念していたのだ。

しかたなく、次のチャンスは逃さないようにしようと気持ちを切り替えて、ヴィンセントは電話が置かれている玄関ホールで一人、今日の予定を考える。

外は美しい快晴。絶交の行楽日和だが、残念ながらヴィンセントにとって晴天はあまり喜ばしくない。

見た目は爽やかな王子だが、彼は純血のヴァンパイアからその血を受けた者。闇に生きる種族である。

とはいえまがい物でもない限り、ヴァンパイアの血を持つ者が日の光で溶ける事はない。だが強すぎる太陽の光を嫌う者が多いのは確かで、ヴィンセントもまたその一人だった。

出歩く理由があれば苦にはならないが、昼間から用事もないのに外出したいとは思わない。

それにこう見えて、ヴィンセントには不精な一面もある。

かつてマフィアであった頃に、身だしなみを含めた人前での作法については色々たたき込まれたので、世間では常にきっちりした紳士的な王子だと思われる。

けれど本心では、ヒューズのように仕事でもラフな格好でいたいと思っているし、人前で愛想を振りまくのも好きではない。

むしろ休日にはだらしがない格好のまま、一日家にいるのが好きだ。現に今、家にひとりでいる彼は、日頃トレーニングで使っているラフなズボンをはいているだけで上はシャツすら身につけていない。

どこかの騎士隊長と同じく、ヴィンセントはあまり格好を気にしないタイプだった。

もし使用人の一人でもいれば小言を漏らされていたところだが、今の彼は広い家に一人暮らし。

使用人がいれば便利だとは思うが、24時間家にいるとなると、やはり自分の存在を隠しておくことは難しい。夜もろくに眠らず、冷蔵庫には輸血用の血液パックが陳列しているのだ、ばれないわけがない。

今でこそ闇の種族が迫害されることはなくなったが、やはり血を啜る行為、そして人並み外れた身体能力を畏怖する者は多い。

彼の正体を知る、キアラ達一部のガリレオの騎士のようにヴィンセントを受け入れ、認めてくれる者は多くないのだ。

そして自分の生活を支えるてもらうならば彼らと同等、いやそれ以上の信頼関係が必要だ。

けれどフロレンティアに着てだいぶたつ今でも、彼の信頼に足る人物は現れず、彼は一人ひっそりこの邸宅に住んでいる。

勿論不便なことも多い。広い家を掃除するのは手間だし、復活祭の事件でヒューズが粉碎した壁も未だ手付かずのままだ。

今日はこれを片付けるかと、床に散らばる破片に目を落とすヴィンセント。

そのとき唐突に玄関のチャイムが鳴った。

この時間帯に彼の家を訪ねるのは一人しかいない。そしてその一人は屋敷の荒れ具合やヴィンセントの格好を見て何かと小言を言う相手だった。

「開けてよヴィン！ 僕だよ！」

扉を叩く音とその声に渋々玄関を開けると、現れた親友のアルベルはやはり眉をひそめる。

「またそんな格好して！ ゴシップ誌の良いネタにされちゃうよ」

「こんな写真のせたって、売れ行きが下がるだけだろう」

「むしろ上がったよ……」

思わずため息をこぼしてしまつたのは、売上げはもちろんのこと、ヴィンセントの肉体に少なからず嫉妬しているからだ。

人々が思い描くヴァンパイアのイメージと言えば、不健康そうな顔色だとか、大理石の彫刻を思わせる冷たい肌だとか、とにかく寒々しいものが多い。

けれど日頃から訓練で鍛えているヴィンセントは、ヴァンパイアのイメージとは正反対だ。

周り比べれば確かに肌は白いが、ちゃんと日に焼けているし、鍛え抜かれた肉体には余分な脂肪が無く、元から長身なので体の線も崩れず美しいままだ。

体も小柄で、なかなか筋肉のつきづらいアルベールにとってヴィンセントはまさに理想の存在。

勿論騎士団に入ってから、アルベールも彼と同じトレーニングをしているのでだいぶ鍛えられた。

だがやはり持って生まれた体格差は埋められない。

「ともかく服着て」

「お前、俺を説教しにきたのか？」

めんどくさそうに頭をかくヴィンセント。

彼の言葉でアルベールは今更のように当たりをきよるきよると伺いでした。

「やっぱりいないか……」

「誰が？」

首をかしげるヴィンセントに、アルベールは周囲を気にしながら声をすぼめた。

「父上」

「はあ？」

思わず声が裏返ってしまったのは、もちろんアルベールの父上が普通の人ではないからだ。

「俺の家にいるわけないだろう」

「だけどヴィンなこと確かめたいことがあるってこの前話してた

んだ」

「心当たりはあるけど、一人でこんな所に来るわけないだろう」

コメディ映画じゃないんだからと笑うヴィンセント。だがアルベールの顔は浮かない。

「…ないよな？」

一向に笑顔が戻らないアルベールにさすがに嫌な予感を覚えると、アルベールが目をそらした。

「最近はなかったんだけどね」

「昔はあつたような言い方だな」

「あつたんだよ、よく」

アルベールの言葉に、ヴィンセントは静かに尋ねる。

「いないのか？」

「お昼を食べる約束をしてただけど、部屋はもぬけの殻で…」

それどころか宮殿のどこにもいなくてと、アルベールはうなだれる。

「ヴィンのこと誘いたがってたから、もしかして思ったんだけど」  
「きてないぞ」

「何か心当たりとかない？ 父上、最近よくヴィンの事話してたんだよ」

「俺の話？」

「前より構ってくれなくなつたとか、冷たいとか、いい話を持って行つても聞きやしないとか」

「…そういうば、先週見合い話を断つた」

そしてそのころからだつた。妙な視線を感じる事が多くなつたのは。

監視でもされているのだろうかと思つていたのだが、どうやらオチはもつと酷いらしい。

「あれか…」

「心当たりあるんだ」

「でも今日来てないのは本当だぞ」

辺りを伺うが、やはりそれらしき気配はない。

「近衛兵はこのことを？」

「みんな探してる。今夜はお客様も来る予定だし、それに最近何かと物騒じゃない」

誘拐事件も多いしと続けたアルベールにヴィンセントはため息をつく。

「俺も探した方が良さそうだな」

近衛兵よりは街には詳しいし、何より明らかに失踪の原因は自分である。

「3分で支度する」

「この大聖堂ドゥオモの歴史と建築様式を説明したまえ」

老人が発したその一言に、そびえ立つフロレンティアの象徴大聖堂ドゥの前に立っていたキアラの額を冷や汗が伝う。

ロマネスク様式。バロック様式。ロココ調。

建築様式に関する単語でキアラが知っている物と言えればそれくらいである。そして明らかに最後のひとつで無いことは確かだった。

歴史的建造物が並ぶフロレンティアに住んでいるとはいえ、キアラはその長い歴史の全て理解している訳ではなかった。

かつて学舎から始まったという国の成り立ちや、現在の政治形態や国王の名前くらいならわかるが、老人が指さすそれは国が興るよりも遙か昔に作られた建造物である。

そもそも、騎士学は死ぬほど勉強したキアラだが、それ以外のことはてんで駄目だった。騎士に関する事ならば網羅しているのだが、寺院の建築様式など気にしたこともなかったし、その知識を必要とする機会には運良く恵まれなかったのである。

「君は、それでもフロレンティア人かね」

黙っているキアラに向けられた嫌味に、すいませんと答えるほかない。

「自国の歴史も語れず、象徴となっている美しき大聖堂の建築様式すらわからないなんて、騎士の風上にもおけんな」

重ねられる言葉は正論である。そして正論を真つ向から受けるのがキアラだ。コレがレナスなら「そんなこと知らなくても国防くらい出来るわよこのクソジジイ」と逆ギレしてしまうところだろうが、キアラは心の底から打ち拉がれている。

「…すいません、私の勉強不足です」

「教養もなく色気もない、君は本当に駄目だな」

老人の言葉は、ただでさえ凹んでいたキアラの心を完璧に粉碎さ

せた。

うなだれたキアラをみて、老人は意地悪く微笑み、そして畳みかけた。

「そんなレベルで、よくもこの国の王子とつき合っていていられるな。まさか貴様、騎士の皮をかぶった魔女ではないのか？」

さあ言い返してみるとキアラに意地悪な笑みを浮かべた老人。

その直後、キアラがその場からフラフラと歩き出す。

「逃げると言うことはやはりそうか！ 魔女め、ついに本性を現したな！」

一人高笑いを浮かべる老人に、周りの観光客は何事かと白い目を向けている。

響く高笑いには、どこからどう聞いても悪役のそれだ。

周りがどん引きしているのも気付かぬままに笑い続けること約3分。さすがに息も切れ、それでも満足げな笑みをたたえ続けていれば、彼の耳に信じられない言葉が飛び込んでくる。

「混成様式でした！」

声の方を振り向けば、逃げたと思っていたキアラが笑顔と共に駆け戻ってくる。

「この大聖堂は、3つの様式が使われているんです。イタリア的なゴシック様式を基本に、丸屋根と採光部は初期ルネサンス建築、そして大聖堂西側の正面はネオ・ゴシックフアサード様式です。これは大聖堂が長い年月をかけて作られたことを意味しており、建設から140年以上もの歳月をへて今の形になったと言われています」

それから……と言葉を繋げようとしたキアラに、老人が慌てて待ったをかける。

「……もしかして、今唐突に走り出したのは」

「あそこのカフェのオーナーが教会オタクだったのを思い出して……。だから失礼とは思ったんですが、聞きに行ってきました」

ただやっぱり、ルネサンスとゴシックとネオゴシックの何がどう違うのかわからなかったんです、と謝るキアラに、老人は呻く。

「君、私の話を聞いていたか？」

「教養もなく色気もない、あたりからあまり……」

キアラの返答に老人の怒りは限界に達した。

「観光はもう良い！ 余は腹が減った！」

「よ？」

「聞かなくて良いところはばかり聞くな！ 良いから行くぞ！」

「でもせっつかくだし大聖堂ドゥオモの中を……」

「三流ガイドが一緒じゃ見ても仕方なからう」

老人の辛らつな言葉にキアラの心が再び折れる。そんな彼女を無視し、老人は持っていた地図を広げる。

「私はこの店に行ってみたい。今すぐ案内しろ」

「ここ、すごく高いですよ」

「君は水でも飲んでいればよい」

ここでもまた、キアラに拒否権はなかった。

## Episode 04 - 2 結婚出来ない理由

トマトソースの香りに誘われ、夢からさめたレナスは枕元の時計に手を伸ばす。

時刻は既に昼の12時を回っている。

結局二度寝をしてしまったとぼんやり思いつつ、寝癖もそのままに寢室を抜け出せば、馴染みの男が台所に立っていた。

「良いにおい」

「お前がつくれって言ったんだろう」

フライパンを傾けながらレナスを見て、そしてヒューズはため息をつく。

「顔洗って着替えてこい」

「家だといつもこうだし」

「客が来ててもか？」

「あんだ客じゃなくて執事だもん」

言うのが早いのが、できたてのトマトソースがかけられたラビオリを

つまみ、レナスは口に入れる。

「美味しい！」

「火傷するぞ」

「だってお腹空いたんだもん」

「すぐ出来るから待ってる」

宣言通り、居間の中央に置かれたテーブルに次々と並べられていく料理とワイン。

ソファーに座りながらそれを眺めていたレナスだが、結局ヒューズの許しを待てず、彼が皿を並べる横から料理に手を伸ばしていく。オーダーしたラビオリの他に、トマトソーススパゲッティ、ズッキーニのオムレツ<sup>フリッタータ</sup>、野菜スープ<sup>フセツカ</sup>、オリーヴアやプロシュットと言った酒のつまみがテーブルには並んでいた。どれも、レナスが好む物ばかりだ。

「このスパゲツテイ美味しい」

「昔から、トマト系の味すきだよな」

「うん。いつも作ってくれるアサリの奴、あれと同じくらい好きかも」

言いながら、あのスパゲツテイもまた食べたいとこぼせば、ヒューズがグラスにワインをつぎつつ苦笑する。

「次はそっちにするよ」

次という言葉に、レナスはほんの少し胸の辺りがむず痒くなるのを感じた。

レナスの我が儘にヒューズが答えるのはいつものことだが、最近はお互い忙しくこうして家でゆっくりと過ごす事は少ない。

休日が合うことはまれで、その上レナスは休みが来るたびに合コンに明け暮れていた。

アルベルと別れてからと言うもの、レナスは新しい恋人を作ろうと躍起になっている。最近では親からも圧力をかけられており、27になるまでに恋人がいらないなら見合いをしると迫られる始末だ。

もちろん、レナスだって好きで独り身でいるわけではない。だが結婚という単語を意識すればするたび、出会った男達の中に理想の相手を見いだせずにはいた。

むしろ、気の置けないヒューズとこうして飲んでいる方が、結婚に対するヴィジョンが見えてくるくらいだ。

「結婚するってこんな感じかな」

唐突な言葉に、ヒューズが思わずむせる。

「何その反応。私が相手じゃそんなに不満？」

「いや、唐突だったから」

「私だってね、結婚したらこうかなあとか想像くらいするの」

言ってからふと、我がなら誤解されそうな台詞だった事に焦る。

「もちろん、あんたとは絶対しないけど」

「言わなくてもわかってるよ」

つれない返事に何故だか怒りを覚えたが、レナスが不満を口にす

るより先に、ヒューズが呆れ声で言葉を繋げる。  
「ってか、お前の想像する結婚生活の中じゃ、料理をするのは旦那なのか」

言われて始めて、何の躊躇いもなくそう思っていた自分に気がついた。

「掃除も洗濯も全部やって貰うつもりだった」

「そう言うところお嬢様だよな」

「だって、男の人ってそういうの得意なのかと」

「んなわけあるか」

「でもヒューズは何でも出来るじゃない」

「そりゃあ、我が儘なお嬢様のオーダーに15年間振りまわされてきたからだろう」

本気で驚いた顔をするレナスに、ヒューズは頭を抱える。

「でもほら、最近は家事が出来る男性が人気だし」

「だからってお前のオーダーに全部答えられるスペックはそうそういないぞ。それに、需要があるからって、この手の物は供給が追いつく訳じゃない。みんなどこかで妥協するもんだ」

「でも結婚相手よ。一生付き合うのに」

「だからこそだろ。妥協し会える相手こそ、一生過ごせる相手だ」

ヒューズという言葉に、レナスは今更ながら恋を失い続けてきた理由を知った。

「私、高望みしすぎてたんだ」

「今更だなおい」

「だって、結婚相手はパーフェクトな人って思ってたし」

「なら貴族はどうだ？ 技能はなくても、需要を満たす使用人はいるだろう」

ヒューズが言うと、レナスは彼が作ったラビオリに目を落とす。

「そういうのは、やだ」

「でも色々と条件は…」

「私は、普通の夫婦生活がしたいの。食事も家事も他人に任せるん

じゃなくて自分の家族でやるの、それでご飯もいつも一緒に……」  
言葉を重ねるにつれて物言いが幼くなつていくレナスに、ヒューズはいつも一人で食事をしていた幼い彼女の姿を思い出す。

レナスの両親は貴族でありながら、国の重要な職務につく聖騎士であつた。それゆえ、レナスを家に置いたまま仕事で返らない日も多く、彼女はいつも家で一人だつた。

両親の前ではいつも聞き分けの良い子どもの振りをしていたが、一人になると、彼女はいつも両親を呼びながら泣いていた。自分に懐いたのだから、結局は常に側にいる存在が自分だけだつたからだ。ヒューズは思っている。

なにせ、一時期は寝るときまで側にいると、同じベッドに入り込んできたことまであつたのだ。

たくましいようで寂しがりやな騎士隊長は、親と子が当たり前に側にいる、そんな一般家庭の温かさが今でも欲しいのだ。

「じゃあ、お前も料理が出来るようにならないとな」

「…出来る人と結婚する」

「えり好みしてる時間無いんだろう」

言葉に詰まり、レナスはラビオリを大きな口でほおばつた。

「時間があるときで良いなら、教えてやるよ」

「あんたの方が忙しいのに」

「いつもは遠慮しないで」

「でも、私があんたのレシピ覚えたら……」

「覚えたら？」

「ヒューズ、もう私にご飯作つてくれないでしょう」

またえらいところに引つかかつたなど、ヒューズは呻く。

「だから、習うなら教室通う」

「別に、俺はそんな心の狭い人間じゃないぞ」

「けど、嫌々やつてるじゃない」

「嫌じゃないさ」

苦笑と共にほき出された言葉に、レナスは思わず彼を見た。

「こんなに美味しい美味いって言うてもらえるんだ、嫌なわけないだろっ」

向けられた微笑みに、何故だか胸が熱くなる。

その胸の熱には覚えがあったが、それは目の前の男とはほど遠い物のはずだった。

だからレナスは、勘違いだと心の中で繰り返し続ける。

「それにお前。そんなことを気にするくらいなら、もっと他に気にする所があるだろう」

着替えとか、と繋がれて、今更のようにレナスは赤くなった。

当たり前前に側にいたけれど、相手は便利な道具ではない。一人の男なのだと、今更のように自覚して、レナスは開いたままの足を閉じた。

そのとき、料理に向けられていたヒューズの視線が不意に玄関へと向けられる。

少し遅れて、響いたのは玄関の呼び鈴だ。

何故だか呼び鈴にホッとして、玄関へと駆け出すレナス。それをヒューズが慌てておっだが、彼女は躊躇いもなく玄関を開けた。

扉の向こうに立っていたのはヴィンセントとアルベール。二人はレナスの姿を見て、固まる。それどころかアルベールは鼻血を出して転倒する。

「ちょっと、どうしたのよ！」

とアルベールの側にしゃがみ込もうとしたレナスを、後ろから抱えて部屋に引き戻したのはヒューズ。

「やっぱりおじゃまでしたか？」

「こいつはいつもこんな格好だ！」

ヒューズの指摘にレナスはアルベールの鼻血の意味を知った。

Episode 04 - 3 生足の破壊力

「タダだと思ふなよ」

鼻にティッシュを詰めているアルベール。それと向き合うレナスは、騎士団の制服のズボンをはきながら目を怒らせていた。

「す、好きで見た訳じゃないのに……」

「私の足なんて見たくなかったってか？ ええ？」

低く抑えられた声音に殺意を感じ、慌てて首を横に振るアルベール。そのやり取りを見ていたヴィンセントは、進まない会話にため息をつく。

「アルベール、足の話はもういいから、そろそろ本題に入れ」

「僕だつて好きでしてる訳じゃないよ！」

「私の足は好きじゃないってか？ 太くてたくましくて目にも入れたくないってか？」

「そんなこと誰もいつてないよ！ むしろ今まで見た中で一番綺麗だったけど、足の美しさと性格の男らしさとの間に隔たりがありすぎて混乱したというか、脳が受け入れを拒否したというか、性的魅力を感じつつも未だ自分が見た物を信じられないというか……」

言葉を重ねるたびに墓穴を掘っていくアルベール。そしてもちろん、レナスの顔は怒りに震え始める。

「もういい、喋るな……」

とレナスの怒りを察知して、アルベールの口を塞いだのはヴィンセント。

ほぼ同時にヒューズがレナスを背後から拘束すれば、彼女は彼をつま先を三度ほど、骨を粉碎する勢いで踏みつけた。

「……で、用件つてなによ」

ヒューズの貴い犠牲により、ようやくレナスの怒りが治まったところで、話は始まった。

「実は、秘密裏に協力してもらいたい事があるんだ」

「なんか危ない話？」

「だったら嫌よとレナスは即答したが、アルベールは彼女の機嫌が悪くなる前に言葉を繋ぐ。

「国王が行方不明なんだよ」

レナスの予想より遙か斜め上に行く言葉に、慌てて返した声は若干うわずった。

「誘拐とかじゃないわよね」

「それはないと思う。身代金の要求とかもないし、実を言うところの手のことは良くある事だから」

「良くあるって、国王がいなくなること？」

「昔から、結構な行動派で……」

ヴィンセントとの一件を話せば、レナスとヒューズはあきれ果てる「行動派で片づけて良いのかしら……」

「前から、一人で街に出ることはちよくちよくあったんだ。ただ、今は状況があまり良くなって」

言いつつアルベールが広げたのは今朝の新聞。そこには、イタリヤ全土で貴族の誘拐が頻発しているという記事が大きく載せられていた。

「フロレンティアではまだ被害はないけど、万が一って事もあるし……。それに一応身なりの良い格好はしていると思うから、この手の輩に目を付けられちゃったら……」

「凄い身代金要求されそうね」

呑気な言葉に、アルベールが頭を抱えた。

「お金で解決するなら良いよ！ ってか誘拐されてもきつとヴィンとかヒューズさんが何とかしてくれると思うし！ でも一国の主がフラフラで歩いてるとか世間にはれたら、色々とイメーシダウンだよ！」

うちはずっと、歴史と伝統のある高貴な一族として、『なりたい王族ランキング』の首位だったのに！ と叫ぶアルベールから、他の3人はこっそり距離を置く。

「…そもそも、高貴な王族の長男はあいつだし」  
とヒューズが言えば、

「アルベールも高貴とはほど遠いじゃない」  
とレナスが続け、

「高貴な王族って言葉にツツコミが集中してますけど、他にも色々  
と問題があつたような…」

とヴィンセントがうなだれる。

「ともかく！一刻も早く父上を見付けなと！」

それだけは同意出来るので、渋々レナスとヒューズはアルベールの言葉に頷く。

承諾してくれた二人に頭を深く下げたのはヴィンセント。

「よろしく願います」

「あーあ、せつかくの休日だったのに」

「すいません。アルベールの言葉はともかく、信頼が置ける騎士に  
しか頼めないのも事実なので」

「……そのかわり、貸しひとつだからね」

レナスはヒューズの料理にちらりと目を向け、それから渋々重い腰を上げた。

それに目ざとく気付いたヒューズが、レナスの頭を軽く叩いた。

「また作ってやるさ」

「あんただってロクに寝てないんでしょ？」

「たたき起こしたのは誰だよ」

「私は良いのよ、私は」

勝手な言い草だが、一応心配しての台詞らしい。

「剣を取ってこい、すぐに出発するぞ」

大丈夫という変わりに背中を押して、ヒューズもまた剣を携えた。

**Episode 4 - 3 生足の破壊力(後書き)**

06/21 誤字修正しました(ご指摘ありがとうございました)

## Episode 05 - 1 トラットリアで昼食を

老人が指定した店は、アルノ川沿いにある有名なりストランテだった。

街の観光名所であるヴェッキオ橋を一望出来き、なおかつ味の良いいステーキを振る舞うその店は観光客に人気で、その日も平日だといふのに行列が出来ている。

「これは時間がかかりそうだな」

長い行列にため息をこぼしたのは老人。いくら足腰がしつかりしているとはいえ、大聖堂からの道のりを馬車も使わず歩いてきたのだ。その上1時間近く待つともなれば、さすがに体力は持つまい。

「しかたない、違う店に行こう」

そう言う老人の声は心の底から残念そうで、先ほどの罵詈雑言への苛立ちはありつつも、彼女は老人の手を引いた。

「良かったら、私のお薦めの店に行きませんか？」

「ちゃんとした飯が食えるんだろうな」

相も変わらず口が悪い。だが、キアラは気にしないことにした。

そもそも気にしていたら身が持たないし、日々口が悪い騎士達に囲まれている所為で、皮肉くらいであれば受け流す技術がある。

「この店、実は先月オーナーシェフが先代の息子さんに変わったんです。勿論味は同じですが、前のシェフが別の所トラットリアで軽食堂を開いてるので、よろしければそちらに」

そこなら空いているというキアラに、最初のうち老人はあれやこれや言い訳を付けてこねた。

しかしどんな頑固物でも、空腹には勝てない。

最後は、まずかつたらただじゃすまないと目を怒らせつつ、結局キアラについて行った。

アルノ川から離れ、アパートメントが軒を連ねる細いとおりの奥に、キアラの言うトラットリアがあった。

人気がないことに老人はやたらと警戒を示したが、中に入つてしまえば綺麗な店内には客も多い。

小さなバーを改装したらしいその店は広くはないが、子ども連れも多く見受けられ老人も警戒を解く。

「おお、キアラじゃないか」

店に入るなり、厨房から顔を出したのは恰幅のいい男。

「まだランチやってます？」

「もちろん。君が来るのを待ってたところさ」

調子の良いことを言つて、シエフのジーノは老人とキアラを奥の席へと案内する。

「それにしても、今日の彼氏はかなり年上だね。やけるよ」

自分の年を棚に上げて笑うジーノに、老人の案内をしていること告げるキアラ。

彼の店に行ったことを告げれば、ジーノは大層喜び、前の店を出していたコースを振る舞つてくれるという。

さすがにお金がないとキアラは辞退しようとしたが、老人はジーノに素早く頷いた。

「ではシエフのお薦めを二つ」

「ワインは？」

「そちらもお任せ出来るか？」

頷いてメニューを下げるジーノ。

そのやり取りを見ていたキアラに老人は、相変わらずの仏頂面のまま言葉を重ねる。

「ここは奢つてやる。後で案内料を請求されると困るからな」

口は悪いが、恩を仇で返す性格ではないようだった。

そう言えば席に着いたときも、ジーノよりも先にさり気なく椅子を引いてくれたのは老人。わかりにくいだが、本当は紳士的で優しい人なのだ。キアラは今更のように気付く。

苦手意識ばかりが先行して距離を置いていたが、こちらが心を開けば彼も少しは優しくなるかも知れない。

ほんの少しの勇気を出し、キアラは老人に目を向けた。

「そういえば、フロレンティアにはお一人でいらしたんですか？」  
キアラの問いに、老人は怪訝な顔だ。

「別に他意はないです。ただの世間話ですよ」

キアラが言えば、老人はようやく口を開く。

「一人だ。息子達は、最近あまり構ってくれなくてな」

「息子達って事は、何人もいるんですか？」

「ああ。皆自慢の息子達でな、私に似て頭も良く見目麗しく女子にも人気なのだ」

「たしかに、おじいさん昔はモテてだらうなあ」

「昔？」

ぎろりと睨まれて、キアラはすぐさま「今もです」と繋げる。

多少ギスギスはしているが、一度話し始めると老人は意外にお喋りだった。

出される料理とワインも気に入ったようで、デザートが運ばれてくる頃には警戒も解け、老人の方からもキアラに話を振るまでになっていた。

そんなとき、老人がそばの席を気にしていることにキアラは気付いた。

老人の視線の先には、彼と同じくらいの男とその孫らしき少年が座っている。

お爺ちゃん、お爺ちゃんソソと祖父との食事を楽しんでいる幼い少年に思わず顔をほころばせるキアラ。だが老人は何故か少し寂しげだった。

「お孫さん、いらっしやらないんですか？」

思わず尋ねると、老人は寂しげな顔のままワインをくゆらせた。

「みないい年をして結婚せんだ。一番良くしてくれる息子にも、見合い話を断られた」

一瞬睨まれた気がするが、理由はわからないのでここはふれなくておく。

「一番上の息子には子どもがいるようだが、あいつが若いときに勘当してしまった建前会いにも行けん。…このままじゃ、死ぬまで孫の顔はみれんじやろう」

勘当という言葉に、何気なく思い出されたのは自分の父の事だ。

「意地をはずずに会いに行ってみたらどうですか？ 意外と、勘当された方は気にもしてないかもしれませんよ」

「君に何がわかる」

「私の父が勘当された方ですけど、祖父のことを恨んでいるとは言っていないでした。かなり拗れて別れた方だとは思っんですけどね」

キアラの言葉に老人は少し驚いた顔をする。

「じゃあ、君は自分の祖父にあつたことがないのか？」

「会ってみたいけど、お忙しい方みたいですね。それに、うちの家庭は結構複雑で、会いたくてもそう簡単には会えなくて」

微笑みながら、キアラは老人に目を向ける。頑固で口が悪くて意地悪だけど、それが逆に想像の中のノンノと似ていて、長年の夢が叶ったような気がしていた。

「ノンノって、いつかは呼んでみたいんですけどね」

でも無理かなあとこぼすキアラのグラスに、老人がワインをつぎ足す。

「私も、死ぬ前に一度は呼ばりたい」

「なら長生きしなきゃですね」

向けられた微笑みと言葉に、老人は思わず目を奪われた。

色気もかわいげもないと思っていたが、穏やかなその笑みは彼の心を暖かく解かしていく。

それどころか、キアラの優しい瞳に亡き妻の面影までよぎる始末だ。

「君が魔女だったら、私に勝ち目はないな」

降参とばかりに頭を抱えれば、キアラはきよんとした顔で小首をかしげる。一度可愛いと思ってしまうと、こういう何気ない仕草

からも目が離せなくなるから不思議な物だ。

けれど老人は、それを必要以上に警戒しなくなっていた。

「なんでもない。それよりも、君にひとつ聞きたいことがある」

「何ですか？」

「どうやって王子を落としました？」

唐突な質問に、キアラはあわてふためく。

「なんだ、人に話せないことか？」

「いや、話しても信じて貰えるかどうか」

キアラの言葉に老人は不審そうな顔をする。だが誤魔化しては貰えそうもなく、キアラは渋々出会いを語り出す。

「王子様と出会ったのは合コンでした」

そしてキアラは、老人の爆笑に耐えながらヴィンセントとの馴れ初めを話す羽目になった。

**Episode 5 - 1 トラットリアで昼食を（後書き）**

06/21 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

2時間のコース料理を堪能し、機嫌を良くした老人と共に店を出たのは午後2時を過ぎた頃だった。

庶民的なトラットリアでコース料理を食べるのは不思議な感じがしたが、元三つ星レストランのシェフだけあって、味は一級品。味も見た目も美しく繊細なのに、もらった皿とそれが載るテーブルが激しく安物というのはおかしかったが、そこが新鮮で良かったと老人は大満足だ。

「素晴らしい昼食だった」

「何よりです」

「あと面白い話もありがとう」

「信じてないですね」

「王子と合コン、それによりにもよって君のような女が選ばれるなんて話を信じると?」

老人は相変わらずキツイ。だが笑顔で言ってくれるだけ食事の前よりマシかも知れない。そう思いつつ次はどこに案内しようかと迷っている、彼女のイヤリング型の通信機が弱々しく光った。

慌てて通信に切り替えるが、声が遠くてよくきこない。

このあたりは昔、魔法術の学舎があったところだ。魔法を一所で長く使い続けると地場が歪み、小型の機械製品が上手く作動しないことがあるので、原因はそれだろう。

もしトラットリアにいたときから呼び出しがかかっていたら大事だと思い、キアラは老人に向きなおる。

「少しだけ、ここで待っていて貰えますか?」

老人が頷いたのを確認して、キアラは通りを駆け出す。

通りを200メートルほど走り、小さな土産物屋の前に来てようやく、遠のいていた声が近づいた。

「もうっ！ あんたどこにいるのよ」

「すみません、通信が入らない店だったみたいで」

「まだ変なじいさんの観光案内？」

「変ですけど、いい人ですよ」

「悪いけど、優先事項が出来たの。じいさんはそこら辺の騎士に預けてくれる」

「事件ですか？」

「国の重要人物が行方不明」

たしかにそれは大事件である。

「まあ今のところ誘拐とかはなさおうだけど、すぐに探して」

「どなたですか？」

「国王陛下」

キアラの時間が止まった。

「色々思うところはあると思うけど、とにかく探して」

さすがに顔は覚えているわよねと念を押され、キアラは少し自信がないと素直に答える。

新聞やテレビでは見たことがあるが、本人の警護はしたことがない。それにもし変装でもされていたら、探すのは骨だ。

「なんだつたら、土産物屋でポストカードでも買いなさい。王子達の間、売れ残りが沢山あんでしょ」

言われるがまま、目の前の土産物屋に入った途端、キアラは思わず赤くなる。

そこで売られていたのは、笑顔がまぶしいフロレンティアの王族達が写った土産用のポストカードだ。

一番の売れ筋はヴィンセントなのか、種類も豊富で、中には明らかに隠し撮りされたものまである。そしてこれこそ、キアラの頬を染めた元凶だ。

「こんな物売ってたんですね」

爽やか笑顔で写っているポストカードの値段を、思わず確認してしまうキアラ。

「最近ハンサムな王子って流行らしいのよね。雑誌とかでも特集く

んでハンサム王子ランキングとか出しちゃうくらい」

そしてその上位に、性格はともかく顔が良いフロレンティアの王子達は入っているらしい。

「結構多いのよ、王子目当ての観光客」

とはいえこの種類の豊富さは尋常ではない。よくよく見ればポストカードだけでなくステッカーやカレンダーと言ったグッズまで売られており、レナス曰く売上げはかなりの額になるそうだ。

さすが、観光で栄えている国は王族の使い方もえげつない。

「多分国王のもあるでしょう、割とアップの奴」

王子達に紛れて、やたらと売れ残っているそれを手に取るキアラ。そのとき、通信機の向こうの話し手が変わる。

「キアラか？」

その声に思わずキアラは悲鳴を上げる。

「彼氏の声を聞いてカエルがつぶれるような声を出すな」

「いや、その…」

「今、ポストカードを持つてるか？」

「はい」

「国王は多分髭を剃ってるはずだ。あと髪はツラだから、本当はもつと額が後退している」

言われるがまま、指で豊かな顎髭を隠した途端キアラは更に息を呑んだ。

「今すぐコスタ・サン・ジオルジョ通りに来てください！」

「騎士団のすぐ裏手じゃないか」

「とにかく今すぐに！」

それだけ告げて、キアラは元来た道を駆け戻っていく。

だが店の前に老人の姿はない。慌ててトラットリアにはいるが、老人は影も形もなかった。

「よりにもよって…」

顔を覆い、キアラはうなだれた。

思わず持つてきてしまったポストカード。そこに写る老人は、先

ほどこまで彼女をいじめていた彼にそっくりだった。

Episode 6 - 1 老人を追って

「すいませんでした」

頭を下げるキアラに、事情を知った4人は彼女を諷める。

「さすがにそんな不審者が国王だとは思わないわよ」

「けどずっと側にいたのに」

「始めて会ったならわからなくて当然だ。それよりまだ近くにいるかも知れない、すぐに探そう」

ヴィンセントの言葉に少しだけ気持ちを浮上させつつ、キアラは頷く。

「ヒューズ、国王の姿探せる？」

キアラが落ち着いたのを見計らって尋ねたのはレナス。その言葉に、ヒューズが静かに目を閉じる。

「あの、探せるって？」

尋ねたのはアルベール。ヒューズの集中を途切れさせないように声を押さえながら、レナスが答えた。

「こいつの目は特殊でね、一所にいながら他の場所を見通すことが出来るの」

「凄い魔法ですね」

「キアラ、国王の服装は？」

レナスの問いかけにキアラが素早く答えれば、ヒューズが見付けたと目を押さえる。

「まずいな、人相の悪い奴らに捕まっている」

「噂の誘拐犯？」

「わからん。だが、古い映画館見える」

「敵の人数は？」

ヒューズが答えようとした直後、彼の口から苦悶の声が漏れる。目を押さえ、その場に膝をつくヒューズ。

その指間だから赤い血が零れた。

「すまん、特定する前に眼をふさがれた」

慌ててレナスが手をどけさせれば、ヒューズの眼から血の涙がこぼれる。

「酷い」

「犯人の中に魔法使いがいるようだ」

ヒューズは言うつと、最後に見た光景を告げる。

「古い映画館つて事は、チネマ・オデオンかもしれませんが。あのあたりは改装中の建物が多いので、身を隠せる場所が多い」

キアラの言葉に、騎士達は素早く行動を開始する。

アルベールは素早く近衛兵に応援の連絡を入れ、レナスはヒューズの眼に包帯を巻きつつ部下と騎士団長のヴィートに連絡を入れる。後で合流すると告げた3人をその場に残し、一足先に駆けだしたのはキアラとヴィンセント。

裏道に詳しいキアラの案内で、最短ルートで映画館まで向かえば、ヒューズが言った通り、建物の周りには柄の悪い男が立っている。

「当たりだな」

「でも正面から乗り込むのは危険そうですね」

敵の数を数えていたキアラ。だがヴィンセントは男達ではなく視線を上へと向けた。

「あそこから入ろう」

ヴィンセントが指さすのは、屋根の上についた小窓だ。小さいが、確かに敵の影は見えない。

「でもどうやってあそこまで上がります？」

「跳べばいい」

言うのが早いか、ヴィンセントはキアラを抱き上げる。

久しぶりのお姫様だつこに叫びだしたい衝動をこらえるキアラ。それをおかしそうに見ながら、ヴィンセントは地面を蹴った。

響いたのは軽い足音、だが二人の体はあつという間に屋根の上まで飛び上がる。

「その脚力は、うらやましい……」

瓦屋根に着地したヴィンセントにキアラが思わずこぼす。

「うらやましいって……」

「だってそれだけの脚力があれば、スリも逃がさないですみそうです」

「人前では早々使えないけどな」

王子が人外の存在、それもヴァンパイアだと言うことは、表向きには知られていない。

元マフィアだと言うだけで風当たりが強いので、それ以上の波風を立てないためだ。

「でもやっぱりうらやましいです。まるでヒーローみたいで」

「ヴァンパイアをヒーロー呼ばわりするのは君くらいだぞ」

「でも、これから国王を助けに行くんでしょう？」

だったらヒーローですよと言うキアラに、ヴィンセントは思わず吹き出した。

「ヴァンパイアをこき使う君の方が、よっぽどヒーローに見えるけどな」

「ヒーローの器じゃありませんよ。蜘蛛の糸とかも出ないし」

真面目に返すキアラがあまりに可愛くて、ヴィンセントは思わず抱きしめたくなったが、悠長なことをしていると中の国王に怒られるので、ここはぐっと我慢する。

「じゃあ、ヒーローになりに行くか」

ヴィンセントの言葉に頷くキアラ。

そして二人は音もなく瓦屋根を駆け、映画館の入ったビルの屋根へと飛び移った。

## Episode 06 - 2 働かないのも困りよう

チネマ・オデオン。

現在改装中のその映画館は、古い宮殿の中に作られた物だった。フロレンティアでは歴史的な景観を後世に残すため、新しい建築物を建てるのが禁止されている。

そのため使われなくなった宮殿などが、新しい娯楽施設やリストランテに改装されることがこの街では多い。

チネマ・オデオンはその代表で、スクリーンと客席はもちろんあるが、宮殿として建てられた当時の彫刻やタペストリー、そして中央のステンドグラスやクーポラはしっかりと残っているため、映画館と言うよりはオペラ劇場を思わせる。

しかし近年、ステイツを中心とした映画スタジオは魔法を撮影に取り込む大がかりな映画を取るようになり、フィルムにさえも特殊効果を生み出す魔法をかけるのが流行だ。

それらの効果を引き出すには、古い建物とスクリーンでは不十分。そのためチネマ・オデオンも、最新の映画への対応と建物の修繕のため、改装することになった次第である。

とはいえこの国は、とにかく仕事が遅い。

街の治安に関わる騎士団ならともかく、休憩時間と休日とデートの時間がないと働かないのがフロレンティア人だ。

それ故休暇の時期とかぶったここ数週間は工事がストップしており、それに目を付けた誘拐犯達が一時的な根城にここを選んだようだ。

劇場内が一望出来る映写室に入ったヴィンセントとキアラは、犯罪者の巣窟とかがしている内部に思わずため息をこぼす。

敵の数は30人近く。そして彼らを取り巻く劇場の奥、スクリーンが置かれた舞台の前には、縄で縛られた貴族達10人ほどが集められていた。

このまま突っ込んで、逆に人質を盾にされ身動きが取れなくなるのは目に見えている。

しかし応援を待っている間に老人の素性がばれたら大事だ。

さてどうしようかと顔を見合わせたとき、唐突に映写室の扉が開いた。

剣を構えた二人の前に現れたのはヒューズとレナスとアルベール。

「ヒューズさん達も上から？」

ヴィンセントが尋ねると、ヒューズが肩を回しつつ頷く。

どうやら、二人を抱えてヴィンセントと同じ事をしたようである。目にはまだ包帯が巻かれていたが、彼の動きは目が見えているときと何ら変わりはなく、ヴィンセントも舌を巻く。

「敵は？」

「30人弱です」

尋ねたのはヒューズ、答えたのはヴィンセントだった。

「外とあわせると40近くいるな」

「一瞬で片を付けるには少々多い」

この数を少々といえる当たり、二人の話は次元が違う。

たしかにこの二人が本気になれば、竜だってひとひねりだ。今回も人質さえいなければ無傷で全員捕縛してしまうところだろう。

「位置がバラバラなのも面倒ですね」

さすがに敵の立ち位置まではわからないヒューズに中の状況を伝えれば、ヒューズもヴィンセント同様顔をしかめた。

だがその点は問題ないと声上がる。

「この劇場後方と左右に4つ扉があるの。そこから一気に突入すれば敵の注意も分散出来るし丁度良いんじゃない？」

扉の位置を指摘したのはレナスだ。

「良くデートで使ったから、間取りはばっちり把握してるの」

「でも、僕は連れてってくれなかった」

と空気を読まずしよげているアルベールにレナスが呆れる。

「王子様が映画なんて見るとは思わなかったのよ」

「なら今度連れてって」

「あんだ、恋人作らない宣言はどうしたのよ」

「なんか、他の男がしていることを僕だけしてないのって我慢出来ないんだ」

良いながら、アルベールがハツとした顔でヒューズを見る。

「ヒューズさんはレナスさんと映画を見たことは？」

「この男が一番回数多いわよ。彼氏と行けない映画には無理矢理連れてくし」

清楚なお嬢様キャラで売っているため、男臭いアクション映画や、年柄もなく絶叫したいときに見るホラー映画はデートにはつかない。そのためヒューズが呼び出される機会は多いようだ。そして話を聞きながら、アルベールが悔しそうに唇を噛む。

「僕も、ホラー映画でレナスさんに抱きつかれたい」

「言っておくが、映画代もジェラート代も出すのは俺だぞ」

その上抱きつくと言うより絞め殺す勢いで腕を回され、次の日は必ず筋を痛めるのが常なのだという。

「これを羨ましいというなら、むしろ代わってくれ」

その言い方が気に入らないのか、ヒューズを殴り飛ばすレナス。そのやり取りもまた、羨ましそうに見ているアルベールに、ヴィンセントとキアラは呆れてしまう。

最初の関係から考えると、よくここまで仲良くなった物だと感動する一方、時も場所も顧みず騒ぎ出す彼らにヴィンセントはため息を重ねた。

「デートのプランは終わってから練ってくれ」

「レナス隊長もそろそろヒューズ隊長の首から手を離してください。大事な戦力が作戦前に死んでしまいます」

実際、既にヒューズの息は止まりかけていた。

## Episode 07 - 1 闇の中の戦い

始まりは女の絶叫だった。

どこかノイズ混じりの絶叫に誘拐犯達が驚いた直後、場内の明かりが落とされ、スクリーンに泣き叫ぶ女の姿が映る。

それは有名なサスペンス映画のワンシーンで、不気味な効果音と合わり場内は一時騒然となった。

直後、暗闇の中で5つの影が動いた。

襲撃だと彼らが気付く前に、倒された男達の数は訳半数。

皆一様に武器は持っている。

だが暗闇に目が慣れない上に、人間離れた人影が二つ、入り組んだ座席の間を獣のように駆けていく。

響くのは一方的な絶叫と剣の打ち合う音。

それに怯えだした人質の中、一人静かに微笑んだのは老人だった。時折スクリーンをよぎる影のひとつには見覚えがある。あんな化け物じみた動きが出来るのは、彼が最も信頼を置く息子しかない。

「助けに来ました」

闇に目をこらしていると、聞き覚えのある女の声が耳もとで聞こえる。

「遅いぞ」

思わず皮肉を口にする、すいませんという言葉と共に、腕を縛っていた縄が外された。

「ここは私に任せて、陛下を外へ」

もう一つの声に礼を言い、老人は腕を引かれるがままスクリーンの裏手に回る。

非常用の出入り口から劇場を出れば、そこは細い裏路地だった。

ゴミを集める巨大な鉄のゴミ箱やモップと言った掃除用具が置かれているせいか、どこことなく異臭が漂ってくる。

「おけがは？」

問題ないと老人は答える。

「君は、意外と頼りになるんだな」

「あなたに死なれると困りますので」

「どうやら、素性はばれてしまっているようだな」

「写真で見るより髪がないのでわかりませんでした」

キアラの素直すぎる告白に老人、いや国王はムツとする。

だが彼が言葉を換えそうとしたとき、キアラが彼を側のゴミ箱に投げ入れた。

突然の事に驚く国王の耳に響くのは剣を薙ぐ音。

ゴミ箱から顔を出せば、キアラの前には剣を持った屈強な男が立っている。

その上、背後からも一人、剣を持った男が迫っていた。

狭い路地で挟み撃ちにされれば、彼女一人では対応しきれない。

「まったく」

そう言ってゴミ箱に手をかけ、国王は若い騎士顔負け身のこなしでキアラの後ろへと舞い戻る。

啞然としたキアラの前で、国王は側に置かれたモツプを手にした。

それを素早く手の中で回転させ、キアラの背後に迫っていた男の剣を弾き落とす。

そのまま男の懐に忍び込み、国王はモツプの柄で男の顔面にキツイ一撃を喰らわせる。

軽い動きでこなしているが、その動きは戦闘に慣れたキアラでさえ目で追うがやっととなくらい早い。

啞然としているのはキアラだけではない。

キアラと対峙していた男も、目の前の老人が仲間を倒したことに驚き、思わず動きを止めた。

だがその一瞬をつき、国王はモツプを支えに男に蹴りを繰り返した。ドロップキックと言う奴である。

受け身を取る間もなく転倒した男は、そのまま意識を手放した。

「私はこの国の王だぞ。身の安全も確保出来ないのに、外を歩く

よくな身勝手な真似はしない」

得意げな国王にキアラは呆れるほかない。

「でも捕まってたじゃないですか」

「そうすれば君の化けの皮が剥がれると思ってね」

微笑んだ国王。その目が二人をおってきたヴィンセントをとらえた。

「ご無事ですか？」

「この子のお陰だ」

「というより、陛下がお一人で倒してしまいました」

国王とその腕のモップに目をやり、ヴィンセントはあきれ果てる。

「いい年なんですから、無茶はしないで下さい」

「これくらいへでもない！」

と意気揚々とモップを振りまわす国王。

「…ぎっくり腰が再発しますよ」

苦言を示したのはヴィンセントで、年寄り扱いするなどと答えるのは国王。

トラットリアでは愚痴をこぼしていたけれど、二人の仲は悪くないようだった。

笑顔で言葉を交わす二人とほんの少し距離を置き、キアラは思わず微笑んだ。

## Episode 07 - 2 異形を求める者

だが穏やかなやり取りは、ほんのつかの間だった。

体が震えるほど周囲の魔力が高騰したかと思うと、側の壁が崩れ、不気味な蔦のような植物が3人へと伸びていく。

切り裂こうと剣を構えるが、それよりも早く蔦は彼らを掴み壁の内側へと引きずり込んだ。

「たった5人か。予想より少ないな」

体を引きずられた痛みにはキアラが呻いていると、その側に一人の男が近づいてきた。

男の後ろには、キアラ達と同じように蔦で拘束されたレナスとヒューズ、そしてアルベールの姿がある。

肩までにのびる白髪と、魔法使いが好む全身を覆う長いローブが印象的な男は、キアラと国王、それからヴィンセントに目を向ける。それまでは冷淡だった男の顔が、ヴィンセントをとらえた途端、卑しく歪んだ。

「不死者か、それも上物の」

体に巻き付く蔦の所為で身動きが取れないのを良いことに、男は持っていた杖でヴィンセントの体を転がす。

「何者だ」

睨み上げたヴィンセントに、男はにこやかな笑顔を浮かべる。

「コレクター、とでも言っておこう。それより良く顔を見せてくれ」  
卑しい手つきで指を折れば、ヴィンセントに巻き付いた蔦が彼の体を引きずり上げる。

どうやら、蔦はこの男の手によって生み出され、それを操っているのも彼のようだった。

「赤い瞳とこの芳醇な血の香り。お前、シチリアーノのドン＝ルチアーノから血を分けた物か」

「だとしたら何なんだ」

「ドンの血を引く者を探していたんだよ。マフィアなんて野暮な商売を始めた所為で、ドンと血の掟オルメタを交わした不死者は、殆ど灰にされてしまったからね」

「ずいぶんとマフィアに詳しいじゃないか」

「ヴァンパイアのような希少価値のある生き物を集めるのが趣味なんだ。ここに着たのも、フロレンティアにドンが潜んでいるという情報を得てね……」

そこで値踏みするように、男はヴィンセントの体を卑しい眼で観察する。

「けれど、年老いたヴァンパイアより君の方が良いね。若いし見た目も美しい」

「男に褒められても嬉しくないな」

そう言っ て身をよじれば、男はむしろ嬉しそうに喜ぶ。

そのとき、唐突に二人に間に入った影があった。

「貴様のような虫けらに、息子を渡すわけにはいかんな」

いつの間にか鳶から抜け出していたのは国王。その手には短いナイフが握られている。

「どきなよジジイ」

「私をジジイ呼ばわりするとは、良い度胸だな」

言いながらナイフを振り上げれば、男は素早くヴィンセントの側から後退する。

かわりに、ムチのようになつた鳶が国王へと迫つた。

「陛下、ナイフを！」

叫んだのはキアラ。声に導かれるまま彼女の手元にナイフを投げつければ、それを受け取つたキアラが自身の鳶を切り裂く。

転がるようにツタから抜け出たキアラは、国王を庇うように剣を構えると、後ろ手でナイフを返した。

「ヴィンセント様の鳶を斬って！」

迫り来る鳶の動きを目で追いながら、キアラは国王に攻撃が及ばないよう、手にした剣で鳶を切り裂いていく。

その隙に国王がナイフを振り上げるが、それよりも早く、更に太い蔦がヴィンセントの体に巻き付いた。

「そう簡単に返すものか」

鋼のように堅くなつていく蔦に弾かれるナイフ。

その中ではきつく体を圧迫されたヴィンセントが苦痛に顔を歪ませた。

「あの術者をどうにかせんとだめそうだ」

国王の指摘にキアラは男に目を向けるが、迫る蔦の勢いに押され、攻撃に出る余裕はない。

防戦一方のキアラと、激痛に喘ぐヴィンセントを前に、国王はきつく拳をにぎる。

勝利を確信し微笑む男、その笑顔をにらみつけながら、国王は手にしたナイフを持ち直し、蔦に視線を走らせた。

攻撃の勢いが緩まる一瞬を狙い、国王は男へとナイフを投げる。

蔦と蔦の僅かな間を走るナイフ。ねらいは僅かに外れたが、鋭い刃は男の肩に深く突き刺さった。

痛みに悲鳴を上げながら、男は国王に殺意を向ける。

だがそれを、男の物よりも更に冷たい殺意が跳ね返した。

「言つたはずだ、余の息子に手を出すなと」

口調は静かだが、国王の言葉は空気と男を震えさせる。

「余はもう、二度と息子を失うわけにいかんだ。もしこれ以上続けるというなら、八つ裂きにされてでも、余はお主を叩き潰す！」

「なら、試してみるがいい！」

男の魔力によつて、床を破り更に太く鋭い蔦が次々と生み出される。

それら全てが向かうのは国王の元。

竜を思わせる動きで猛襲したそのすべてを、ナイフ1本で防ぐのは不可能だ。

それでもひるむことなく、立ち続ける国王。その前に、剣を構えたキアラが飛び出した。

どけと国王が叫ぶ前で、キアラの体を鳶が貫く。剣とキアラの技量を持ってしても、全ての鳶を切ることは敵わなかったのだ。

血を流し、それでも剣を構え続けるキアラを国王が支える。

「無茶をするんじゃない！」

「それはこつちの台詞です……。身の安全…全然確保できてないじゃないですか…」

攻撃の第二波を剣で退けながら苦笑するキアラ。だが第三波までは、持ちそうもなかった。

剣をはじき飛ばされ、それでもなお立つキアラに迫る鳶の刃。

今度こそ駄目かと思われたそのとき、ヴィンセントをとらえていた鳶が軋んだ。

気がつけば苦痛に喘いでいたはずの声が、獣の咆哮を思わせるそれへと変わる。

直後、鳶を引きちぎり、怒りと殺意の炎を目に宿したヴィンセントがキアラの前へと飛び出した。

攻撃はない。だが、鳶の刃をその身で全て受けきり、ヴィンセントは怒鳴る。

「無茶なのは君もだ！」

人を越えた力で鳶を体から引き抜くヴィンセント。酷い出血でありながらも、彼は揺らぐことなく立っている。

「さすがにドンの血は強いな」

「強いのは、俺の血だけじゃないさ」

キアラ達を護るように剣を構えるヴィンセント。そんな彼を我が物にしようと思いを募らせた男は、今一度腕を掲げ地面から無数の鳶を生み出していく。

だがその背後に、黒い影がしずかに忍び寄っていた。

気配を感じ、振り向いた男の手に食らいついたのは一匹の獣。

巨大な狼を思わせるその生き物に、男は慌てて杖を振る。

地面から飛び出した鳶を避けるために獣が後退すると、男は恐怖と喜びを織り交ぜた笑顔で叫んだ。

「不死者の次は狼男か！」

「今時、獣人くらい珍しくもねえだろ」

獣の声に、ハツとして顔を上げたのはキアラ。

ヴィンセントの側に着地した途端、獣は人の形を取った。

だが厳密にはそれは人ではない。人と、そして竜を思わせる姿へと変貌した異形の者は、恐ろしく禍々しい爪で鳶を切り裂いていく。

だが、醜い外見の異形を見たキアラとヴィンセントは、むしろその姿にホツと胸をなで下ろす。

「本気になるのが遅すぎです」

ヴィンセントの言葉に、お前もだと答える声はヒューズの物だ。

並び立ち、新たに出現した鳶をあつという間に切り裂いた二人を、誰よりも真剣に見入っていたのは男だった。

「獣、そして竜……！ いや、それだけじゃない……！ 貴様、いったい何匹化け物を飼っている！」

ヴィンセントからヒューズへと視線を移した男は、とりつかれたように彼へと腕を伸ばす。

それに合わせて再び迫り来る鳶の嵐。

だがヒューズとヴィンセントに死角はなく、男が欲する人外の動きで彼らはそれらを軽々と切り裂いた。

それまでと形勢が逆転し、戦いは一気に終幕へと向かう。だが男の目は狂気を宿したままだった。

「素晴らしいな。これこそ私が求めていた存在だよ」

興奮を抑えきれないといった様子で叫ぶ男に、ヒューズが顔をゆがめた。

「目が見えなくて良かったよ。あんな変態、視界にも入れたくない」「いずれ嫌でも、私だけを見るようにしてやるさ」

鳶の向こうから聞こえた声に、ウンザリするヒューズ。

だが彼が黙れと忠告するより早く、男の口から悲鳴がもれた。

「あいつに好きかってして良いのは、私だけなのよこの変態クソ野郎」

腕を押さえてしゃがみ込む男に、剣を突きつけているのはレナス。  
「貴様等いつのまに」

「僕、あなたと同業種なんで」

いつのまにか、男の杖をアルベールが握っていた。どうやらレナスの剣によつてはじき飛ばされたそれを、ちゃっかり回収したらしい。

「…悪しき魔法よ、我が手により良き力へと変われ！」

魔力を秘めた言の葉で空気を震わせれば、キアラ達を取り巻いていた鳶は方向を変え、今度は男を縛り上げる。

「ちゃんと魔法使えたのね」

と失礼なことを言うレナスに唸りつつ、アルベールは杖を手に男へと近づいた。

「まだやるつもり？」

「…さすがに甘く見すぎたか」

アルベールを見つめる目は怒りに満ちていたが、男の声に焦りの色はない。

それを訝しく思いつつ、構えを解いたヴィンセントとヒューズ。

男はそんな二人を、じつと見つめた。

「けれど私は諦めん」

ふつと笑うと同時に、唐突に男の体から力が抜ける。

蔦の中で意識を失う男に、駆け寄るアルベール。

男の体に触れたアルベールは、先ほどまでの荒々しい魔力が男から消失している事に気付く。

「逃げられたみたい」

どういう事だとヴィンセントが尋ねると、アルベールは杖に目を落とす。

「体と心を操る魔法の名残がこの人に残ってる。たぶん、誰かがこの人を操ってたんだ」

「と言うことは、真犯人は別にいるのか」

「それもかなり強い魔法使いだよ。人の心に進入するなんて、並の

魔法じゃない」

アルベールの言葉に不安は残るものの、彼曰くそう何度も使える術ではないそうだ。

「ひとまず、脅威が去ったことだけでも良しとしよう」

ヴィンセントの言葉に、一同は剣を収める。

そんな中、キアラとヒューズの二人が力尽きたようにその場に崩れ落ちた。

キアラにはヴィンセントと国王が、ヒューズにはレナスとアルベールが駆け寄る。

「無茶しすぎよ!」

最初に怒ったのはレナスだった。人へと回帰するヒューズの肩を乱暴に叩く彼女に、ヒューズが力無く笑う。

「さすがに、睡眠不足の時にやるもんじゃないな」

「変身は一回だけってお父様とも約束したでしょう」

「でも蔦がきつくて人のままじゃ抜けなかったし」

「とにかく、今後はワンコにもトカゲになるのも禁止!」

ワンコとトカゲ扱いは釈然としなかったが、向けられたレナスの瞳が僅かに潤んでいることに、ヒューズは気付いてしまう。

「わかった、もう無茶はしない」

ヒューズがそう言って、レナスの頭を撫でる。その仕草があまりにも親密に見えて、側にいたアルベールが二人を引き離そうと思わず腕をのばす。だがその直後、ヴィンセントの怒鳴り声がアルベールの変わりを果たす事となった。

「頼むから、行動する前に自分が人間だって事を思い出してくれ」

ヴィンセントの腕の中で小さくなっているのはキアラ。

「だけど、陛下が怪我したらって思ったら体が……」

「そもそもあなたも、勝ち目のない戦いで無駄に喧嘩を売るのはやめて下さい!」

「お、男には引けない戦いがだな……」

「それで彼女まで死んだらどうするつもりですか!」

ヴィンセントに怒鳴られ、国王もまたキアラと同じく肩身を狭くする。

「気を付けます」

最初に謝ったのはキアラ。その体をヴィンセントがきつく抱きしめる。

むせるほどの血のにおいに、彼の中の吸血衝動が高まっていく。

だがそれでも、彼女を離すことはしたくなかった。

そのとき、ようやく応援の騎士が劇場内に駆けつけた。

先頭に立つのはヴィート。その姿に、国王の表情が僅かに曇る。

国王の表情の変化に気付いたキアラ。彼女は残った力を振り絞り、国王の背を押した。

「良い機会ですよ」

その言葉と視線に国王はハツとしてキアラを見上げる。だが国王が声をかけるのを躊躇っているうちに、ヴィンセントがキアラを抱き上げた。

「ヴィート騎士団長」

声をかけたヴィンセントに、ヴィートはキアラに視線を落とし、そして何も言うなと呟く。

「アレッシオの所に運んでやってくれ。俺は、あそこのハゲを城まで送り返さなきゃならん」

だがその前にと、ヴィンセントの腕の中のキアラをヴィートは撫でる。

「ちゃんと、お爺ちゃんおじいちゃんの事護りましたよ」

ささやかれた言葉に、ヴィートは良くやったと彼女の頭を撫でた。僅かなやり取りだったが、国王は二人のやり取りでキアラの正体を悟ったようだ。

「あの子は…」

近づいてきたヴィートに尋ねれば、彼は得意げに微笑む。

「うちの自慢の騎士ですよ」

「それだけじゃないだろうー！」

「それ以上のことを聞きたかったら、今は俺と一緒に城に戻って下さい」

遠慮のない物言いで、国王に手をさしのべるヴィート。

「お前の手を借りなくても、一人で帰れる」

だが素直ではない国王は、ヴィートの腕を払って立ち上がった。

だがその体が、不自然に傾ぐ。

「そついう所、昔からの悪い癖だ」

国王にだけ聞こえる声で言つて、ヴィートは彼を支えながら歩き出す。

自分を力強く支えるヴィートの腕に、国王はその身をゆだねる他ない。

最後の抵抗とばかりに不機嫌な表情を顔に貼り付け、国王はヴィート共に劇場を後にした。

「とりあえず、少しだけここにいて。キアラちゃん方先見ちゃうから」

チネマ・オデオンの前に立てられた簡易テント。その中では誘拐された貴族達とキアラが、診察を受けていた。

テント入り口で、救護班のアレッシオにつかまっていたのはヒューズ。

顔色が悪いヒューズをアレッシオは心配そうに見ているが、ヒューズは大丈夫だの一点張りだ。

「何だったら騎士団の方で見て貰うよ。すぐ撤収することになりそうだしな」

そう言っつてヒューズが目を向けた先には、フロレンティアでは珍しい全身を覆う甲冑に身を包んだ騎士達がいる。

「何かしらあれ」

「南ローマ国の騎士だな。クソ熱いのに、よくあんなの着てられる。思わず疑問を口にしたアレッシオに、ヒューズは答える。

「でも南ローマの騎士が何でフロレンティアに？」

「ここにいてるって事は誘拐犯の件だろうな」

「そう言えば、誘拐事件が始まったのって南ローマ国だったわよね。たしか最初の事件が起きたのは2ヶ月前のことだ。誘拐された者は延べ26人にも上り、身代金を払わなかった者の中には死者も出たと聞く。」

それ故南ローマ国の騎士団が本腰を入れて捜査を行っていたようだが、結局犯人の足取りをつかむまでには至らなかった。

そんな中狙っていた獲物を小国の騎士団がとらえたとなれば、快く思わない者もいるのだろう。騎士達の雰囲気は物々しく、誘拐犯達を護送しようとしていたレナスとなにやら揉めている。

「あいつら、聴取もさせずに犯人を持つてくつもりみたいだな」

「なにそれ、超ムカツク」

ヒステリックにキーキー言い出すアレッシオに苦笑しつつも、ヒューズも思いは同じだ。

あの魔法使いのことも含めて色々調べたいところだが、南ローマ国の騎士には強引なところがあるので、多分突っぱねられるだろう。

フロレンティアには南ローマ国の領土だった過去がある。今では独立し、国として認められてはいるが、やはり南ローマ国に昔の利権を振りかざされることは多々あった。

「ああ言う輩の方が、魔法使い何かよりよっぽだめんどくせえな」  
アレッシオを落ち着かせながら、ヒューズは静かにその場を後にする。

だがそんな彼を静かに追いかけるひとつの影があった。

映画館の通りから川沿いへと向かうヒューズ。目は見えないが持ち前の方向感覚で最短距離を選べば、必然と人気のない路地を進むことになる。

アルノ川へと出る最後の路地を曲がったとき、彼を追ってきた影が突然ヒューズに突進した。

その手にあつたのはナイフ。

鋭く長いそれは、ヒューズの背中に突き刺さったかのように見えた。

だが背後にすら彼の死角はなかった。いつの間にか後ろに回された手でヒューズはがっちりナイフを掴んでいる。

ナイフを止められた途端、不思議と男から殺気は消えた。

「あーあ、目が使えない今なら勝てると思ったのに」

道化のような、リズミカルに人を苛立たせる口調にヒューズが眉をひそめる。

「お前は気配がでかすぎる」

そう言ってナイフを手の中で回転させ、ヒューズは背後に立つ男にそれを突き返した。

立っていた男は南ローマ国の騎士団の証である、銀色の甲冑に身を包んでいる。そのため顔も兜の下に隠れているが、ヒューズは相手の正体を見抜いているようだった。

「それにしても、何でお前がここにいる」

「それもこんな格好だと尋ねれば、男は舌を巻いた」

「本当は見えてるんじゃないの？」

「そんだけガシャガシャなつてれば嫌でもわかる」

それで何をしに来たと尋ねれば、男はこれまた道化のように大仰な仕草でヒューズの肩を抱いた。

「先月から、南ローマ国に異動になっちゃったのよ。中東の獣人たちもだいぶ大人しくなったし、ロシア情勢も安定してるでしょ？ そしたらオレ様行くトコなくなっちゃって」

「確かに、お前みたいな戦闘狂は自国に置いておけないからな」

「ひどいよねえ、オレ様もう10年はステイツに帰ってないよ」

言いながら、男はヒューズの肩をねぎらうように叩く。

出会い頭のやり取りからは信じられないが、ヒューズと男と知り合いでもあるらしい。

「でも良いなあフロレンティア。ローマと違ってギスギスしてないし、騎士の女の子は可愛いし」

特にうちの騎士団に喧嘩を売っていた子とは続けられ、ヒューズは眉をひそめる。

「あれ？もしかして狙ってた？」

「あいつは今の雇い主だ」

「あゝあ、そう言えばやめたんだっけ…」

「定年退職だ」

男の言葉を遮り、ヒューズは彼の腕を引きはがす。

「それより、わざわざ俺を追いかけてきた理由をそろそろ話せ」

「久しぶりに昔の相棒に会いたくて」

「ならもういいな。俺は帰るぞ」

つれないヒューズに、男は慌てて彼への前へと飛び出す。

「あんた好みの情報があつたから持つてきただけだよ。その目を潰した阿呆のこと、知りたくない？」

しかたなく、ヒューズは足を止める。

「いくらだ？」

「お金なんて取らないよ、オレ様とお前の仲じゃん」

「だから高いんだろう」

男は甲冑の下でけらけら笑い、ヒューズの肩をもう一度掴む。

ヒューズの答えも無視して、男は完全に語る体勢だ。

「実はね、誘拐されてるのは貴族だけじゃないんだよ。竜や獣人、妖精に麗しの人魚達。マイノリティーな種族がイタリア全土でかなりの数失踪してる」

「その犯人は……」

「俺の大事な大事な元相棒をこんな目に遭わせた奴よ」

「通りで、ちやちな誘拐犯相手にあれだけの数の騎士が来たわけだ」

「まあ主に起きてるのは南ローマ国近辺だね。だけど全然犯人の手がかりがつかめなくて、臆病な騎士様達は事件のことを隠す始末よ」

「最低だな」

「だからあんたに話しに来たんだよ。なんかもう、無能すぎてオレ様の實力全然発揮出来てないの。だからここは愛しの君に一肌脱いで貰おうかなって」

「まさかとは思うが、俺の所に来るとか言わないよな？」

「聞いたけど、ガリレオ騎士団って個人個人が好きに捜査できるんだらう？」

「優秀な奴はな」

「ならオレ様オツケーじゃん。南ローマ国は何をするにも上にお伺い立てなきゃいけないくて、自由に捜査出来ないんだよな」

「だが、お前の担当はこの事件じゃなくて南ローマ国だらう。どうやって許可を貰うつもりだ」

「元々フロレンティアにも一人くらい潜り込ませたいって言うてたからね」

笑う男に、ヒューズは声を抑え、最近では滅多に使わない母国語で言葉を続ける。

「うちの国にはスパイするような価値はないぞ」

「だからだよ。そう言う貴重な国だからさ、何かあった時に護ってあげたいとか自意識過剰な我らの母国は思っちゃう訳」

そして勿論、男が話すのも流暢な英語だ。

「いらん世話だな」

「まああんたがいれば問題無さそうだけどね」

でも一応と男が言えば、ヒューズはしばしの間考え込む。

「ジェイクはまだ息災か？」

「ああ、今でもオレ様の上司よん」

「じゃあジェイクから直接指令を持ってこい。そうしたら面倒見てやる」

ヒューズの言葉に子どものようにピョンピョン跳ねる男。それから彼は思い出したように、マジシャンのような手つきで、どこからともなく報告書の束を出現させる。

「これ、誘拐事件の詳細。後で直接教えてあげるけど、一応わたしとくよ」

そういつと、男は「チウエディアーモまた会おう」と手を振り元来た道をスキップで戻っていく。

残されたヒューズは告書を片手にため息だ。

今は見えないが、目が治ったら目を通しておいた方が良くかも知れない。

「魔法使いよりよっぽど面倒なのがきたな……」

思わずばやくと、ヒューズは報告書を手に騎士団へと歩き出した。

キアラが目を開けると、そこには見慣れた天井が広がっていた。いつの間にか家に帰ったのだろうかと考えたつつ、視線を動かせば包帯の巻かれた自分の体が目に飛び込んでくる。

そこで彼女は、オデオンでの負傷を思い出した。

思い出すと同時に今更のように痛み出すのは体中の傷口。

剣を握っているときは夢中で気付かなかったが、どうやら予想以上に怪我は大きいらしい。

先月は腕を折ったばかりだというのに、また休暇を取らなきゃ行けない。

また隊のみんなに迷惑をかけてしまうなとため息をこぼせば、突然キアラの手を大きな温もりが覆った。

「痛むのか？」

声の方に顔を向ければ、恋人が心配そうにキアラを見ていた。

「また仕事を休むことになるなと思って……」

「君は本当に真面目だな」

「それで、陛下は無事戻られました？」

「相当文句を言っていたそうだがな」

「文句を言いたいのはこちらの方なんですけど」

散々振りまわされたことを思い出して、キアラは国王との一日を思い出す。

我が儘放題で、嫌味が多くて、短気で、でも時々優しい。

一緒にいるのは楽ではなかったけれど、彼と街を巡るのは嫌ではなかった。

中途半端なところで終わってしまったけれど、出来ることなら最後まで案内したかったとキアラは思う。

だがそこでふと、キアラは今更のようにひとつの疑問を抱いた。

彼は国王だ。誰よりもフロレンティアを愛し、フロレンティアに

詳しい国王なのだ。

なのになぜ彼は、身分を偽ってまで自分に観光案内などさせたのだろう。

「そう言えば、陛下はなぜ一人で外に？」

自分の素性を知っているならともかく、最初は名前すら知らないようだった。

「…それは多分、俺の所為だ」

そう言うヴィンセントは、すまないとキアラに頭を下げる。

「どうしてヴィンセント様が謝るんですか？」

「1週間ほど前、陛下から見合いの話をもちこまれてな。それを一も二もなく断ったんだ」

そう言えばそんな愚痴を国王はこぼしていた気もする。

「そのときは時間もなくて、一方的に断ってしまって。でもそれが、陛下を必要以上に不安にさせてしまったようで……」

「まさか、理由をご自分で探りに来たって事ですか？」

「グイート様との一件で、陛下は拒絶されることに酷く敏感になっ  
ていて……」

騎士団長であり王子であるグイートは、国王の血を引く王子の一人。

かつては国王の後を継ぐ者として期待されていたが、それを疎ましく思う物の手にかかりその地位を失墜された。そのときグイートは魔法で心を墮落させられており、誰よりも彼を信賴していた王の期待を幾度も裏切ったという。それを魔法だと見抜けなかった国王は、怒りにまかせて当時の彼を勘当したのだ。

国王の好意をはねつけ聞く耳すら持たなかったヴィンセントに、

国王はかつてのグイートの姿を重ねてしまったのだろう。

「でも、自分で来るなんて……」

「そう言う血筋なんだろう」

思いこんだら一直線、覚悟を決めたら何でも動かず、一度熱すると手が付けられない。

「…何で私の顔を見るんですか」

「似てるなって思ったんだ。すぐ無茶をするとところとか」  
言いながら、ヴィンセントはキアラの傷にそっとふれる。

「でも国王のことを含め、今回責められるべきは、君の無謀さよりも俺だな」

どうしてと尋ねようとしたキアラに、ヴィンセントは悲しそうに笑う。

「俺がいながら、君に大けがさせた」

「怪我なんて、いつものことですよ」

「でもこれは、俺の所為だ」

男があそこまで強引な手段に出たのは、ヴィンセントの存在があったからだ。

彼の存在が男を狂わせ、そしてキアラを傷つけるほどの猛攻をし  
かけさせたのは事実だ。

「本当に済まない」

「やめて下さい。怪我したのは私自身にも落ち度があります」

「君は良くやった。責められることは何もない」

「だけど…」

「非があるのは俺だ、俺の存在が君を傷つけた」

そう言うヴィンセントの目に宿るのは、深い後悔と自責の念だけ  
だった。

その瞳は、リストランテで息子のことを語った国王の物と似て  
いて、キアラはヴィンセントもまた、過去に起きた何かしらの出来  
事と今回の事を重ねているのだと気付く。

だが気付けたところで、深く堕ちていく彼の心に手が届かない。  
ヴィンセント様の所為じゃないと、いくら言葉を重ねても彼が見  
せるのは拒絶だけ。

何を言っても、今の彼は取り合ってはくれなかった。

こんなに頑なになったヴィンセントは初めてで、だからキアラは  
どうして良いかわからなる。

だがこのままでいると、彼が二度と自分のことを見てくれなくなる予感がして、キアラは縋るように彼へと腕を伸ばした。

だがそれすらも彼は拒絶する。ふれようとしたキアラの腕から身を引くヴィンセント。

その動きにキアラは思わず体を起こし、そして腕を振り上げた。

自覚はなかった。

前触れもなかった。

けれど、確かな感触が残る頬に触れヴィンセントが啞然とする。

「……今」

腕のしびれにキアラがはっと我に返り、頬の痛みにヴィンセントが顔を上げる。

「今のは……」

答えるキアラの方も、どこかポカンとした表情をしている。

「わ、わかりません」

「わからないのに、殴ったのか」

ヴィンセントの指摘で、キアラはようやく自身のしたことに気付く。

「な、殴りました？」

「ああ」

「私から、ですか？」

「ああ」

「私から……？」

「それにはもう答えた」

「ごっごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

思わず叫んで、キアラは頭から毛布をかぶる。

その様子があまりにもおかしくて、ヴィンセントも思わず吹き出した。

「君には良く殴られるな」

「騎士が王子に手を挙げるなんて最低ですよね……」

言つて、毛布の合間からキアラがちらりとヴィンセントを伺つ。

「叩いたところ、赤くなつてます?」

「すぐ治まる。ともかくちゃんと話そう。だから出てきてくれ」

と言つても出てくる気配はないので、仕方なくヴィンセントは毛布を引つpegす。

「怒ってますよね」

「というか驚いている」

「私だつて驚いてます」

「なぜ殴つた」

「別に怒つたわけじゃなくて、むしろ混乱しちゃつて」

「混乱すると君は殴るのか?」

「だつて、ヴィンセント様の所為じゃなのに、あなたはご自分を責め続けるし。」

かといつて騎士として、怪我をしたことを人の所為にするような最低な人間にはなりたくないし。

その間でグルグルしてたら突然、恋愛映画とかでわびる男を女性が殴つて仲直りするシーンが浮かんで……」

次の瞬間には、殴つていたらしい。

「極端というか、とても前衛的な発想だな」

「けど、これでおあいこになりますよね?」

それとも、体に受けた傷の分だけ殴つた方が良いでしょうかと真面目に聞かれ、ヴィンセントは返す言葉がなかった。

「悪かつた……」

「また謝つた……」

「これは、必要以上に意固地になつたことについてだ」

「じゃあ、もう殴らなくて良いですか?」

「ああ。君のは、かなり痛い」

言われて、キアラは腕を後ろに隠す。

「でも、ひとつだけ聞いても良いか?」

「はい」

「またもし、俺の側にいることで傷つく事があつたら、君はどうする？」

ヴィンセントが問いかけに、今度は間違えないようにとキアラは本気で頭を悩ませる。

考え込むキアラを、不安そうな顔でヴィンセントは見つめている。それでも辛抱強く待っていると、キアラはとっておきの答えを見つけたという顔で口を開いた。

「もう傷つかないようにします。それまでに修行して、今度は無傷で勝ちます」

「……君は、何でもかんでも拳で解決しようとするな」

「こ、これしか取り柄が無くて」

あきれ果てたヴィンセントに、また自分は間違えたのかと不安になるキアラ。

けれどヴィンセントは笑顔を取り戻し、キアラをきつく抱きしめる。

「……間違えて、なかったですか？」

「いや、完全に間違えている」

でも……と、ヴィンセントはキアラの髪を撫でた。

「そう言う答えを、ずっと待っていたのかも知れない」

向けられた瞳に自分が映っていることに安心し、キアラもまたヴィンセントを抱きしめる。

それから彼女はヴィンセントの耳元でありがとうと呟く。

なぜと尋ねるヴィンセントにキアラは微笑んだ。

「ヴィンセント様のお陰でノンノに会えましたから」

ちよっとだけ迷惑だったけど、食事が出来て良かったと無邪気に笑うキアラに、ヴィンセントは敵わないと呟いた。

**Episode 08 - 1 自責の念を払うもの（後書き）**

6 / 24 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

Episode 08 - 2 気付いた想い

時計の音だけが響く深夜。

ガリレオ騎士団第4小隊の隊室では、レナスがじつと壁に掛けられた時計を見つめていた。

「ヒューズ？」

「なんだ？」

窓際に置かれた、仮眠用ソファアではヒューズが暇そうにしている。相変わらず目に包帯は巻かれているが、痛みはすでに無いようだった。

「あと2時間で、私の休日が終わっちゃうんだけど」

「わかっているなら、早く報告書を書き上げろ」

「もう飽きた」

飽きたも何も、もう1時間ほどペンは動いていない。

完全にやる気を失ったレナスは、報告書の存在を忘れるため、話題をすり替える。

「……キアラ、そろそろ目を覚ましたかしら」

「さすがにさめただろう」

「つてことは、二人でよろしくやってるのかしら」

「お前なあ」

「その上、二人で私のラビオリ食べさせあってたりして」

「別にお前のじゃないだろ」

「あんたが作った物は全部私の物なの」

そういつて、レナスは手にしていたペンを放り出す。

「もうやだ、最悪、帰りたいたい」

「帰ったら、お前の言う状況に遭遇するぞ」

ヒューズの言葉に、レナスは呻く。

「今晚、あんたの所泊めて」

「報告書が書き上がればな」

レナスが放り出したそれは、誘拐犯の捕縛に関する物だ。

誘拐犯に関しては元々南ローマ国の騎士団が追っていたため、捕まえた経緯をまとめた報告書と犯人を明朝までに引き渡す事になっていた。

それに関してレナスは相当やりやっただが、結局相手の強引な主張には勝てなかったようだ。

だからこそ、いつもよりも更に筆が進まないのだろう。

とはいえさすがに、この目では手伝うわけにもいかない。

かといって帰ろうとしたら思いっきり殴られたため、ヒューズはすることもないのに彼女の側にいた。

「ほんと、何でもこう言うときにあんたは目なんて潰されるわけ」

「お前に劳いの気持ちはないのか」

あるわけないが一応尋ねておけば、レナスは良いことを思いついたと立ち上がる。

「そろそろ包帯変えてあげようか！」

「お前、あの手この手で報告書から逃げているだろう」

的確なツツコミは華麗に無視することにして、レナスはヒューズの側までやってくる。

眼の包帯を取れば、肌に密着している部分は赤く血で汚れている。

「血、なかなか止まらないわね」

のぞき込んだその眼はうつろで、レナスの姿を写していない。さすがに心配になったのか、レナスは不安そうな顔でヒューズをのぞき込む。

「そんな顔するな」

「見えないくせに」

「何年一緒にいると思ってる」

お前のことなどお見通しだと言われ、レナスはふくれ面になる。

「今度は膨れたな」

「当てないで！」

思わず目を手で覆えば、ヒューズが声を上げて笑った。

その笑顔にホツとしたとたん、言いようのない不安と安堵でレナスは胸が苦しくなる。

「ちゃんと、治るよね」

「ああ、少しずつだが良くなってるのを感じる」

心配させたなと囁かれた声は甘く、レナスが感じたのは焦りだった。

「別に心配とかしてる訳じゃないのよ。心配は心配だけど、あんたの目が見えなくなったら色々と不便だし」

「こき使うのにか？」

「そうよ。仕事でも私生活でも、私はあんたが必要なんだから」

「なら、怪我してるときくらい優しくしてくれ」

「優しくって何よ」

「とりあえず、真面目に報告書書いてくれよ。結局全部書き直しとか、絶対嫌だからな」

「私の報告書をなんだと思ってるのよ」

「グイートがこぼしてたぞ、字が汚くて読めないって」

自覚はあるのかレナスは黙る。

「だって、報告書書いてる時間があったらデートとかしたいじゃない」

「今は相手もいないだろう」

「す、すぐに出来るし」

「合コン行かなかったくせに」

「それは！」

勢いよく声を上げたが、続ける台詞をレナスは持ち得ない。

「私だって、何か最近よくわからないんだもん」

変わりに零れた小さな愚痴。それを聞いたヒューズは不安げなレナスの髪をそつと撫でる。

「最近忙しいからな。疲れて気分が乗らないときもあるさ」

「でも、そろそろ本気でやばいのよ……、若さも美貌も下降傾向だし……」

「大丈夫だよ、お前はまだまだ綺麗だ」  
それはいつもの、レナスを安心させるためのおきまりの台詞だった。

今まで何度も聞いてきた。というよりも、レナスが無理矢理言わせてきたので聞き慣れているはずだった。

なのになぜか、今日に限ってその台詞に、訳もなくヒューズを意識してしまった。

「焦らなくても、これからだってまだまだ綺麗になる。適齢期を過ぎたくらいで落ち込むな」

目が見えていない所為か、レナスへと向けられたその顔はいつもより穏やかで暖かい。

冴えない冴えないと日頃口にしてているが、苦笑混じりのその笑顔は、冴え無いどころか目を奪われるだけの優しさに満ちている。

気がつけば、レナスはヒューズに引き寄せられるようにその身を彼へと預けていく。

「レナス？」

呼ばれた低い声で、レナスははっと我に返った。

いつの間にか目の前にあるのはヒューズの顔。勿論レナスはその距離に息を呑む。

合コンではどんな色男を前にしてもピンと来なかったのに、よりもよってこの男に見とれるなんてと焦るレナス。

そして今更のように、治ったばかりの右手がしびれるのを感じ、レナスは真っ赤になった。

「何でそこで顔をしかめる」

「何でもない」

「嘘つくな」

さすがに顔色まではわからないのか、ヒューズは怪訝な顔で彼女の頬に触れる。

そのとき、聞き覚えのある絶叫がレナスの背後から響いた。

「アルベール？」

声の主の名をレナスとヒューズが呼んだ途端、アルベールはヒューズの元からレナスの体を引きはがす。

「何してるんですか！」

「それはこっちの台詞よ」

「アレツシオさんに捕まってたんです」

アルベールの怪我を治すと意気込んでいた自称白衣の天使を思い出し、レナスはほんの少し彼に同情する。

「それより、今！ 今何してたんですか！」

「包帯を変えてただけよ」

「その割には近かった」

「こんなに！ と二人の距離を指先で表現するアルベールにはさすがのレナスも呆れる。

「じゃああなたが変わりにやって」

アタシは報告書を書くからと突き放され、アルベール泣きそうな顔で唇を噛む。

「何で泣きそうな顔してる」

相変わらず聡いヒューズが表情を言い当てれば、アルベールは不満を顔に貼り付けた。

「レナスさんとは何でもないって言ってたじゃないですか」

「何があるように見えるんだよ」

その答えは死んでも口にしたいくない。

したくないが、本気でわかっていないヒューズにアルベールは乱暴に包帯を巻いていく。

「アルベール、ちょっときついんだが」

「目が見えないのを良いことに、あんなにくつついて」

言いつつ、アルベールは昼間レナスの家で見た光景を唐突に思い出す。

「…もしかして、いつもあんなに」

「あいつとは兄弟みたいなものだ。ガキの頃から側にいるし……」

「でもレナスさんは子どもじゃないんですよ。あんなに綺麗で、美

人で、それがあんなに近くにいたら」

好きにならないわけがない。

かつて付き合っていたときは気付かなかったが、騎士として共に仕事をするうちに、アルベールは彼女の本当に魅力に気付いていた。誰よりも男らしく、騎士らしく戦うレナス。だからこそ、日頃見せる女性らしい一面がより一層輝くのだ。

自分を磨く事ばかりを考える一般女性と比べれば、女らしさは少ないかもしれない。けれど騎士として剣を振るう彼女は誰よりも美しい。

そして常に側にいるヒューズが、それに気がつかないわけがない。「…あなたも、彼女が好きなんですか？」

最後の理性で、レナスに聞こえないよう声だけ抑えれば、ヒューズが苦笑を返す。

「安心しろ、お前と取り合うつもりはない」

「僕じゃ相手にならないって事ですか？」

「そう思うなら早く立派な騎士になって、あいつをお姫様にしてやってくれ」

まるで願うような言い方に、アルベールは怒気をそがれる。

「やっぱり好きなんじゃないか」

「大事だっただけだ」

乱暴に巻かれた包帯を外すヒューズ。

「それに、俺じゃあ相手になれないのはお前も理解したと思うが？」  
うつろな瞳の中を揺れる、人のモノではない深い闇。それを間近で見たアルベールは、思わず体を引いた。

苦笑しつつ、ヒューズは包帯の下に眼を隠す。

だがそこでふと、ヒューズが動きを止めた。

「今、妙な気配がしなかったか？」

そう言っただけで窓の方を向くヒューズ。目の見えない彼に代わって視線を走らせた直後、アルベールの顔が引きつった。

「あああっあああああ！」

突然の絶叫に驚くヒューズとレナス。その前でアルベールは窓の外を指さす。

「お、お化け！」

そんなわけではないと思つたレナスも、窓を見て絶句した。

確かにいたのだ。窓枠から、目と頭を出した不気味な人影が。

先ほどまでのライバル心をかなぐり捨てて、ヒューズの背に隠れるアルベール。

そんな彼に気付いた人影は、ガラスにゆっくりと手を伸ばす。

不気味な音がして開く窓、その向こうから又ツと出てきたのはお化けではなく、もつとたちの悪い者だった。

「父を前に、その態度一体なんだ」

よいしょと腰を上げ、窓から室内に飛び込んできたのはまさかの国王。

「ち、父上！ どうしてここに」

「お前に聞きたいことがあったのだ。ヴィンセントの彼女の、ほら、あの可愛い女の子はどこに住んでいるのかと」

何を言い出すのかと思いつつも、せつつく国王にアルベールはレナスを指さした。

「き、キアラさんなら、彼女と一緒に住んでいますけど」

答えれば、国王はレナスに目を向ける。

「先ほどは世話になつたな。礼もかねて、これから君の家にお邪魔させてもらつてもいいかな？」

どこに礼を兼ねているのかさっぱりわからなかったが、躊躇いもなく無茶を言う国王にレナスは頷くほか無かった。

**Episode 08 - 2 気付いた想い（後書き）**

6 / 24 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございます）  
8 / 3 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございます）

「さあ、口を開けて」

笑顔と共に差し出されたラビオリに、キアラは思わず悲鳴を上げる。

「じ、自分で食べられます」

「でも、腕を怪我してるだろう」

「フォークくらい持てます！」

と言ったが、ヴィンセントは手に持っていた皿とフォークを素早く引く。このやり取りを、キアラとヴィンセントはもう30分近く繰り返していた。

「傷が開いたらいけないから」

傷口よりも激しく跳ねる心臓の方が心配だったが、ヴィンセントが引くつもりは無さそうだった。

しかたなく、彼女はやりかたをかえる。

「そのラビオリ、ヒューズさんのですよね。勝手に食べたらまずいんじゃないませんか？」

「ヒューズさんから許可は貰ってある」

ヒューズ隊長めと、またしても彼を呪いながらキアラはじつとラビオリを見た。

お腹は空いていた。そして以前食べたヒューズのラビオリの味が恋しくて、また家に呼んでくれないかところり期待もしていた。

していたが、このオポジションは望んでいない。

「ほら、口を開けて」

なぜ、こんな恥ずかしいことを、笑顔で出来るのかキアラには理解出来なかった。

理解が出来ない上に回避する方法も見付けられず、キアラは不本意ながら、差し出されたラビオリを恐る恐る口にする。

だが望んだ味はしなかった。微笑むヴィンセントに胸がつまり、

味わうどころではなかったのだ。

「じゃあ、もうひとつ」

ひとつで限界だった。二つも食べたら死んでしまふ気がした。

「おなか一杯です」

そう言つて毛布をかぶれば、ヴィンセントが不満げな顔をする。

だが無理矢理毛布を取られるより早く、寢室のドアが乱暴に叩かれた。

レナス達が帰ってきたのだ。

「助かった！」

思わず泣きそうになり、早く入ってきて下さいと懇願するキアラ。

だがそれを、彼女は深く後悔することになる。

「お邪魔だったかね？」

尋ねられたその声に、キアラは悲鳴を上げながらまたしても毛布の中に潜ってしまった。

「どうしてみな、余の顔を見て絶叫するのだ！」

「それは、いるはずのない場所にいるはずのない人が立っている状況が、ホラー映画に酷似しているからかと」

冷静なヴィンセントの分析に、キアラの部屋へと入ってきた国王は不満そうな顔である。

「それにしても、狭い部屋だな」

「あなたの部屋と比べないで下さい」

毛布の中から零れた言葉に、老人はそれもそうかと納得する。

それから彼はヴィンセントをどけ、彼女の側に立った。

「とりあえず、毛布から出てきてくれなにか」

「陛下にお見せ出来るような顔じゃないので」

「それはいつもだろう」

キアラが更に頑なに毛布をかぶる。その様子に、言い方を間違えた国王は呻く。

いつも可愛いから気にするな、と国王は言いたかったらしいが、今のは完全に誤解される言い方である。

「ともかく顔を見せてくれ。余はそのために脱走までしてきたのだ」  
「しないでください！」

「君の顔を見たら今日はちゃんと帰る」

国王の言葉に、渋々ながらキアラは顔を出す。

男らしいいつもの彼女とは違う、小動物を思わせるその動きに、  
国王の胸が激しく高鳴る。

可愛いとは思っていた。

思っていたが、孫娘だと自覚した所為か、愛しく思う気持ちが倍以上に膨れあがっている。

「もしかしてあの、説教とかしに来たんですか？」

どうやら国王は、ときめきを覚えると眉間に皺が寄ってしまうようになった。

何かをこらえる様に眉をひそめるその表情に、彼が怒っていると勘違いしたキアラは恐る恐る尋ねてみる。

「そう言うわけではない」

「ならもしかして……」

と、キアラはヴァインセントを見つめる。

「別れるとか、そう言うお話でしょうか……」

シユンとした顔でうつむくキアラに、国王はもはや限界だった。

「そう言う顔をするな！　しゃんとしろ！」

可愛いの一言が言えない不器用な国王は、またもやそんな言葉を叩き付けてしまう。

「余はお前に礼を言いに来たのだ！　案内のセンスはなかったが、一応付き合っただけだからな！」

礼を言う口調ではない。口調ではないが言いたいことはわかるので、怯えるキアラの耳にヴァインセントがそつと耳打ちをする。

「照れてるだけだ、素直にお礼されてくれ」

ヴァインセントのフォローで、ようやくキアラは笑顔を取り戻す。

「私も楽しかったですよ」

少し照れながらもそう告げれば、国王は満足そうに笑う。

だがそんな自分に気付き、国王は慌てて表情を頑なな物へと戻した。

「だ、だがやはり君の案内はまるで駄目だ!」

「すいません、確かに勉強不足でした……」

だからこの国のことをちゃんと勉強しますと宣言するキアラ。

だが国王はそれだけでは満足出来ないようだった。

「お前の勉強などあてに出来ん。……だつ、だから余が、じつ直々に教えてやる」

「いや、それはいいです」

即答したキアラに、シヨックを受ける国王。

遠慮をしての言葉だったが、突っぱねられたと勘違いした国王はうなだれる。

仕方なく、再びフォローに入ったのはヴィンセントだ。

「君ともう一度観光がしたいって事だよ」

たぶんじつくりと。

ヴィンセントの言葉に、キアラはそう言うことかと頷く。

「わかりました。それまでに自分の方でも、勉強しておきます」

そう言つて敬礼したキアラの反応は、国王が求めていた物とは少し違うがしかたない。

「ヴィンセント、ちょっと来い」

鈍い孫娘に危機感を覚え、国王は頼りになる息子を呼ぶ。

「次の休日は、お前も予定を開けておけ」

どうやら孫娘は予想以上に手強いようだ。

ここは味方を付けねばまずかろうと、国王は判断したのである。

「いつもとちがって気弱ですね」

「余はあの子に、酷いことを沢山言ってしまったのだ。次で挽回しないと、嫌われてしまう」

国王の囁きにそんなことはないと言おうとしたが、孫娘に言葉に一喜一憂する国王は、見ていて非常に微笑ましかったのであえて黙っておく。

「わかりました。：ただひとつ条件が」

「何だ？」

「彼女との交際許可を」

そこで国王は、今更のようにキアラと出会った経緯を思い出した。  
「愛してるんです、彼女を」

重ねられた言葉に、国王は首を縦に振るほか無い。

「他の男にやるよりはいい」

でもせっかく出会えた孫娘に、既に虫が付いているというのは非常に複雑だ。たとえそれが彼が一番信頼している王子だとしても。

「だがあの子を泣かしたら、余が黙ってはおらんぞ」

「その言葉、ヴィートさんにも言われました」

ヴィンセントの言葉に、国王は不満そうな顔で唸った。

「ちなみに、ヴィートさんとは上手くいったんですか？」

ふと気になって尋ねてみれば、国王は静かにうなだれるばかりだ。孫娘への反応を見ていれば予想は出来たが、この老人は本当に不器用で言葉が足りないらしい。

「そつちもフォローが必要ですか？」

「あいつのことは、自分で何とかする」

国王の目に宿った覚悟に、ヴィンセントは微笑む。

「早く仲直りした方が良いですよ。あの人と仲良くなると、写真とか沢山横流ししてくれますから」

誰のとは言わなかったが、国王の目に宿る並々ならぬやる気を見た限り、彼は理解したのだろう。

気むずかしくも立派な国王の、あまりに子どもっぽい一面。

それはヴィンセントにとって始めて見る彼の一面であったが、こちらの表情も悪くないと彼は思った。

騎士の休日編【END】

朝食は二人より一人で【キアラⅡサヴィーナ】（前書き）

キャラクター紹介小説キアラ編です。

外見とか年齢とか性格とか、そう言うのを羅列した物でも良かったんですが、

これはこれでひとつの読み物だったら面白いかなあ………と書いて作ってみました。

基本的な設定描写は1話内に一通り入っていますが、

他のキャラとリンクもしているので、全部読むとキャラの人となりがぼわわかる感じになっています。

本編には関係ないので、読まなくても差し支えはありません。

騎士の休日編までのネタバレ含みます

## 朝食は二人より一人で【キアラⅡサヴィーナ】

【午前7時】

鏡の前で歯ブラシを持つことから、私の朝ははじまる。

昨晩はロクに髪を乾かさずに寝てしまったため、肩まで伸びた茜色の髪は所々跳ねてしまっていた。

同室のレナス隊長が、酔った勢いでドライヤーを粉碎したのが原因である。

隊長は本当に良く物を壊す。普段は、フロレンティアを守る『ガリレオ治安維持騎士団』の第4小隊隊長として素晴らしい活躍を見せるのに、酔っぱらった隊長は騎士と言うより破壊神だ。

副官として何とかせねばと思うが、破壊神と化した隊長を扱えるのは彼女と同期のヒューズ隊長くらいである。

【午前7時5分】

ようやく寝癖が直る。日頃から化粧もせず、休日さえ男物の服ばかり着ている所為で外見を気にしない女子だと思われるが、これでも身だしなみには気をつけている。

勿論それは最近出来た恋人のためではなく、騎士としてだらしない格好は出来ないという職業意識から来る物である。別に寝癖をからかわれたとかではない。断じてない。

【午前7時10分】

きちつとアイロンがかけられた制服を、鍵付きのクローゼットから取り出し、今日も一日よろしくと心の中で声をかける。

私達ガリレオ治安維持騎士団の制服は全部で3種類あり、私が手に取ったのは「勤務服」と呼ばれる物だ。

式典などで使う礼装、大規模戦闘などの時に使用する特殊戦闘服が他にあるが、一番着る機会が多いのはこの勤務服で、街行くガリレオの騎士は皆この服を着用している。

残念ながら、有名デザイナーが作ったガラハドの制服に比べるとこの勤務服は決して格好が良い物ではない。しかし私は、むしろそこが気に入っている。

丈夫だけが取り柄のえんじ色と黒を基調とした制服は、元々男性用にデザインされた物なので女性が着ると体のラインが出ず少し不格好だが、私のような体格…認めたくはないがまな板と称される胸が目立たないのがいい。凄いいい。

また動きやすさを重視するために、スイツの警察騎士団で使われている制服デザインを取り入れているのだが、ここがなにより私の好みなのである。

今思うと、昔好きだった警察騎士団を舞台にした映画の衣装にそっくりだ。私はあの映画が大好きで、父にせがんで4回も見に行った。

……まさか、それがきっかけでこのデザインを採用したのではと思ってしまうのは、親ばかな私の父こそがガリレオ騎士団の団長だからである。

しかしさすがにそれは………ないと言い切りたいが、ありそうどこまる。

【午前7時12分】

嫌な想像を振り払い、さっそく着替えを開始する。

ズボンの裾を無骨なアーミーブーツにしまい、紐を結んでまずは一息。

ブーツは女用の細身の物もあるが、私は格好いいのでこちらを使っている。

それから色気がないとレナス隊長にからかわれるスポーツ用の下

着を着け、その上からタンクトップ、シャツ、上着を重ねていく。シャツ及び上着のボタンを全て留め、最後に騎士団に入団した記念に父から貰った剣と、それを差すベルトを右肩から斜めがけに装着すれば、ガリレオの騎士の完成だ。

【午前7時15分】

鏡の前で最後の服装チェック。いつ見ても自分の背の低さがきになる。

156という身長は騎士としては低い。

これであと5センチ背が高かったらと思いつつ、牛乳を冷蔵庫から取り出す。

まだ18になったばかりだし、レナス隊長は今も背が伸びていると言っていたので、きっと希望はあるはずだ。

【午前7時半20分】

朝食用にと買っておいたサンドイッチをレナス隊長の夜食にされてしまったためシリアルで代用。

そこでようやくレナス隊長が起きてくるがソファアの上でまた寝た。

多分今日も遅刻だと思うが、隊長を起こす技術はまだないので放置する。

【午前8時】

ちよつと早めに家を出る。入れ違いでヒューズ隊長がレナス隊長をおこしにやってくる。

今日もお疲れ様である。

【午前8時10分】

シリアルだけではお腹が減ったので、朝からあいているボールに入る。

パニーニを5個とピザを1ホールとサラダを買って外に出る。

【午前8時半】

騎士団近くの広場で朝食を取ろうとしたら、巡回中のヴィンセント様と鉢合わせしてしまった。

朝食の量を見られてしまった。恥ずかしくて死にたくなる。

【午前8時40分】

ヴィンセント様が巡回に戻らない。

朝食を食べるのに忙しいと言っているのに、今日も無駄に私を混乱させる世辞ばかりいう。

エメラルド色の瞳が素敵だという褒め言葉は今日だけで3度目である。3度目なのにドキドキする。

始めて合コンで遭遇したときから思っていたが、どうしてこの人は心拍数を上げる言葉ばかりを口にするのだろう。

王子と名の付く生き物はそういう物なのだろうか。

でもこの人は元マフィアだし、人種的にはヴァンパイアでもある。

…でもよくよく考えると、どれも女の人に甘い言葉を囁くイメージだ。

よりもよってそれを3つもあわせているなんて、恋愛初心者の自分では勝てる気がしない。

初めての彼氏はもっと地味な人でも良かった気がする。

【午前8時45分】

朝食を終えると、ようやくヴィンセント様が騎士団に戻ると言い出す。側にいられると落ち着かないが、いなくなるとそれはそれで寂しいと思ってしまう。

そんな少女的思考回路が働いてしまった所為だろう。

ヴィンセント様が突然、騎士団まで送ると言い出した。

恋人同士で出勤なんて恥ずかしくて今度こそ死んでしまう。

慌てて拒否すると、変わりにキスを要求された。

悩みに悩んだが、結局頬へのキスで許して貰う。朝から、体力がかなり減った気がする。

【午前8時50分】

事務局の前で騎士団長のヴィートがなにやら叱られているが無視する。

しかし目ざとく気付かれる。

ふと今朝の疑問を思い出し尋ねたところ、「ついに気付いてくれたか！かっこいいだろう！」と言わんばかりの笑顔で変なポーズ（多分カッコつけている）を取られた。

考えが透けているのもそうだが、職場でも馴れ馴れしすぎるのは騎士団長としてどうかと思う。

【午前8時55分】

机の上に花束が置かれていた。またヴンセント様かと思ったら祖父からだった。

ちよつと嬉しいとおもったが、祖父が変なポーズ（多分カッコつけている）をしているポストカードが10枚もついていた。正直こんなじゃない。

【午前9時】

就業時間開始。レナス隊長どころか誰も来ない。しかし時間を守らないのはフロレンティア人の義務のようなものなので待つしかない。

【午前9時10分】

まだ誰も来ない。しかしこれもいつものことだ。

基本的に、有事と合コンの時だけやる気を出すのが、この小隊の特性である。

他の隊とは違い、第4小隊は戦闘技術に特化した女性だけで構成されている。

故に重要視されるのは血の気の多さと戦闘センスであり、それがあれば多少変人でもレナス隊長が構わず連れてきてしまうのである。それは隣の第5小隊も同じで、この二つの班はガリレオ騎士団の珍獣部隊とも言われているらしい。

その中に入れられているのは少々納得がいかないが、得意の剣術を行かす機会が多いのはありがたいので文句は言わない。

…言わないが、やはり一人で皆を待つのは寂しいので早く来て欲しいところではある。

【午前9時15分】

レナス隊長を除き、何とか全員集合する。隊長のことはヒューズ隊長に探しに行かせる。

【午前9時25分】

レナス隊長がヒューズ隊長に担がれながら出勤。

二日酔いが酷くて、近くの公園で寝ていたらしい。  
噂ではまた合コンで失敗したそうだ。これはたぶん、今日一日荒れる。

【午前9時30分】

朝の朝礼を開始。予定の確認と点呼を行いようやくの業務開始。

朝食は二人より一人で【キアラ〓サヴィーナ】（後書き）

わかりにくいよ！

と自分でも軽く思っているので、ツッコミ等があればお気軽にどうぞ。

普通がいい…:というご要望が在れば、別途制作しますので。

08/12 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

朝が苦手な騎士王子【ヴィンセント＝アルジェント】（前書き）

キャラクター紹介小説ヴィンセント編です。

騎士の休日編までのネタバレ含みます

## 朝が苦手な騎士王子「ヴァインセント＝アルジェント」

【午前4時半】

目覚めのきつかけは、焼けるような目の痛みだった。

いつもは締め切っているカーテンに、僅かなすき間が出来ていたのが原因である。

爽やかな眠りと目覚めにはもうずいぶん縁がないが、今日は特に最悪だ。

ヴァインパイア 不死者となったことで不便を感じる事は多いが、特に目覚めに関しては殊更強くそれを感じる。

しかしこれでも、俺はヴァインパイアにしては朝に強い方である。太陽の下でも自由に動くことが出来るし、血圧も一定なので不機嫌で誰かを殴り飛ばすようなこともない。

【午前4時44分】

目を避けながら二度寝を試みたが、上手くいかないので起床する。寝間着の黒いガウンから、動きやすいズボンとタンクトップに着替え、朝の鍛錬を行うために西のサロンにむかう。

【午前4時50分】

ステイツから取り寄せた室内型の運動器具を使い、2時間かけて全身の筋力と持久力維持のための基礎鍛錬を行う。

ヴァインパイアは人よりも身体能力が高いが、だからこそ日頃から体を鍛えておかないと、筋肉に過度な負担をかけてしまい体を壊すことになる。

肉体の再生能力も高いので壊れたところで問題はないが、仕事柄肝心なときに動けなくなると困るので、日々体作りだけは欠かさな

いようにしている。

【午前6時50分】

鍛錬を終え、シャワーで汗を流す。

髪を乾かしながら鏡を覗けば、不死者の証である赤い瞳の色が淀んでいた。

寝起きに太陽を直視した所為だろうか。

【午前7時】

目が治るのはまだ時間がかかりそうだが、髪の方は既に渴き始めていた。

しかし太陽の影響が出たのは瞳だけではないらしく、黒い髪の方々に銀の色が混じり込んでいる。

不死者は普通銀髪なのだが、人としての姿に未練がある俺は地の黒色に染めている。

だが魔法で染めているので、太陽など魔力を乱す物に影響されると、ときたま元に戻ることがある。

理髪店で染めたほうが楽なのは重々承知しているのだが、一応外見年齢は28で止まっているので、若白髪を隠す為だと勘違いされるのが嫌で実行できていない。

【午前7時10時】

着替える前に、冷蔵庫の中に入れておいた献血用の血液で朝食をすませる。

俺の正体を知る友人が手配してくれた血液は、フランス産のヴァンパイア用食品である。

高級だがやはり冷凍食品なので、味は良くはない。

栄養分も足りてないのでサプリメントで補っているが、最近喉の乾きが以前より強いので困っている。

やはり身近に血の気の多い恋人がいるのは、不死者的には健康に  
よろしくないのかもしれない。

かといって離れるという選択肢はあり得ないが。

【午前7時15時】

寢室に戻り、鍵付きのクローゼットから制服をとりだす。

いつ見てもこれを着る自分に違和感を覚えるのは、自分がヴァン  
パイアで、その上マフィアの幹部をしていた過去があるからだ。

そんな俺の今の務め先はガラハド治安維持騎士団。つまり今の俺  
は真正正銘の騎士である。

故に纏う制服は騎士らしさに溢れた物で、色はフロレンティアで  
代々騎士の制服に用いられていた白と赤を基調にしている。

かといって古くさく見ええないのは、ミラノの有名デザイナーが仕  
立てたからだろう。

細身のズボンと上着は、誰が着ても格好良くそして凛々しく見え  
る為、観光客から写真撮影を頼まれることも多い。

しかし騎士らしさをと格好良さを追求するあまり、動きにやすさ  
が二の次になっているのは問題だ。

上着は丈が膝上まであるので、すぐ汚れるし擦れるので大変不便  
である。

とはいえ、『痛めば買い換えれば良い』という発想の貴族達で構  
成されるガラハド騎士団では、その手の配慮は無用なのだろう。そ  
もそも真面目に職務に取り込む騎士自体が少ないのが現状だ。

しかし不便な一方、この制服を着ていて良いこともちろんある。  
騎士らしい格好を何より好む恋人は、どうやらこの手の制服に目  
がないようなのだ。

俺の制服をじっと見つめる表情は実に可愛らしく、それを見るた

めなら多少の着心地の悪さは我慢できる。

服より俺自身を見てくれと思う時もあるが、視界に入らないよりはずっと良い。

【午前7時20時】

『身だしなみには気を配れ』

それはかつて恩師から、何度も言われてきた言葉だ。

そのため外に出るとき、特に騎士に制服を着るときは必ず、鏡の前で自分の容姿を確認することになっている。

白いズボンと上着には皺はないか、勿論その下のシャツも問題ないかをまず確認する。

それから膝下までの長いブーツは左右の丈が違っていないか確認し、最後に剣を下げるベルトの位置も調整する。長さが中途半端だと剣と足の長さが上手く合わず、不恰好になる。

そしてこう言うところに目ざとく気付くのが俺の恋人だ。

多分俺の顔より、服を見ている時間の方が絶対長いに違いない。

照れ屋な所は可愛いが、一応褒められる顔はしているので、せつかなら全身を見て頂きたい。

【午前7時半】

服装のチェックを終え、髪と髭を整えてこれで身支度は終了。：

と置いていたが、そう言えばこの前アルベルから香水を買ったこと思い出したので、それを付けて家を出る。

【午前7時40分】

騎士団に赴く前に、フロレンティアの中央にあるヴェッキオ宮殿に足を伸ばす。

宮殿に入るやいなや王子王子と近衛兵が群がってくる。正直この呼び名が未だに慣れない。

【午前7時45分】

近衛兵がよってきた理由が、国王が行方不明だからだと知る。

国王は俺の恩師の一人であり、俺に第6王子としての位を与えた人物だ。

けれどそんな彼の一大事に関わらず、俺は慌てることが出来ない。理由は昨晚、俺の恋人が好きな花について、国王が根掘り葉掘り聞いてきたからである。

公にはしていないが、俺の恋人である騎士キアラは国王の孫娘なのだ。

表だつて孫娘に会えない彼は、武術の腕が立つのを良いことに、すぐに城を抜け出し会いに行ってしまう。

正直デートについてこられたときは、少タイラツとした。

国王だからと言って何をしても許されるわけではないと思うが、残念ながら城を抜け出すクセは治るどころか、悪化の一途をたどっていた。

【午前8時】

いつの間にか、国王がふらりと戻ってくる。

肩に花びらがついていたので、やはりキアラに花を届けに行ったのだろう。

そこを指摘すると色々と面倒なので、来月行われる王族の晩餐会について軽く話をしたあと、アルベールの部屋に向かう。

【午前8時15時】

爆睡しているアルベールをたたき起こす。

俺の部下であり、今は弟でもあるこの王子は俺が起こしに来ないと際限なく寝ている。宮殿のメイドにグズグズしているようなら無理矢理服を着せるように言って、先に宮殿を出る。

【午前8時半】

巡回をかねて街を歩いていると、幸運な事に、朝食を取っているキアラを見つけた。

朝食とは思えない量の食事に思わず微笑めば、あからさまな不快感を示された。

156という小柄な体にどうしてあれだけの量が入るのかわからない。25センチも身長が違うのに、正直俺よりも遥かに食欲が旺盛だ。

まあヴァンパイアはそれほど食事を必要としないので、厳密には比べられないが。

【午前8時40分】

機嫌を悪くしたキアラをなくさめようと、世辞を言うのに相変わらず素直に受け取ってくれない。

そこが可愛くて仕方がないのだが、やはり微笑んだ顔も見たいと思つのが男心である。

【午前8時45分】

キアラが朝食を終えた。騎士団本部へと向かう彼女を送ろうとしたら全力で拒否された。

キスをしてくれたら引くと申し出れば、2分ほど悩んだ末、頼み口づけをしてくれた。

全力で逃げ出した数週間前と比べるとかなりの進歩である。

【午前8時48分】

逃げるようにして去ったキアラのあとを追うように、ガラハド騎士団の本部へ向かう。

ガラハド騎士団の本部は、キアラの所属するガリレオ騎士団の本部と、背中をあわせるように建っている。なので向かう方向同じなのだが、キスは許しても一緒に出勤は嫌らしい。

【午前8時55分】

騎士団本部内にある執務室に向かうと、アルベールが起こしたらしい不祥事の始末書が置いてあった。

近頃やる気を出してくれたのは嬉しいが、どうにも空回りしている。

その上中途半端に聖騎士としての実力がついてきたので、天狗にもなっているようだ。

きつと近々痛い目を見るだろうが、良い薬になりそうなのであえて放っておく。

【午前9時】

就業時間開始。

俺が隊長を務める、ガラハド治安維持騎士団一番隊のロッカールームに顔を出したが誰もいない。

貴族とか王族というのはとことん時間にルーズなのだ。

でもせめて一人くらい定刻通りに来てほしい。特にアルベールに。

【午前9時半】

ようやく部下達がやってくる。

ガラハド騎士団では基本的に10時を過ぎないと人が来ないため、これでも早いほうである。

それで良いのかと思う時もあるが、うちの隊に関して言えば緊急の時は遅れず集合するので、普段は大目に見ている。

【午前9時45分】

アルベールが出勤。早速今朝の予定を伝えようとしたところ、アルベール以下5名の騎士が二度寝を始めたため、今日は朝の予定を訓練に切り替える。

不満ばかりいっているので、好きにしろと突き放した所、何だかんだで全員ついてきた。

この手のおぼっちゃま達は、基本無視されるのが一番嫌いなので、押すより引いた方が確実に上手く事が運ぶ。

【午前10時】

騎士団内にある中庭で、剣術の訓練を開始。

以前より様になってきたが、まだまだ訓練が必要な部下達を片っ端からたたきのめせば、ようやく彼らのやる気に火がついたようだ。貴族という優位性を捨て、騎士としての心得と剣を持って貰いたいという俺の思いが伝わっているとは言いがたいが、もう一回と手合わせを願い出る部下の目に真剣さが芽生え始めているのは確かだ。俺は剣を構え、そして改めて部下達との訓練を再開した。

一日酔いと背中【レナスⅡマクスウェル】（前書き）

キャラクター紹介小説レナス編です。

騎士の休日編までのネタバレ含みます

## 二日酔いと背中【レナスⅡマクスウエル】

【午前7時20分】

同室のキアラが身支度を調える気配で目がさめる。

しかし頭が痛い。体も重い。

そして思い出されるのは昨晚の合コンでの失敗と、そのあと酒に溺れた嫌な記憶だ。

嫌な記憶は忘れるに限る。頭も痛いし。

そう思っリビングのソファーに横になった瞬間、意識が飛んだ。

【午前8時5分】

馴染みの男の声と温もりで、再び目が覚める。

酒臭いと馬鹿にされた気がして、腹いせに拳を突き出したら手応えがかえってきた。

【午前8時10分】

ようやく意識が覚醒し始める。しかしとにかく頭が痛い。

唸っていると、とにかく風呂に入れと言われる。

そう言えば今日は休日ではないと今さら思い出した。

ついでに自分はガリレオ騎士団の第4小隊隊長レナスⅡマクスウエルだと言うことも思いだした。

そっだ、仕事に行かなくては。

【午前8時半】

風呂から上がったままウロウロしていたら、ヒューズが慌ててタオルをかぶせてきた。

何でいるのかと聞いたたら、お前が呼んだのだと言われた。……たしかに昨日留守電を入れた気もする。覚えてないけど。

ぼんやりする私に、ヒューズが服を着ると怒り出したので、寝室に戻りクローゼットから隊服を取り出す。

先週ヒューズにアイロンをかけさせたお陰で、隊服は皺ひとつ無い。

しかし、この恵まれたスタイルの良さがでない制服が、私はあまり好きではない。

っていうかこのえんじ色、これが私の美しいブロンドの長髪に合わないのだ。

26の今日まで結婚相手が見つからないのは、この制服が私の魅力をちゃんと引き出さない所為だ。きつとそうだ。

【午前8時40分】

隊服にブツブツ恨みを言っていたらヒューズにさっさとしろと怒られた。

洗いはしたがタンスにも入れていない下着を身につけ、ズボンを履くとブーツが見あたらなかった。

ヒューズに聞きに行ったら「服！」と怒鳴りながらブーツを投げてくれた。

女性用のブーツは、普段は足が細く見えるから良いが、二日酔いの時は履くのが辛い。

お陰で3回ほど床に転倒し、ようやく履けた。

【午前8時50分】

シャツと上着を身につけてヒューズの前に出ると、よれていた襟を直された。

胸元が開きすぎだと言われたが、堅苦しいのは好きではないし、

ヒューズだつて格好はだらしない方だ。そう指摘すると苦笑しながら、剣をさすベルトを締めてくれた。

【午前8時55分】

ヒューズと共に家を出る。

朝食は食べている暇がなかったが、ヒューズがサンドイッチを作ってくれたのでそれを持参する。

遅刻するぞと駆け出すヒューズを追おうとして、また頭痛がぶり返してきた。

ついで行くふりをして、公園のベンチでこっそり息をついた瞬間意識が飛んだ。

【午前9時20分】

目が覚めるとヒューズの背中に乗っていた。

私は女性にしては背が高く、春の身体測定では170まで身長が伸びていたが、ヒューズはそんな私を軽々と担いでいく。

こうしていると思ひ出されるのは、まだ騎士ではなく貴族の令嬢であった頃のこと。

あのころから執事兼、護衛の騎士として側にいた彼の背にはよくお世話になった。

大抵はいたずらに失敗し、怪我をした私を彼がこうして運んでくれたのだ。

それが二日酔いになつたところ、自分も大人になつたなあと思う。

だがそれを告げると、しみじみするところじゃねえと怒られた。確かにもつともだ。

【午前9時25分】

騎士団本部に到着した。降りろと言われたが面倒だったので隊室まで運んでもらう。

酷い顔だなと言われ、今更のように化粧も何もしていなかったことを思い出した。

ただでさえ最近皺が増えてきたのにと唸れば、愛用している化粧品と化粧水が入ったポーチをヒューズが渡してくれる。

相変わらず気配り上手だと思いつつ、礼を言う前にさっさと去ってしまう相棒をちよつと見直す。

それと同時に彼の前で相当の醜態をさらしたことを思い出し、今更のように恥ずかしくなる。

【午前9時半】

朝の朝礼を開始。予定の確認と点呼を行い業務開始。…と行きたいところだが、キアラ以外の騎士達は皆着替えや化粧をすませないないので、ロッカールームに向かう。

【午前9時45分】

肌のためにと高い金を出して買った化粧水と乳液で二日酔いの肌に活を入れ、同じく良い値のするの化粧品で女の武装を施す。

今日は昼から訓練なので、紫外線をカットするフェアリーパウダー配合の化粧下地とファンデーションを選ぶ。

部下達も皆慣れた手つきで訓練と仕事に合った化粧を施していく中、唯一キアラだけが暇そうにしている。

これだから10代はと若干恨めしく思うが、こちらをちらちら見ているところ、少しはその手のことに興味も出てきたのだろう。

今度の週末当たり、ショッピングに付き合わせるのも良いかも知れない。

【午前10時】

化粧を終わらせると、最後に特殊なコンタクトレンズを目に入れる。

有り余る美貌からわかるとおり、私には魔力と容姿のレベルが極めて高い『エルフ』と呼ばれる種族の血が入っている。

そのため私の緑眼には特別な魔力があるので、コンタクトはそれを押さえるための物である。

とはいえ私の場合、異常なほど魔力が低いのではめる必要はあまりないのだが、こういう細かいところをいちいちチェックする男が側にいるので仕方がない

それにこのコンタクトをしていると、若干目が輝いて見えるので男ウケが良いのは確かだ。

一通りの身支度を終え鏡の前に立てば、そこには美しきガリレオの騎士が映っている。

どうしてこんな美人なのに、結婚できないのだろうか。腹筋か、それとも制服の所為なのか……。

【午前10時5分】

正直仕事をする気分ではないが、残念ながら出勤要請を告げる放送がロッカールームに鳴り響く。

一振りの剣を腰に差し、私は仕事に取りかかるため気合いを入れた。

…でもやっぱり頭は痛い。

休日出勤の代償【カイル”ヒューズ”】（前書き）

キャラクター紹介小説ヒューズ編です。

騎士の休日編までのネタバレ含みます

## 休日出勤の代償【カイル”ヒューズ”】

【午前3時45分】

目を開けると、そこに広がっていたのはガリレオ騎士団内にある、仮眠室の天井だった。

もう5日ほど家には帰っていない事を思い出しながら、硬いベッドに悲鳴を上げる背骨を伸ばす。

シャワーは浴びれるが、そろそろロッカーに置いてあるシャツのストックも切れかけている。

今日こそは帰りたいと願いつつベッドから抜け出せば、既に東の空に色づき始めていた…。

【午前3時50分】

俺が隊長を務めるガリレオ騎士団第5小隊の隊室に戻ると、昨日逮捕した麻薬の密売人が、アジトの場所をまだ割らないとの報告を受ける。

せつかく今日は非番なのに、これではまた家に帰れない。

さすがに部下達も疲れ切っているので、仕方なく秘密兵器を投入することを決意する。

と言つても俺である。

ただしいつもの姿ではなく、俺のもう一つの姿で取調室に入り、オーバーな動きで机を粉碎したところ、犯人が泣きながらアジトの場所を吐いた。

【午前4時】

隊室に戻ると部下にも悲鳴を上げられた。

皆俺の正体を知っているが、やはり竜を思わせる翼や角を有する

姿は気味が悪いのだろう……とこっさり凹んでいたら、問題は机を粉砕したときに酷く裂けた右腕だった。

よく見ると血が大量に出ている。

よってたかつて救護室に行けと叫ばれたので、仕方なく元の姿に戻り部屋を出る。

【午前4時5分】

最悪なことに、今晚の当直は白衣の天使を自称する男、アレツシオであった。

腕だけで良いのに体中まさぐられ、セクシーだの何だの良いながら顎髭にキスマでされた。死にたい。

【午前4時15分】

変な薬をもらえそうになったので、ガーゼと包帯を奪って逃げる。隊室に戻ると、アジトへの突入は、この件と一緒に捜査していた第7小隊が行うことになったとの報告があった。

手柄はあちらの物になるがと前置きされたが、犯人が検挙できるならそれだけで十分だ。

それに部下達もみな家に帰っていないので、手柄よりも休息を取ることのほうが重要だろう。

【午前4時20分】

今日はゆっくり休めると喜ぶ部下達と共に騎士団を出る。

久しぶりの非番だ。今日こそはあの女の我が儘で睡眠を妨害されないことを祈る。

【午前4時40分】

帰宅すると留守電が入っていた。  
嫌な予感を覚えて再生すると、案の定俺の同期兼雇用主のレナスからの物である。

残されていたのは、酷く酒をのんだから明日は起こしに来いという勝手な伝言だった。

非番の意味がないじゃないかと思いつながらベッドに倒れ込んだ直後、意識がとんだ。

【午前7時半】

さめなくていいのに目がさめてしまった。夢の中でレナスに殴られる夢を見た所為だ。

それも出会った当初の、幼い彼女に殴られる夢だ。

思えばもう、16年もあいつの面倒に振りまわされている。

初めは護衛役とその対象として出会い、今や完全に奴の下僕である。

【午前7時35分】

風呂にも入らずに寝てしまったのでシャワーを浴びる。

何気なく腕を見ると、怪我をした腕にはもう傷ひとつ残っていないかった。

短時間とはいえ熟睡できたおかげで、ただでさえ高い治癒能力が活性化したようだ。

【午前7時40分】

シャワーを終え、寝室にあるクローゼットの鍵を開ける。

昨日着ていた制服をしまい、変わりに予備の物を出したが、ズボンもシャツも上着も、アイロンをかける暇がなかったので皺になっ

ている。とはいえこれしかないので、着るしかない。

ボタンやベルトをしつかり止めてしまおうと目立つが、カチツとした着方はしないので少しはマシだろう。

レナスにはだらしがないと言われるが、上着はいつも手で持つか肩に羽織るだけだし、シャツも二の腕までめくり上げ、胸元のボタンは冬場でも締めない。

ちなみにこれはファッションとかではない。俺の中に眠る獣の血がそもそも服を好まないのだ。

俺の中には竜族や獣人と言った特異な人種の血が多く入っているため、特に血が濃い種族の特性は、人の姿の時にも現れてしまう。

故に夏場は地獄だ。なにせ毛皮を着ているのと同じ状況なのである。

故にいつそ獣に変身して寝ている方が実は涼しい。

実際仕事がないときは狼の格好でウロウロしていることもある。

野良犬が多いフロレンティアでは、こうしていても意外にはれないのだ。

むしろ動物の姿をしているときの方が優しくして貰える。……正

直それはそれでとても切ないが。

【午前7時50分】

歯だけは磨こうと鏡の前に立つたら髪がまだ乾ききっていないかった。

なかなか散髪に行けない所為で、後ろ髪がだいぶ伸びてきているようだ。

また黒に近い茶色の髪は、色が暗いせいか長くなると獣の毛のように見えてきてしまうのも問題だ。

変身してないのに狼に近づいてきたとか失礼なことをレナスに言われたことを思いだし、せめてちゃんとセットくらいしようとしてドライヤーに手を伸ばしたら、スイッチが入らない。

そしてふと、この前レナスが酔った勢いで振りまわし、壊したことを思い出した。

トースターと電子レンジとテレビに続き、我が家で彼女が破壊した機械製品は既に4つ目である。

【午前7時55分】

冷蔵庫の中から朝食になりそうな食材をいくつか見繕い、剣とベルトと共に抱えて玄関に向かう。

その瞬間、今更のように自分が非番であることを思い出した。

制服でなくても良かったのと思ったが、着替えるのも面倒なのでベルトを腰に回す。

ガリレオで支給されている物とは違い、俺が使っているのはかつて故郷のステイツで愛用していた物だ。

拳銃と呼ばれる武器をしまう為のベルト、通称ガンベルトと呼ばれるそれを改造し、今は剣をさせるようにしている。

おっさんくさいだの、西部劇みたいだのとレナスには散々言われているが、下僕の俺にだってこだわりのひとつくらいあるのである。

【午前7時59分】

レナスのアパートに到着。

女性向け物件の所為か、全体的に作りが小さなアパートは、身長が188も在る俺には酷く狭く見える。

ちなみにこのアパートはガリレオの女性騎士専用のアパートであるため、男の出入りはほとんど無い。故に男子禁制ではないが、中にはいるのは少し勇気がある。

それを本人に告げたところ、嫌がらせのように合鍵を渡された。チャイムを鳴らさなくて済むでしょうと微笑まれたが、そう言う問題ではない。

【午前8時】

アパート内でキアラとすれ違う。

「今日もご苦労様です」と呑気に出て行くところ、今日もレナスを起こさずに出てきたようだ。

副官ならフォローしろと言いたいところだが、あの女の寝起きはドラゴン並に悪いので無理は言えない。

【午前8時5分】

ソファアで爆睡しているレナスを発見する。物凄く酒臭い。

思わずその事実を口にすれば、寝ていたはずのレナスからパンチが飛んでくる。

予想はしていたので素早く交わす……はずが、レナスが脱ぎ散らかしたブーツに躓いてもろにくらってしまった。どんなに腹筋を鍛えていても彼女の一撃は痛い。

【午前8時10分】

ようやく受けた一撃の痛みが消えてきた。

レナスももぞもぞと動き出したので、無理矢理風呂に追い立てる

【午前8時15分】

あまりに部屋が汚いので、レナスの脱ぎ散らかした服と飲み散らかした酒瓶を片づける。

キアラの物に触らないのは、彼の恋人であるヴェンセントを知っているからだ。

あの男、女慣れしているように見えて、キアラに関しては相当嫉

妬深い。本人は無自覚のようだが。

【午前8時20分】

持ってきた食材で簡単なサンドイッチを作る。

あの様子では朝食を取る余裕は無さそうなので、職場に持って行くように紙袋に入れる。

【午前8時半】

服はおろかタオルすら巻かずにレナスが風呂場から出てきた。

慌ててバスタオルをかぶせると、張りのない声が返ってくる。確実に寝ぼけている。

どうしてこの女はこうも心臓に悪いことをやらかすのか。

子どもの頃からの付き合いとはいえ10も年が離れた男がいるというのに、よりもよって裸である。

【午前8時40分】

自分に原因はないとはいえ、裸を見てしまった罪悪感にさいなまれていると、レナスがまたあられもない姿で現れた。

ズボンをはいているが上は下着だけである。まだマシか、と思っ  
てしまうのは彼女に毒されている証拠か。

ブーツがないと騒ぐ彼女に、床に放置されていたそれを投げれば、  
ようやく寝室に引っ込んだ。

【午前8時50分】

レナスがようやく服を着てくれた。

しかし完全に酔っ払いの着方なので、襟やボタンの掛け違いを直

してやる。

子どものようだと指摘すれば、逆にヒューズもだらしのないじゃないかとふて腐れる所が更に子どもだ。

【午前8時55分】

先ほど作ったサンドイッチをレナスに持たせ、家を出る。

遅刻寸前なので無理矢理走らせれば気持ちが悪いと文句を言われた。自業自得だ。

【午前9時】

ガリレオ騎士団の本部に到着。しかし肝心のレナスがいつの間にか後ろにいない。

探すべきかと思ったが、さすがにどこかで寝ている…なんてことはないだろう。あれはもう26だ。

【午前9時15分】

せっかくなので、隊室でたまっているデスクワークを片づけていると、レナス隊長が来ていないとキアラから文句を言われた。

暗に探して連れてこいと言っているのは明白で、仕方なく仕事を中断する。

【午前9時20分】

来た道をたどると、騎士団本部近くにある公園のベンチでレナスが爆睡していた。

見つけると同時に、すぐに戻るべきだったと俺は後悔する。

なぜなら、レナスを遠巻きに見つめる男達の視線があまりに多か

ったからだ。

腹筋の所為でモテないと言っているが、それは彼女の魅力を正當に評価できない男に引つかかるからであって、ガリレオ騎士団のレナスといったら、美しき女騎士として異性にも人気が高い。

今もレナスに声をかけようとする男がじわじわと増えており、俺は急いで彼女を引つ張り起こす。

寝ぼけて足腰が立たない彼女を仕方なく背に乗せれば、無意識ながらちゃっかり腕を回してくる。

それから周りを見回せば、男達が気まずそうな顔で逃げ出した。

睨んだわけではないが、俺の灰色の瞳は人を畏怖させる魔力があるようなのだ。

今日のような場合は役に立つが、子どもや動物に怯えられるのは正直ちょっと切ない。

【午前9時25分】

騎士団本部に到着。今更のように自分の有様を自覚して、レナスが慌て出す。

化粧なんて今更どうでも良いだろうと思ったが、それはおきまりの台詞なのでその手のスキンケア商品は俺が変わりに持ってきている。

いったいいつまで俺はこいつの執事みたいな事をせねばならないのかと思いつつ、嬉しそうに微笑まれるとどうにも弱い。

だがせめて服くらいはちゃんと着れるようになって欲しい。これは切実である。

【午前9時半】

隊室に戻ると、私服姿の部下達がいた。休日だろうと指摘すると、それはこっちの台詞だと言われた。

隊長がちゃんと休んでいるか確認しに来たのだという。

部下達には日頃楽をさせて貰っているので、休日出勤くらいしてもいいと思っただが、それを口にしたら物凄く怒られた。

楽をさせてるのではなく、楽を押しつけているのだと言われた。

そうしないと働きすぎて過労死するだろうと怒鳴る彼らに、否定の言葉を返せないのは実際倒れたことがあるからである。

俺が唸っている隙に部下達は勝手にデスクを片付け始め、せっかくだから飲みに行こうと誘ってくれた。

### 【午前10時】

気配り上手な部下達に感動していたのに裏切られた。

飲みに行く……というのは大嘘で、向かった先は野郎には似合わない可愛らしい軽食堂トレットリアに設営された、合コン会場だった。

それも相手は魔法学校の学生達で、休校を利用して朝からおめかししてきたらしい。

正直全く興味がなかったが、合コンの条件が俺の参加らしいので帰るに帰れない。

通りでいつもは定時通りに来ない部下達が、朝も早くから隊室にいたわけだ。

36にもなつて結婚できない隊長のため！とか言っているが絶対嘘だ。

やはり帰ろうと立ち上がれば、こう言うときだけ無駄に団結力を発揮する部下達に無理矢理椅子に戻され、いつの間にか手と椅子を手錠で固定されている。

どうして俺の周りはいくつか強引で勝手な奴ばかりなのかと思いつつ、もし合コンをしたことがばれたら、一番勝手な女が怒る事は火を見るより明らかなので、俺は箝口令を敷くことを心に決めた。

次々増える仕事と心労に、もはや生きた心地はしない。

やはり休日出勤などする物ではないなと思いつつ、俺は手錠の外

し方について考え始めた。

酷い顔だと、男は足に縋り付く少女を見下ろした。

高価なドレスを泥だらけにして、1時間もかけて結った美しい金糸の髪もボサボサにして、彼女は行かないでと繰り返しながら泣き叫んでいる。

どうしてこうなったのかと、男は少女を見下ろした。

縋り付く腕は細くひ弱で、男が本気になれば意図も容易く突き放すことができる。

1時間前まで、男は少女を守る護衛の騎士だった。

しかしその契約は期限付きの物であり、もはや少女と男には何の関わり合いもない。

ならば振り払うことなど造作もないと考えて、男は少女に腕を伸ばした。

少女の腕を引きはがそうと、密着する体を遠ざけようと思っていた。

思っていたはずなのに、伸ばされた腕は少女の乱れた髪を撫でていた。

行くなと、少女がもう何度目かになる言葉を繰り返した。

「わかった」

なぜそう答えたのか、男にもわからない。

だが短いその一言で、少女の涙が途端に消えた。

「ここにいる」

少女の目線に合わせて男が膝を折れば、少女が男の首に思い切り抱きつく。

「ずっとよ」

それが永遠と同じ意味を持っている事に男が気付いたのは、もう少し後のことだった。

Episode 01 - 1 夢に見たその顔は

レナスが目覚めると、そこには不機嫌な副官の顔があった。

「隊長、作中中です」

「ちよつと、うつらうつらしてただけじゃない」

「よだれ垂れてましたよ」

慌てて口を拭くと、副官であるキアラがため息をこぼす。

「まあ、今日はみんな似たり寄りたりですけど」

見ればレナスの部下達の中にも船をこいでいる者が多い。

それもそのはず、昨日はせつかくの非番だというのに急な出勤で夜中まで仕事だったのだ。

「なんで非番の日に限って放火魔とかでるのかしら」

「でも昨日の隊長格好良かったです。あの救出劇には惚れ惚れしました」

「じゃあ、今日は寝て良い？」

「それとこれとは話が別です」

笑顔と共にキアラが出したのは、経費申請書だった。

「うわあ、これ今日までか!？」

自分の事務処理能力じゃ無理だと白旗をあげた瞬間、キアラがあらゆるため息をついた。この反応は既に予想していたのだろう。「私がすでにまとめています。なのでご自分の分だけ書いてください」

「あんたが副隊長で本当に良かった」

「隊長つて、頭良さそうなのに事務仕事ホントだめですよね」

「さつきは褒めたくせに」

「現場での指揮や行動力を尊敬しているのは本当ですよ」

でも事務が…とあきれキアラをしかれないのは、実際彼女に様々な雑務を押しつけている負い目があるからだ。

「昔から、そう言うのは人任せだったから」

「ヒューズ隊長に同情します」

あえて名前を出さなくても、レナスが迷惑をかけ続けている相手をキアラはわかっている。

「さあ、早く書類出してください。隊長のが終われば定時で上げられるので」

「もしかしてデート？」

「ちっ違います」

といいつつ語尾が下がったところ、凶星なのだろう。

順調に恋を進める副官を心の底から羨ましく思いつつも、嫌がらせをするような趣味はないのでレナスは素早く書類を引き寄せた。

経費の申請に使う領収書をかき集めながら、そろそろ自分もデートをしたいなとぼんやり考える。

しかしそう思う一方で、近頃は好みの顔を見ても、なかなか心が揺れない日々が続いていた。

むしろ好みでなくても、甘い台詞を囁かれればコロツと落ちていた。

なのに今は美青年にも愛の言葉にも心が反応しない。そのくせ、仕事中に、どうでもいい男の夢なんぞを見てしまう。

もう来月で27になるのだ。それまでに結婚できなければ、今度こそお見合いと親にも再三言われている。

だから確実に自分を好きになつてくれる相手に出会いたいのにな、訳もなく側の男ばかりを意識することが増えているのは事実だ。

それはまるで恋のようで。でもそれを認めることは出来ない。

…出来ないはずなのに、もしもこれが気の迷いではなかったら、そして万に一つの可能性ではあるが、彼が自分を受け入れてくれたらどうなるのだろうかと考えた途端、持っていた鉛筆が折れた。

「ないないないない」

そう言いつつも一瞬、ほんの一瞬だけ、自分を見るヒューズの愛おしい顔が浮かんだのは何があっても認められない。そしてそれを、格好いいと思ってしまったことも絶対に認められない。

「隊長、大丈夫ですか」

拳動不審なレナスに声をかけるキアラ。それに大丈夫だと頷いて、レナスは気合いを入れ直す。

彼は、ヒューズはただの友人だ。友人というか、従者で下僕で便利な道具だ。

我ながら酷いと思いつつも、それが幼い頃から今まで続く、二人の絆の形である。

歪で滑稽で、けれど彼の最も近くにいるにはそれしかない。

だから何があってもこのままでしょう。そう心に決めて、領収書を出すために財布を引っ張り出してレナスは唸った。

「やばい、今月ちよつと使いすぎた」

ヒューズにあとでお金借りよう。

考えるより先に出た結論に、レナスはホツと胸をなで下ろす。

やっぱり彼に抱くのは恋ではない。恋心があるのなら、金をせびりになど行けるわけがない。

「財布よね財布」

ニコニコしながら財布と繰り返すレナスに、キアラや他の部下達が若干心配そうな顔で彼女を伺ったが、レナスは気付きもしない。

そんなとき、一人の男が颯爽と隊室にやってくる。

「レナスさん！」

爽やかな微笑みをうかべる彼は、フロレンティアの第4王子アルベールである。

「今晚暇ですか？」

誘い上手な王子の登場に、騎士達はおっと声を上げたが、当のレナスは何故だか呆れている。

「立派な騎士になるまでは、デートしないんじゃないの？」

それもそのはず、この王子はレナスのかつての恋人だ。そして立派な騎士になるから付き合えないと、彼女をふったのはまだ記憶に新しい。

「この前言ったじゃないですか、一緒に映画行ってくれるって」

以前付き合っていた頃はもう少し大人っぽいと思っていたが、こういう人なつっこい笑顔のほうが素なのだろう。そしてこの笑顔に向けられると、レナスは弱い。

「まあ、言った気はする」

とはいえ僅かな時間ではあるが、レナスが彼をすっぱり諦めるには十分な時間である。

元々ふられると、あっという間に次の恋に移るのがレナスなのだ。むしろ今は男として言うより、弟分として放っておけないという意識の方が強い。

「じゃあ映画、一緒に行ってください？」

「わかったわよ。だからあと30分待ちなさい」

レナスの言葉に、アルベールの顔に花が咲くような笑顔が浮かぶ。それに騎士達の何人かが甘いため息をこぼしたが、レナスは見てもいない。

それどころか、彼女は自分の財布の軽さを思い出し、アルベールにとある提案をした。レナスの何気ない言葉はアルベールの爽やかな笑顔を木っ端みじんに打ち砕いたが、それすら彼女は見ていなかった。

Episode 01 - 1 夢に見たその顔は（後書き）

ヒューズ・レナス・アルベールを中心とした5話目です。

毎回毎回少しずつ1話の分量が多くなっておりませんが、今回は最長かもしれません…。

その分色々な事が起こりますので、よろしければまたお付き合い下さい。

あと拍手のお礼小話にヒューズとレナス（11歳）のエピソードを掲載しましたので、もし気に入ってくださった方がいらっしゃいましたら、読んで頂ければと思います。

Episode 01 - 2 財布の男

「ヒューズ、僕今日これからレナスさんと映画に行くんだ」

「何見るんだ」

「最近話題の恋愛映画！」

「ああ、吸血鬼と狼男の間でウロウロする女の子の奴か」

「何で知ってるんだよ。っていうか、他にもっと反応あるだろ？」

「その映画の原作、レナスに無理矢理読まされたんだよ。面白いからって」

「……あれ、少女小説じゃなかった？」

「あの手の小説のなにが面白いのか、おっさんにはさっぱりわからん」

唯一理解出来たのは、10代の恋愛は面倒そうだと言っことくらいだと呟くヒューズ。

しかしそれはアルベールが聞きたい言葉ではなく、ついに彼は怒り出す。

「ってそういう話じゃない！ 僕、レナスさんと映画に行くだよ」

「なんだよ、俺に金だせつてのかわ」

冗談を口にしたはずが、目の前のアルベールが泣き崩れた。

「何でなんだ。どう考えても恋愛映画に誘ったらデートじゃないか。何に何でヒューズも連れて行こうとか言うんだあの人は！」

「だから財布だろう」

「僕を試してるんだ。ライバルをも受け入れる度量があるかどうか試してるんだあの人」

「だから財布だって」

「僕だっってお金ならある！」

「王子の台詞じゃねえだろそれ」

そう言つと、ヒューズは自分の夕食代を引き抜いた財布をアルベールに差し出す。

「使えるわけ無いでしょう！」

「レナスに渡せば勝手に使うから」

そんなまさかとアルベルが驚いていると、やってきたのはそのレナスである。

「早くしないと映画始まつちゃうよ」

「いや、ヒューズがその…」

「俺は仕事なんだ」

「えー、私お金無いのに」

ほらきたと、ヒューズは財布をレナスに渡す。

「二人で行ってこい」

「じゃあ来週一緒に行こう。新しいホラー映画はじまるし」

「じゃあその分は残して置けよ」

「あ、ジエラート…」

「食って良いからさっさといけ」

あつけないほどのあっさりと、レナスはアルベルの腕を引いて歩き出す。

驚愕の表情を貼り付けたまま、部屋を出て行くアルベル。それをヒューズは見もしないが、彼の部下達はそうはいかない。

「いつもおもうんですけど、隊長はそれで良いんですか？」

「何が？」

「財布あつかい」

「カードは抜いてあるし、飯代は確保してるからな」

そう言う台詞が出ている時点で、レナスの財布であることに疑問すら持っていないのは明らかだ。

婚約者どころか恋人も作らず、挙げ句の果てにガリレオ騎士団3大悪女の一人であるレナスに利用され続けている隊長が、部下達は哀れで仕方がなかった。

「それよりお前等、さっさと経費申請書だせよ。帰りまでだからな」  
だが当人はそう思われていることすらわかっていない。

口では面倒くせえといいながら、実は隊の誰よりも仕事熱心な彼

には、恋よりも書類の締め切りのほうが重要なのである。

「隊長、結婚とか考えた事無いんですか？」

「相手もいねえのになんでだよ？」

「っていうか、相手探しましょうよ、俺達合コンセツティングしますから！」

部下達がそうはやすが、ヒューズは全くつれそうにない。

「いつまでもレナス隊長に振りまわされてちゃ駄目ですよ」

「もう15年も振りまわされてるんだ、今更すぎるだろう…」

呆れているように聞こえるが、付き合いの長い部下達は気付いている。

仕事以外には無関心なくせに、レナスに関する話の時だけ、ヒューズの言葉にははつきりとした感情が乗るのだ。

それはもう、特別な意識があるのことは明白で、でもそんな自分の癖に彼自身が気付いていないのも明白で、聞いている部下達は胸が苦しくて仕方がない。

何でよりも寄ってあんな女なんですか隊長。

あなたはもつと幸せになるべきです。

そんな思いを部下から向けられていることにも気付かずに、ヒューズは「申請書」という単語を繰り返していた。

幸せそうな顔でジェラートを頬張るレナスを見つめながら、アルベールは何とも言えない複雑な気持ちになる。

夜、街灯に照らされたフロレンティアの街並みは、恋人達の都と言われるだけあってロマンティックなムードを演出している。

恋人達は手と心を繋ぎ、うっとりとして街を歩いていく。中にはついはむようなキスを交わしながら歩く者までいる。

しかしそれは、アルベールのいる場所からは遙か遠くの出来事だった。

彼らがいる一角だけは恋人よりも家族連れが多く、今もレナスとアルベールの前を走っていくのは小さな子ども達だ。そしてその顔は、ジェラートでべっとりである。

それを叱る母親の怒号が響き、もはやムードも減ったくれもない状況だがレナスは気にもしていない。

「このジェラート美味しいのよね。何度食べても飽きないわ」

今、レナスの目に映っているのは、手にしているジェラートただひとつなのだろう。

それはそれで悲しいが、もしこれが自分で買ったジェラートならまだ救いがあった。

だが彼女を笑顔にしているそれは、ここにはいない第三者の財布から出た物である。

「レナスさんって、いつもそうなんですか」

「なにが？」

「デートの時も、ヒューズさんの財布からお金」

「デートの時は彼氏に奢らせるわよ」

映画を見て食事までしてジェラートまでたべたのにこれはデートではなかった、という驚愕の事実が判明し、アルベールは深く深く沈み込んだ。

一人前の男になるからと、レナスと別れてから早2ヶ月。

アルベールの方は、『一人前の男になったら改めて告白する』つもりで切り出した別れの言葉だったのだが、それをレナスが全く理解していなかったと気付いたのは最近のことだ。

今のところ、彼女が新しい彼氏を作った形跡はない。

だからてつきり自分のことをまだ……と勝手なことを思っていたのだが、勿論そんなうまい話はなかった。

記憶喪失に陥ったのかと時々不安になるほど、レナスがアルベールとの甘い日々を思い出すことはない。

アルベールの方は二人でいるたびに昔より胸が高鳴るのに、レナスはお友達、いや友達と言うよりもはや弟分とかそういう方が近い接し方である。女は終わった恋を振り返らないという言葉は、どうやら本当らしい。

「つてか、最近デートしてないなあ」

これまた傷つく一言に、アルベールは腕を滑らせジェラートに顔を突っ込んだ。

だが勿論、レナスはアルベールの異変には気付かない。

「合コンとか行っても、なかなか良い出会いがないのよねえ」

それどころか、男を紹介しろと言い出しかねない空気が流れだしている。

それだけは回避せねばと、アルベールは慌てて顔のアイスをなめ取り、真剣な顔をレナスに向けた。

「レナスさん」

「どしたの、似合わない顔して」

傷ついたが、ここはぐつと我慢する。

童顔だと言われ続けてはや二十数年、自分がいかに男らしさからほど遠いかは知っている。

だがそろそろその汚名を返上せねば、レナスの中での彼の地位は可愛い弟分で確定してしまう。

故に彼は決心した。今こそ、男を見せる時なのだ。

「僕、今年のカルチヨ・ストーリーリコに出てみようと思うんです」  
カルチヨ・ストーリーリコ、それは毎年繰り広げられる古式サッカーの大会だ。

そして男をアピールするには、この大会は絶交の機会でもある。  
なぜなら、カルチヨ・ストーリーリコに参加することこそ、フロレンティアの男の証とされているからだ。

それ故毎年、無駄に暑苦しい野郎どもが上半身むき出しでボールを追いかけるのがこの大会の醍醐味である。

またこの試合は、暑苦しいだけでなく大変過激なことでも有名だ。

サッカーというより格闘技に近いルールを用いるため、カルチヨ・ストーリーリコでは毎年大量の怪我人が出る。

それが怖くて今まで参加を逃げていたのだが、レナスの中の評価を上げるにはもはやこれしかないだろうと、実はこっそり参加申請を出していたのだ。

「でも大丈夫？ あんた男達から目の敵にされてるし、たぶんボコボコにされるわよ」

応援より先に心配されたことも非常に気になったが、それよりもボコボコという単語にアルベールは反応した。

「女たらしのアルベールって、野郎どもから評判悪いしねあんた。良い機会だって、よってたかって殴られるわよ」

そんなに人気がなかったのかと、アルベールは動揺を隠せなくなつた。

「悪いことは言わないから止めなさい。それかほら、決勝戦の前にある子ども達の親善試合、あれにでなさいよ。お母さん達には人気だし、写真撮影とかいっぱいして貰えるわよきつと」

「僕はマダムにモテたい訳じゃない！」

腕の中のコーンを握りつぶし、アルベールは思わず立ち上がった。  
「僕は、僕はこの2ヶ月ずっと体を鍛えてきたんです。聖騎士としての修行も積んで、高位な聖騎士にだけ与えられる聖剣も貰ったんです」

ジェラートまみれの手で引き抜いたそれは、夜でも仄かな白い輝きを放つ本物の聖剣。

その柄に刻まれた竜の紋章は、上級聖魔法を全て会得した者にだけ与えられる、上級聖騎士の証であった。

「何よ水くさいわね、言ったらお祝いしたのに」

「じ、自分で言ったら格好悪いと思って、先週からこれ見よがしにさしてたんですよ。レナスさんは全く気付いてくれなかった……っというか、ヴィンとヒューズしか気付いてくれなかったんですけどね！」

どこかやけになっっているアルベールに少々不安を抱きつつ、レナスはとりあえずおめでとうと声をかける。

だがそれだけでは、もはやアルベールの傷ついた男心を元通りにすることは出来なかった。

レナスの素っ気ない態度で心に大けがを負ってしまったアルベールは、もはや暴走する高速列車である。

「立派になりたくて、レナスさんに追いつきたくて、ずっと頑張ってきたんです、ずっと！」

勿論まだ未熟だけれどと言いつつも、アルベールは男らしいと自分では思っている動きで、レナスの前に跪く。

「それでも僕は、前より遥かに強くて男らしくなりました！だからカルチヨ・ストーリコで大活躍して、絶対優勝してみせる」

そしてもう一度、レナスさんに告白させてください！

フロレンティア第4王子アルベール「アレクサンドル一世一代の大告白。」

だがその力みように、レナスが感じたのは喜びよりも、不安だった。

## Episode 02 - 1 悩みの種と残業と

お先に失礼します。

そう言っ出て行く部下達を見送って、ヒューズは手元の書類と大量の領収書を引き寄せた。

今頃あの二人は美味いもんでも食ってるんだろうかとぼんやり思いつつも、経費の申請を明日に控えた今夜は食事に行く暇もない。帰りに部下達が提出したこの有象無象達を、今夜中にまとめ上げねばならないのだ。

他の隊と違って特殊な潜入任務や諜報活動などもある第5小隊では、この手の請求書の整理は一苦勞である。

だから前もって出しておけというのに、何度言っても部下達の提出はギリギリだ。

「よめねえよ」

資料代なのか衣装代なのかはつきりしない文字に唸りながら、わかるものだけでも適当に分けていく。

中には仕事外の領収書を混ぜている馬鹿もあり、そう言うのは勿論ふるい落とす。

一応経費には上限があり、超過すると事務課のおばちゃん達が黙っていない。

事務のおばちゃん達は厳しく、そしてとにかく怖い。

なにせおばちゃん達のほとんどは、結婚や子育て故に前線を退いた、元女騎士なのである。

故に不正や超過は絶対に見逃さないし、それにくわえてもう一点ヒューズを悩ます爆弾を彼女たちは抱えていた。

おばちゃん達は、漏れることなく非常に嗜好きなのである。特に色恋に関して。

騎士団内の恋愛事情をもれなく把握しているのは彼女たちで、誰と誰が付き合った、別れたという話を広めるのもおばちゃん達だ。

ヒューズも一度、レナスと付き合っているという根も葉もない噂を流され、酷い目にあつたことがある。

偽りだとわかつたときはさすがに謝罪されたが、それで降やたらとレナスとのことを聞いてくるのは正直うんざりである。

しかし人に散々迷惑をかけておきながら、経費に関しての甘えは許してくれないのだ。

むしろ弱みを握られることになるため、今夜もこうして知恵を絞っている。故に超過は絶対許されない。

だが節約の二文字が欠けた騎士達は、張り込み中の食費が支給されるのを良いことに、無駄に高い昼飯を食べていたりするからやっかいだ。

そもそもフロレンティア人は食に妥協しない。

戦争中にも関わらず、戦地でコース料理を食べていたという噂をステイツで聞いたときはそんな馬鹿なと思つたが、實際来てみるとあながち嘘ではないことがわかる。

「こいつ、絶対女と食事したたる」

食事代と書かれたレシートの金額に、ヒューズは呻いた。

女好きが度を超しているのもフロレンティアの男の特徴だ。

張り込み中だろうと、犯人追跡中だろうと、いい女がいれば目を離せなくなるのがフロレンティア人らしい。

ナンパをしないと死んでしまう病にでもかかっているのかと本気で思うほど、女性に目がないのは部下達も同じで、ヒューズはそんな彼らを何回どついた事だろう。

捕まえた犯人を、女だからと言う理由でを本気で口説き始めた奴には、もはや怒る気力もわかなかつた。

そう言う国なのだと、最近では割り切ることにしている。

だが一方で、どういふ訳だか最近、周りの方がヒューズの行動を割り切ってくれない。

おばちゃん達の詮索は酷くなるし、部下達は彼を騙してでも合コンに連れて行こうと画策ばかりしている。

放っておいてくれというのがヒューズの思うところだ。既に彼を財布と思う女がいるのに、これ以上それを増やしてどうするのか。それに少なくとも、レナスからの財布扱いについては彼自身が招いた結果である。

今でこそあそこまで図々しくなったが、レナスは本当に欲しい物に限って遠慮をする少女だった。

元々甘えるのが得意ではないし、欲しい物をぐっと我慢して生活していた時期もある。

それを甘やかしてやりたくなつたのはヒューズの勝手に、それを普通だと思うように仕向けたのも、彼自身だ。

レナスとは違いヒューズは物欲もあまりない。

それに危険な任務が多いため、レナスより貰っている賃金は上だ。その上家や騎獣のような高価な物を買うつもりもないので、レナスの我が儘に使うくらいどうと言うことはない。

それに何だかんだで、彼女は恩を仇で返すことはしないのだ。

馴染みの足音が近づいてきたのに気付いて顔を上げれば、そこにはヒューズの財布を持ったレナスが立っていた。

同時に胃袋をくすぐる香りに視線を動かせば、レナスが紙袋を抱えている。

「はいこれ、パニーニとジェラート。そこでみんなにあつて、ご飯まだだつて言つてたから」

そうやってさり気なく気づかしてくるだけで満足してしまう自分には、彼自身だつて呆れている。

けれど多くの物を望んではならないヒューズには、ささやかな差入れだけでも十分すぎるほどののだ。

「カッフェ入れるね」

「砂糖とミルク大量で」

「糖尿病になるわよ」

そう言いつつも、ヒューズのマグカップを取り上げるレナスに、ヒューズは書類に目を戻しつつ苦笑した。

## Episode 02 - 2 二つのお願い

鼻孔をくすぐるバジルの香りに誘われるがまま、レナスの差入れのパンニーニかぶりついた途端、妙な視線をヒューズは感じた。

どこか不敵な忍び笑いも聞こえ、ヒューズは恐る恐るパンニーニから顔を上げる。

ときたま優しさに見せかけた罨を張られることがあるのだが、今日はまさしくその罨の方だったらしい。

「食べたわね」

いつの間にか迫ったレナスの顔に、思わずむせるヒューズ。それを笑いながら、レナスは側の机から椅子を引きだしヒューズの隣に座った。

「これは一体何との交換条件なんだ？」

「とりあえずまあ、カッフェでも飲んで」

喉も渴いたので手を出したいところだが、側でこちらを伺うレナスの顔にはなにやら含みがある。

「安心して、ここまでは私のサービス。っていうか別に、あんた私の言うことは無償で聞くじゃない」

これまた勝手なことを言い出すレナスには呆れたが、ヒューズは誘惑に負け、カッフェを口に含んだ。

「実はさ、アルベールに告白されたのよね」

どうしてお前は、口に物を含んだときに限ってそう言う告白をするのかと、カッフェで濡れた机をふきながらヒューズは唸る。

「アルベールがさ、聖剣貰ってたの知ってた？」

「これ見よがしにぶら下げてた奴だろ」

「そう、私全然気付かなかっただけぞ」

「アレ、一応貰うの結構大変なんだぞ」

「やっぱり努力してたんだ……」

そう言って机についた腕に頬を載せ、レナスは唸る。

一応その努力が他ならぬ自分のためだと言うことはわかっている  
雰囲気である。まあ告白されたのなら当たり前だろうが。

「受けるのか」

「そう言うこと以前にもう一個問題があるのよね」

持ち上げていたカップを机に戻し、ヒューズはレナスの言葉を待  
った。

「カルチヨ・ストーリーコに出るんだって」

口にかツフエを含んでいなくて良かったと、ヒューズはしみじみ  
思った。

「努力は認めるわよ。でもよりもよってカルチヨ・ストーリーコよ、  
野郎どもの裸祭よ」

「……まあ、魔法が得意な王子様とは相性最悪だな」

「もうさ、死んじゃうと思うのよアルベール」

同意するのはアルベールが可哀想だが、残念ながら否定も出来な  
い。

「去年ヴィートが参加して、他のチームをボコボコにしちゃったで  
しょ？ それで、そもそも騎士が参加するのは不公平だ、うちも特  
例を認めるとか結構騒いでるみたいなのよね」

「助っ人ルール、復活するんだったな」

「北地区が竜族、東地区が巨人族、南地区が獣人族で申請出して  
らしいわよ」

「……確実に死人が出るぞ」

「もちろん人数制限とか細かいルールはあるみたいよ。でもさあ、  
アルベールが巨人に叶うわけ無いじゃない」

逃げまどうアルベールの姿しか想像出来ず、ヒューズも渋い顔で  
ある。

「まあその、明らかにアルベールが変なやる気出しちゃったのは、  
自分の所為だってわかってるからさ、だからこそ死なれたら困るっ  
て言うか」

「気付いてるなら応えてやればいいのに」

「それじゃアルベールのためにならないじゃない」

「ということは、一応今も好きなんだな」

「そう言われると微妙なのよね」

言いつつヒューズをさり気なく見たレナスだったが、ヒューズがその視線に気付くことはなかった。

「ともかくさ、止めるなりフォローするなりをあんたに頼みたい訳よ」

「しかし、あいつの一世一代の大告白だったわけだろ。それを違う男に止めさせるって言うのは、あいつの自尊心を傷つけちまうんじゃないか？」

「体ポコボコにされて騎士生命たたれるよりも、自尊心ポコボコにされてでも生きてた方が良くないじゃない」

それは女の考え方何だよと呟きつつ、ヒューズはどうした物かと頭を悩ませる。

だがそのとき、ヒューズの聴覚がこちらに近づいてくる馴染みの足音を感知した。

「まずい、隠れるレナス！」

「え？」

「良いからすぐに！」

レナスはその言葉に、ヒューズの机の下へと潜り込んだ。

その直後、隊室へと顔を出したのは渦中の存在アルベールである。

「あれ、誰かいたの？」

側の椅子に目ざとく気付くアルベールに、少し前まで部下がいたのだとさり気ない嘘で誤魔化す。

「しかしどうした、こんな時間に」

そう尋ねた直後、アルベールが先ほどまでレナスの座っていた椅子に腰を下ろした。

何を告げるつもりだろうか、そして足下のレナスに気付かないだろうかとハラハラしていると、アルベールは唐突に、ごんつと言う音まで立てる勢いで、頭を机にこすりつけた。

「助けて、僕死んじゃうかもしれない！」

叫ぶアルベールを一目見た瞬間、目の前の王子には自尊心やプライドと言った物が激しく欠けていることにヒューズは気付く。

「レナスさんに良いかつこしたくて、よりにもよってカルチョ・ストーリーコに出るとか言っちゃったんだ！」

どうやら周囲以上に、言い出した本人が一番不安だったらしい。

「その上絶対優勝しなきゃいけないんだ！ だからヒューズ、僕とチームの完全勝利のために、一緒にカルチョ・ストーリーコに出て！」

「……一応聞くが、お前はそれで良いのか？」

ヒューズに向けられたアルベールの瞳には、人を頼って何が悪いの？という、意思しか映っていない。

そして言い訳よりも、スケジュール調整について考え始めてしまった自分に、ヒューズは深く深く、ため息をつく。

昔から自分勝手に破天荒な年下に、ヒューズはとにかく弱いのだ。

## Episode 03 - 1 熱の入れすぎには注意

6月の日曜日、あふれかえる人と熱気に満ちたサンタクローチエ広場には、巨大な観客席と砂利が敷き詰められたサッカーコートが出現していた。

カルチヨ・ストーリコと呼ばれる伝統的な古式サッカーの試合は、もう何百年も前からこの広場で行われている。

行われる試合は、予選と決勝戦を合わせた3試合。

フロレンティアの都市部を4つの地域にわけ、それぞれに住まう男達の中から選抜メンバーを編成し、戦いに挑むのだ。

地元に根付く祭であるせいか、春の祭に比べれば訪れる観光客も少なくその規模は小さい。

だが遊びに本気になる事を美德とするフロレンティア国民の、この古式サッカーへの熱の入れ具合は半端ではない。普段は温厚な人々も、この時期は地域同士での争いが絶えないほどだ。

皆自分の地区が優勝すると信じて疑わない故に、応援に熱が入りすぎた国民が暴徒化することは多々あり、それを押さえるのはもちろん治安を維持する騎士達の仕事である。

だから本日、急遽出場する羽目になったヒューズに変わり、現場で指揮をとっていたのはレナスだった。

試合が行われる広場内部は、昔からガラハド騎士団が警備を行うのが通例なので、ガリレオ騎士団が見回るのは、会場の外と試合の中継をしている酒場などだ。

「今年は荒れそうですね」

レナスの横で、そう呟いたのはキアラだ。その目が追っているのは巨体を屈めつつチケットブースで観覧チケットを購入している巨人族である。

「久しぶりの参戦だから、客席の方にも結構いるわね『大きい人たち』」

その奇異な外見と身体能力の高さから、世間から隔てられ、虐げられてきたマイノリティーな種族達が、こうして身体能力を競う祭に参加するのは久々のことだ。

元々フロレンティアは観光と学生の街であるがゆえ、近隣諸国と比べると昔から国民も多様で差別意識も少ない。

パスポートさえあれば入国も比較的簡単で、それ故『特異種族』と呼ばれる人種や民族も気軽に訪れることが出来る数少ない国だ。

リストランテにはイタリア語の他にも英語やフランス語、東竜語、巨人語、スペイン語に古代妖精語と様々なメニユーを用意しているところも多く、観光局のガイドなども様々な言語に対応している。

故に通年を通して巨人族のような者達を見かけるが、それらを一緒にくたにコートに放り込むというのはさすがにないことだった。

なぜなら人種意識が薄い事で逆に、熱くなると巨人や竜相手でも平気でやり合ってしまう悪い癖がこの国の国民にはあるからだ。

たしか最後に異種混合試合をカルチヨ・ストーリコで行ったのは7年ほど前のこと。

あのときは観客をも巻き込む大乱闘が起き、それ以来危険だからと試合に出られる選手の制限が厳しくなったのだ。

騒ぎが起きたときの仲裁役は勿論騎士達で、自分たちと同じ人族ならまだしも巨人をなだめるのは非常に骨が折れ、怪我人の多くはこの騎士達だった。

故に選手の制限に騎士達は大喜びしたが、まさかそれを他ならぬ騎士団長が再び廃止させてしまうとは誰が予想しただろうか。

実際今も、西の地区で竜と巨人が喧嘩をしているという通報が飛び込んできたのだが、それを聞いた騎士は口々に騎士団長への恨みを呟いている。

その上例年は、この手の超人对超人の喧嘩が起きると呼び出されるのは決まってヒューズだった。しかし少なくとも、試合中は頼めない。

「うちが行きますよ」

変わって、レナスに声をかけたのは彼の部下達だ。他の騎士同様表情は明るくないが、隊長の晴れ舞台に水を差す気はないようだ

「変わりに、隊長の勇士みといてくださいよ」

ヒューズの隊は特に戦闘に優れたエリートで構成している。数さえあれば事態の收拾は可能であろうと判断し、レナスは頷いた。

「じゃあお言葉に甘えて、第4小隊はボールと近くの広場を中心に巡回しましょう」

事前に打ち合わせていた班に分かれ、騎士達は行動を開始する。

「本当は生で見たかったんじゃないですか？」

歩き出すレナスの横でそう言ったのは本日のバディであるキアラ。

「それはあんたも同じだと思っけど？」

「別にサッカーは興味ありません」

「サッカーは、でしょ？」

ムツとしつつも、観客席から零れ始めた黄色い声援を気にしているのは明白で、レナスは思わず微笑む。

「決勝は一緒に見に行きましょうね」

「勝つと決まった訳じゃないでしょ」

「勝つわよ。今年は本気のチームだから」

3重もの防御魔法をかけられた時点で、アルベールの不安はピークに達していた。

「公平を期すために、耐久力が少ない方には鋼の魔法をかけております。しかしながらこれは、背骨や脊髄内臓各種といった負傷すると二度と戻らない部位を守護するための魔法ですので、痛みを和らげる効果はございません。また度重なる負傷で魔法の効果が落ちる場合がありますので、もう無理だと判断した場合は速やかに棄権してください」

そんなアナウンスをしながら魔法をかけていく魔法使い達は、大会運営が用意したボランテニアである。

「あつ間違えた」

とか言っているのが若干気になるが、ボランテニアとして集められた者達の殆どは、魔法学校の若き生徒達だから仕方がない。

出来ることなら、自分で自分に魔法をかけたいとアルベールは切望したが、選手が魔法を使うことは禁止されている。

いかなる場合でも、武器と魔法を使つてはならない。

それがカルチヨ・ストーリコの鉄の掟なのだ。

魔法使い故にかけ方が甘い魔法に不安を覚えてしまいがら、アルベールはため息を重ねる。

「今更後悔してんよ」

そう言つて、彼の側に来たのはヒューズだ。

「よりもよつて一回目で巨人族と対戦なんだよ。あと・・・」

まだ何か不安があるのかと尋ねようとしたヒューズは、アルベールが着ているコスチュームにを引っ張っているのに気付く。

「これ超ダサイ」

「お前、またそう言うどうでも良い事を……」

「どうでも良くないよ、こっちはレナスさんに格好いいところ見せ

なきやいけないのに！」

彼らカルチヨ・ストーリコの選手が纏うのは、フロレンティア建国以前にこの街を守護していた騎士の様相である。

現在の騎士の制服や鎧は、実用性と防御力を考慮した生地や素材で出来ているため、騎士と言うよりはステイツや英国の軍や警察騎士団からのデザインや装備を取り入れた物が多く、アルベルがダサイと言い放つ服とはだいぶ違う。

今時キンキラキンの甲冑だの、タイトだの短パンにはねつき帽子だのと言った騎士らしい装備を常時着用しているのはしているのは南ローマの騎士くらいだ。

フロレンティアも歴史ある国なので、勿論礼服や特殊装備として騎士らしさに溢れたコスチュームもあることはあるが、纏うことはまだ。

だがカルチヨ・ストーリコとなれば、話はまた別である。

そもそも古式サッカーは騎士達が行っていた訓練から派生したスポーツ。それ故衣装も騎士の歴史を再現した物になっており、無駄に派手な色彩と装飾に飾られた短パンと上衣いう少々珍妙な格好なのである。

衣装はチームごとに異なり、アルベル達の所属するサント・スピリト地区の衣装は白だ。

本日戦う敵チームの色は緑で、その他に青と赤があり、4つのチームはその色で呼ばれることが多い。

「まあ、そうごねるなよ。どうせ服装なんてろくに意味ねえんだから」

「それこそが問題なんだよ」

そう言っただけでアルベルが頭を抱えたとき、唐突に彼の服を引くたくましい腕が現れた。

「そろそろ試合始まるぞ。さっさと脱げよ王子様」

そう言っただけで、無駄にたくましい胸板を恥じらいもなくさらしているのは、ヒューズの上司であるガリレオ騎士団団長ヴィートである。

「やめてよヴィート！　つてか監督なのに、なんで一番最初に脱いでるのさ！」

「そりやお前、観客席の美女達がこの俺の色気ムンムンの胸板を待ちわびているからだ」

自意識過剰にもほどがあるが、言つてきく性格ではないことはアルベルもわかつている。

世間的には認知されていないが、彼はアルベルの兄でありフロレンティアの第5王子なのだ。

過去の様々な出来事を思い出し、口をつぐむアルベル。そんな彼に変わり、ヒューズがヴィートに指摘する。

「監督は脱ぐ必要ねえし、誰もお前の裸なんて望んでないと思うが」「俺は去年の英雄だぞ。サント・スピリト地区を10年ぶりの優勝に導いたんだ」

「お前が本気出したお陰で、今年からすさまじい助っ人が増えちまつたんじゃないか」

「勿論責任は取る。だからこそ、今年は俺が監督になつたんじゃないか」

そう言つて、側に置かれたベンチの上に立ちヴィートは声を張り上げる。

「良いか野郎ども！　作戦はこうだ」

ぱんつと足を踏みならし、ヴィートは高らかに宣言する。

「向かってきた敵はぶちのめせ！　転がってきたボールは何が何でもゴールに入れる！　逃げたら俺がぶつ飛ばす！」

一人盛り上がっているヴィートには申し訳ないが、30名もの選手達は一樣に無言になった。

「…それは、作戦とは言わん」

誰も何も言いたくないという顔をしていたので、仕方なくここでもまた口を開いたのはヒューズだ。

「難しい作戦言つたつてあの巨人相手じゃどうしようもねけだろ！　勢いだ勢い！　それが大事！」

「責任取るって台詞はどこ行った」

「ぐだぐだ言うな！ 去年はそれで何とかいったんだよ！」

「だから今年は難攻不落の鉄壁が参加してきてるんだろっが！」

あーもつるせえ！ とついには逆ギレするヴィート。

そんな彼に、始まる前から敗北ムード流れ出したチームに、意外なところから助っ人が現れた。

「すいません、到着が遅れました」

その声に、一番に顔を上げたのはアルベル。その視線の先には、3人目の王子の姿がある。

彼の姿に何より驚いていたのはチームの男達だ。

「おい、ヴィンセント様が出るなんて効いてないぞ」

「アルベル様が出ると聞いた時はもう無理だと思ったが、ヒューズ隊長に加えてヴィンセント様がいるなら、勝てるかもしれん！」

沸き立つ歓声に、凹んだのはアルベルとヴィート。

同じ王子でありながら、このカリスマ性の違いは何なのだとむくれている。

「…悪いな、無理言って」

思わず呟いたヒューズに、ヴィンセントが微笑む。

「さすがに、ヒューズさん一人じゃ荷が重いの思っって」

アルベルは勿論、例年より明らかに線の細い騎士ばかりで構成されたチームを見回して、ヴィンセントは苦笑する。

それから彼は、向けられる熱い視線に応えるべく、口を開いた。

「巨人を容易い相手ではないが、皆で善戦しよう。ひるまなければ、きつと勝機はある」

さすが優秀な王子。この手の演説はお手の物である。

彼の言葉で男達は奮い立ち、声を張り上げながらピッチへと繰り出した。

「なんでこれが出来ないかなあ、こっちの二人は」

「僕は素直だから、ヴィンみたいに口先だけの台詞何て言えないもん」

「俺も素直だから、そんな無駄にきざったらしい台詞なんて言えないもん」

普段散々口先だけの言葉やら、きざったらしい言葉を女に連呼している二人が今更何をとヒューズは思ったが、あえてここは無視することにした。

何せ試合の開始は、もう目前なのだから。

さすような日差しにさらされた肩がひりひりと痛み、アルベールは今し方脱いだ上衣を羽織りたい衝動に駆られた。

ピッチに勢揃いした選手達は皆、邪魔になる上衣を脱ぎすて、人によっては観客席に男らしさをアピールしている者もいる。この無駄な露出度の多さも、カルチヨ・ストーリコの醍醐味のひとつである。

あわせて巻き起こるのは、周囲をぐるりと取り囲む観覧席からの黄色い悲鳴。

その大多数は、アルベールの隣で体を伸ばしているヴィンセントへと向けられた物。

アルベールへの物も勿論あるが、その差は圧倒的である。それはそうだと、こればかりはアルベールも負けを認める。

ヴァンパイアである彼よりも肌が白くてひ弱な自分とくらべて、ヴィンセントの体つきは男でさえも羨ましいほど逞しく、それでいて美しい。

だがヴィンセントへの負けは認められても、解せないのはヴィンセントとは反対側にいる男である。

ヴィンセントへの歓声にも負けず劣らず、叫ばれているその名はヒューズのもの。

日頃レナスに虐げられている場面にはかり遭遇するので忘れていたが、彼もまた女性に人気のある騎士の一人である。

自分より一回りは年上のはずなのに、鍛え上げられた筋肉と健康的に焼けた肌は、ヴィンセントとは違う荒々しい色香に溢れている。

そんな二人の男が両脇に立たれては、あまりない男らしさが無惨に四散する。

「…二人とも、ちょっと離れてくれないかな」

「お前を守るために来たんだろうが」

「ヒューズにはわからないんだ、どんなに頑張っても8つに腹筋が割れない悲しみが」

「割れてりゃ数なんて別に良いだろ。それに今日はレナスが見てる訳じゃねえし」

ヒューズの言葉に、アルベールは慌てて観客席の一点を見つめる。そこはレナスの為に貸し切った席で、シートには赤い花束まで置いたのだ。

なのに、そこに座っていたのは麗しき令嬢：の格好をした野郎であつた。

「何でアレツシオさんが座ってるんだ！ レナスさんは、レナスさんはどうしたんだよ！」

そう言つてヒューズの首を絞めるアルベールを、ヴィンセントが呆れ顔で叩く。

「あのなあ、これだけ大きな催し物があつて、騎士が暇なわけないだろう」

「でも見てくれなきゃ意味無い……」

僅かに弱まったアルベールの腕をはがしつつ、ヒューズは安心して息を吐く。

「街中のテレビや魔法鏡で中継してるから嫌でも目には入るさ。それに決勝戦のチケットは、並んで買ってたぞあいつ」

「本当に？」

「だからここで負けたら、無駄な金払わされたって怒るだろうな」  
気落ちしていた心を立て直し、アルベールは二人に小さく謝る。

「忙しいときに二人ともごめんね」

「お前の我が儘は今に始まった事じゃないしな」

「俺も、我が儘には慣れてる」

近くに寄るなど言つてしまったことを後悔し、今度は逆に彼らの存在に頼もしさを感じるアルベール。

彼が二人によろしくと声をかけたそのとき、ついに戦いの火蓋は切つて落とされた。

## Episode 03 - 4 勝利をその手に

地響きのような揺れと轟音と共に、ボールへと群がる男達。

最初にボールを手にしたのはアルベール達のいる白のチームだった。

だがそれを見逃す相手ではない。ボールを手にした一人に向かって走り出したのは、5人もの巨人だ。

慌てて阻みにきた男を次々となぎ倒すその勢いに、ボールを手にしていた男がひるむ。

「ボールをアルベールに回せ！」

そんなとき、轟音を切り裂く指示を飛ばしたのはヴィートだった。その声到他ならぬアルベール自身が驚いていると、ヴィートがもう一度声を張り上げる。

「お前は昔からシュートだけは得意だっただろ！ ヒューズ、正面の巨人達をなぎ倒せ、ヴィンセントはアルベールを守りながら前進しろ！ さあ行け行け行け！」

飛んできたボールをアルベールが受け取ると同時に、彼へとねらいを変えた巨人達にヒューズが躍りかかる。

岩のような拳を軽やかな身のこなしで避けたヒューズは、アルベール達の進路を予想し、左サイドにいる巨人達の足を次々と払う。

カルチョ・ストーリコではこのような蹴りや拳を使った攻撃は原則ではない。

ボールを手で持つても良いし、そのボールで相手を殴り倒すのも良いという何でもありのルールなのである。

故にサッカーと言うよりラグビーに近く、ヒューズもその要領で巨人を引き倒していく。

転倒に巻き込まれ倒れた巨人は4人。残り一人はヴィンセントの蹴りでバランスを崩したが、ゴール間にはまだ巨人が5人。そして体力自慢の男が20人は待ち受けている。

厚い肉の壁におののくアルベール。だがひるむ彼の背を、ヴィートの声が押した。

「お前の足だつたらそこからでも十分ねらえる！ あとは味方が道を空けるのを信じて待て！」

ボールを地におき、アルベールは静かに息を整える。彼へと迫る男達は仲間が引き倒し、問題の巨人にはヒューズとヴィンセントが殴りかかっていた。

二人の動きや考えは、共に戦ったアルベール自身が誰よりもよくわかっている。

残り5人のうち、右側の巨人を倒すと読んだアルベールは、すぐさまゴールへの壁が開かれると信じてボールを蹴った。

予想通り、右の巨人が倒れゴールが見えた。

だがそこにはキーパーがいる。

初歩的なミスに焦るアルベール。ボールはもうキーパーの目の前だった。

しかし、ボールはキーパーから折れるように逸れた。

なり響くゴールホイッスルに何があったのかと目をこらせば、引き倒した巨人の上にヴィンセントが立っている。彼がヘディングでボールの角度を変えたのだ。

沸き起こる歓声。同時に仲間から激しい抱擁をうけ、アルベールはようやく自分が役目をやり遂げたことを実感した。

「惚けるのは早いぞ、カルチョ・ストーリコが荒れるのはこれからだ！」

ヴィートの声に、アルベールは慌てて息を引き締めた。

最初の恐怖は既に無く、負ける気はもうしない。

共に戦う仲間達の熱気を感じながら、アルベールは勝利を目指しかけた。

黄色い歓声にレナスとキアラが思わず側のバールを覗けば、若い女の子達が店に置かれた魔法鏡を囲んでいる。

側に妖精学の学舎があるので、多くはそこに通う女学生だろう。

「順調に加点しているようですね」

キアラが指さしているのは、カルチヨ・ストーリーコの試合を映している魔法鏡だ。

それを気にするキアラに気付き、休憩がてら覗いていこうとレナスが提案した。

「繁盛してますね」

レナスがレジカウンターに向かって声をかけると、初老の老婆が振り返りながら微笑んだ。どうやらこの店の店長らしい。

「客引き用に、うちにある魔法鏡をだしたのよ。結構大きいから、お客さんも見やすいかなって」

壁に掛けられた巨大な四角い鏡。それは離れた場所の景色を映すことの出来る、魔法の鏡である。

今では機械製品の価格が落ちた所為で、何処の家でもテレビが買えるようになったが、かつてはこのような安価な魔法鏡がテレビの代わりに家や店に置かれていた物だ。

だが魔法鏡は電波以上に受信が不安定なため、今ではテレビの需要の方が勝っている。それに魔法鏡に映像を送る魔石、今で言うカメラの変わりをする魔石は魔法使いにしか扱えないため、番組の種類もテレビより少ない。

とはいえこうした歴史的な祭には魔石を持つ魔法使いがカメラマンと一緒に撮影をしているため、このような古い魔法鏡でもカルチヨ・ストーリーコを見ることが出来るのだ。

「一杯奢ってあげるから、あんた達も少し見てきなさいよ」

じゃあお言葉に甘えてと、エスプレッソを二つもらい、レナスと

キアラは壁際の席に陣取る。

丁度通り向かいに、荒くれ者が集まる要注意酒場もあるので、監視と観覧を兼ねた場所としては申し分ない。それ故この手の休憩には必ず文句を言うキアラも、今日は黙っている。

まあ理由はそれだけではないだろうが。

「ヴァインセント様ってホント格好いい」

その台詞にレナスが横のキアラを見たが、勿論彼女が言うわけではない。

「子どもの戯言だと思って聞き流しなさいよ」

あんたも子どもだけだと言う言葉は飲み込みつつエスプレッソを飲めば、わかってますという言葉が返ってくる。

けれどもどこか不満そうなその声に、もうすこし茶化してやろうとネタ探しもかねて魔法鏡を見れば、そこに映っていたのはヴァインセントではなくヒューズだった。

軽い身のこなしで巨人を引き倒す彼の姿に、レナスが言葉を詰まらせる一方で、女学生達の間から漏れたのは甘いため息だ。

格好いい。

レナスは決して口にしたことのないその一言を、気兼ねなく言い放つ女学生達に、レナスは思わずテレビから視線を外す。

それどころか、彼が自分の彼氏だったらと口々に言い出す女学生達に、レナスは何故だかその場から立ち去りたい衝動に駆られた。

今まで、ヒューズに言い寄る女性がいなかったわけではない。

むしろレナスの前で、もっとあからさまな好意を向ける女性は何人もいた。

なのに今、少女達の可愛らしい好意ひとつで揺らいでいる自分に気付き、レナスはうなだれる。

今まで付き合ってきた…と言うほど親密な仲になった男は殆どいないが、そう言う男が他の女に言い寄られているのを見て、こんな気持ちにはならなかった。むしろ自分の彼が異性にモテることを得意に思っていたこともある。

だからこそレナスは気付いてしまった。今自分が抱いている感情が、明かな嫉妬であることに。

「そう言えば隊長、アルベールさんが優勝したら結婚するんですか？」

唐突に、あまりに唐突に振られた話題にレナスは思わず横のキアラを見た。

今更のようにアルベールの活躍を全く見ていなかった自分に気づき、レナスは眉をひそめる。

その表情に何を勘違いしたか、キアラが慌てて口を開いた。

「すみません。ヴィンセント様が試合に出るって話したとき、理由を無理矢理聞いてしまって」

「別に良いわよ、隠している訳じゃないし」

「それで、どうなんですか？ 彼を優勝させるためにヒューズさん達まで出てるんですよ」

アルベールが優勝すること、それが彼の告白に繋がることを、レナスは今更のように気付いて息を呑んだ。

「…やっぱり、そうなる？」

「そう言っつもりじゃなかったんですか？」

「あいつが怪我したらまずいから、ヒューズにはそのフォローをと

…」

「でも、あの二人がいたら多分勝ちますよ」

正直そこまで考えが行き着いていなかったというのが、本当のところだった。

今更のようにアルベールに酷いことをしている自覚が芽生え、レナスは頭を抱える。

「アルベールが死なないようにって考えるばかりで、勝った時のこと全然考えてなかった…」

「酷いですね」

「言われなくてもわかってるわよ…」

「それでどうするんですか？」

誤魔化す、事が出来る状況には多分ならないだろう。あのときのアルベールの目は、真剣だった。

「復縁するんですか？」

27まであと一ヶ月。正直アルベールが立派な騎士になったとは言い難いが、結婚相手としてはまあ申し分ない物件ではある。

……だが。

「うわぁ、ヒューズ隊長痛そう」

話題を断ち切るキアラの声に思わずテレビを見ると、リプレイの文字と共にアルベールを庇いながら巨人の蹴りを食らうヒューズの姿が映る。

続いて大丈夫だと腕を振るヒューズの姿と歓声が映り、それはバールの客達にも感染した。

口々に格好いいと叫ぶ女学生達の目はキラキラと輝いていて、その輝きに自分は勝てないため息をつき、そしてレナスは息を呑む。一体自分は、何に勝つつもりだったのかと。

「……結婚、できるのかな」

思わず零れた言葉に、キアラが目を見ている。

「隊長、風邪でも引いたんですか？」

とても失礼なことを言われた気がしたが、反論する気力もなかった。

「……そんなに、アルベールさんとじゃ不安なんですか？」

「まあ、あいつを結婚相手として見てないのは正直ある」

ただ問題は、結婚の不安以上に心を乱す物が生まれつつあることだ。

テレビに映るヒューズを目で追っていると、誰よりも自分と近い位置にいるはずの彼が遠く思えて、レナスは不安で仕方が無くなる。

今までは365日恋人と結婚のことばかりを考えて生きてきた、と言っても過言ではないほどその手のことばかり考えていたのに、今はヒューズと自分の間に感じる不安を解消することで頭がいっぱ

いだった。

「っていつかそもそも、私は何であんなに結婚したかったんだろう」

「……隊長、本当に病気ですか？」

「あんたはさ、ヴィンセントと結婚したいと思う？」

突然の問いかけにキアラは目を白黒させたが、レナスの真剣な表情に慌てて表情を正す。

「結婚は、しなくても良いです」

「好きじゃないの？」

「も、勿論好きなんですけど。やっぱりほら、自分ドレスに合わないし」

「そっちかい」

「指輪とかにあわないし」

「私は欲しいけどな、指輪もドレスも」

綺麗に着飾って、美しい教会で結婚式をする。という少女じみた妄想をこの年まで抱いていたのだ。

けれどその先を、結婚式の先にある物を、自分は何も考えていなかった。

むしろこれから先もずっと側にいたいと、いるのが当たり前だと考えていたのはただ一人だった。

そしてその一人にもし、少女じみた妄想の相手をして貰えたらと思っただ瞬間、レナスはカップを自慢の握力で粉碎していた。

「指輪は欲しいけど、それは……それだけは……」

「ど、どうしたんですか！ っていつか手！」

「大丈夫、手の皮は厚いから」

キアラにそう言って、それから慌てて店の主に謝りながらも、レナスは内心焦りに焦っていた。

気がつけば、息を潜めていた結婚願望がわき上がってきている。

それも特定の男の顔つきで。

「だっ大丈夫ですよ。すぐに隊長に指輪くれる人は現れます」

拳動不審なレナスに不安を感じたのだろう。

的はずれながらも一生懸命励まそうするキアラに、レナスはようやく落ち着きを取り戻し、同時に彼女をガシツと抱きしめた。

「そうよね。あんな奴じゃなくても、沢山いるわよね」

「いや、沢山さんは……」

キアラの言葉は多少気になったが、レナスの気持ちは軽くなった……はずだった。

「あ、試合終わってますよ！」

キアラの指摘に魔法鏡を見れば、アルベールの笑顔を中心に彼のチームのメンバーが映っている。

「勝ったみたいですね」

良かったと思いつつ、さり気なくヒューズを目で探してしまい、そしてレナスは眉をひそめた。

「あいつ……」

「アルベール様が得点王らしいですね。本当に頑張ってます……」

「巡回戻るよキアラ！　そしてさっさと仕事終わらせて、打ち上げ会場に乗り込む！」

一喜一憂したかと思えばいつもの暴走を見せる隊長の姿に、キアラは唸りながらも従うほか無かった。

## Episode 04 - 1 宴を離れて

味方に囲まれて楽しそうに笑っているアルベールを見ながら、ヒューズが祝杯会場となっているバルから外へと出たのは深夜を過ぎた頃だった。

カルチヨ・ストーリーコ1戦目、それは想像以上の圧倒的勝利で幕を閉じた。

出る前はあれだけ不安がっていたアルベールだが、今日の得点王は彼である。

「別に俺がいなくてもよかったかもな」

そう苦笑しながらビールを片手に夜風に当たっていると、いつの間にか外に出ていたヴィートがヒューズの肩を叩く。

「そう謙遜するな。お前が道を開かなきゃ、あのガキぶつつぶされたぞ」

「でも良い足だ」

「シュートだけな。あいつ、ドリブルはすっげえヘタだから」

さすが良くわかつているなど感心すれば、ビールを煽りながら珍しくヴィートが口を滑らせる。

「昔は良く一緒に遊んでやったからな」

年はだいぶ離れているが、ヴィートとアルベールは紛れもない兄弟である。顔や容姿は似ていないが、幼少期は共に過ごす時間もあつたのだろう

「また一緒に遊んでやったらどうだ？ ヴィンセントや俺への態度は、どう見てもブラコンの素質有りだぞ」

「ブラコンだったよ。こんな小さい頃からな」

「じゃあ泣いただろう」

あえて言葉にせずとも、ヴィートは理解したようだった。

だからこそ一瞬言葉を続けることにためらいを見せたが、酒の所為もあるのだろう、今日は珍しくお得意の誤魔化しは発動しなかつ

た。

「あいつだけだったなあ、大泣きして行かないでくれって行ってくれたのは」

でも無視しちまったと、ヴィートは苦笑する。

その笑みがいつもより感傷的に見えた所為だろう、ヒューズもまた珍しく昔のことを口にする。

「俺は無理だったな。泣いて縋られると、どうにも意志が鈍る」

「小さい頃から女だねえ、あいつは。大人の男を涙で引き留めるとは」

「でもたまに思う、あそこで折れない方が良かったんじゃないかって」

「よくない事はないさ。現にアルベルとレナスじゃ、レナスの方がまともな大人だろう」

「どつちもどつちだけだなあ」

「でもレナスは、お前がちゃ〜んと大人にしたよ」

「お前が言っと、なんか嫌らしいんだよな」

どこか意地悪な笑みを浮かべながら、ヴィートはヒューズの肩を軽く叩く。

「側に立派な大人がいて、手を引いてって貰うってのは大事なことだ。アルベルはまあ、それがこれからって感じだが」

「なぜ俺の肩を労いながら言う」

「ヴィンセントとお前さんに、随分懐いてるみたいだからな」

「ヴィンセントはともかく、どうして俺に来るのか」

アルベルが、ヒューズにやたらと干渉するようになったのは、たしか先月起きた国王の失踪劇のあとくらいからだ。

ライバルだ、恋敵だと勝手に勘違いして食ってかかってくることはかりだったが、一方でヴィートの言葉を否定も出来ない。

喧嘩腰ながらやたらと剣術を教えるだのレナスの好みを教えるだの理由を付けて、二人で食事をしたり出かけたりする機会が増えてるのは事実だからだ。

別にアルベールにどう思われようと、どんな扱いをされようと正直構わない。

だがそれがレナスに筒抜けなのは、ヒューズにとって大きなやっかいの種だった。

アルベールと親しくなればなるほど、レナスの方もアルベールの話を持ってくる。

その話の内容がやっかいごとに関するのなら良い。だがもし、アルベールだけでなくレナスの方も彼のことを想うようになれば、不器用な二人のことだから、ヒューズは自然とお互い気持ちを支える伝達役になつてしまふだろう。

そしてそれを想像以上に恐れている自分に、ヒューズは気がついていていた。

「レナスと親しいからつてのはわかるけど、やっぱりなあ」

「そこはお前のお人好しな性格も問題だと思つがな。犬に尻尾振られたからつて、すぐ撫でるのが行けない。その犬が恋敵だつてんなら、蹴つて追い返さない」と

「恋敵じゃねえよ」

「でもレナスにや惚れてるだろう」

ヴィートの言葉に、ヒューズが返したのはため息だけだった。

「…できるからつて、する必要はないんだぞ」

「どつという意味だよ」

「お前は多分レナスがいなくても生きていける。俺と違って恋人がいなくても死にやあしない男だ。…けど、だからつてそう言う道を選ぶ必要もないだろう」

「…もう選んだんだ。ずつと前にな」

「お前はずつと有言実行の男だつたらう。だから一回くらい『やっぱりやめた』って降参しても良いと思つぞ」

そう言つてヴィートが意味ありげに通りの奥を見つめる。その視線の先を追えば、こちらへと向かつてくるのはレナスとキアラだ。

「かつさらうなら今だぞ」

「酷い兄貴だな」

ヒューズの言葉に苦笑しながら、ヴィートはいつもの調子でさり気なくキアラを捕まえる。

「大勝利おめでとっ」

そうヒューズに微笑んだレナスは、仕事帰りなのか隊服のままだ。

「その言葉は、中で騒いでる王子様に言っただけでやってくれ」

「どう考えても、一番体張ってたのはあんたとヴィンセントじゃない」

「褒めるところは褒めてやらないと、あいつ拗ねるぞ」

一応頷いた物の、レナスの反応はあまり芳しくない。これはもう少しきつく言うべきかと口を開いたとき、突然レナスがヒューズの腕を取った。

驚きと同時にヒューズの体を走ったのは激しい痛みだ。

「やっぱり折れてるじゃない」

「どうして…」

「後半終了間際に、アルベールを庇って斜めから巨人の蹴りくらったでしょう。あれみたとき、絶対やったと思ったのよね」

「俺失態よりアルベールの活躍を見てやれよ」

「丁度あんたのアップだったのよ。…ほら、いいからくる！」

今度は反対の腕を引いて、レナスはヒューズを店の裏手にある小さな噴水広場へと連れ出した。

Episode 04 - 2 否定できない思い

いつの間にか、レナスは救護室から借りてきたらしい固定用の包帯と添え木、そして痛みを止めるフェアリーパウダー入りのクリームを手にかけていた。

「治療の邪魔になるから上着脱いで」

「自分でやる」

「昼間散々人前で裸さらしたくせに、私の前では脱げないの？」

「俺と二人きりの所、アルベールに見られたら事だろう」

「別に私は問題ない」

「あんだだけお前のためにしてくれてるんだぞ。少しは…」

「いつもは、自分の気持ちに素直になれって言うくせに」

零れた言葉に、ヒューズは小さく息を呑む。

「そうだな、あんまり立ち入る事じゃなかった」

「治療したらアルベールの所行く。だから…」

「わかった。お前に任せる」

上着を脱げば、レナスが慣れた手つきでヒューズのシャツをまくり上げる。

「酷いはれ方…」

「確かに少し痛む」

「少し？」

「……見栄張った」

寄せられた眉に、ヒューズは仕方なく言い直す。嘘が下手な方ではないはずなのに、昔から彼女にだけは上手く嘘がつかない。

「あんまり無茶しないでよ。もういい年なんだから」

「いい年だけど、怪我はすぐに治る」

「ここまで酷いと時間かかるでしょう」

クリームを取り、酷くはれた二の腕にレナスはそっと指を走らせる。

心地よい冷氣と共に熱を綺麗に拭っていくクリームに、ヒューズの体から徐々に力が抜けていく。

「添え木は良い、見た目が派手だとみんなに心配かけるしな」

「かければいいのに」

「ようやくアルベルがナーバスから脱却したんだ。ここでまたウジウジされたら面倒くさい」

「じゃあ、少し多めに塗っておく」

それもいいと言いかけたのは、今更のようにヴィートの言葉を思い出したからだ。

『惚れてるだろう』

その言葉を否定など出来るはずがなかった。

誰よりも近くにいて、自分を気づかってくれる存在を、どうして愛おしく想わないでいられるのだ。

それどころか人ではない自分を受け入れ、恐怖ではなく愛情を始めて向けてくれた相手を好きになるなど言う方がおかしい。

「そう言えば何だっけ、ヒューズが小さい頃教えてくれた痛みが消える東洋のおまじない」

「いたいの飛んでけてやつか」

それだと笑って、レナスが子どものように呪文を唱える。

「そんなんで消えたら医者はいらねえよな」

「でもヒューズがやってくれたときは消えた」

「そりゃあ、ガキは対して痛くもないのに想像で痛がるからな」

「昔は色々やってくれたのに、ヒューズ最近ノリわるい」

つまらないと口をとがらせるレナスはやはりまだまだ子どものよう  
うで。

「でも、それで少しでも軽くなるならやったって良いじゃない」

けれど子どもものようだと思っても、そこにいるのは美しく育った大人の女性で。

ふれられたままの腕から逃げるように、ヒューズは体を反らせた。  
「俺はもう少し風に当たってるから、お前は中入ってる。今日はヴ

イトのおごりだそうだ」

「うそ！ 何でも？」

何でもだと応えれば、レナスははしゃぎながら店の方へとかけていく。

彼女が消えた途端、ヒューズの胸に芽生えたのは寂しさ。

自分でせかしたくせにと自らを嘲笑しながら、ヒューズはレナスが触れた腕を見つめた。

「みてよほら、僕が一面！」

自分が一面を飾る新聞を手に、アルベールがレナスの元へとやってきたのは試合の翌日のことであった。

「…聞こえてるから、もう少し小さな声でお願い」

無駄に元気なアルベールとは対照的に、レナスの顔色は悪い。原因は勿論二日酔いだ。

ヴィートのおごりだということで調子に乗り、昨日はいつもの3倍も飲んでしまった。

案の定昨晚の記憶はほとんど無く、気がついたらよりもよって騎士団の仮眠室で爆睡していた。

お陰で頭痛はいつもより酷く、アルベールの声は酷くこたえる。

「あとこの雑誌と、これとこれにも写真が載ってるんだ」

さあ僕を見て！と、子犬のようにまとわりつくアルベールに根負けし、レナスは彼が手にする雑誌を受け取る。

彼が持っているのは若者向けのゴシップ誌だ。

ステイツや英国の映画スターを主に取り扱うが、見てくれの良い王子などが紙面を飾る事も多い。

特にヴィンセントはウケが良いらしく、アルベール以上に取り上げられる事が多かった。

今回もアルベール以上に紙面を割いているのはヴィンセント。キアラが見たらまたいじけるなど苦笑しつつ眺めていたが、とある写真の前でレナスは唐突に息をのむ。

理由は、ヴィンセントの写真の横に、最も加わって欲しくない男の姿が写っていたからだ。

「…なんでヒューズがいるのよ」

「それより僕の…」

「なんでだっけきていてんの！」

思わずアルベールを締め上げれば、僕にわかるわけ無いだろうと泣き言が帰ってくる。

「でもたかだか1ページだしさ。ちょっとした気まぐれみたいなもんだよ」

昨日は3人の連係プレイで勝ったような物だしとアルベールがつければ、レナスは渋々彼を放す。

「あ、でも誤解しないでよ！ この雑誌の所為で僕の所に女の子が沢山来ても、僕の心はレナスさんの物だから」

「…女の子、くるんだ」

その一言をアルベールは自分への嫉妬だと受け取り上機嫌になる。だが彼女が見ていたのは、もちろん彼の写真ではなかった。

## Episode 05 - 2 割に合わない団長命令

「10時から取材。12時から写真撮影。そのあと5時までサッカーの練習で、そこでもまた取材だから」

「…は？」

「だから10時から…」

「新しい暗号か？ それとも内密な指令？」

ガリレオ騎士団の事務室前で、唐突にヒューズを呼び止めたのだ。ヴィートだ。

それだけで十分面倒なのに、彼がつけた言葉の意味がまったくわからず、ヒューズは不安そうに眉を寄せる。

直後、違うと声が飛んできたのは事務室の中からだった。

「…ヒューズちゃんの取材をしたって、新聞社や雑誌社から電話が沢山来てるのよ」

そう言ったのは事務のおばちゃん達。その手の話題が好きな彼女たちは事務室を飛び出し、ヒューズの肩をねぎらうように叩く。

「待ってくれ、取材って言うのは…そういう取材なのか？」

「他に何がある」

ヴィートの言葉に思わず、ヒューズは目の前が真っ白になった。

「勿論全てうけたからな！ これは、うちの騎士団を広く知らしめる良いチャンスだ！ 主に金持ちに！」

「俺はやらない！」

「やれ、団長命令だ」

それでも食い下がれば、ヴィートはヒューズの肩を掴み、人気のない廊下の隅に引きずってくる。

「うちの資金繰りが危ないの知ってるだろう！ あの手の雑誌は貴族のお嬢さんたちに人気だし、そこに火がつけば、親ばかなパーパさんたちが、ウチに出資してくれるかもしれない！」

「そんなうまい話が…」

「実際ガラハド騎士団は、ヴィンセントが入団してから貴族たちからの融資が20%アップした」

「俺にそんな効果があるわけ無いだろう」

「大丈夫、散髪代はだしてやる」

「それだけでどうにかなるか！」

「なる。安心しろ、なる！」

反論する隙も与えず、ヴィートは命令だと繰り返した。

もはやこちらの話を聞く気がないのは明白で、仕方なくヒューズは交換条件があると譲歩した。

「来月から、一人騎士を雇って欲しい」

「お前からの紹介なんて珍しいな」

つまり訳ありかと尋ねられ、ヒューズは頷く。

「俺の…昔の同業者だと言えればわかるか」

「確かに訳ありだな」

「…国王失踪事件の際に戦ったあの魔法使い、どうやら世界的な指名手配班らしくてな」

「その調査で来るって事か……」

「ああ」

「やばい奴なのか？」

「妙な収集癖があるらしくてな」

悪趣味な物だろうと言いついでるヴィートにヒューズは頷く。

「あいつが訪れた国では、特異種族が次々と消えているらしい」

「そう言えば先月、行方不明者の捜索願がいくつか出ていたな」

「結局見つかってない奴だろう？ たぶんあいつが関係してる」

「あの魔法使い、ここにまた戻ってくるのか？」

「今はヴェネチア共和国の方で忙しくしてるみたいだが、時間の問題だろう」

「この夏も忙しくなりそうだな」

「そのためにも奴が欲しい。性格は少々難があるが、腕は立つからな」

「いいだろう。お前が信頼してる男なら、俺も信頼する」

「繰り返すが、性格は難がある」

「難がない騎士がここにいるか？」

「……いない」

「なら問題ないだろう」

違う意味では問題有りだと持ったが、その筆頭がヴィートなので指摘する気もおきない。

「じゃあ変わりに、体張って頑張ってきてくれよ」

「取材だけだよな？」

「…カルチヨ・ストーリーコが荒れるのはこれからが本番だろう？」

ヴィートの不敵な笑みに、ヒューズは彼が抱くもう一つのねらいに気がついた。

「割にあわねえなあ」

「その分昨日奢ってやっただろう」

主にお前のお姫様にとつげられて、ヒューズはもう一つの問題に気がついた。

「本当に割にあわねえ」

Episode 05 - 3 冷めた態度は不機嫌な証拠

怒られることは予想していた。殴られることも覚悟していた。

だがそれでもヒューズが意を決してレナスを捕まえれば、彼が思っている以上にレナスは不機嫌だった。

「きいてるわよ。試合までの1週間、私が第5小隊の指揮もするんでしょ？」

「すまん」

「…とかいって、内心は嬉しいんじゃないの？」

そんなわけないと抗議したが、今日のレナスはいつもより確実意固地になっている。

「まあお好きにどうぞ。女の子たちに囲まれてキヤーキヤー言われてればいいのよ」

感情にまかせて怒っているときはまだいい。だがこうして妙に突き放した言い方をしているときは、要注意のサインだった。

「埋め合わせはする。大会が終わったら、いくらでも奢る」

「大会が終わったら私なんかと飲みに言ってる暇ないわよきつと」

彼女でも出来て、その子と二人でよろしくやってるわよ」

「そんな気はないっての」

「そんな気なくてもその気になるわよ！ 今だってほら！」

そう言っ指さす先にあるのはヒューズの部下の姿。その腕には、ピンク色の封筒がぎっしり詰まった箱が抱えられている。

にこやかな顔でこちらにかけてくる部下に嫌な予感を覚えれば、ヒューズの予感は的中した。

「凄いですよ隊長！ 隊長宛のファンレターがこんなに！」

「ここにか？」

「ええ。あと5箱くらいあるんで、みんなで今運んでます」

その言葉にレナスの機嫌が更に悪くなったことは明白だった。だがわかったところで今のヒューズにはどうすることも出来ない。

「…私、もう行くから」

これ以上何か言ったら殺すと語る背中に、ヒューズは腕さえも伸ばせない。

「すごいですよ！ 今年のミスフロレンティアからも来てます」

その何処が凄いのかと思わずこぼせば、部下はとことんやる気のない隊長に説教をするモードだ。

これ以上凹ませないでくれと思う一方、部下たちはこれを好機と捕らえたようで、ここぞとばかりに日頃のヒューズを叱咤する。

仕事ばかりしてないで、少しは女の子のことも考えてください！

独身主義を改める良い機会です！

ぶつけられる言葉に、言われなくてもとっくに考えてると思ったが、勿論言えるわけもない。

結局その日は部下の説教と、ヴィートが無理矢理セッティングした取材と練習試合だけで日は暮れてしまい、レナスの機嫌を取る機会訪れなかった。

何かがおかしい。

明らかにおかしい。

けれどそれを、なぜおかしいと感じるのかわからない。

そんな奇妙な異変に、最初に気付いたのはキアラであった。

異変が始まったのは5日前。

しかしその異変はとても形容しがたい物で、それに気付いたきつかけも非常におかしなものだった。

でも異変は何か悪いことが起きる前触れのように、異変に気付いてから5日目の今日、キアラの不安は限界に達した。

もはや一人で背負うには限界だと感じたのだキアラが、相談に相手に選んだのは恋人。

カルチヨ・ストーリコの決勝を明後日に控えた恋人は、騎士団の仕事など色々と忙しいようだったが、彼女の電話にむしろ喜び、すぐさま会ってくれと言う。

だが外に出ると色々と面倒なそうなので、彼が会う場所を選んだのはアルベールの部屋だった。

「何でアルベール様の部屋なんですか？」

「俺の家は嫌かと思って」

「どこでも気にしませんよ」

「でも使用人も、誰もいないんだぞ」

「別にお茶とかはいりません」

「そう言う問題じゃない」

「あ、別にお菓子もいりませんよ。相談したらすぐ帰るつもりです  
し」

お構いなくと言い切れれば、受話器の向こうでヴィンセントが大きく息を吐く。

「君は俺を悩ませる天才だな」

「だからお気遣い無くと言ってるじゃありませんか」

「君はアレだろう。キスしたら子どもが出来るとか思ってる口だろう」

「失敬ですね。性交渉で出来ることくらい知っています」

「些細なことで恥じらうくせに、意外とそう言うところは男らしいんだな」

意味がわかりませんと唸れば、ヴィンセントはため息を苦笑に変えた。

「俺の言葉の意味に気付くまでは、俺の家には上げられないな」  
だからアルベールの部屋でとつげられ、キアラは渋々受話器を置いた。

## Episode 06 - 2 相談役は二人の王子

アルベールの部屋。それはすなわち、王子の寢所だ。

故にキアラがその日の夕方方向かったのは、フロレンティアの中心。ヴェツキオ宮殿と呼ばれる宮殿だ。

ヴェツキオ宮殿は、フロレンティア建国以前に政庁舎として造られた物で、故に他国の宮殿と比べると華やかさはまるでない。

内装は初代国王が手を入れたのでさすがに豪華だそうだが、キアラは未だ見たことがなかった。

城の警備を行うのは王家に使える近衛兵なので、キアラが赴く機会は無いに等しい。

「話を付けておくから気軽に来てくれ」

何てヴィンセントは笑っていたが、ただでさえ馴染みが薄い宮殿に気軽には入るなんて真似が、真面目なキアラに出来るわけもない。それでも勇気を出して入り口の兵に声をかければ、キアラが尋ねるまでも、アルベールの部屋へと案内される。

外観は地味で、宮殿の上にそびえ立つ時計塔くらいしか目を引く物はないと思っていたキアラだが、中に入ればその考えは一変する。せつかくなのでと、観光客にも一部開放されている有名な広間をいくつか覗かせて貰ったのだが、どの部屋でも目を引くのは見事な天井画だ。

有名な画家達が描いた見事な絵画と、それを囲む細やかで豪華な彫り物は圧巻で、芸術に詳しくないキアラもその美しさには息をのんだ。

そしてもちろん、目的地であるアルベールの部屋もまたキアラを唸らせる。

「…うちの部屋より広い」

思わずそうこぼしたキアラを出迎えたのは、装飾過多な調度品が埋め尽くす部屋。

そしてそこに違和感なくとけ込む二人の王子だ。

天井にはもちろん色鮮やかな彫り物と天井画が描かれており、LDKの狭くて質素なアパート暮らしには酷く落ち着かない。

とはいえそのまま惚けているわけにも行かないので、キアラは慌てて頭を下げた。

「突然お邪魔してすみません」

「…ごめんね、邪魔者がいて」

「いえ、邪魔者はこちらですの」

「謝るのはヴィンの方だよ、こらえ性がないからってさ」

と笑うアルベールにヴィンセントが苦笑したが、キアラは彼の言葉より、着ている服を気にしているようだった。

アルベールと、そしてヴィンセントが纏っているのはいつも制服ではなく、王子として式典に出るときに纏う礼服だった。それを指摘すれば、30分ほど前まで新聞の取材を受けていたという。

「最近ずっとですよね」

言い方が若干卑屈になったことに自分でも気付いていたが、後悔してももう遅い。

「会えないことを寂しく思っているのは、俺だけかと思っていた」「寂しいなんて…」

思っていないと言うが、下がった語尾は肯定しているも同じだ。

「ちょっと、人の部屋でイチヤイチャするのやめてくれない？」

アルベールの言葉にキアラは真っ赤になってうつむくが、ヴィンセントは何処吹く風だ。

それどころか愛情に溢れたエスコートで、彼は応接用のソファーにキアラを座らせる。

その後もさり気なくキアラの隣に座り、同時に入り口前に控えていた侍女に飲み物を頼むその姿は、まさしく王子。

普段は騎士としての姿ばかりを目にするので、王子としてのヴィンセントは新鮮で、それでいてどこか歯がゆい。

「王子より騎士の方が好み？」

そして勿論、聡いヴィンセントはキアラの複雑な気持ちを読んでいる。

キアラは真つ赤になって違つと怒鳴るが、ヴィンセントはそれすらも愛しいと恥じらいもなく告げる。

「だから、イチヤイチャしないでよ」

本日2度目のツッコミにようやく冷静さを取り戻し、キアラはいつの間にか握られていたヴィンセントの手を振り払いながら、真剣な顔を作った。

「実はちよつと悩んでることがあるんです。…そして出来たら、アルベール様にも聞いて頂きたいんです」

「僕？」

「悩みつて言うのは、その、レナス隊長の事なんです」

ヴィンセントより先に食いついたのはアルベール。

身を乗り出す彼に、キアラは最近起きている異変について語り出した。

「最近、隊長すごく真面目なんです。仕事にも遅刻しないし、いつもの3倍の早さで書類仕事を片づけるし、定時で上がるとそのまま家に帰って、お酒も飲まずに寝ちやうんです」

「…それが、変なのか？」

尋ねずにはいられなかったヴィンセントに、キアラは変だと断言する。

「それにお昼も自腹で食べてるし」

「…それは、普通だろう」

「給料日前なんです！ 普通だったらヒューズ隊長の財布か、ヒューズ隊長ごと連れて毎日のようにリストランテに行くのに、最近はいつも一人で」

キアラの顔は、上司の身を心から案じている顔だった。

その表情と言葉に、ヴィンセントは理由がわかったようだった。

一方アルベールも何かに気付いたようだが、ヴィンセントのようには素直に頷くことが出来なかった。

「でも、良い事ならそのままでも良いんじゃないかな？」

「それはわかっているんです。レナス隊長がもつと仕事熱心だったら、ずっと思ってたんです。でも何故だか、仕事熱心なレナス隊長を見てると、どういう訳か心が痛くなるんです」

キアラは本当に胸を痛めているようで、ヴィンセントとアルベルは思わず顔を見合わせる。

「でもレナス隊長が真面目になる原因もわからなくて……」

むしろこんな事を思う私の方がおかしいんでしょうかと、真面目な顔でうなだれるキアラ。勿論その恋人は、彼女の不安を拭おうと優しく髪を撫でる。

「原因に見当はついてる。俺も協力しよう」

「ええっ！」

と声を上げたのはアルベルだ。

どうやら彼もまた、原因に気付いている風である。

とはいえヴィンセントにとって、この場合気づかうべきは恋人だ。「ありがとうございます。やっぱりヴィンセント様に相談して良かった」

いつもは見せない花のような笑顔に、ヴィンセントもまた微笑む。「だからイチャイチャしないでよ」

力のない声でアルベルはつげたが、効果があるわけがなかった。

相談したらすぐ帰るといふ言葉は嘘ではなかったらしく、キアラはお茶も飲まずに部屋を出て行った。

「普通、もう少し一緒にいたいとか思わないか？」

「今日はヴィンがいつにもまして積極的だったからね」

ことあるがとに甘い言葉を囁くヴィンセントに、どうやらキアラのほうはまだ慣れていないらしい。

「キスくらいしたかった」

「なら自分の部屋で会いなよ」

「あんな可愛い生き物と一緒にいて、手を出さないでいられる自信がない」

「ヴィンってもう少しこらえ性があると思ってた」

「そっちはな」

少し疲れたような言い方に、そう言えば最近あまり顔色が良くないなとアルベールは思う。

「ちゃんと、血も飲んでる？」

「量を増やしてるが駄目だな」

「もういつそキアラちゃんに貰えば？ 一口飲むだけでも違っつて」

「本当にやばくなったら打診する」

本当にする気があるのかとアルベールが不安になるのは、あの溺愛ぶりを見ているからだ。

ヴィンセントとの付き合いは長いが、彼が一人の女性にこんなにも心酔しているのは初めてだ。

かつてのヴィンセントは、恋は勿論生活もおざなりだった。だがキアラと出会ってから、彼は毎日を大事に生きてるように思う。

「でも俺の前に、レナスさんの問題をどうにかしないと」

後もう一人の問題もと呟いた言葉に、アルベールは思わずムツとする。

「協力するなんて、酷すぎる」

「そう思いつて事は、お前も気付いてるんだな」

「…あと2日、あと2日でレナスさんが僕の物になったのに！」

それはないだろうとヴィンセントは思ったが、落胆するアルベールにその言葉はさすがに酷だ。

「でも彼女が好きなら心配にならないか」

「むしろ健康的じゃないか」

「キアラの落胆ぶりを見ただろう。たぶん、本人相当無理してるぞ」

「昨日会ったときは普通だったもん」

「お前が抱く普段の姿と、本当に一緒だったか？」

尋ねられ、アルベールは上手く答えられなかった。

キアラが言う違和感を、アルベールも感じていたのは事実だ。

別れてから今まで、レナスは常に彼女らしい自然な態度でアルベールと接してくれた。

けれど昨日あった時、彼女はまるで付き合っていた頃のような、作り物の表情と態度を常に纏っていたのだ。

その原因に気付いたのは、練習を見に来て欲しいと告げた時だ。

驚くようなことでもないのに、彼女の表情が一瞬、凍り付いたのだ。

彼女が躊躇う理由がアルベールにはない。

そう気付いた瞬間わかったのだ。彼女が普通と違うのは、自分ではない誰かが関係していると。

「……協力なら僕がする」

「協力だよな？」

頷く代わりに、アルベールは部屋の隅に置かれた机へと向かった。

「明日パーティがあるだろう。そこで僕がレナスさんを元気にする」

アルベールが取りあげたのはカルチョ・ストーリーコの主催者たちが執り行う舞踏会の招待状だった。

参加出来るのは決勝戦に参加する選手達と主催者の招待客、主に貴族たちだ。

「レナスさんこう言う舞踏会好きだし、ここで僕がいかに本気であるかを…」

「…それで本当にどうにかなると思ってるのか？」

「なる、絶対！」

ヴィンセントは呆れたが、アルベールの確固たる自信を突き崩すことは出来ない。

結局招待状を渡しに出かけたアルベールを止めることも出来ず、ヴィンセントは更に拗れそうな状況に頭を痛める。

「…もう片方から攻めるしかないか」

この手の話題にはやたらと疎い友人の顔を思いつつ、ヴィンセントは策を練り始めた。

アルベールがレナスに招待状を渡したその翌日、ヴィンセントが声をかけたのは共に新聞の取材を受けていたヒューズだった。

「終わったなら、少し時間いいですか？」

急な誘いにヒューズは困惑していたようだが、撮影終了と共に騎士団近くのバールまで同行してくれる。

「静かな休憩なんていつぶりだろう」

そう言ったヒューズの声は、芯から疲れ切っている。

ヴィンセントが案内したのは、細い裏路地の奥にある寂れたバール。なぜそんな穴場を選んだかと言えば、ヘタに表通りに顔を出せば、街行く女性達にまわりつかれてしまうからである。

カルチョ・ストーリコの初戦以来、ヴィンセントとヒューズの女性人気はうなぎ登りで、最近では道を歩くだけで一苦労だ。

ヴィンセントの方はまだ慣れているが、ヒューズは苦痛で仕方がないのだろう。

日に日にやつれた彼は、もはや病人のような有様である。

「もしかして、女性はお嫌いですか？」

「嫌いつて訳じゃないが、正直苦手だ」

「女性の扱いは上手いのに」

それはレナスだけでなく他の女性にも言えること。ここ数日、本人は疲れ果てているが、まわりつく女性達の扱いは決してヘタではない。

誘いの断り方や交わり方は、正直アルベールより達者だ。

「それより相談って何だ」

「単刀直入に言います、レナスさんが嫉妬でおかしくなっていますよ」

本当に単刀直入だなとヒューズがこぼせば、だって気付いているでしょうとヴィンセントが微笑む。

「つてか、嫉妬じゃねえよ。アレは僻みだ僻み」

昔から、ヒューズに女の影が見えるたびにレナスが怒り出すのは、おきまりのパターンだ。

私は彼氏がないのに！ どうして使用人のあんにばっかり！と怒鳴られるのは良くあること。

とにかく昔から、ヒューズが自分より優れていることがレナスは気に入らないのだ。

騎士を志したのも「あんに勝ちたいから！」と言う理由だったし、恋人を作り始めたのも「あんにより幸せになるんだから！」という宣言の後からだ。

とにかくヒューズより上に。駄目でもせめて対等になりたい、という願望がレナスにはある。

いらん対抗意識を燃やした原因はもはや思い出せないが、とにかく差があると詰めたくなるのがレナスなのだ。

故にいつしか、彼はなるべくその手の噂が立たないように、立ち回るようになっていた。

恋人でなくとも、女性と一緒にというだけで機嫌を損ねるからである。

「特に今は結婚とかで焦ってるから、そう言うのが原因だって」

「でもキアラから相談されたんです。いつにもましてレナスさんがおかしいと」

具体的にと問われたので、彼女から聞いた言葉をそのままつげる。するとヒューズの顔が険しくなった。

「それはおかしいな」

そんな真剣な顔をするほどかと思ったが、ヴィンセントが思う以上にレナスという騎士は色々と問題があるらしい。

「けど、試合が終わるまでは、どうしようもないだろう」

言ってもききやしないとヒューズがこぼせば、良い案があるとヴィンセントが微笑む。

「とりあえずレナスさんとゆっくり話せる場所を作ります」

二人きりの状況をと微笑むヴィンセント。出来る男であるのは間違いないが、この手の話題にも聡いところが、ヒューズは正直苦手だ。

多分自分の感情に彼は気付いている。そしてたぶん後押しするつもりなのだ。必要もないのに。

しかしレナスがおかしいというなら、放っておくことなど出来はしない。

「…頼んだ」

降参とばかりに頭を下げれば、ヴィンセントが計画を話し出した。

## Episode 07 - 2 招待状を睨んで

昨晚、アルベールから手渡された招待状を睨みながら、レナスはこの日35回目のため息をこぼした。

「まだ悩んでるんですか？ お昼休み終わっちゃいますよ」

そう言ったのはキアラ。勿論ヴィンセントからこっそり報告を受けているので、彼女が何に悩んでいるかは知っている。

「それ舞踏会の招待状でしょ？ どちらにしろ今夜はその警護ですし、一曲くらい付き合っただけならいいでしょう」

「でも…」

「それに第4小隊はドレス着用ですし、アルベールさん喜びますよ」と言いつつキアラの表情が若干苦しくなったのは、自分もまたドレスを着なければならぬ事を渋っているからだ。

本日の警護は第5小隊との合同で、第4小隊は第5小隊の補佐的な立場だ。故に客達に紛れて、会場の監視と警護にあたることになっている。

「でもドレス無いのよ」

「買ってくればいいじゃないですか。現にみんな休み削って、ブティックに駆け込んでますし」

上手くすればドレス姿を見初めた殿方をゲットできるかもと、騎士達は自らの貯金を切り崩しドレスを買いに走っている。

「それとも、借り物の奴にします？」

「でも破ったら弁償でしょ。絶対今年も荒れるから嫌なのよね」  
舞踏会で荒れるというのは妙な表現だが、試合前に行われるこの舞踏会で、怪我人が出無かった試しがない。

決勝戦に挑む選手達が、大会の主催者達の前で健闘を誓い合っつ。と言つのが会の表向きの趣旨だ。

しかし試合前でピリピリした両チームが一色触発することは少なく、誓いの儀式などここ数年行われたことがない。

同じ女をダンスに誘った、狙っていた食べ物を先に取られたなど、どうでも良いことで喧嘩が勃発し、そのたびに警備の騎士が止めにはいる……否ボコボコにされるのである。

毎年同じ事を繰り返しながらも舞踏会が続いているのは、そういう喧嘩こそがカルチョ・ストーリコの醍醐味だと皆思っているからで。間近で繰り広げられる喧嘩をむしろ楽しむために、貴族たちは足繁く舞踏会に通うのだ。

逆に選手たちの方は、ここで主力メンバーを倒しておけば試合が楽になると考えているので、きっかけを見つけては相手チームに攻撃をしかける。実際この舞踏会こそが、最終戦の真の始まりなのである。

「それにアルベル様の側にいれば彼を守りやすくなるでしょう」  
事の発端を今更のように思いだし、レナスはため息をついた。

「でも今月やばいんだよねえ」  
せつかくだったら中途半端なドレスなんて着たくない。

とはいえ懐も寂しいしとレナスが悩んでいたとき、唐突に扉がノックされた。

「迎えに着たよ」

その声に悲鳴を上げたのはキアラだった。

続いてレナスが息をのめば、ヴィンセントがヒューズの肩を掴みながら部屋へとは行っていく。

「君もドレスが必要だろう？ ブティックを予約したからいこう」

「どこからその情報が」

この登場は初耳だったのだろう。

キアラは本気で彼の誘いに驚き、そして嫌がっている。

「私は借り物で行きます」

「エスコートする女性に、ドレスを贈るのは普通の事だろう」

「いつされることになったんですか！」

怒鳴った直後、ヴィンセントがキアラの胸元に招待状を差し入れる。

「今」

「嫌です！ 仕事ですよこっちは！」

「だからこそだ。…1週間かけて相手方を散々煽ったんだ、今夜の舞踏会で護衛がないのは困る」

ヴィンセントの笑顔に、ちよつと待つてと声をかけたのはレナスだ。

「煽ったって？」

彼女の問いに答えたのはヒューズだ。

「新聞や雑誌に片っ端からインタビュー載せただろう。お陰で相手のチームは、俺達3人を目の敵にしている。調子乗りやがってってな」

「じゃあ、全部わざと？」

「怒りの穂先が集中させれば、試合でも舞踏会でも奴らの拳は全部俺達に向く」

正直今年のチームは、二人を覗けば通年よりレベルの低い騎士達ばかりだ。

試合中ならお互いにフォローもしあえるが、連携が取りにくい舞踏会の会場で攻撃を受ければ、ひとたまりもない。

「それを見越して、あんな下らない仕事受けてたの？」

レナスが目を向けたのはヒューズで、彼は少しやつれた表情で頷く。

「それにこの1週間は、やたらと喧嘩をふっかけられるからな」

だからアルベールの護衛もかねて、彼と共に行動していたのだとヒューズが説明する。

「俺が留守の間、世話かけたな」

ヒューズがレナスの前で軽く頭を下げれば、ほんの少しだけ彼女の表情が軟らかくなる。

「謝る事無いでしょう」

「仕事、ふやしちまっただろう」

だからだと微笑んで、それからヴィンセントに促されるまま彼は恐る恐るレナスの手を取る。

「だからお詫びに、ドレス代くらいはもつ」

「別にそこまでされる義理は…」

「早い誕生日プレゼントだと思えばいい」

「…じゃあ財布、財布だけかして」

「俺も行く。自分の金でセンスのないドレスなんて買わされたらマジで凹むし」

「センスの無いって何よ」

うっかり出た本音にレナスの機嫌が悪化したが、ここで断られるよりはとヒューズは食い下がった。

「お前が選んだドレスのことだよ」

「酷い！」

「良いのか、笑い物になっても？」

センスがない自覚はあったのだろう。散々文句を言いつつ、結局最後に折れたのはレナスだった。

**E p i s o d e 0 7 - 2 招待状を睨んで（後書き）**

9 / 4 誤字修正致しました。（ご指摘ありがとうございます）

「悪趣味」

思わず零れた一言は、レナスの拳によって粉碎された。

「着飾った女を見て開口一番に悪趣味ってどういうことよ！」

試着室のカーテンを開け放った格好のまま、怒鳴るレナス。

そんな彼女に顔面を殴り飛ばされつつ、やはりついてきて正解だったとヒューズは改めて思う。

「その年でレースやらリボンやら装飾過多なドレスはねえだろ」

「お姫様みたいで良いでしょう」

「お姫様って年かよ」

再び殴られヒューズは鼻を押さえた。

機嫌を直そうと思ってきたのは確かだ。だがあまりにも、あまりにも酷いそのセンスは、さすがに褒めるわけにもいかない。

恐る恐るレナスを見れば、意固地になる一歩手前の表情がそこにはある。

いつもより言葉に気を付けねばと思いつつ、ヒューズは目を付けていたドレスを彼女に渡す。

「それ着てみる」

ヒューズの一言に、レナスは不満そうな顔で試着室の中へと引込む。

だが改めてドレスを見た彼女はカーテン越しに黄色い悲鳴を上げる。

「これすごく良い」

でも値段が高いと唸るレナスに、ヒューズがあきれ果てた。

「出すって言っただろう」

「同意はしてない！ 半額くらいは出すつもりだった！」

「出したらすっからかんだろ。だったら無駄な酒代はらわされるより、こういう物に使わされた方がまだマシだ」

「でもこれ、本当に…」

「良いから着てみる。昼休みおわっちまうぞ」

ヒューズという言葉に試着室の中が騒がしくなる。へたに焦って破かなければいいがと思いつつ、ヒューズはさり気なくこちらの動向をうかがっていた店員に目を向ける。

「今着てる奴を」

お支払いはと答える店員に、ヒューズは手持ちのクレジットカードを渡す。それをためらいなく受け取る所、さすが高級ブティックである。

観光客が多いフロレンティアでも、クレジットカードを利用出来る店はあまり多くはない。

ヒューズが暮らしていたステイツでは、貨幣の偽造が度々起こるためむしろカードの方がありがたがられるが、フロレンティアではむしろ利益高の高い現金払いの方が好まれる。

とはいえ貴族達富裕層の人間は、ステータスの一部としてカードを好んで使うので、このようなブティックではカードに慌てたりしない。

「やっぱりこれにする！」

支払いを済ませている間に、ようやくレナスはドレスの試着を終えたようだった。

笑顔でカーテンを開けたレナスに、ヒューズは息を呑んだ。

コルセットを必要としない今風のドレスは、日頃の訓練のお陰で美しく保たれた彼女のボディラインを美しく、不自然なく強調している。とはいえ同年代の女性にしてはつきすぎている腕や太ももの筋肉は緩やかなサテンの生地が美しく隠してくれるので、一見しただけでは彼女が騎士だと気付く者はいないだろう。

「へ、変かな？」

何も言わないヒューズに不安になったのか、レナスはドレスをさすりながら僅かにうつむく。

「いや、ちよつと予想外だった」

「予想外に酷い？」

「だったら買ってない」

店員からカードを受け取るヒューズに、今度はレナスが息を呑む番だった。

無駄に気が利くのも、彼女に甘いのも今に始まったことではなくて。だからいつもなら、素直にありがとうと笑うことができた。

でもそんな気配り上手なところが、そして彼のさり気ない優しさが女性には素敵に写るのだろうなと考えてしまった直後、レナスの息が止まった。

「…やっぱり、給料入ったら返す」

ここ1週間意固地になつていた所為もあるのだろう。お礼をするつもりだったのに、それとは間逆の言葉が口から零れた。

「いいよ。詫びだ」

でも怒っていたのはレナスの勝手に、ヒューズが詫びることなど何もない。

「いいの、あんたに甘えすぎてる自覚はあるし」

自分で言葉にして、レナスは今更のように気付く。

「それにこれからも…、ずっと甘えられる訳じゃないでしょう」

その言葉に、今度はヒューズの息が詰まった。

レナスの言葉を、誰よりもわかつていたのはヒューズだった。

なのに他ならぬ彼女の口から告げられると、こんなにも苦しいとは思っていなかった。

「あんだだつて木偶の坊じゃないし、いつか私より大切なヒトできるでしょ。でもきつと、今のうちから一人になれておかないと、甘えなくなるから」

「でもいつも言ってただろう、自分より先に結婚するとか」

「思ってたけどさ、あんたが新聞とかでてるの見て気付いたの。あんたに憧れてる女の子は沢山いるって…」

「俺は誰も選ばない」

「選ぶ気がないだけよ。周りを見れば素敵な子は沢山いる。それに

他人の恋とか出会いを、私が潰す権利無いって気付いたの」

だから今までごめんねと告げて、レナスは試着室の中に戻っている。

「他人…か」

いくら長い年月を共にしても、彼女と自分は赤の他人で。わかっていたはずなのに、彼女の声で聞くと酷くつらい。

子どものような無邪気な彼女に、甘えていたのは自分の方だと気がついて、ヒューズは愕然とした。

でも目に焼き付いてしまった彼女のドレス姿は消えず、ヒューズは店員に包装を頼むと一人店を後にした。

## Episode 08 - 1 美しさと憂いと

夕刻、舞踏会の会場となっている高級ホテルのサロンで、アルベールはレナスを今か今かと待っていた。

フロレンティアの南東、古い貴族の邸宅を改装して作られたそのホテルは、海外の要人や映画俳優なども訪れる有名な三つ星ホテルだ。

ホテルを格調高い物にしているのは舞踏会のメイン会場となっているサロン。

通称鏡の間と呼ばれるサロンは、巨大な2対のシャンデリアと、ヴェッキオ宮殿にも負けない美しいフレスコ画が天井を彩る、それは見事な物なのだ。

その部屋の美しさに負けぬよう、貴族達は派手なくらいに着飾っているが、王子の礼装で佇むアルベールはその中でも特に目を引いた。

騎士としては未熟で、レナスの前では男としても未熟な彼だが、王子としての立ち居振る舞いは一流。

故に多くの女性達が彼に甘い視線を送っていたが、彼が待っているのはただ一人。

もちろんそれは、昨晚招待状を渡したレナスである。

渡したとき、正直レナスはあまり乗る気ではなかった。

しかし、どうしても言えば彼女は渋々頷いてくれた。

「まあ行く用事はあったし」

と言う言葉に若干不安は覚えたが、絶対だからと念を押ししたので多分大丈夫だろう。

大丈夫なはずだ。万が一にも来なかったら……いや彼女に限って来ないことはあり得ない。多分。

希望を失わないようそう念じ続けていると、背後から突然肩を叩かれた。

振り返り、そしてアルベールは息をのむ。

「ごめん、仕事があつて裏にいたの」

ドレスに合わせたメイクと髪型で完璧に決めたレナスは、アルベールの想像より遥かに美しかった。

結い上げられた金系の髪は美しく輝き、顔を彩るほお紅は白くつややかな肌を暖かく彩っている。

いつもより濃いめの化粧を施しているはずなのに、不自然さはそこにはなく、ただ純粋な美貌だけがそこにはあった。

「い、今までで一番綺麗だ」

唇にキスをしたい衝動を何とかおさえ、膝について手の甲に口づけを落とす。

「そうしていると王子様よね」

「そうして無くては王子様です」

若干ムツとしながらも、アルベールは彼女の手を引きサロンへと足を踏み入れた。

「今日は、絶対忘れられない夜にするんだ。むしろ今すぐ告白してとかせがまれるくらい熱い夜に……」

独り言に近いその言葉を、レナスは何かに気を取られ聞いていなかったが、アルベールは構わず続ける。

「今日は一晩中踊り明かしましょう。だから僕だけのお姫様でいてくださいね」

それは、アルベールが女性を落としたいときに使う本気の殺し文句。

だがそれに答えたのはレナスではなく、無機質なノイズと伝令だった。

『竜族の団体さんが来た、一同配置に付け』

それはレナスが耳に付けているイヤリング：に見せかけた通信機からの物で、アルベールはレナスの言っていた「仕事」が何であるかようやく気がついた。

「安心しなさい。言われなくても一晩中、あんたの側について守って

あげるから」

「え？」

啞然とするアルベール。その横に、部下らしき騎士を従えたヒューズがやってきた。

「5番テーブルは騒がしいからアルベールを近付けな。あと料理を取るなら8番テーブルはやめろ、どこかの馬鹿が痺れ薬を盛つたらしい」

了解と答える声はいつもの物。すれ違うような僅かな間に現状を報告しあい、すぐさま職務に戻る二人にアルベールは驚くほか無い。

「レナスさん、ヒューズさんと喧嘩とかしてたんだよね？」

「どこからで聞いたのよ、その情報」

「いや、その…」

「っていうか、今仕事中なの。喧嘩してても、こういう場所じゃあ持ち出さないわよ」

と云いつつ、レナスが一瞬だけヒューズを目で追っているのに気付いてしまう。

式典の時などに纏う礼装に身を包んだヒューズは、さすがに髪と髭も整えているのでいつもより凛々しく見える。

そしてそんな彼に、周りの女性たちは甘い視線を送っており、それを見たレナス顔に暗い影が降りた。

けれど彼女は慌てて明るい表情を作り、そしてアルベールの肩を押す。

「とりあえずなんか食べましょうか。せっかくごちそうがあるし、めちやくちやにされたら勿体ない」

「めちやくちや？」

「知らないの、このパーティーのこと」

ただのパーティーでしょうと応える彼は今年が初参加。仕方なくレナスがこの会の裏の顔をつげた瞬間、アルベールの顔から血の気が引いた。

## Episode 08 - 2 ダンスフロアは遙か遠くに

午後8時。

誰も彼もが酔いに頬を染め始めると、舞踏会はその姿を一変させる。

選手対選手の喧嘩は勿論だが、酔いが回った貴族同士の間でも争いが始まるのがこの時間だ。

お互いひいきのチームが違うので、どちらが強いかを論議している内に気がつけば手が出てしまうらしい。

『入り口横で乱闘。側にいる騎士は至急仲裁に入れ』

ヒューズの耳に入ってきた通信に、位置的にすぐ近くだと読んだヒューズは、自分が向かうと宣言する。

「おい、無視してんじゃねえ！」

だがそんな彼の前に、見知らぬ男が立ちはだかった。

もはや何が原因で喧嘩を売られたかも覚えていないが、とりあえず任務の邪魔になるなら倒すしかない。

殴りかかってきた男の鳩尾に拳をたたき込み、ヒューズはあつという間に男を床に放った。

彼の足下には、返り討ちにされた男が他にも3人ほど倒れている。

1人は選手、もう3人は彼の連れのようだった。

舞踏会の招待状1枚で、会場には入れるのは4人。故に選手たちの殆どは、恋人とそして護衛役を連れてくる。

自分が怪我をすると事なので、大抵は護衛役に他の選手を攻撃させ、本人は恋人と踊りあかすというのが通例だ。

なのでヒューズに向かってきた奴は相当な愚か者なのだろう。とはいえ勿論、売られた喧嘩に本気を出すような大人げのない真似をするつもりはない。

護衛役と言っても腕に覚えがある程度であり、騎士を職業にするヒューズとの差は歴然だ。

過剰な正当防衛はすべきではないと思っっているし、特に選手には怪我をさせたくない。

念のため倒れた男達に怪我がないかを確認し、それから報告のあった乱闘騒ぎに駆けつける。

現場では、二人の男が服を引っ張り合い、片方などは尻を出している。

見苦しさは半端ないが、双方に大した怪我はまだないようだった。「そこら辺にしておけ」

男たちの首根っこを掴み、ヒューズは二人を無理矢理引きはがす。同時にキツイ睨みをきかせれば、手元の二人は黙り込んだ。

「こいつらを外に出せ」  
部下に男達を渡し、とりあえずは一件落着かと周囲を見回すヒューズ。

そのとき彼は、奥のフロアでアルベールと踊るレナスに気がついた。

昼間見たとき以上に美しく着飾ったレナス。その美貌に多くの男達の目が釘付けになっているが、ヒューズはそれよりも時折不自然に飛び上がるアルベールが気になった。

あれは多分、物凄い勢いで足を踏まれている。

昔からレナスはダンスが下手で、その上一歩一歩にやたらと力が入るせいか、相手の足を痛めつける拷問器具のような踊り方をするのだ。

ヒューズはもう慣れたのでそれなりの回避行動が取れるが、アルベールはまだ無理なのだろう。

それがおかしくて、その反面今まではあの場所が自分の物だったのにと、女々しく思う自分にヒューズはふつと苦笑する。

下手な自覚があるのか、彼女は舞踏会に参加しても大抵は踊らない。

「でもあんたの足は壊しても良いから」

と躊躇い無く腕を取るのは、ヒューズの腕だけだった。

だからいつもなら、周りの男がどんな目を向けようと気にせずにいられた。

けどもう、彼女の特別でいられる時間は終わる。

もう甘えないと宣言したレナスの言葉を思い出し、ヒューズは彼女から目をそらした。

そんな彼の背に、軽い衝撃が走ったのは、その直後の事だった。響いた悲鳴に背後を振り返れば、男がへし折れた木の椅子を掲げている。

軽い衝撃、とヒューズは思ったが、周りの慌て方からしてかなりの勢いで椅子をぶつけられたらしい。

「…器物破損で現行犯逮捕だ」

折れた椅子を掴んで体を引き寄せ、あとは背負い投げで相手を地面に叩き付ける。

意識はまだあるようだったが、素早く手錠をかかればさすがに大人しくなった。

「大丈夫ですか？」

そう言っただけ声をかけてきた相手が、一瞬誰だかわからなかった。

「……キアラか？」

「どうしてみんな怪訝な顔で尋ねるんです！」

そんなに綺麗に化けたらわかるまいと思ったが、下手に褒めると拗れるのであえて言わないでおく。

ヴィンセントが見立てたドレスは上手い具合に彼女の寂しい胸元を寄せ上げており、ウィッグと化粧で彩られた彼女の顔には騎士の面影はない。

さり気なくドレスの裾から刃物が覗いているが、ぱっと見ただけで騎士だと気付くのは無理だ。

「手錠まだあるか？ 俺のはストックが切れた」

ヒューズの言葉に、これまた器用に隠した手錠を取り出して、キアラがため息をつく。

「今年はいつてもより激しいですね」

「煽るに煽ったからな」

そう言っただけでさり気なく視線を走らせれば、キアラから少し遅れて、  
ヴィンセントがこちらにやってくる。

「凄い音がしましたけど」

「ヒューズ隊長が、背中で椅子を粉碎しました」

「俺が壊したみたいだな言っただけよ」

キアラの言葉にヒューズが深いため息をこぼす。

同時に背中を軽くさすりながら、彼は周囲に目をこらした。

「ずいぶんと殺気立ってきたし、そろそろプランBでいくか」

「じゃあ、中庭の方、人払いをさせておきます」

そう言っただけで歩き出すキアラを見送りつつ、ヴィンセントはヒューズに目を向ける。

「大丈夫ですか」

「椅子くらい平気だ」

「レナスさんの事ですよ」

言い当てられとは思っていなかったのか、ヒューズが思わず動きを止める。

「それ以外で、あなたが背後を取られるようなことはありませんか？」

「目ざといな」

「…敵が集まるまで、お話聞きましょうか」

ヒューズの肩を叩き、ヴィンセントは中庭を指さした。

二人がやってきたのは、サロンのある本館と離れに立つ別館とを繋ぐ広い中庭だった。

喧嘩とは別の方向で盛り上がった男女のために、本日はそこも会場の一部とされており、二人は道すがらききたくもない情事の声を耳にする。

「平和だね全く」

庭園の中央、噴水のある一角にたどり着いたヒューズは、人気のないベンチに腰を下ろしながらぼやく。

この付近にはまだ人がいないが、もう少し時間がたてばここも恋人達に埋め尽くされるであろう。

「で、何があつたんですか？」

「見かけによらず、この手の話しに食いつき良いよな」

「安心するんですよ、あなたがちゃんと恋愛してることに」

「何でお前が安心する」

「同じ、人でない者として」

その言葉にヒューズは無言で頭をかき、それから上着のポケットからたばこを取り出す。

「最近あまり吸ってなかったのに」

「レナスがうるさくてな」

「夫婦のようですね」

「その表現はやめろ」

言いつつ火を付けようとするがマッチは物の見事に折れていた。

「…もう、帰ってえ」

手の中のたばこをへし折り、ヒューズはベンチに背をぐったりと持たれかかった。

ヒューズがここまでではつきりと疲れを顔や声に出すのは初めてで、ヴァインセントは静かに頭を下げる。

「色々とすいません」

「なんでお前が謝る」

「きっかけはアルベールでしょう。あれは俺の部下で、友人ですか」  
「ら」

「確かに、もう少し手綱を握っててくれると助かる」

「でも安心してください、レナスさんは歯牙にもかけてませんから」  
「だから何で…」

あいつの名前を出すと云おうとして、いつもならこの手の話題を冷静に流していたことを思い出す。

「前にも言いましたけど、あなたの恋は、年の割に青すぎる」

「うるせえよ」

「それに遠慮しすぎだ。…まあ理由がわからなくはないですが」  
「ヴィンセントの言葉に、ヒューズが黙り込む。」

沈黙は長かった。そしてその長い沈黙を経て、ヒューズがこぼすように言葉を吐いた。

「お前は俺が何に見える」

「冗談抜きでと言われて、ヴィンセントは言葉を選ぶ。」

「実を言うと、あなたのことを少し調べました」

「調べた？」

「昔の癖で、色々と裏を取らないと相手が信用できないたちでして」  
それを咎めることなく、むしろおかしそうにヒューズは笑う。

「で、何がわかった？」

「…何も、と言うのが正直なところです」

いくら調べても、彼に関する情報は、レナスの家に護衛として雇われた所から過去にはさかのぼれないのだ。

まるで意図的に消されているような、そんな印象だったと告げる  
ヴィンセント。

それを聞いたヒューズは、ただ笑みを苦笑に変えただけだった。

「…だから逆に候補は絞れましたけどね。ステイツ出身でこの手の情報操作を行うとしたら、軍の秘密部隊が諜報局当たりだ。そして

あなたの能力を鑑みれば、多分後者」

でもわかるのはここまでだとヴィンセントが降参のポーズを取れば、何故だかヒューズは少し困ったように笑った。

「悪いが、俺も自分のことに関してあまり詳しくない」

そう言うと、ヒューズは自分の右手を異形の者へと変化させる。

「自分が何者か、俺は教えられていない。ただ人ではないと、そう言われた記憶はあるが」

始めは竜を思わせる物に。そして次に、獣を思わせる物へと変え、ヒューズは忌々しげにそれを見つめる。

「生き物、でもないのだろうな。特別な仕事をさせるために造ったと言われたが、結局その仕事が終わった今も、自分が何者かはわからない」

「知る術はないんですか？」

「前の仕事は辞めちまったからな」

と言うよりやめさせられたとヒューズは苦笑する。

「戦争が終わってずいぶん立っし、最近は俺みたいな存在があると逆に不都合らしい。それでいきなり退職を迫られ困っていたところを、レナスの親父さんに拾われた」

ヒューズの言い方は、酷くさっぱりしていた。

しかしそれがただの退職でなかったらうことは、彼の奇異な出生を聞けば自ずとわかる。

だが少なくとも今は、身も心もフロレンティアの騎士であると言うヒューズに、ヴィンセントは内心ホツとしていた。

「…でもせめて、本当の自分が『どれ』なのかくらい、聞いておけば良かった」

確かに彼の話が本当なら、いくら地方紙といえども、写真撮影やインタビューには応じられない。それに気付いたヴィンセントの脳裏に、ふと疑問が浮かび上がった。

「いくつくらい、姿があるんですか？」

「数えたことはないが、地球上にあるヒトと呼ばれる種族には一通

りなれる。ちなみに今のこれは、ステイツの一般男性の顔だ」

「なぜその顔を？」

「ただ、保つのが一番楽ってだけなんだ。あとは、レナスの好み」  
予想外の一言に思わずどういふ事かと聞き返せば、ヒューズがウンザリした顔をする。

「元々は、別の顔で接していたんだが、こういう存在だとある時はれてな」

「全部見せるとか言われたんでしょ」

「1日ばかりだった」

幼いレナスに命令されている姿は易々と想像でき、ヴィンセントは思わず吹き出した。

「どうせなら一番楽な姿でいって言われて……、それでこの姿になったら、一番俺らしいと言われた」

未だにその基準はよくわからないかと唸るが、そう言う困ったような表情が、一番似合っているのがこれだったのでないかと、ヴィンセントは推測する。

「年齢は変えられたりしないんですか？」

「これが限界だが若くはなれる」

「ならもつと若い容姿にすればいいのに」

「レナスに言われたんだよ、ずっと若いままだと不自然だって」

逆にやりすぎて文句を言われたけどと唸りつつも、そのレナスを語るときの彼はとても幸せそうだった。

人ではないとわかっていて、それでもヒューズが人のように笑えるのは、きつとレナスの我が儘のお陰なのだろう。

「今のあなたは、レナスさんが作ったような物ですね」

「あいつと出会わなければ、今の俺はいなかっただろうな」

「あなたを変えたのは、出会いだけではない気がしますが？」

ヴィンセントの笑顔に思わずため息がこぼれたのは、彼の言いたい事がわからぬほどヒューズも鈍くはないからだ。

「良い恋をなさっていますね」

ヴィンセントが思わず微笑めば、ヒューズは困ったように頭をか  
く。

「異形が恋などすると思うか？」

「側に素敵な女性がいるのなら」

ヴィンセントは微笑むと、ゆっくりと立ち上がる。

「それに俺だって人より異形に近い」

「でも元々は人だろう」

「人間らしい生活を始めたのは、俺も最近なので」

そしてその生活を与えてくれたのはきつと、恋が苦手な可愛らしい騎士だ。

「それにフロレンティアの女性は強い。彼氏が人でなくても、構いやしませんよ」

「お前はキアラを幸せにする自信があるか？」

「ないですよ。ただ、こつちが幸せになりたいだけです」

ヴィンセントの言葉に、今度はヒューズが笑った。でもそんなことを言いつつ、彼はきつとキアラを大切にするのだろう。

「お前が羨ましい」

そう呟いて、ヒューズも静かに立ち上がる。

今更のように、目の前の男に色々と話を知りたいとヒューズは思った。

しかし残念ながら、それには辺りが騒がしくなりすぎている。

「意外と多そうだな」

言いながらヒューズが剣に手をかければ、サロンの方から物騒な武器を持った男たちが向かってくる。

そしてその武器が、酷く過激な事に二人は気付いた。

「…さすがに、舞踏会に戦斧はないですよね」

さり気なく相手方の動きを見れば、彼らは戦い慣れた様子で陣形を組んでいる。

「選手とその護衛って感じじゃないな」

「違う舞踏会の客だと良いんですけどね」

しかし男達の殺気は、明らかに二人へと向けられていた。

「ちよつとまづいかもな」

こちらへとかけてくる男達に、ヒューズは剣を構えつつ通信機に手を当てた。

## Episode 08 - 4 その強さはドレスの下に

「すみません、足が限界です」

「だから言ったでしょ、ヘタだって」

もう100回以上の踏まれた足を引きずってダンスの輪から外れれば、アルベールは壁際に置かれた椅子に座り込む。

「まあ警護するのは楽で良いけどね。踊ってれば喧嘩は売られないし」

「もつと他に感想は無いですか？」

「あんたダンスのリードヘタね」

「僕の所為!？」

思わず嘆くがレナスは笑うばかりである。

そんなとき、突等に通信機のスイッチが自動的に入った。緊急信号だと気付くと同時に、響いたのはヒューズの声と打ち合う剣の音だ。

「非常事態発生。武装した複数の敵と交戦中。繰り返す、非常事態発生。現在武装した複数の敵と交戦中。各員は速やかに周囲の状況を確認せよ！」

周囲の騎士達の視線をあわせた次の瞬間、側にいた貴族の男が、唐突に袖の下ナイフを抜いた。

その切っ先はアルベールに向けられており、レナスはとっさにその腕を蹴り上げる。

ナイフは飛んだが、相手はすぐさま距離を取り、新しいナイフを抜き放つ。それはどう見ても、素人の動きではなかった。

「アルベール、剣を貸して！」

「大丈夫です、僕だってやれる」

剣を引き抜きアルベールは男へと躍りかかる。それをレナスは声で制したが、伸ばした腕は届かなかった。

アルベールは男向けて、素早く剣を振り下ろす。

だが予想より手応えが浅く、彼は思わず息をのんだ。アルベールが思うよりも相手の動きは速く、そして的確な回避行動を取ったのだ。

アルベールが再び体勢を立て直すより、男が回避から攻撃へと転じる方が早い。一撃目で深く男に近づきすぎていた彼には、もはや回避を行う暇はなかった。

やられる。

アルベールが恐怖に立ちすくんだそのとき、ようやくレナスの腕が届いた。

剣から逃すようにアルベールを引き倒し、レナスは隠し持っていたナイフを構える。しかし相手はその動きを読んでいた。

アルベールをの所為で上手く動けないのを想定し、男はレナスに刃を向けた。

素早く間合いに入り込まれたレナスは為す術無く、アルベールが素早く剣を差し入れたが、間に合わなかった。

ぎりぎりまで体を反らした物の、男の刃はレナスの額と右目、そして頬にかけてを無惨にも切り裂いていく。

飛び散る鮮血に、悲鳴あげたのはアルベールの方だった。

男もまたその一撃で、レナスの動きが止まると思っていた。

だが彼女は、切り裂かれてもなおその場に立ち続ける。その上アルベールの腕から剣を奪うと、油断していた男のナイフをたたき落とすとした。

続けざまに蹴りを放てば、男は転倒し、そして駆け寄った騎士がそれを取り押さえる。

「この馬鹿！」

レナスは剣を支えに膝をついたのは、そう怒鳴って、彼の頬を殴り飛ばした後だった。

「ごめんなさい、僕」

「謝罪は良いから下がって！ 敵はまだいる！」

言いながらドレスを引き裂き、出血が酷い傷にそれを巻く。

完全には止血できないが、何もしないよりはマシだ。

「陣形を組んで一人一人確実にしとめる」

いつの間にか周りに揃う部下たちに声をかければ、皆一斉にドレスの下に隠していた武器を構えた。

そして同時に身動きが取れるよう、騎士達は一斉にドレスの裾を切り裂く。

「結局一日で駄目になるのよね」

そんな恨み言を漏らしたのはレナス。

自分の怪我で周り動揺をさせないようにとの配慮だったが、それに部下達はちゃんと乗ってくる。

「でも、いい男見つけましたから！」

誰かが張り上げたその一言に、良い意味で空気が緩み、そして彼女たちは気高い笑顔を顔に貼り付けた。

その笑顔こそが開戦の合図。敵へと躍りかかる騎士達は、ドレスの動き難さなど物ともせず、武器を振り上げる。

逆に裾を目くらましに使ったり、攻撃の一手にしたりと、彼女達の戦い方は可憐で大胆だ。

剣術の腕だけで言えば、アルベールよりも劣る者が殆どだ。けれども少なくとも、彼女たちは敵の強さを見誤ったりはしない。

そんな騎士達の前にアルベールの出番などあるわけもなく、周囲の制圧が終わるのは一瞬だった。

逃げようとする者達も入り口の警備に捕まり、客たちが混乱するよりも前に騎士達に軍配が上がった。

危機が去った事にアルベールはホッとして、それから慌ててレナスの姿を探す。

「…すぐに救護を」

そう言う部下に頷きつつも、今後の指示を飛ばすことは忘れないレナスに、アルベールはただただ啞然とするほか無かった。

そんなとき、その場へと駆け戻ってきたのはヒューズとヴィンセントだ。

多少髪と服は乱れているものの、彼らには傷ひとつ無い。

「こちらも終わったようだな」

ヒューズの言葉にレナスが顔を上げ、ヒューズもまた彼女の顔を見た。

しかし彼は動揺ひとつしなかった。ただ平気かと小さく声をかけ、レナスが頷くのを確認すると、すぐさま客達の非難を行うため、その場をあとにする。

自分だったら、きっとレナスの怪我を見て取り乱すことしかできない。

今更のように彼が隊長である理由をまざまざと見せつけられ、アルベールは落胆した。

そんな彼の肩を叩いたのはヴィンセント。彼は薄々、レナスの怪我の原因に気付いているのだろう。

「彼女を救護班の所まで連れて行け、この場の整理は俺達が行う」  
すぐに頷いたのはレナスが心配というのもあるが、この場においても、自分に出来ることがないと彼は気付いたのだ。

「レナスさん」

「大丈夫よ、こんなのツバつけとけば」

今度こそ謝ろうとしたアルベールの頬を、今度は優しく叩き、レナスは大丈夫だと笑う。

「でもこれ以上ドレス汚したくないから、エスコートされてあげるわ」

部下にすぐ戻ると告げるレナスの手を、アルベールは齒がゆい思いでとる。

そうして歩き出せば、レナスが軽くアルベールの足を蹴った。

「失敗したと思うなら、今日のことを次に生かしなさい」

「はい」

「あと必要以上にクヨクヨしない。あんたは騎士で王子。あんたの顔色ひとつでみんなが不安になる」

「はい」

「あと傷つけられたくらいで、あなたの評価を上げたり下げたりはしないから、今日はしっかり休んで明日の試合に備えるように」

「レナスさん」

「何？」

「格好良すぎます」

「でもあなたの評価は元々高くないから、あんまり期待はしないでね」

うなだれたアルベールの背を、レナスは活を入れるように力強く叩いた。

「アルベールは行った？」

「行きました」

「戻ってくる気配はない？」

「ありません」

キアラが答えた途端、救護班の待機していたホテルの一室でレナスがギャーと悲鳴を上げた。

もう少し女らしい悲鳴にしないよと突っ込んだのは、ガリレオ騎士団随一の治療師であるアレッシオだ。

明らかに顔も体も男だが、心が乙女な彼はレナス達同様ドレスでめかし込んでいる。ちなみにレナスとは同期で、彼女の治療を担当するのはいつも彼だった。

「ホント痛い、なにこれ、今まで一番痛い！」

「そりゃあなた、額から頬にかけてザツクリよ」

「やだ、もう鏡見たくない」

と言うより見れない顔になってるのかと情けなく聞き返す隊長に、思わずため息をついたのはキアラだ。

「アルベールさんの前ではカッコつけてたクセに」

「あそこでカッコつけないと、あいつ絶対ウジウジするじゃない！」

それは同意だが、先ほどの落差に驚くより呆れてしまう。

実際レナスが怪我を負うのは良くあること。

そもそも騎士を生業にしている生傷がないという方がおかしい。だがしかし、傷を負うことに関してはためらいがないが、やはり痛みになれると言ったことはない。

人前では気丈に振る舞っても、一步身内の中に戻ればこの有様である。

「痛すぎて死ぬ。今すぐ顔の右半分切って捨てたい」

「そしたら今度こそ結婚できないわよ」

「ねえ、この傷残る？ 残るかな？」

「その前に目の心配しなさいよ」

そう言いながら、アレッシオが持ち出したのは20センチほどもある細くて長い針だった。

アレッシオが行う治療は、妖精術と呼ばれる医療魔法とこの特殊な医療器具を用いて行われる。

この長い針を傷に刺し、そこから怪我をした箇所 directly 魔力と魔法を流し込むことで、免疫力や治癒力を飛躍的に高めるのだ。

とは言っても針が通らぬ堅い物、骨折や頭蓋骨で覆われた脳の怪我などは治せないのも万能ではないが、少なくとも騎士が負うことの多い裂傷などを癒やすのは得意である。

「さあ、とりあえず目からいくわよ」

「待って、それ刺すの？」

「どうせ見えてないでしょう？」

「やだ、やだやだやだ！」

完全にだだっ子となりはてるレナス。

それを慌ててキアラが押さえたが、レナスの怪力の前では刃が立たない。

「やっぱりヒューズがいないとダメか」

投げ飛ばされるキアラを避けながら、そう言ったのはアレッシオ。彼の治療が苦手なレナスが暴れるのはいつものことで、それを押さえるの役目を押しつけられるのは、いつもヒューズだった。

とりあえず応急処置だけして、ヒューズの手を空くの待とうと本気で考えたとき、レナスが静かに動きを止めた。

「ヒューズは、呼ばないで」

我慢すると告げられ、アレッシオは耳を疑った。

そしてヒューズを呼びに行こうとしていたキアラも動きを止める。勿論驚愕の表情で。

「頭でも打ったの？」

「いや、ちょっと……」

その原因を見抜いたのはアレッシオ。

キアラの方は気落ちした隊長を不安げに見ていたが、むしろ彼は  
おかしそうに微笑んでいる。

「で、ヒューズと何があったの？」

びくりと動きを止めたその隙を逃さず、アレッシオは素早く針を  
突き刺す。

針を目に刺す、と聞くと痛々しく思えるが、特別なその針は傷口  
に触れた瞬間、溶けるようにきえてしまうので痛みもほぼ無い。

勿論中には痛みを伴う針もあるが、目のように細やかな治療を必  
要とする箇所を使う針は特別製なのだ。

「何でわかるのよ」

「だって、私もヒューズを愛する女の一人ですもの」

えっ！と声を上げたキアラの頭をさり気なく叩き、それからアレ  
ッシオはレナスの肩を抱く。

「もう頭来るわよね、いつ会いに行っても周りは小娘だらけだし！」  
その若さと勢いにはさすがのアレッシオも対抗できず、もう5日  
も声を聞いていないと彼はむくれる。

「普段接点がない私だって頭に来てるんだから、あんたがイライラ  
するのは仕方ないわよ」

アレッシオに言葉にレナスは無言だった。その代わり、なるほど  
と手を打ち合わせたのはキアラだ。

「そうか、レナス隊長がおかしかったのは、ヒューズ隊長が側にい  
なかつたからなんですネ」

今更のように納得するキアラ。そしてレナスもまた、キアラの言  
葉で自分の感情に気付かされる。

「その上、拗ねた勢いで『ヒューズ離れする！』とか宣言しちゃっ  
たんでしょ」

「なんでそれを…」

「わかるわよ、あんたと何年付き合いがあると思ってるの」

言いながらさり気なくレナスの右目に魔法をかけて、それからア

レッシオは彼女の傷を見る。

「素直になり時じゃない？ この傷、私の魔法でも1ヶ月じゃ治らないわよ」

「じゃあ、確実に結婚…」

「まあお見合いも無理でしょうけど」

顔に傷があるからと、婚期を逃した先輩騎士達の姿を見たのは一度や二度ではなく、レナスは思わずうなだれた。

「でもヒューズなら大丈夫よ。あんたみたいなチンピラの世話を甲斐甲斐しく焼いてくれてんよ、今更外見もチンピラみたいになつたって、気にもしないわよ」

「チンピラって何よ！」

「金はせびる、食事は奢らせる、機嫌が悪いとすぐ殴る。これの何処がチンピラじゃないのよ」

自分では言い返せなかつたのでキアラに援護を頼もうとしたが、彼女もまたあからさまに視線をそらしている。

「でもそれが良いって言う男なんだしさ」

「良いなんて言った事無いわよ。いつも呆れてるし、困ってるし、嫌ってるし」

「最後の一個はあんたの被害妄想。あいつが大人気なのはわかつたんでしょ？」

痛いほどに。

「それは今に始まつた事じゃないし。でもあえてあんたの側にいたって事はさ、ちゃんと理由があるのよ」

「昔の恩とか、仕事とか…」

「逃げ道探してる時点で、自分があいつのこと意識してるって気付いてる？」

言われて、それでも違うと思ひ込もうとした。しかしまたしてもキアラがレナスの気持ち言葉を言葉にしてしまった。

「好きだって認めた方が良いでしょう。今週の隊長、それはもう挙動不審でした」

「この恋愛偏差値マイナス10点のキアラにまでおかしいって思われてたのよ。いい加減認めなさいな」

「でも15年もいて、一度も好きだなんて……」

「気付いてなかっただけよ。端から見れば嫉妬は前からしてたし、やたらとかみつくのも構って欲しくてしょうがないって感じだったし」

「そうなの？」

「あんたはさ、ヒューズの側にいたくてたまらないのよ。でもたぶん、その気持ちに鍵かけてる」

共に過ごした時間が長すぎたのか、それとも護衛とその対象というくくりに必要な以上に縛られていたのか。言われてみれば浮かんでくるその原因に、レナスは頭を抱えた。

「好きだなんて、考えたこともなかったの」

「でも、離れるなんて選択肢もなかったんじゃない？」

アレッシオの言うとおりだった。彼が離れてしまいかもという恐怖に支配されるまで、当たり前のようにヒューズは自分の物だと思っていた。

「私、どうしたらいい？」

急な自覚に戸惑うレナスに、アレッシオが新しい針を持って微笑む。

「指輪でもねだってみたら？」

案外ぼろっとお金出すかもと笑い、そしてアレッシオが彼女の傷に針を刺す。

途端にレナスはまたしても色気のない悲鳴をあげた。

「あ、ごめん。今度のはちょっと痛い」

「先に言って！」

「あともう一本」

いやだと叫んで暴れるレナス。

迫り来る針に、彼女の心はあの男の名前を呼んでいた。

もう気付いた想いは否定できない。アレッシオの言葉は、多分正

しい。

故にレナスは、ブティックでの言葉を今更酷く後悔した。彼を手放す事なんて絶対に無理だ。その上違う女の所へ行くのを我慢できるわけがない。

しかし、多分ヒューズはそれを受け入れたのだ。ドレスを脱いで外に出たとき彼の姿はそこにはなく、いつもなら一番に駆け付けてくれる彼の腕はそこにはない。

「すぐ終わるから、少し我慢しなさい」

「だめ、一人じゃ無理」

アレッシオとキアラの体を反射的に投げ飛ばし、レナスはベッドの上から逃げようともがいた。

だがそのとき、キアラとは別の、たくましい腕がレナスの体を押しさえ込む。

「ホントに成長しねえなお前…。部屋の外まで悲鳴が聞こえてたぞ。そこにいたのは、レナスが来て欲しいと願った男だった。」

「なんで…」

「あんまりうるさいから、お前の部下達が心配してな」

痛みを騒いでいるのを聞きかねてヒューズを送り出してくれたらしい。

いないときはあんなに切望していたのに、いざ目の前に立たれると気恥ずかしさの方が先に立ち、レナスは顔を赤らめた。

「話、聞いてた？」

「悲鳴なら」

ならいいとホツとした瞬間、またしてもアレッシオが問答無用で針を打ち込んだ。

しかし悲鳴を上げようとした瞬間、レナスの頭はヒューズの腕に優しく抱え込まれる。

悲鳴はでなかった。どうやら心とは反対に、体が勝手に彼の温もりに安心感を覚えているらしい。

「やっぱり最初から連れてくれば良かった」

途端に楽になった治療に、アレツシオは大喜びだ。

一方で既に痣が出来ている腕に、勘弁してくれとヒューズがため息をつく。

「明日は朝から試合なのに、腕を折られたら叶わん」

「とかいいつつ、心配して飛んでいたんじゃないの？」

アレツシオの言葉にヒューズの表情が変わった。

それにレナスも気付いたが、その意味を考察する暇はない。

アレツシオが更に太い針を刺したのだ。

「あ、ごめん。今度のはさっきよりもつと痛い」

「だから先に言っで！」

どんどん太くなっていく針に、せつかくもらった安心感が四散する。

それでも一人でいた頃よりはマシだが、結局ヒューズの腕のはレナスの爪痕やら殴打のあとが強く残る結果となった。

## Episode 09 - 2 不器用な騎士達

「レナスさんの様子はどうだ？」

治療が長引きそうなレナスに代わり、サロンへと戻ってきたキアラに声をかけたのはヴィンセントだった。

「傷が深いですが、失明はせずにすみそうです」

「それにしても暗い顔をしているが？」

「疲れ果てたんです、隊長に2回も投げ飛ばされて」

でも今はヒューズ隊長のお陰で落ち着いたと微笑むキアラに、ヴィンセントはホツとした顔をする。

「そう言えば、私わかりましたよ。レナス隊長がおかしかった理由」

そう言っ得意げに理由を語るキアラに、勿論ヴィンセントは苦笑だ。

「見ていれば普通気付くだらう」

「ヴィンセント様はいつから？」

「君よりもずっと前に」

その言葉に今度はむくれるキアラ。それを愛でながら、ヴィンセントはヒューズの言葉を思い出す。

『異形が恋などと思うか』

そう聞く彼の顔は既に恋をしている男の物で。

でもその恋を彼が認める気がないのは、ずっと前から知っていた。それを自分の言葉で打ち崩せた自信はない。

しかしそれでも上手くいくと思えるのは、ヒューズが恋をしているのが、彼の全てを変えた女性だからだ。

キアラが言うとおりレナスもまたヒューズを好いている。そしてそれを自覚したのだとしたら、きつとそれから逃げるようなことはない。ガリレオの女騎士はどんなことから目も背けないからだ。

「でも良いんですか、アルベール様は？」

「相手が悪すぎるからな」

それはキアラも同意のようだ。

「やっぱり、レナス隊長に釣り合うのは騎士として立派な人だと思うんです」

そう言っつて不機嫌になったキアラの表情から察するに、多分レナスに怪我を負わせたことを多少なりとも怒っているのだろう。

騎士としての規律に厳しいキアラである。アルベールの未熟さと、それを顧みない部分が許せるとは思えない。

「その怒りをぶつけるのは俺にしてくれ。アルベールを、未熟なまま放置させたのは俺だからな」

そう言っつヴェンセントの顔は、レナスやヒューズと同じ騎士隊長の物だった。

「ぶつけません。レナス隊長が、それを許しませんから」

「そう言っつところ、少し妬げる」

何気なく微笑めば、キアラが真っ赤になって下を向いた。

はぐらかす気だろうなと思うヴェンセントの前で、案の定キアラは慌てて話題を変える。

「ちなみに今、アルベール様は？」

「ラウンジで貴族達の相手をさせている。君たちの対処が早いお陰で混乱はないが、不安がつている方々もいるのでな」

元々王子として顔が広いアルベールは、その手の役には適任なのだろう。

そしてそう言っつ部分は、キアラも評価している

「聞き込みが終わるまでもう少し時間がかかりそうなので、アルベール様の口からそれを伝えて貰うことは可能ですか？」

「それを聞きに来たんだ。まだ酒と料理が余っているので問題ないが、時間がかかりすぎると機嫌を損ねる輩もいるからな」

「そこまで長くは取らないと思います。襲撃者の正体はわかっているんで」

さすがに調査が早いなと感心すれば、キアラが声をすばめる。

「ただちよつと、面倒なことにはなっつています」

どう面倒なのか聞きたいところだったが、遠くでキアラの名を呼ぶ声がしたので断念する。

「引き留めて悪かったな。あと、貴族達のご機嫌取りは任せてくれ」「お願いします」

そう言つて駆け出そうとして、キアラが慣れないヒールに軽くよるける。

その様子に、彼女がまだヒールを履いていたことにヴィンセントは驚いた。

「脱いでしまつたらどうだ？ 苦手なんだろう？」

どうせドレスの裾で見えないからと、他の騎士達が歩き慣れないヒールを脱ぎ捨てる姿をヴィンセントは見ていた。

だからキアラも、いやむしろ誰よりも先に脱ぎ捨てていると思つていたので。

「…大丈夫です」

「もらい物だからと遠慮しているなら気にするな。さほど高い物ではない」

「でもせっかくヴィンセント様に貰つたのに、無くしたらいやです」

呟かれた言葉に、ヴィンセントは頬を打たれたような衝撃を受けた。

ドレスと靴を試着していた時の嫌がりようは正直傷つくほどで、もう少しくらい喜んで欲しいと思つていたので。しかしどうやら、あれは照れ隠しだったらしい。

「あとその、ドレスも破つちゃつてすいませんでした」

「かまわない。それに、乱れた姿もなかなか素敵だ」

思わず微笑めば、キアラが顔を真っ赤にしてかけ出した。

やはり時々姿勢を崩すが、そこは騎士なので上手いこと速度だけは落とさない。

器用なんだか不器用なんだかわからない姿に苦笑して、それからヴィンセントはラウンジへと戻った。

「ヴィン、顔がにやけてるけど何があったの？」

目ざとく気付いたアルベールに何でもないと答えて、彼もまた不安げな貴族達に声をかける。

優秀な騎士達が事態を收拾するのはさほど時間がかからないだろう。

ならば彼女たちの仕事を増やさぬようと、ヴィンセントはこんな状況でも酒を飲み続ける貴族達を静かに監視した。

## Episode 10 - 1 一夜が明けて

舞踏会の騒ぎから一夜が明けた朝、カルチヨ・ストーリコの決勝戦を4時間後に控えたフロレンティアは、すでに例年以上の盛り上がりを見せていた。

舞踏会の騒ぎは、フロレンティアで発行されている新聞各紙を大いににぎわせ、特に事件の解決に尽力した王子と騎士の注目は更に高まっていた。

是非決勝戦でも彼らの活躍を見たいと願う人々で、この時間から当日券売り場には人が列をなしている。

また試合中継が見られるバルやカフェには既に多くの人々が詰めかけ、大繁盛のようだった。

朝が遅いフロレンティア人が、こうも早くから活動的になるのは珍しいこと。

だがその一方、活動的になりすぎた人々の起こす騒ぎで、騎士団は早朝からてんやわんやだった。

「ああもう！ こっちは一睡もしてないのに！」  
隊室に設置されたスピーカーから流れる出勤要請に、耳を塞ぎながら机でぐったりしているのはレナス。

さすがにドレスは脱いだが、家にも帰れず風呂にも入れてないの  
で、髪と肌は荒れている。

それは周りの騎士達も同じで、こんな事なら美容院でセット何てするんじゃないかと、整髪料などで硬くなった髪に悲鳴を上げている者も多い。

「あと1時間でシフトが終わります、それまでは頑張りましょう」  
疲れ果てている一同に声をかけたのはキアラ。それから彼女は、さり気なく傷を押さえているレナスに気付く。

「少し休んでもかまいませんよ。傷、痛むんでしょ？」

「痛いからこそよ。何かしてないと気が紛れないし」

そう言って微笑んだ瞬間、今度は慌ただしい足音が隊室へと飛び込んでくる。

「レナスさん！」

そう言って飛び込んできたのはアルベル。

また面倒ごとかと身構えたその直後、アルベルは彼女の腕を取った。

「結婚してください！」

どよめきと呆れ、そしてレナスがアルベルの頭を叩く音が隊室には響く。

「優勝はどこ行った」

「もうしたんだ……」

不本意そうなその言葉に首をかしげれば、アルベルから僅かに遅れヴィンセントとヒューズが顔を出す。

「ねえ、こいつに求婚されたんだけど」

不満げなレナスに、昨日の事件の顛末は知っているかと尋ねたのはヒューズだ。

会場の警備で手一杯だった第4小隊及び第5小隊に変わり、調査と取り調べを行ったのは応援で呼ばれた別の騎士達だった。しかし同じガリレオの騎士であることもあり、事件の真相は耳に入っている。

聞くによると、どうやら昨日彼女たちを襲った男たちは真正正銘の暗殺者。人殺しを生業とするマフィア崩れの男たちであつたらしい。

そしてそれを雇ったのは、なんと本日アルベルたちと対戦するサンタ・マリア・ノヴェツラ地区の監督だと言うのだ。

何でも、騎士相手に勝てる見込みがないと思った監督は、騎士と張り合える強者を別に手配し、舞踏会に潜入させる計画を思いついたらしい。

武道家の集団、剣術学校の生徒などを当たろうとしていたところ、彼は酒場であるとある貼り紙を見つけてしまった。

「荒事引き受けます」と文字と、その内容は問わないと書かれたその張り紙に、監督は一も二もなく飛びついた。

そして喜び勇んで金を払い、舞踏会に招き入れてようやく彼は氣付いたのだ。相手がその道のプロであったことに。

暗殺者だとわかった瞬間こわくなり、止めることも出来なかったのだろう。

騎士達が調査を始めるやいなや、泣きながら謝りだしたというので大きな罪には問われならしいが、それでもお咎め無しとは行かなかったようだ。

「荒っぽいが、カルチヨ・ストリコは国の行事だからな。このまま続行するわけにはいかないと運営が決めたらしい」

ヒューズという言葉に第4小隊の一同が息をのめば、彼は静かに告げた。

「発表はこれからだが、多分決勝戦は中止。うちのチームの不戦勝という形になるらしい」

不戦勝でも優勝ですよ、と言いつつどことなく焦点が定まっていないアルベル。

多分決勝戦が無くなったことが相当ショックだったと見える。というかショックでちよつと壊れている気もする。

でも正直、レナスの心配はアルベルよりも他の所にあった。

「チケット、払い戻しあるの？」

「そこなの！」

とアルベルは泣きついたが、それを考えていたのは皆同じだった。

「覚えてない？ 一昨年の決勝戦も、舞踏会でおきた不祥事で取りやめになったじゃない。おかげで翌日は大荒れだったのよ」

アルベルは覚えないうのだが、チケットの払い戻しがないことに怒った人々が会場に詰めかけ、酷い騒ぎが起こったのだ。

「その上今年はある等の人気に便乗して、立ち見席までガンガン出してたしね」

そして裏では通常の2倍以上でチケットが取引されていたという噂もある。

「残念ながら、払い戻しは行わないそうです」

静か告げたのはヴィンセント。その言葉に騎士達はギャーと叫びを上げた。

これはもう当分帰れない。帰れたとしても生傷の一つや二つではすまされない。

一 昨年の地獄を経験した者が多い第4小隊では、殆どの騎士が神に祈りを捧げ始めていた。

「さすがにガラハドの方からも騎士を出す手はずを整えています、荒れるでしょうね」

「お互い生きて明日を迎えられればいいわね」

「生存率を上げるコツは？」

「運かしら」

力無く笑うレナスに、ヴィンセントも苦笑するほか無い。

「とりあえず、アルベルも告白してすっきりしたようなので連れて帰ります」

「待つてよ、僕まだ答えを聞いてない」

「生きて帰ってこれたらね」

と笑えば、それまでのだらしなさは嘘のようにアルベルがしゃきつと歩き出す。

「行こうヴィン。僕たちの力で1秒でも早く騒ぎを静めよう」

出て行く二人の背を見送りながら、ヒューズがちらりとレナスを見る。

「戦地へ赴く前に恋人と約束した奴って、大抵帰ってこれないよな」

「恋人じゃないし」

「そう言う問題じゃねえだろう」

呆れつつ、ヒューズはレナスの傷を見る。緩んだ包帯を見れば、

昨晚治療を受けてからアレッシオの元に行っていないのは明らかだ。

「今のうちにアレッシオの所いっとくか。当分戻ってこれなくなる

だろうし」

「ついでてきてくれるの？」

思わず息をのんだのはレナス。その前で、ヒューズが僅かに目を伏せた。

「やっぱり、俺はいらんかい？」

甘えないと宣言したことを、やはり彼は覚えているのだとレナスは気付く。

今更ながらにあんな事を言うんじゃないかと彼女は後悔したが、しかし上手く撤回する方法も見つからない。

だがアレッシオからは、少なくとも1週間、毎日治療が必要だと言われた。

その間、ヒューズ無しで乗り切れる自身は到底無い。

ここが素直になり時かと、アレッシオの言葉を思い出し、レナスはヒューズの手を掴んだ。

「あれ…延期してもいい？」

「延期ってお前…」

「今はまだ、無理みたいで」

今言えるのはこれくらいが精一杯。しかし掴まれた腕を彼はふりほどかなかった。

「初めから、お前を一人にする気なんて無かったんだ。だから好き  
なだけ、こき使えよ」

いつもとは違い、先に歩き出したのはヒューズ、それ追うようにしてレナスが隊室から出て行くと、騎士達が顔を見合わせる。

「あれはついに、レナス隊長自覚したんじゃない？」

「いつまで待たせるのって感じよねえ」

「でもヒューズ隊長は気付いてるのかしら？」

「すぐ気付くわよ。うちの隊長、恋心を隠せるほど器用じゃないし」

「じゃあ、祝いの酒でも買ときましようか」

そう言って喜び合う騎士達は、もうずいぶん前から二人の絆の行き着く先を知っている。

むしろ騎士団内で気付いていないのは当人達くらい物だ。

「何とか今日を乗りきって、二人で花火を見に行けると良いですね」  
毎年、カルチヨ・ストーリコの最終日の夜は、アルノ川の上に大輪の花火が咲き乱れる。それを恋人同士で見ると未永く幸せになれるという伝説があり、願わくば隊長の恋が今度こそ叶うようにと、キアラは思わず祈った。

まあ残念ながら、カルチヨ・ストーリコの夜はそこまで甘くはないのだが。

## Episode 10 - 2 告白は花火の下で

空気をふるわせる低い破裂音にレナスが気付いたのは、酒場で喧嘩をしていた酔っ払いを投げ飛ばしたときだった。

話を聞かない上に、こちらへと殴りかかった来たので仕方なく応戦したが、どうやら勢いがつきすぎたらしく、相手の意識は完全に飛んでいる。

とりあえず大事がないことを確認し、それから同行していた部下に騎士団へと運ばせてレナスは一息ついた。

「花火始まつちやいましたね」

ここからよく見えないが、赤い瓦屋根を彩る光と低い音、そして花火を見ようとかけていく人々の姿に、レナスは部下と共に肩を落としました。

「いつになったら静かになるのかしらね」

「花火の最中は割と静かだと思えますけど」

確かに騒ぎの報告は少なくなっている。しかし終わればまた、人々は酒場に戻っていくことだろう。

払い戻しの騒ぎはようやく一段落したが、酒が入れば喧嘩も増える。夜はまだまだこれからだ。

「じゃあ今のうちに休憩取っちゃいましょうか」

かれこれ8時間も働きづめで、これ以上の激務は致命的な怪我に繋がりがかねない。

とりあえず1時間後にヴェッキオ橋のたもとに再集合と言うことになり、部下達は一度騎士団へ、レナスは一人側のバールへと向かった。

騎士団でゆっくりしても良いのだが、もう三時間ほど前から空腹で死にそうだったのだ。

なのでパニーニとカツフェを買い、せっかくだからと花火の見える場所へレナスは移動する。

花火が上がる川沿いはさすがに人で込んでいたので、少し離れた場所にある噴水広場にレナスは陣取った。

アルノ川から遠いその広場は、花火が上がる方向に建物がないので、ヘタに近づくよりも花火がよく見えるのだ。その上人も殆どいないので、噴水前のベンチに腰を下ろし、ゆっくりパニーニにありつくことも出来る。

穴場なんだと、この場所を覚えてくれたのはたしかヒューズだ。

あのときはたまたま巡回途中で一緒にになり、せっかくだからと二人で花火を見上げた。

仕事だだというのにレナスがピザと酒を買い込み、それがあとでばれて上司にこっぴどく叱られたのは良い思い出である。

懐かしいなと思う反面、何故だかちょっと切なさを感じていると、唐突にレナスの肩が叩かれた。

見えない側だったので慌ててそちらを向けば、そこにいたのはアルベールだった。

一瞬ヒューズかと期待したのは絶対に言えないが、慌てて貼り付けた笑みに彼は違和感を感じたようだ。

「僕でがっかりしました？」

「驚いたのよ。まだ右側の感覚つかめないから」

言いながら、誤魔化しもかねてアルベールにパニーニを半分分けやる。

「れ、レナスさんと半分こ！」

「どうせまだご飯食べてないでしょ？」

食べるのが勿体ないと本気で感動しているアルベールに、レナスはあきれ果てる。

「そっちも休憩？」

「もう終わりです。うちの騎士団撤収早くて」

確かにいつの間にか、ガラハドの騎士を見かけなくなっている。まだまだこれから忙しくなるのにと苛立てば、アルベールが慌ててフォローに走った。

「でもうちの隊はまだまだ働きますよ！ 僕も、まだ帰らないですし」

「というか、是非レナスさんのお手伝いをしたいと思い、街中探し回ってました！ と明け透けもなく言うアルベールに、レナスは思わず感心する。

「あんたってたまに凄い行動力を発揮するわよね」

「たまにって…」

「いや基本的に臆病でウツカリでそそっかしいんだけど、自分の心に素直に従うところは正直尊敬するわ」

「褒めてませんよね」

「褒めてるわよ、その素直さが羨ましい」

失敗を恐れるよりも、成功を信じるその強さは羨ましい。レナスも無鉄砲さには定評があるが、恋に置いては彼のような行動力を発揮できないことが多いのだ。

「そう言えば、今日は失敗しなかった？」

「怪我はたくさんしましたけどね」

昨日の今日で失敗したらそれはそれで問題だろうと思ったが、褒めて褒めると子犬のように寄ってくるアルベールに、とりあえずよしよしと頭を撫でてやる。

「じゃあ朝の答え、発表しようか」

途端に、アルベールの顔が凍り付いた。

「あの、すいません。朝のは無しで」

ちよつと混乱してたのと言つて、アルベールは手にしていたパニ二を大急ぎで頬張る。

それから彼は必死になつてそれを咀嚼し、手も口も開いたところで胸のポケットから小箱を取り出した。

「母の形見なんですけど、是非あなたに受け取って欲しいんです」

レナスの前に膝をつき、小箱を開けるアルベール。

中に入っていたのは、貴族でさえ手に入れるのが困難な、大きなダイヤの指輪だった。

それにレナスは息をのむ。

告白をされるとは思っていた。でもこんなにも本格的で、そしてこんなにも大事な物を自分にくれようとしているとは思っていないかったのだ。

「今まで、あなたのこと蔑ろにしすぎてた。本当にごめんね」

レナスの声に、アルベールの顔が輝く。

「だからここからは、本気の気持ちだから」

真剣な目でアルベールを見つめ、そしてレナスは、開かれた小箱を静かに閉じた。

「あなたの気持ちは嬉しい。だけど、他に好きな人がいるの」

閉じられた小箱を、アルベールが静かに胸に抱く。

「あなたとつきあってた頃はね、こういう指輪が凄く欲しかったの。目の前で膝をついてプロポーズされたら、すぐ頷けると思ってた」

「でも今は違うんだね」

そう答えるアルベールの顔は、レナスの予想に反し、酷く穏やかだった。

「誰でもいいわけじゃないって気付いたの」

むしろ指輪なんてなくて良い。好きと言ってくれるなら、プロポーズの仕方など問題ではない。

ただ、側にいられるならそれで良い。そう思える相手こそ、自分が結婚すべき相手なのだ。彼女は気付いてしまった。そしてその存在が、誰よりも側にいることも。

「ごめんね」

「いいんだ。本当はもう、わかってたから」

小箱をポケットに戻して、それからアルベールはようやく残念そうな顔をした。

「パニーニ、もっと味わっとけば良かったなあ」

「いくらでも奢ってあげるわよ」

「…半分こがいいんだよ」

「してあげるわよそれくらい」

「彼氏じゃなくても？」

「割と誰でもするけど」

告白を断ったときよりもショックだったのか、アルベールは頭を抱えてうなだれる。

「ちなみにさ、レナスさんの中で僕の立ち位置って何処？」

友達か、親友か、元彼か、戦友か。

尋ねられた答えに、レナスは頭を捻る。

「昔の私、が一番近いかなあ」

「なにそれ」

「あんたのその未熟で無鉄砲で失敗だらけな所、騎士団に入った当時の私にそっくりなのよね」

ヒューズにもそんなことを言われたなど、アルベールはふと思い出す。

「正直自分の黒い歴史を見ているようで凄く恥ずかしいんだけど、でも放っておけないのよねえ」

「見えて恥ずかしいんだ、僕」

「自覚ないの？」

と尋ねつつ、自分で自分が恥ずかしいと思えるようになったのは最近だったと気付く。

「私の場合、それを矯正してくれたのはヒューズでさ。そう言うのが側にいた良さを知っていると、やっぱり何かしてあげたいって思うのよ」

言うほど自分も成長していないけれど、でも自分が学んだことを何かひとつでもアルベールに教えられたらと、勝手にレナスは思ってしまうのだ。

「正直不快だったら言ってね。その気もないのに元彼にお節介焼くとか、正直どうかと思うし」

「そんなことないよ。フラれたけど、レナスさんとはこれから一緒にいたいって思うんだ」

こんな人は初めてだよと微笑むアルベール。その笑顔に救われ、

レナスは手に持っていたパニーニを更に二つに割り、それをアルベールに手渡す。

「今度は僕がパニーニ奢るから、これからも色々教えてね」

「剣の使い方とかね」

うつと喉を詰まらせるアルベールにレナスは笑う。

「責める気はないけど、一度見つけた弱みは二度と放さないわよ」

意地悪く笑うレナスに情けない悲鳴を上げるアルベール。

だが一方で、素敵な女友達が出来たことを、彼は心の底から嬉しく思っていた。

花火がおわり、ようやく人が少なくなってきたヴェッキオ橋を、レナスがぶらついていたのは集合時間の10分前。

集合場所にはまだ誰も現れず、アルベルもトイレに行くところに入ってしまったので、レナスは一人暇をもてあましていた。

彼女が覗いているのはヴェッキオ橋の上に並ぶ宝飾店。

先ほどアルベルが見せた指輪はどれくらいするのだろうかと思いい、比較できそうな物を探すがさすがにあれほどのダイヤはない。

だがその半分くらいの物で桁がおかしい指輪があり、今更のように彼は王子なのだと再確認する。

でも惜しいと思う気持ちはない。きっと安物でも、好きな相手に貰った指輪の方が自分には似合っていると思うからだ。

そしてもしも、もしも貰えるとしたらどれがいいだろう。

そんな子どものような妄想をふくらませつつ、レナスはショーウインドウをのぞき込んだ。

やっぱり欲しいのはダイヤ。でも二人でそろって付けるタイプの婚約指輪フェデーナも良いなとレナスは思う。

フロレンティアでは婚約から結婚までの期間がながいのが普通。故に結婚指輪フェデーによく似たシンプルな指輪を送りあう事が多いのだ。

まあ時期が時期なので婚約よりさっさと結婚したいというのが本音だが、もしも彼が自分の想いに気付いてくれるなら、急ぐのも勿体ない気もする。

「……って、何を考えているんだ私は」

ふと我に返り、レナスは恥ずかしさに呻いた。

26の女の妄想するには、あまりに幼すぎる妄想だ。その上勿論予定などにもないのだ。

しかしわかっていても、ショーウインドウから目を離せないのがまた悔しい。

「欲しいなあ指輪」

「どれが？」

「あの奥のとか」

思わず答えて、そしてレナスは動きを止める。

今の声は部下の物ではない。アルベールの物ではない。むしろ妄想の中の声に近い。

恐る恐る横を見て、そしてレナスは思わず相手を殴り飛ばしていた。

「何でいるのよ！」

「それは俺の台詞だ。まだ仕事だろお前」

「今休憩中だもん」

「つか、いきなり人の顔見て殴るか普通」

「だって妄想に割り込んでくるから！」

妄想つて何だと呻きつつ、ヒューズは彼女の覗いていたショーウインドウを見つめる。

「こんなのより凄い指輪を、アルベールが渡しに行っただろう」

「知ってたの？」

「この1週間、ことあるごとに自慢されたからな」

そのたびに呆れていたのだろうなと思いつつ、他に何か思うところはなかったのだろうかと探ってみた物の、彼の表情に特に変化はない。

「で、あの指輪はどうしたんだ？」

「貰わなかった」

「それで、代わりに自分で買うのか？」

直後、レナスがヒューズをもう一度殴る。

「そんな悲しい事しない！」

「でもお前、凄い物欲しそうに見てたぞ」

「そりゃ欲しいもの！」

「ちなみにどれだ」

「あの奥のとか」

「また高いのを…」

「別に、貰えるなら何でも良いんだけど！」

引かれたらまずいと、慌ててフォローに走るレナス。

「あとはあの、右のとか」

「ゴテゴテしすぎてないか？」

「じゃあ、左の」

「裝飾派手だろう」

「じゃその下は？」

「お前の太い指じゃな」

気がつけばまた、腕が出ていた。

「否定ばかりしないですよ！」

「お前、自分に似合う物全然わかってないよな」

ドレスも酷かったと呆れられ、レナスはふくれ面で必死に自分に似合いそうな指輪を探す。

しかし目につくのは、無駄に裝飾過多でキラキラしたデザインばかりだ。

「あの左上のとかどうかかな？」

答えはため息。

やはりまたダメだと落ち込めば、ヒューズがレナスの頭を掴み、僅かに右に動かした。

「そのもう一個右のやつ」

されるがままに視線を右にずらし、レナスは息をのんだ。

「あれ、凄くいい！」

値段は張るが、あれならばきつと自分の指にあう。

そしてなによりデザインもレナスの好みをばっちり掴んでいる。

「あんな指輪見つけちゃったら、もう他の指輪貰えないな」

思わず呟いて、レナスは自分の左手の薬指に目を落とした。

あの指輪がここにあったらどんなに素敵か。そしてそれをはめてくれる人が隣の男であつたらどんなに良いかと想像し、そしてレナスはため息をこぼす。

それはありえないとわかっていた。

でも一方で、素直に諦めるといふ行為は酷く難しい。

『指輪でもねだってみたら？』

そんなアレツシオの言葉を思い出し、レナスは静かに息を吐く。

頼むだけならタダかも知れない。いざとなったら誤魔化せばいい。突飛な我が儘をヒューズに叩き付けるのは良くあることだし、それを笑い飛ばすだけの余裕が彼にはあるはずだ。

そう念じながら、レナスは恐る恐るヒューズを見上げる。

「あのさ…」

「ん？」

「あれ、欲しいって言ったらどうする？」

彼が見つけた指輪を指せば、ヒューズが浮かべたのは苦笑だ。

「あれ、結婚前に買う婚約指輪フエデーナだぞ」

「うん、まあ、そうなんですけど」

「俺から貰ってどうするんだよ」

「は、はめるつもりだけど」

「はめる？」

「うん、ここに」

薬指をさして、そこで初めてヒューズの様子が変わった。

「……俺が買った指輪だぞ」

それをはめるのかと聞かれて、レナスはこくりと頷いた。

「あれだったら、はめる」

我ながら歯切れが悪い言い方だと思った。でもこれなら断られても傷つかずにすむ。

そんなぎりぎりの線引きでひねり出した言葉に、ヒューズはため息でこたえた。

さすがに呆れられたかと思い、レナスはそっとショーウィンドウから離れる。

だがヒューズは、まだ指輪を見ていた。

「返品はできないからな」

耳を疑った。しかし聞き返す間もなく、ヒューズがふらりと店に入っていく。

ぽつんと一人残されて、そしてレナスはようやく悲鳴を上げた。欲しかったのは事実だ。でもまさか彼が本気で買いに行くなんて思ってもみなかったのだ。

恐る恐る店内をのぞき込むが、商品棚の所為でヒューズの姿は見えない。しかし先ほどの指輪をショーケースから出す店主と目があえば、おめでとうございますと彼は微笑んでいる。

『案外ぽろっとお金出すかも』なんて笑っていたアレッシオも、まさかこれを予想していたわけはあるまい。

しかしそこまで予知出来るなら何かしらのアドバイスは貰えるかもと、レナスは彼の持つ通信機の周波数に自分の通信機をあわせた。もはや自分一人でこの状況を理解し、乗り切る自身がなかったのだ。「アレッシオどうしよう！ あんたの言うとおりにしたら、ヒューズがホントに指輪買いに行っちゃった！」

思わずそう叫ぶと、何故だか長い沈黙が続く。

確かに通信は繋がったはず。なのにあのお喋りな男が食いついてこないのは変だ。

故障でもしたのかと通信機を外そうとしたとき、店に入ったはずのヒューズがふらりと出てくる。

「…お前回線間違えてる」

告げられた一言に、ようやく聞こえてきたのは騎士達の爆笑だった。

どうやら周波数をあわせるつもりで、うっかり騎士全員に繋がる非常回線ボタンを押していたらしい。

「両思いおめでとう」

と口々に言われ、レナスはその場につくりと膝をついた。

そしてすぐに場所まで特定され、通りかかった騎士達がおめでとうおめでとうと微笑みかけてくる。

「…アホか」

そう言ってレナスの頭を軽く叩き、ヒューズが彼女を立たせる。

「だって、あの…」

「お前より俺の方がからかわれるんだからな」

「ごめん」

とうなだれた次の瞬間、ヒューズがレナスの左手を取った。

「だから、もし無くしたら本気で怒るぞ」

アルベールの時の方がよっぽど夢に見たシチュエーションに近かった。

しかし薬指にその指輪がはまった途端、レナスの目からこぼれたのは涙だった。

「これ、一生付けてていい？」

「その答えは、回線切ってからな」

ヒューズは彼らしい苦笑を浮かべ、レナスの耳から優しく通信機を外した。

「ヒューズ、僕今日これからレナスさんと映画に行くんだ」

「何見るんだ」

「レナスさんが見たがってたホラー映画！」

「あれ相当怖いらしいな」

「僕、ホラー映画って少し苦手なんだよね」

「あいつも恐がりだから、気にしなくても良いだろ」

書類から顔も上げずに言い切るヒューズ。

もちろんそれはアルベルが聞きたい言葉ではなく、ついに彼は怒り出す。

「って、だからそういう話じゃない！ 僕、レナスさんと映画に行くだよ」

「なんだよ、また俺に金だせつてのかわよ」

そこでようやくヒューズが手元の書類から顔を上げる。

そしてその前にあるのは、勿論アルベルの不満そうな顔だ。

「あのさ、先週と反応が全く同じなんだけど」

「だってまだ給料日前だし」

だからそう言う事じゃないと、アルベルがヒューズを睨む。

「いいの？ 自分の彼女が違う男と映画に行くんだよ」

「俺仕事あるし」

「邪魔するとか嫌がるとかすればいいじゃない」

「あいつの邪魔を俺が出来ると思うのか？」

思わない。思わないが、それでも納得できないのはヒューズがあまりにも以前と変わらないからだ。

彼がレナスに指輪を贈ったことはアルベルも聞いていた。二人の思いには気がついていたが、正直あまりの急展開にさすがに驚きを隠せなかった。

しかし実際会ってみると、二人の様子は前と変わらない。

レナスを映画に誘えば「いいよ」の一言だし、ヒューズに関しては相変わらず反応がぞんざいだ。

あまりに普通すぎる二人に、むしろアルベールの方が不安を感じているくらいである。

「あかさ、上手くいったんだよね」

「そう言うのはレナスに聞け」

「レナスさんが喋らないからこっちに来たんだよ」

詰め寄るアルベールに、ヒューズが面倒くさそうに頭をかく。

「で、どうなの？ ちゃんと上手くいってるんだよね」

「いつてるんじゃないか？」

「なにそれ！」

「仕方ないだろう。なんか気がついたらそう言うことになっちまって、実感も何もねえし」

アルベールは信じられないと言うが、ヒューズにとってそれ以外の言葉は見つからない。

指輪をねだられて、それを薬指にはめると言ったレナスの言葉を聞いた瞬間、ヒューズの中にあつた躊躇いは、嘘のように消え失せていた。というより、何も考えられなくなったという方が正しいだろう。

気がつけば彼は指輪を握りしめていて、我に返ったときにはレナスのドジの所為で後にすら引けなくなっていた。

「あれからデートとかしてないの？」

「仕事が忙しくてな」

アルベールに振りまわされた一週間のお陰でたまりにたまつた仕事は、今日明日で片付く物ではない。

それでも勿論昼と一緒に食べたりはするが、そこで甘い雰囲気になると言うことはない。

「良くも悪くもいつも通りだな」

「それで満足なの？」

「わりと」

あり得ないとアルベールが呆れていると、そこに顔を出したのはレナスである。

「ねえ、映画始まつちゃうよ」

その言葉に既視感を覚えていると、やはり今日もヒューズが財布を差し出した。

「ジェラートも食べていい？」

「食うなっていっても食うだろお前」

やり取りが端的になってはいるが、やはり甘さはない。

まるで熟年の夫婦のようだと思って、そしてアルベールは気がついた。

もうずっと前から、この二人は家族にも等しい間柄だったのだ。

側にいるのが当たり前で、だから今更それに困惑したり、胸を高鳴らせたりはしないのだろう。

「行こうアルベール」

相変わらず強引なレナスに、アルベールは引きずられるようにして部屋を出て行く。

だが部屋を出る直前、ヒューズが静かにこちらを見た。

「……あまり遅くなるなよ」

ぼつりとこぼしたその言葉に満ちていたのは、暖かな優しさと僅かな嫉妬心だ。

実感がないなんて嘘じゃないかと、アルベールは思わず苦笑した。そして同時に、彼は嬉しそうに微笑んでいるレナスにも気付く。

「レナスさん、やっぱり今日は映画じゃなくて食事しようか」

「いいけど、どうしたの？」

「映画、本当はヒューズと一緒に見たいんじゃないかと思って」

笑顔でそう言うと、レナスが胸のポケットから指輪を取り出し、それを薬指にはめた。

「別に良いのよ。これからもずっと一緒にいるんだから」

それに見たい映画がまだまだあるのと、レナスは笑う。

その笑顔と言葉に、アルベールはやっとな安心する。

わかりにくいだが、二人の絆は確実に形を変えたのだ。今よりも、ずっと良い方向に。

「やっぱり食事にしよう。僕行ってみたいリストランテがあるんだ」  
レナスの手からヒューズの財布を奪い、アルベールは勝ち気に笑う。

「二人が上手くいったのって僕のお陰でしょ？ だから今夜は奢ってよ」

「その分迷惑もかけられたけどね」

でも自分の財布じゃないから良いわと、レナスは笑う。

そんな彼女と肩を組み、アルベールは夜の街へと繰り出す。

今夜は財布が空になるまで食べて飲もう。

軽くなった財布にヒューズは絶望するだろうが、むしろをそれを笑う権利くらいあるはずだと、アルベールは意地悪く笑った。

隊長達の絆編【END】

『奇跡』

いつもは着たまま帰る隊服を鞆にしまい、おめかしをして意気揚々と隊室を出て行く部下達を見つめながら、レナスの脳裏をよぎった言葉はそれだった。

彼女たちの今夜の予定は勿論デート。

ガリレオ騎士団の余り物と称される第4小隊に春が訪れたのは、1週間ほど前、カルチョ・ストーリーコの舞踏会に、警備として参加したのがきっかけだった。

彼女たちの華麗な戦いぶりを見初めた男達の熱烈なアプローチに一人また一人と相手を見つけ、今では隊の殆どが彼氏持ちという状況である。

故に就業時間を迎えるやいなや隊室から人は消え、ただ二人残っているのは隊長のレナスと副隊長のキアラだけだ。

「すみません、私もそろそろ」

そしてその片割れのキアラも、おめかしはしていないがどこかわそわした顔でレナスを向ける。

「今日は帰りが遅くなると思うので、先に寝てて下さい」

「むしろ、あんたはそろそろ朝帰りをしても良い時期だと思うけど？」

真っ赤になつて慌てるキアラに冗談だと笑つて、それからレナスは深く椅子に腰を下ろす。

そうしてついに一人になり、そこでレナスは自分の薬指を見た。「っていうか、これおかしくない？」

恋人を見つけデートに挑む部下達。それを見送る自分の指には、婚約指輪が光っている。

なのに自分には今夜の予定がない。というか、この1週間何のイベントもなかった。

「あいつ、本当にただ買っただけのつもり何じゃ…」

思わず腕を組んだそのとき、開くことがないと思っていた隊室の扉が唐突に開いた。

そこから顔を出したのはレナスの指輪を贈った張本人であるヒューズ。

彼は人気のない隊室を見回し、それから暇そうに座っているレナスに目を向けた。

「どうしたの？」

これはもしかしたらと期待を込めて声を上げれば、ヒューズは書類の束を手に隊室に入ってくる。

その時点で既に嫌な予感がしたが、それでもと身構えればヒューズが怪訝な顔でレナスを見下ろした。

「お前なあ、いい加減報告書くらいちゃんと書けよ」

案の定、彼が持つてきたのは仕事の書類らしい。

「そんなことか…」

「そんな事じゃねえだろ！ 支離滅裂だし、字は汚たねえし、サインはねえし！」

「字が汚いのは前からでしょ！」

「開き直るな！ 自覚してるならちゃんと書けちゃんと！」

言いつつ目の前に広げられる書類に、レナスはふくれ面である。

「私もう帰るんだけど」

「とりあえず、中身は直したからサインだけしろ」

「こんなに？」

「たかが一枚だろ、すぐやれ」

「なんか、そう言う気分じゃない」

「お前の所為で残業してる俺に、良くそう言うこと言えるな」

「別に直して何て頼んでないし」

「なら自分でやるのか？」

「やんないけど」

渋々ペンを手に取り、レナスは書類にやる気のない文字でサイン

をいれていく。

「……ねえ」

「今度は何だ？」

「みんなデートに行っちゃった」

「他の奴らはちゃんと仕事してるからな」

そう言う意味じゃないと怒鳴り、レナスは乱暴にサインを書き入れる。

「おかしいと思わないの？」

「何が？」

「周り全員デートなのに、私だけここにいるのよ」

「だから仕事を……」

「あんたが誘わないからでしょうが！」

椅子を倒す勢いで立ち上がり、レナスはヒューズの胸ぐらをつかむ。

「忙しいのは認めるけど、これ貰ったきり一度も恋人っぽい事してない」

薬指を突き出すレナスに、ヒューズが僅かにたじろぐ。

「あんたも明日休みなんですよ！ なら言うこと言いなさいよ！」

半ば脅迫じみた物言いで首を絞められ、ヒューズは息苦しさで咳き込む。

「とりあえず、息が出来ない……」

「んなことより！」

そう怒鳴った直後、ヒューズが言葉を重ねるよりも早く唐突に隊室の扉が開かれる。

「お前等、デートとかする予定ない？」

開かれた扉の向こうから、記念すべき初デートの誘い文句を横取りしたのは、騎士団長のヴィートだった。

Short Episode 01 - 0 望んだ言葉と望まぬ説教（後書き）

こちらは、本編から少し外れたショートエピソードです。

いつも以上にラブコメ度&糖度が高めになる予定ですので、苦手な方はお気をつけ下さい。

メインストーリーとリンクはしていますが、基本的にラブコメ&ギャグですので（本編もギャグですが）、飛ばして頂いても構いません。

気に入ってくださった方は、どうぞお楽しみ下さいませ^^

Short Episode 01 - 1 初デートには裏がある

「カップルばかりを狙う通り魔ねえ」

ヴィートから渡された新聞を読みながら、レナスは不満そうな顔で団長室のソファアーに身を沈める。

「ここ2日で8件も被害が出る上に、どうも様子がおかしくてな。だからここは、うちの最強カップルに囿になって貰おうって思った訳よ」

「色々突っ込みたいところはあるが、とりあえず話だけは聞いてやる」

ヴィートの説明に、呆れつつもそう告げるのは勿論ヒューズだ。

「どの事案も基本的には女性側が小型のナイフで斬りつけられている。傷自体はかすり傷みたいなものだが、何故だか傷つけられた女性達は皆昏睡状態らしい」

「全員か？」

「ああ。命に別状はないらしいが、意識がないまま眠り続けている。まるで眠り姫みたいだとこぼしたのはレナス。彼女は持っていた新聞を畳むと、不満そうな顔でヴィートを見上げる。

「その状況を知っておきながら、あえて私を囿に使うつもり？」

「お前は眠り姫って柄じゃないだろう？ それにお前等がくっついたことは街中の噂になってるし、まさか囿捜査でイチャイチャしているとは思えない」

それでも決めかねていると、ヴィートがさらりと賄賂をちらつかせる。

「引き受けてくれるなら。明日からの休み、3連休にしてやってもいい」

そしてその賄賂に、見事に食いついたのはレナスである。

「明日、正午に指輪買った店の前に集合ね」

「勝手に決めるなよ！」

「ちなみに、デート中の費用は経費で落ちる？」

「飯代くらいはだしてやる」

「聞けよ俺の話！」

「じゃあ明日！」

そういうと、レナスは意気揚々と部屋を出て行く。

「だから聞けって……」

「良いじゃないか、急がしくてデート出来てなかったんだろっ？」

むしろ空気の読める俺を褒めると胸を張るヴィートに、ヒューズは顔をしかめるばかりだ。

「っていうか、今更どうやってデートに誘えばわからないって顔してたじゃないかお前」

「否定はしねえけど」

「もしかして、自分で誘いたかったとか？」

ヒューズの顔をのぞき込むヴィートに苛つきつつも、ここで感情的になったら負けなのはわかってている。

「得体の知れない奴とかち合わせたくねえだけだ。あいつはまだ、片目になれてない」

ヒューズのつぶやきに、ようやくヴィートが真面目な表情に戻る。

「傷、あんまり良くないのか？」

「痛みも長引いてるし、それに視界が悪い生活に相当疲れてるみたいだ。だから今はデートより、ゆっくりさせてやりたかった」

「相変わらず、無駄に気づかい屋だなあお前は」

「無駄は余計だ」

「けどお前が側にいて、レナスが傷つくようなことがあるのか？」

「ない」

言い切るヒューズに、ヴィートは感動したと笑いながら彼の肩を抱く。

「いやー、恋の自覚って甘酸っぱくていいね！」

「お前のそう言うところ、殺したいくらい腹立つ」

「ともかく頼むな！ デートのついでで良いからさ」

ついでで出来る仕事とは思えなかったが、レナス同様この男もまた話を聞かない人間だ。

「善処する」

肩に置かれたままの腕を引きはがし、ヒューズはため息を重ねた。

## Short Episode 02 - 1 変わらぬ二人

昨日レナスの言葉に思わず言い返したのは、別にデートが嫌だったわけではない。

ただ、こうなることがわかっていたからだ。

「……目覚ましくらいかけるよ」

13時の鐘の音を聞きながら、ヒューズが眺めていたのは寝室で爆睡するレナスである。

集合時間になっても来る気配を見せず、電話にもでない彼女を心配して家まで来れば、予想通り彼女はまだ寝ていた。

お互い、カルチョ・ストーリコの事件以来休みもなく、特にレナスは怪我也有り疲れがたまっている様子だった。

そんな彼女がお昼に起きるなんてあり得ない。いつもなら夕方まで寝ているのが普通だ。

それでも仕事が絡んでいるので淡い期待を抱いていたのだが、案の定彼女は爆睡である。

呆れつつレナスに近づいたヒューズは、彼女の側に膝をつきその頬を軽くつねる。

「おい、今何時だと思ってる」

「…あと5分」

「もう1時だぞ」

ヒューズのつぶやきにようやくレナスが目を開け、そして間近に迫るヒューズの顔を殴り飛ばした。

「何でいるのよ!!」

「昨日のことも覚えてないのかお前は!」

「しまった、デート!」

寝癖のついた頭をかきながら、レナスは体を小さくする。

「まあ、予想はしてたから良いけどな」

「ごめん、目覚ましかけたんだけど」

「そこで大破してるのが、もしかして目覚ましか？」

レナスがはたき落としてと思われる時計の残骸を枕元に起き、それからヒューズは髪と共に乱れている顔の包帯に触れる。

「それ直すから、とりあえず着替える」

「実はその、昨日お風呂に入る前に寝ちゃって…」

「そんなことだろうと思ってお湯張ってあるから」

「あ、まずい！ 服！」

「床に落ちてる奴は洗濯機に放り込んだ。渴くまではとりあえず隊服でもきてろ」

「……なんか、ごめん」

「いつものことだろう」

シーツをかぶったまま、ズルズルとベッドから立ち上がるレナス。体を隠しながら風呂場に向かったところ、あられのない格好で寝ている自覚はでてきたようだ。

それに一安心しつつ、ヒューズは荒れ放題の部屋をぐるりと見回す。

とりあえず人の住める部屋にしておかないとまずかろう。

主にレナスが散らかしているのを知っているヒューズは、彼女のいぬ間にと袖をまくった。

居間に戻ると、もはやそこは別世界だった。

傷を庇いながらの入浴はいつもより時間がかかったが、それでも30分ほどで着替えをすませた。

にもかかわらず、居間だけでなく寝室や廊下なども、先ほどの荒れようが嘘のようにきちつと片付いている。

レナスが酔って暴れた所為で傾いていた家具は元の位置に戻され、ゴミや読んだまま放置されていた雑誌類は一所にまとめられ、汚れた食器類は全て流しの中でピカピカになっている。

そしてそれらをたった一人で片づけた男は、洗濯の終わったレナスの衣服を干していた。

いつもながら仕事が速い。そう感心すると同時に、レナスは今更のようにヒューズの服装が普段と違うことに気がついた。

服を選ぶのが面倒だという理由で、たいていの場合ヒューズは休日でも隊服でいることが多い。だが今日は以前レナスが彼の誕生日に送ったステイツ産の黒いデニムにブーツ、そして夏用の白いシャツに薄手の黒いベストという出で立ちだった。

それに気付くと同時に高く跳ねた胸に、レナスは思わず頬を赤らめる。

別に彼の私服を全く見たことがないわけではない。むしろ騎士団にはいるまでは隊服なんてなかったし、今だって時々は見ている。

でも今日の服はデートのための物なのだ。レナスと出かけるために、身だしなみを整えるのが苦手な彼が、私服を選んできてきたのだ。

そんな些細なことが、何故だか凄く嬉しくて。でも一方で、仕事が終わっているからかもしれないという考えも頭をよぎり、レナスは一人葛藤をする。

「おい、髪まだ濡れてるぞ」

だが彼女の苦悩も気づかないヒューズは、いつもの口調でそんな指摘をしてくる。

彼にじっと見られていることに気づいたレナスは、今更のようにだらしない自分の格好を恥ずかしく思った。

その上包帯を取ってしまったので、目の傷も露わになっている。

もう何度も見られている物だけれど、今日だけは、デートの間くらいは一番綺麗な自分を見て欲しいといじましい乙女心が主張する。「大丈夫、すぐ渴くし」

濡れた前髪で傷を隠すレナス。その肩に掛かるタオルを手に取り、ヒューズはレナスの頭にそれを乗せた。もちろんレナスは抵抗しようとしたが、抱え込まれるようにベッドに座らされては手も足も出ない。

「ドライヤー、まだ壊れたままなのか？」

「そうだけど、頭くらい自分で…」

「そう言っただけ風邪を引いた」  
その小言も何度目だろうと唸るレナスの後ろに座り、ヒューズは傷をいたわりながら髪を優しく拭いていく。

これは、意外と恥ずかしい。

タオルの所為で傷と赤く染まった頬を見られないのは良いが、あまりに近いその距離にレナスは悲鳴を上げかける。

今まで何事もなく頭を拭かれていた頃には、もう戻れそうもない。

そして同時に、自分とは逆に躊躇いも見せないヒューズに少しだけがっかりする。

多分彼にとつて、レナスを拭くのも濡れた犬を拭くのもきつと同じだ。

「これくらいか」

「…ありがとう」

「髪とかしてこい、そしたら傷の消毒するから」

「いい、自分でやる」

「出来るのか？」

できない。

でも傷を見られるのも嫌で、レナスは髪をとかすと同時にガーゼで傷口を覆った。

消毒をすませたことにしてとりあえず包帯だけ巻けと迫れば、ヒューズは怪訝そうにしながらも手伝ってくれる。

「そういえば、今日どこに行くんだ？」

包帯を巻きながら尋ねるヒューズ。それにレナスはポカンと口を開ける。

「考えてなかったのか？」

「そっそう言うのはあんたが考えるべきでしょう！」

図星を指されて意地になれば、ヒューズは苦笑する。

「考えてはあるけど、啖呵切ってたから行きたい場所でもあるのか」と

ある、と言う言葉に内心ガツツポーズをしたのは勿論秘密だ。

「あんたが考えた場所で良い」

表面上は不満な顔を取り繕って言えば、ヒューズがズボンのポケットからフロレンティアの地図を取り出す。

「通り魔が出る場所にチェック入れてきたんだ。見たところ同じ場所で行犯に及ぶ傾向があるようだから、そこをメインに回ろうと思う」

取り繕うための不満な表情が、本物の不満に変わった。

「それ、本気？」

「疲れも取れてないだろうし、少しでも効率的に回った方が良さだろうと思うて」

「それ、本気？」

2度目の問いかけに、ようやくヒューズは自分が地雷の上に足を乗せていることに気がついた。

「他に行きたい場所があれば、勿論そこも寄るけど」

その提案は逆効果でしかなかった。

「私はデートがしたいの！」

「わかってるって」

「わかってない、全然わかってない！」

ヒューズから腕を放し、レナスは膝を抱えて彼に背を向ける。子どものように拗ねることしかできない自分がまた悔しくて、そしてそれを見つめるヒューズはきつと親のような顔をしているのだろうと想像して、レナスは更に機嫌を悪くした。

この1週間、恋人らしいことをヒューズがしたことは一度もなかった。正直レナスも彼との接し方をどう変化させれば良いかわからないところはあった。

でも二人きりになればもう少し良い雰囲気になると思ったし、ヒューズとならそうなっても良いと思ったのだ。

けれど彼は何も変わらない。服は違うが、レナスへの態度も言葉もいつもの彼のままだ。

意識しているのは自分の方だけなのだというのがたまらなく悔しい。

確かに指輪をねだったのは唐突だったが、買ってくれたからには自分の恋人になりたいという思いがあると思っていた。だがもしかしたら、彼はただレナスがほしがった物を与えただけのつもりなのかも知れない。

一度後ろ向きになった考えはどんどん暗い方向に走り、悔しい気持ちは悲しい気持ちへと繋がっていく。

泣きそうになっている自分に気付いて、レナスは慌てて肩にかけられたままのタオルを引き上げようとしたり。

「悪かった、気が利かなくて」

だがその腕を、ヒューズが優しく取る。

ただそれだけで体が熱を持ち、レナスは思わず悲鳴を上げかける。それと同時に降りてきたのは、ヒューズの唇だ。

額だったのは少々不満だが、それでも彼がただ仕事でここに来ているのではないと気付くには十分だった。

恐る恐る顔を上げて、そしてレナスは本音をこぼす。

「仕事もちゃんとやる。でも初めてのデートだから、仕事に全部持って行かれない」

「わかってる、俺も言い方がまずかった」

言いながら、ヒューズが先ほどの地図をもう一度差し出す。それから彼は、酷く歯切れの悪い声でもう一度検討して欲しいとレナスに懇願する。

「一応、通り魔が出た場所の他にいくつか、お前が行きたがってた店もかいてあるから」

地図を覗き込んで、そしてレナスは息を呑む。

「仕事中や二人の時に、独り言のように「あそこにいきたい」「ここで食事がしてみたい」とこぼした言葉を、ヒューズはしっかりと拾っていたのだ。

通り魔が出るのは街の中心地と、デートスポットであるミケランジェロ広場付近が多いので、その周辺の店に限定しているが、それでもその地図はレナスの望みを的確に押さえている。

「これヒューズが自分で作ったの」

「一応」

「デートコースって言うか、巡回コースみたいな書き方ね」

「仕方ねえだろ、デートコースの組み方なん知らねえし」

歯切れが悪いのは照れているからなのだろう。確かにヒューズはこの手のことが得意なタイプではない。

「でもその割には押さえるべきポイントはバッチリじゃない」

「デート自体は仕事とで何度かしたことはある。…ただ、お前と行くとなるとな」

「なんで私じゃダメなのよ!」

やはり恋人だと思われていないのかと不安になれば、それに気付いたヒューズがレナスの頭を優しく撫でる。

「この気持ちは一生言わないつもりだったんだ。だから付き合い合ったらどうするとか、ましてやデートに行くなんて考えたこともなくてな」

正直どうすればいいかわからない。

そう言うヒューズは本当に困った顔で。でもそれは決して、見ていて不快になる物ではなかった。

「前から思ってたけど、ヒューズはもつと我が儘になるべきね」

「そう言われても、お前の側にいられば割と満足って言うか…」

「もしかして、手も出したくないとかじゃないでしょうね！」

筋肉の多い所為で人より色気がないと思っっているレナスは、思わず声を荒げてしまう。

「もしそうだったら服を着ると口を酸っぱくして言わん」

と言うことは、一応女としては見ていてくれていたようだ。思わずホツとすると同時に、レナスは思わず顔を赤らめる。

「その割には二人きりで何もしないし…」

「襲ってほしいのかお前」

その言葉に思わず距離を取れば、ヒューズは呆れ顔だ。

「自分で誘っておいて、そんなに嫌がるなよ」

「だって突然だから」

「お前が嫌ならするつもりはねえし、体調が万全じゃない女を襲ったりもしねえよ」

と言うことは今日は何もしないつもりなのだろう。

それをなんだか残念だと思ってしまった自分に気付き、レナスは内心ギャーと悲鳴をあげた。

いつもなら、その手のことは考えるどころか頭をよぎることさえほとんど無い。

デートをして、手を繋いで、キスを貰えばそれで満足していたのだ。正確にはその先を望めば否応にも腹筋をさらさなければならぬので、考えること自体勇気がいったのだ。

「どうしよう、私上手くないのに…」

「おい、考えがだだ漏れだぞ」

それにまた悲鳴を上げれば、ヒューズはいつもの呆れ顔だ。

「とりあえず外に行こう。俺だって生物学上は雄だ、そんな露骨に

誘われたらもたん」

「誘ってない！」

「なら服を着替える。その格好は目に毒だ」

言われるがまま体に目を向けると、止め方が悪かったのか胸元がいつもより広く開いている。

その上先ほどまでは濡れたタオルを肩にかけていた所為で、肩から胸の辺りがしめっており、そこだけ肌が透けてしまっていた。

先ほどからヒューズが視線をそらすことが多かったのは、多分この所為だ。

「きつ着替えるからまってて」

「わかった、居間の方にいる」

素直に頷いて、そしてレナスはクローゼットを開いて、そして絶句した。

「お前、そこにも服ため込んだのか」

出かけようの衣服は洗濯した物としていない物がごちゃ混ぜになり、もはやきれる物がどれだかわからない。

「さ、最近デートしてなかったから！」

そして家にいるときはロクに服を着ていなかったからと慌てるレナス。

結局その中の服も全て洗濯する羽目になり、初デートは更に遅れる羽目になった。

レストランで食事をするには時間が遅くなってしまったので、二人が立ち寄ったのは手軽に食事を済ますことの出来るパニーニの専門店だった。

『ワインの家』という名のその店は、この国の建国当時がある老舗で、オーダーメイドのパニーニと味の良いワインを提供するので有名だ。

多種多様な食材とパンを自分で選び、その日の気分にあったパニーニを頼まれるその店は、提供するワインのセンスの良さと相まって、地元民から観光客まで様々な人で賑わう。

デートの場所にはいささか不向きではあるが、日頃この店を愛用している二人にとっては落ち着ける場所である。

レナスは茹でたトリッパ（牛の第2小腸をハーブ湯で煮た物）に新鮮な野菜とピリ辛ソースをまぶしたチーズ入りのパニーニを。

ヒューズはローストしたプロシユートと生野菜が豊富なパニーニを選ぶ。

あわせてワインをグラスで頼み、奥のカウンター席に腰掛けると二人は早速パニーニにかぶりついた。

「なんか、いつものお昼と変わらないわね」

「そう言いつつ、ここを選んだのはお前だろう」

「まあそれはそうなんだけど」

唸るレナス。そんな彼女の頬についたソースに、ヒューズが指を伸ばしたのもいつものことだ。

「女らしく食えよ」

「こついうのは一気に頬張るのが美味しいの」

だからって口に入れすぎだろうと、呆れたヒューズが指に付いたソースを嘗め取った途端、レナスが唐突にむせる。

「口に入れすぎだって言ったる」

「だってあんたが…」

何かしただろうかヒューズが首をかしげれば、レナスは何でもないと呻く。

「…あのさ、そう言うのって誰にでもやる訳じゃないわよね」

「そう言うの？」

「ソースなめたりとか」

指摘された内容を理解した時も、ヒューズはさして取り乱さない。

「そう言う意地汚い食い方するのはお前くらいだし」

「もういい！」

口を押さえるレナスに苦笑し、ヒューズはワインを煽る。

「あんたの方が、もっとどきまぎすると思ったのに」

「ん？」

「どうすればいいかわからないって言ってた癖に、デート慣れしてる感じが腹立つ」

苛立ちを素直に言葉にすれば、ヒューズが少し困ったように微笑んだ。

「デートなんて仕事以外でしたことねえけどな」

「ならもつとドキドキしなさいよ！」

「してるよ」

さらりと言つて、ヒューズは手にしたワインを飲み干した。

「これ美味いから、もう一杯貰ってくる」

照れ隠しにしてはそつがなさすぎる態度にレナスは苛立ったが、

ヒューズは何食わぬ顔でカウンターへと向かう。

そんな彼を、店にいた女性客がじつと見ていた事も更に腹が立つ。

デート中に色目使われてんじゃないわよと思う反面、デートに見えない自覚もあるのが更なる苛立ちの原因だ。

薬指に指輪はある。けれどそれはレナスの指だけだし、側にいてもきつと自分たちは恋人同士には見えない。噂の所為で認識はされているだろうが、二人でいる時の空気感も仕草も前と殆ど変わらない。

まだキアラとヴィンセントの方がマシだと思った瞬間、嫌なタイミングでその二人が店の前を横切った。

相変わらずキアラは真っ赤だが、その手はしっかりと繋がれている。

ヴィンセントの言葉になにやら怒っているようだが、端から見ればその姿は恋をしている女の子にしか見えない。

それに比べて自分はもう若くもないし、あんな可愛げも出せない。ヒューズに恋をしている自覚はあるが、指輪が欲しかったのは彼と恋愛がしたいと言うよりも、彼という存在を自分に縛り付けたかったからだ。

そもその前提があのだと二人とは違う。だからきつと純粋な恋愛など無理なのかもしれない。

出来ないとわかると、意外とそれを望んでいた自分がいることわかり、レナスは思わずため息をつく。

ただ側にいてくれればいい。ヒューズが遠かった1週間前はそれで我慢できたのにと、レナスはパニーニを荒々しく頼張る。

「だから、食い方」

戻ってきたヒューズの指摘を無視して、口に物を入れたままレナスは席を立つ。

行くぞと言う様に顎をしゃくれば、ヒューズが拒否できるわけもない。

モグモグと口を動かしながら店を出て、不機嫌さを隠しもせずレナスは歩き出す。

今日は平日だが、店の前は地元民と観光客で賑わっている。

巡回で道は熟知しているが、視界が悪い事になれないレナスには歩きやすい道ではない。

ようやくパニーニを飲み込むと同時に不満が零れそうになったとき、唐突に彼女の右手が包み込まれた。

「右側はカバーするから」

包帯の所為でそこにいる彼の姿は見えない。でも自分の手を握る

男が誰だかわからないほど愚かではない。

さっきまでささくれ立っていた気持ちだが、手を繋がれただけで落ち着いていくのに気付き、レナスは思わず顔を下げた。

デートだけなら今まで何度もしてきたが、こうも気持ちの上下が激しいデートは生まれて初めてだった。

手を繋がれるだけで心臓が痛む事なんて今まで無かったし、それを心地よいと思うなんて知らなかった。

「子どもじゃないんだから、一人で歩けるし」

嬉しい癖に口から出てくるのは皮肉ばかりだ。

むしろ誰よりも子どもなのは自分の癖にと、またどうでも良いところやささくれ立つ心にイライラしていると、ただ包まれるだけだった手の指が暖かく絡んだ。

「わかつてる」

その言葉を彼はどんな顔で告げたのか。

右側の視界が無いことを悔やみつつ、見えていたら恥ずかしさのあまり彼を殴り飛ばしている気もする。

絡めた指に力を込めつつ、レナスはほんの少しだけ、ヒューズの方に体を寄せた。

「で、これからどこに行くの？」

「通り魔が最初に出た場所だ。ちょっとキツイ場所だから、体力があるうちにとまって」

「キツイ？」

「まあ普段の訓練に比べたら余裕だけど」

どんな運動も騎士の訓練に比べたら余裕なのは当たり前だ。

故にあえてキツイと前置きをしたヒューズに嫌な予感を覚えたが、手を放すのが惜しかったレナスは渋々彼に従った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5880s/>

---

右手に剣を左手に恋を

2011年9月25日23時02分発行